

高塚ノート 2004年

★1月 2004年

1月1日、2日、24日 2004年

●布置

世界は1対1対応をしているのではない。

わたしのひとつの原因がひとつの結果を創り出すのではなく、わたしのいくつかの在り方が世界のいくつかの在り方と照応する。そのようにしてわたしの世界はある。

しかし、もしわたしの在り方が常にひとつであれば、世界はそのひとつに照応するであろう。それはどのような人生であり、どのような世界であろうか。

(加筆して新掲示板記入予定)

(参考) 駒と大局

1月2日、3日、2月14日 2004年、4月4日 2010年

●今年の抱負

わたしの人生は牢獄のようだ。

この牢獄には食べ物も娯楽もお酒もある。

しかし、自由がない。

肝心な自由がない。

今年は自由を求めて、格闘します。

すべてのわたしの考え、言葉、行為がわたしであるように。

すべてが、それはわたしである、と言えるように。

すべてが、それをわたしは選んだ、と言えるように。

まずそのためには、わたしのしていることを常に知っていること。

シュタイナーが神秘修行の第一番目の条件としたこと。

グルジェフが1分とてできないと言ったこと。

神との対話の神がとても困難であると言ったこと。

すなわち、わたしを常に観察していること。

これを今年の抱負とします。

(1月2日 2004年掲示板)

■シュタイナー

「この十六弁の開発は次のような仕方で行われる。日常不注意に行ってきた魂の特定の働きに対して注意深い態度でのぞむ。魂のこのような働きは八つの種類に分けることができる。

第一は表象（意識内容）を獲得する仕方である。通常、人はそれをまったく偶然に任せている。日々さまざまな事柄を見聞きし、それを基にさまざまな概念が作り上げられる。そのような態度で生活している限り、十六弁の蓮華はまったく活動を停止している。これを活動させるためには、これに意識的態度でのぞまなくてはならない。この目的のために必要なことは、自分の表象に対する注意力の喚起である。どの表象も彼にとって有意義なものにならなければならない。どの表象の中にも、人は外界の事物についての特定の情報を見出さなければならない。意味のない表象に満足してはならない。自分の所有する概念の働きをすべて自分で統禦し、それが外界の忠実な鏡となるようにしなければならない。歪んだ表象は自分の魂から遠ざけねばならない。」

(ルドルフ・シュタイナー著 高橋巖訳「いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか」イザラ書房 127 ページ)

(1月3日 2004年掲示板)

●自由

今日一日を振り返ったとき、わたしが何かを選んだということは一体あったのだろうか。

わたしは何かを選んで人生を送っているようにみえる。

でもそれは一本の線、選択肢のない一本の線、自動的に引かれる一本の線なのではないだろうか。

その一本以外の線以外の線をくわたしは引けるのであろうか。

今日選んだ選択と異なる選択をくわたしはできるのであろうか。

自由とは、昨日まではこうであったが、今日からはそのような道は通らないことを選ぶことができることである。

だが、それはくできるのであろうか。

(1月3日 2004年掲示板)

●意識のある人生～自己想起

わたしはある瞬間自分自身に気づく。

自己を想起できたときに、いま何を考えていたのか思い起こす。

過去の悔恨か、未来の不安か、他人の思惑か、白昼夢の連想か。
無意味なものに二度と同化しないように誓う。
次に、深い呼吸をする。
身体全体で呼吸をする。
その深い呼吸を繰り返すうちに、わたしは無限の深さと無限の広さをもった湖となる。
その重さは無限であり、その容量も無限であり、そして、不動である。
そのように呼吸をしている。
動かない呼吸である。
その呼吸は永遠につづく。
そして、その呼吸からわたしはある動きを発する。
これがわたしである、
という動きを発する。
そして、わたしが生まれる。
(1月22日 2004 掲示板)

(参考) 小学2年生のときの祈り

●意識のある人生～創造力

イラン地震の被災者のことを思えば、できないことはない、と言える。

この世が80年の人生だと思えば、できないことはない、と言える。

わたしが永遠の生命だと思えば、できないことはない、と言える。

いつ、どんな時に、どういうところが、「わたしはできない」と言うのであろうか。

(3月1日 2004 掲示板)

■わたし・選択・創造

いつ、どんな時に、どういうところが、「わたしはできない」と言うのであろうか。

いつ、どんな時に、どういうところが、「それはわたしではない」と言うのであろうか。

(4月4日 2010年掲示板)

昨日のわたしである。

いつ、どんな時でも「わたしはできる」と言い、行い、

いつ、どんな時でも「それはわたしである」と言う。

1月3日 2004年、4月4日 2010年、5月15日、26日 2012年

●シミ

わたしの顔のシミは私が体の操縦をどれだけ正しく行わなかったかを示している。

体にとっては悲劇であるが、気づきにとってはありがたいことである。

人生のあらゆるシミを悲劇で終わらせることなく、気づきへと至らせることである。

悲しんだり、あきらめたりするのでなく、気づきがあってこそシミも浮かばれるというものである。

今日から体にも気づかいを。

(5月26日 2012年新掲示板)

●わたし

わたしが変わらなければ、世界は何も変わらない。

あなたが変わらなければ、世界は何も変わらない。

わたしは特別である。

あなたもまた特別である。

ただし、わたしが一番変えることができるのは、あなたでなく、わたしである。

だから、わたしが変わらなければ、世界は何も変わらない、と言う。

ただし、世界はわたしが創っているのではないと思うのであれば、別である。

世界はわたしと何も関わりがないと考えるのであれば、別である。

(1月24日掲示板)

1月4日 2004年、5月15日 2012年

●意識のある人生～神聖なる矛盾

常にもっているのは、長期の展望、長期のベクトル。無限大の長さのベクトル。

常にあるのは、いまこの瞬間の直観、この瞬間のアドリブ。

(掲示板記入予定)

●原風景

友人に原風景について聞かれた。

～入院時

～神といた時である風景

1月6日 2004年

●意識のある生活

わたしは一日に何十回も目が覚める。

目が覚めたときに、思い起こす。

いま、わたしは何を考えていたのだろうか。

過去の悔恨であろうか、未来の不安であろうか、他人の思惑であろうか。

何を食べるかということであろうか、何を着るかということであろうか、何を買おうかということであろうか。

それは、今までのわたしであっても、これからもつづけたいわたしではない。

だから、わたしは目が覚めたときに変えようとする。

いま、わたしは神とともにいたのだろうか。

いま、わたしは創造とともにいたのだろうか。

いま、わたしはたましいとともにいたのだろうか。

いま、わたしは何十年間の地上生活としての一瞬を送っていたのだろうか。この地上に降りてきたという生活を送っていたのだろうか。

(1月8日 2004年掲示板)

■神といること

神といることは、神の言葉を守ることではない。

1月6日、12日、22日 2004年、5月15日、26日 2012年

●見る

人は将来嫌いになる異性でも今好きになることができる。

将来嫌いになることは、よく見えるようになったからだろうか。

それとも、よく見えなくなったからだろうか。

(1月22日 2004年掲示板)

■＜時空＞＜感情＞

昔好きだった人を今嫌いになることができる。

今嫌いだった人を昔好きになることができる。

好きになることと嫌いになることとはどこか似ているところがある。前に行くのもいいが、戻ってみるのもいい。

(5月26日 2012年新掲示板)

●水に流すこと (うるさんへの返事)

「もう一つ抱負をつけたします。
ここに書くと宣言のように思えるので。
「過去を水に流す」です。」

小学生の頃、月刊誌の漫画を兄と弟のわたしとでとっていて、いつも交換して見ていました。でも、大喧嘩したときに、わたしは兄に「もう漫画絶対に貸してやらない」と言い、机の前に「漫画は貸さない」と書いた張り紙して忘れないようにしておきました。しかし発売日になると、結局は貸していました。

わたしの場合は「過去を水に流した」というよりも、「過去は水に流れてしまった」というのが正しい。いつの間にか過去は流れてしまうんですね。しかし、「過去が水に流れてしまおう」のではなく、ゆるさずずっと貸さないでいた方がよかったのかなあ、とも思うこともあります。<わたし>がない良いことと<わたし>のある悪いことと、どちらを選ぶのが人間的か…、難しい問題です。

しかし、うるさんの意志で「水に流そう」とするなら、これは立派なことだと思います。本を貸さないことであれ、過去を水に流すことであれ、自分で決めて、そのように生きることができれば、それこそが自由に生きることであるからです。

(1月7日 2004年掲示板)

1月7日、8日、12日 2004年

●意識のある生活

嫌なものは拒絶するのではなく、忘れようとするのではなく、逆に、自己のうちにすべて引き受けてしまうと腹をくくってしまうこと。

終われば、何事もたいしたことはない。

引き受ければ、何事もたいしたことはない。

人と語るのではなく、人を通じていつも天と語っていればよい。

(1月12日 2004年掲示板)

こころを動かさないこと。

1月8日 2004年、9月11日 2012年

●「ある憲兵の記録」

貧農の出で、畑仕事で虫一匹殺せなかった人間が、徴兵にかり出され、328 人の人を殺し、1917 人の人を逮捕し拷問にかけたという記録。

終戦後、戦犯として捕らえられ、どのような裁きを受けたかという話は感動的である。

わたしは歴史物はほとんど読まないが、この本は戦争を体験した日本に生きる人すべての人に読んでもらいたい本である。

(朝日新聞山形支局編 朝日文庫 480 円)

(1 月 8 日 2004 年掲示板)

■われわれは、経済という戦争、金銭という戦争をしているかのようだ。何人の人を殺し、何人の人を踏みつけにしたであろうか。

手を汚していないので、それはわたしではないという。

■現在の中国、現在のアメリカ

●意識のある人生～「神との対話」

生命のプロセスとのコミュニケーションには「体験、感情、思考、そして、言葉」の四つの方法があると言う。「神との対話」ではその方法の優劣が述べられているが、それはさておき、どの方法にしる深く食い入ることである。

特に、深い感情はなかなか体験できない。

深い感情は、どのような悪感情であっても、それはそれとして、その深い価値は認めること。

■方法

深く食い入るための方法。

全体性の呼吸～直径 10 メートル、直径 100 メートル、地球、太陽系、宇宙のおおきさのこきゅう。

あらかじめ大きな自分でいること。

ハトホルのマントラ

1 月 8 日 2004 年、5 月 15 日 2012 年

●場所～<時空>

今いるところの価値は、常に不明である。

この価値の見晴らしよくすること。

(5月16日 2012年新掲示板)

●意識のある生活

すべてを受け容れる。

そして、こうありたいと思うわたしを意志する。

1月9日 2004年、5月15日、19日、20日 2012年

●ユダ

もしユダがイエスを売らなかったとしたら、彼は偉大なことを成し遂げたのであろうか。
あるいは、イエスを売ったことで、彼は偉大なこと、預言の実現を成し遂げたのであろうか。

(1月9日 2004年掲示板)

●成長

take and take

take and give

give and take

give and give

このように人は変わっていく。

ところで、その次というのはあるのだろうか。

あるとしたら、何であらうか。

(1月10日 2004年掲示板) (5月15日 2012年新掲示板)

■<行為への愛>

「take and take」は結果だけを求める。

「take and give」は結果が与えられれば、原因となることができるということであり、

「give and take」は原因となることはできるが、結果がないと原因となったところをだいなしにしてしまう状態であり、

「give and give」はただただ原因だけであるということである。

そして、原因だけであることを超えるものはないのであり、「give and give」が最終の行為であるようであるが、「give」にはどこかくささがつきまとう。まあ、それはわたしのくささなのかもしれないが、自己満足を超えた「give」、それは「give」というよりも、わたしとしては、

<わたしの表現そのものを愛すること>

と言いたい。

<これがわたしである>

という、行為そのものを愛することである。

(5月20日 2012年新掲示板)

● 囲碁

感情に耳を傾けた打ち方をする。

1月10日、11日 2004年、5月21日、22日、26日、28日 2012年

● 世界

この世界が「目が見えない世界」であったとしたら…。

あるいは、この世界が「他の感官がある世界」であるとしたら…。

そのような世界とはきっとあるであろう。

たとえば、未来の世界。

たとえば、他の創造主が創った世界。

…

確かなことは、健常者われわれもまた、ある感官がない世界に存在しているということだ。

(加筆して掲示板記入予定)

● <時空>

時間とは印象の濃淡である。

だが、願わくば、表現の濃淡であるように。

(5月26日 2012年新掲示板)

■ <時空>～魔術

時空は魔術——創造——のキャンバスである。
魔術が働くためには、表現の深さが一番である。

表現の深さは、必要性和感情によって定まる。

今はまだ他人がつくったキャンバス、自然がつくったキャンバスに暮らしているかもしれないが、キャンバスという時空に人は表現することができるのである。

(5月28日 2012年新掲示板)

■ スコットカニンガムの必要性・感情・法則の感情の話し。

■ 食べ物～<身体><印象と表現>

食べ物は一日食べなくとも生きていける。
空気は一分間食べなくとも生きていける。
だが、
印象は一瞬たりとも食わずには生きていけない。

このようなことを言ったのはグルジェフである。

だが、願わくば、一瞬たりとも表現せずには生きていけない、そのような人間でありたい。

(9月11日 2012年新掲示板)

● G I V E

人間が選択し、神が創造する。
神は与える。
この与えることの意味とは…

1月12日 2004年、8月12日、9月11日 2012年

● 自分自身

自分自身には「正直である」しかない。
どのような人も自分自身——本当のわたしに対しては「嘘であることはできない」。
しかし、この自分自身のように「正直に話し」、この自分自身のように「正直に行動する」
ことはとても難しい。

(1月13日 2004年掲示板)

●意識のある人生～物指し

「あと」を気持ちよくするための今を生きる。

「未来」を気持ちよくするための今を創る。

「あと」も「未来」も成長であり、それが存在である。

「あと」も「未来」も人生のスケール、物指しである。

(1月23日 2004年掲示板)

●<時空><創造>

過去はあるのではないだろうか？

別の感官があれば、行くこと（存在すること）ができるのではないだろうか。

これは荒唐無稽な夢想であろうか。

過去がないなら、「ある」と言っているものもない。

過去があるなら、「ある」と言っているものもある。

(新掲示板記入可)

●意識のある人生～<選択と創造>「ベクトルの方向と長さ」

条件はすべて整っている。

人が選択し、選択した結果を成し遂げる条件はすべて与えられている。

選択する意志があればである。

あとは、意志の長さの問題だけである。

だが、意志が1分とも続かないわたしにとって、これは大問題である。

(1月21日 2004年掲示板) (加筆済み新掲示板記入可)

1月13日、17日、2月14日、3月1日 2004年、5月21日、9月12日 2012年

●道17～理想の住まい

壊れないような建物でなく、変化する建物。

自然と調和し、変化していく建物。

わたしの成長と共に成長して違う顔を見せる建物。

そのような住まいに住んでみたい。

でも、そういう建物とは地球の自然なのかもしれない。

(1月14日 2004年掲示板) (加筆して5月21日 2012年新掲示板)

■伊勢神宮の建て直し

●<神聖なる矛盾>

政治討論などで、対立する意見を聞いていると、どちらもなるほどと思うことが多い。これは、わたしがいいかげんな意見しか持っていない、ということではなく、両方の意見が<それぞれの人の中で>成立するということだ。ただし、世界の中でいつまでも成立しつづけるか否かは別問題である。

かならず両方の正義をこえた第三の道があるからである。

だから、あらゆることに第三の道を考えることである。

人は所詮どちらかの正義にしか立っていない。だから、私の正義があり、相手の正義が不正義にみえるときには、かならず、どちらの正義でもない、第三の道を探ってみることである。

(9月12日 2012年新掲示板)

●杞憂

重要な選択の場面では、どうなるか不安にとらわれてしまうことが多いが、結局はどちらにころんでも一局なのである。間違えた道、思わぬ不運に見舞われたとしても、最後は起死回生の道が必ず用意されている。

このことは後になってみれば分かる。

だから、怖れずに、計算せずに、自分自身にしたがって選択することである。

(1月21日 2004年掲示板) (加筆済み新掲示板記入予定)

1月14日、15日、2月14日 2004年、5月21日 2012年

●感情

感情のスケールとは、直観のスケールかもしれない。感情を大切にすると、直観を大切にすることかもしれない。

(掲示板記入予定)

●<わたし><プロセス>

生まれ変わる前の自分が今の自分を見たとき、今の自分の何がすばらしくて、何が無意味であると感じるであろうか。

生まれ変わった後の自分が今の自分を見たとき、今の自分の何がすばらしくて、何が無意味であると感じるであろうか。

前の大きさをもう一度生きてみることである。

後の大きさを感じて生きてみることである。

そして、前と、今と、後へとつづいているわたし、そのプロセスを俯瞰し、今を新たに生きてみることである。

(3月1日 2004年掲示板) (5月21日 2012年新掲示板)

■意識のある人生～一日

未来のある日から今日を振り返った時、今日の何をすばらしいと言えるだろうか。

●意識のある人生～願うこと (意志)

創造者は宇宙の時間よりもはるかに長く意志しつづけた。その時間の長さたるや…。

その意味では、わたしの意志の長さはまさしく、無に等しい。

(1月24日 2004年掲示板)

●ヒーリング

利き手から気を出す。右脳を意識する。頭の上から気を入れる。等々のわたしなりの方法はある。

しかし、本来ヒーリングには形はない。あるのは、内側だけである。

その関係にある内側について常に思い至ること。

■参考～ナバホと河合

●意識のある人生～身体性

料理、掃除、洗濯を行うこと。

身体性を育むこと。

あるいは、絵画。

1月15日、2月4日 2004年、5月21日、6月10日、9月12日 2012年

●<所有>～能力・道具・<わたし>

どんな能力であれ、能力が偉いのではなく、人間が偉いのである。
人間を忘れてはならない。
能力に飲み込まれてはならない。
能力にあこがれると、能力に飲み込まれる。
能力とは道具のようなものであり、どのように立派な道具であっても、使う人がこの世を去る時に、焼いていってしまうものである。
能力も道具も焼いてしまうものである。

だから、

人間だけを大切にすることである。

あなた自身と相手とに親切にすることである。

しかし、相手に親切にできても自分自身に親切にすることはとても難しい。
(2月14日 2004年掲示板) (9月12日 2012年新掲示板)

■ 神聖なる矛盾

同時にこの逆の意味での動詞、プロセスとしての存在。

■ 「弓と禅」～焼いてしまいなさい

■ 容貌

どのような美しい容貌であれ、容貌が美しいのではなく、人間が美しいのである。
人間を忘れてはならない。
容貌に飲み込まれてはならない。
容貌にあこがれると、容貌に飲み込まれる。
容貌とは道具のようなものであり、どのような立派な道具であっても、使う人がこの世を去る時に、焼いてしまうものである。
容貌も道具も焼いてしまうものである。

だがこの世で培った、一人ひとりの美しさだけは焼くことできないものである。

それはいつまでも残り、そして、その美をもとにして次の人生、そのまた次の人生で変わっていくものである。

(6月10日 2012年新掲示板)

●夢～二人の人

頑張る人がやくざな人を殺し、自殺をする。

頑張る人はわたしを信頼している。

1月15日、16日 2004年

●絶望

どのような絶望の中でも救いはある。

見ることができれば、救いはある。

救いは外から来ることもあるが、内から来ることの方が多い。

なぜなら、内側がすべての原因だからである。

だから、内側をよく見て、内側を変えてみることだ。

(1月17日 2004年掲示板)

1月16日、26日、2月4日、8月3日 2004年

●意識のある人生

常に神と共にいること

●意識のある人生～模様替え

必要なものと不必要なものを見分ける。

それは人とともに変わっていくものである。

以前必要だったものが手放され、以前見向きされなかったものがたぐりよせられる。

(1月26日 2004年掲示板)

●意識のある人生～始まり

朝外に出た時に、空を見上げてみる。

空を見上げて、美しいと感じれば、どのような不愉快な一日が始まろうとも、美しい一日に変えることができる。

そして、空は美しい。

(1月17日 2004年掲示板)

●注意力

モスに入った時、前のテーブルのお客さんは競馬新聞にしるしをつけて、一心不乱に検討していた。小一時間いて、私が帰るときにもまだ、注意力全開で予想しつづけていた。

競馬はくだらん、などと野暮なことは言わない。わたしが思ったことは、わたしの注意力は競馬予想のおじさんのようにあらぬ方向に向けられてはいないだろうか、ということである。

(1月17日 2004年日記)

●意識のある人生～持続力

合気道の達人、道衣に触れるだけで相手をすっとばしたという佐川幸義の持続力。
分かるまで、朝まで稽古をしつづけたという持続力。

(1月20日 2004年掲示板)

●気の送り方

相手に入れて、また、自分に還す。(羽鳥氏の話)

●ロト

手のひら全体で
頭でなく、手のひらの方が知っている。
手のひらでコンタクトを取る。

他の場合もしかり。

1月17日、18日、24日、25日 2004年、8月26日 2011年、5月15日、16日、22日、
30日、9月12日、14日 2012年

●虚言癖～<わたし>

世の中に嘘をつく人がいる。
嘘と知っていて嘘をつく人はまだよい。
問題は、嘘と知らずに嘘をついている人がいることだ。

それはどのような人かという、自分という人である。

誰もが自分が自分に嘘をついていて、その嘘はとても分かりにくい。
だから、外を見て自分の嘘に気づくしかない。
ただし、外の現象が自分とは関係ないと思っていれば、いつも他人が加害者で自分が被害者であると思っていれば、自分の嘘に気づくことはできないかもしれない。

(1月20日 2004年掲示板) (加筆済み 5月22日 2012年新掲示板)

●意識のある人生～<音><呼吸>

時に、目を閉じて、人の声だけを聞いてみる。

世界の音だけを聞いてみる。

何が見えてくるのだろうか。何が感じられるだろうか。どこにいるのだろうか。

時に、目を閉じて、深い呼吸だけをしてみる。

世界の呼吸だけをしてみる。

何が見えてくるのだろうか。何が感じられるだろうか。どこにいるのだろうか。

(9月13日 2012年新掲示板)

■ 感覚

>世界の音だけを聞いてみる。

意味を探るのではなく、ただ音を聞き、バイブレーションに身を置くこと。

(参考) ハトホルのマントラ

● <エネルギー> 1～信念

小さい頃、空中浮揚をしたことがある。

その信念を思い起こしてみるに、

その信念とは一点の曇りもない信念、「浮ける」という信念であった。

そして、実際に身体が浮いたということは、この<一点の曇りもない信念>と<エネルギー>とは関連しているということである。

だから、何かを為そうとする時には、この<一点の曇りもない信念>をこころがけるべきである。

毎日体を動かしているようにである。

(1月19日 2004年掲示板) (8月26日 2011年ブログ)

■ エネルギーと信念

実はすべてにエネルギーの問題がある。

これを意識すること。無意識にエネルギーを使用するのではなく意識して用いること。

疲労～睡眠以外でのエネルギーの蓄積方法は？～疲労は不完全燃焼の老廃物であろうか。

完全燃焼とは行為への愛であろうか。結果にとらわれない行為。

■エネルギー体としての人間

人はエネルギー体であるというハトホルの指摘もまた想起すること。

●自他

わたしにとって人生の痛恨事とは自分を通したこと。

わたしにとって人生の賞賛事とは他人を通したこと。

しかしまた、いつかまた、人生の賞賛事とは自分を通すこととなるであろう。もちろん、この通すということは最初の自分を通すこととは異なる。

(1月19日 2004年掲示板)

●「しるし」(結果)～<選択と創造><自他>

検査先の病院から強い口調で「先生、全然よくなっていないですよ」と怒りの電話をかけてきた女性の癌患者さんがいた。その方はそれ以降、気功治療を受けずに、わたしが原価で提供していた市販の半額の健康食品だけを受け取りに来ていた。玄関先で、その健康食品を受け取ると、包装の箱だけを荒々しく破り私に渡して中身のビンだけを持って帰っていった。彼女は結局亡くなられた。

このようなしるしは分かりやすい。しかし、当人には決して分からない。そして、そのようなしるしを誰もが持っている。だから、何度も何度も死んで、何度も何度も生き返る。

そして生き返ったいま、わたしはわたし自身のしるしを見るのだろうか。

わたしにしるしを見る気持ちはあるのだろうか。

あるいは、それはあなたのせいだと、また言うのであろうか。

(1月18日 2004年掲示板) (5月30日 2012年新掲示板)

●瞑想

意識と呼吸

1月22日、23日2004年、5月22日、6月10日、9月14日2012年

●瞑想

瞑想の要諦は、求めず、誠実で、熱心であること。

(山崎さんへのメール)

●<自他><わたし(自己研究)>

25年前、けがをしたわけでもないのに膝から血が出始め、止まらなくなったことがあった。その症状は3ヶ月以上続き、やがて血が出ていたところが不気味に盛り上がり始めたので、病院に行った。その時、

「先生、これはガンではないですよねえ。」

「いや、これは毛細血管が異常繁殖を起こしただけだよ。」

「そうですか。ガンかと思って心配してしまいました。」

「君、そんなにガンになりたいんなら、ガンにしてあげようか。」

思わず、凍りついてしまった。

ずいぶんな医者だと思うが、考えてみれば、わたしにもこういうところはある。口に出すか出さないかは別として、いつもそうであるかどうかは別としてこういうところはある。

おそらく、わたしにないことはこの世界では起こらないのであろう。

おそらく、わたしが考えていないことはこの世界では起こらないのであろう。

前世で何をしたのかを覚えていないのは仕方がない。

来世で何をするのかを知らないことも仕方がない。

ただ、今生で自分自身がどのような人間であるかは知ることできる。

(1月23日2004年掲示板)(6月10日2012年新掲示板)

●自他

あいつと俺とは違う、ということではなく、
皆違うように生きている、
それぞれの道をよく見てみること、

そうすれば、驚き、時には賞賛することができるかもしれない。

(新掲示板記入可)

●<自他><自由><動詞>

あの人はわたしをだました。

だが、世界はわたしをだまさない。宇宙はわたしをだまさない。生命はわたしをだまさない。

では、あの人は世界以外の人なのか。

あるいは、あの人も世界なのだろうか。

きっとあの人は、世界を超えているのである。

そう、あの人は、<自由>ということである。

その人がどれほど理不尽であろうと、唾棄すべきような人であろうと、あの人である<自由>は世界を超えている。

神、仏を超えている。

だから、わたしもまたわたしの自由を謳歌しよう。神、仏を超えて、世界の規範を超えて、わたしを生きようと思う。

それは、もちろん駄々をこねる子どものような自由ではない。

<これがわたしである>

という、そういう自由である。

(蛇足) 神仏は名詞であるが、自由は動詞である。

(1月27日2004年掲示板)(加筆して9月14日2012年新掲示板)

1月23日、24日、27日、2月4日2004年、5月22日、6月14日2012年

●理想論～<創造><自己構築>

理想論は架空の論ではなく、
理想の世界をつくらうとするから、理想論となるだけである。

現実でよいと思う人は、現実的な論議をすればよい。
だが、それではいつまでも現実のままである。

ところで、あなたは理想を持っているだろうか。

あらゆることについて、理想を語れるだろうか。

語れなければ、語ってみようとするればよい。きっと新しいものが生まれてくるはずだ。

昨日とは違う世界、昨日とは違う自分をはっきりとイメージできれば、それは世で言う理想論ではなく、手に届く世界であり、手に届く自分であり、世で言う現実的なことであると分かる。

そして、理想論のよいところは、〈わたし〉を大きく感じることができるようになるということである。

誰もが自分を小さく見ている。しかし、これほど非現実的なことはないのである。

(6月14日 2012年新掲示板)

●疲労への不安

自分を身体と思うな。
身体をコントロールできる自分を創りだすこと。

■死への不安

自分の身体を自分と思うな。
この世界では自分を動かす。
この世界では自分を働かすこと。
健康である時にも、病気である時にも。
では、自分とは何か。

■呼吸

胃腸の呼吸、
よくするためでなく、胃腸自身の呼吸、

わたしがするのでなく。

■機会

わたしには害であることがあなたには害ではない。

なぜか、出来事は完璧であり、わたしには無意味なこともあなたには有意義だからである。
だから、すべての機会を利用する。

死病でさえも。

●自他

人間関係は言葉だけでなく、感情が絡み合うつきあいでありたい。

しかし、そのようなつきあいは往々にしていざこざが生じた場合となる。

(1月25日2004年掲示板)

1月24日、25日、2月4日2004年、8月30日2011年、5月22日、9月14日2012年

●<エネルギー>2～労・所有

昔話によくあるように、いちばん労力を費やした者が、いちばん多くのものを得る。
そして、労に限りはない。

だから、労をつくすことである。

では、何につくすのか。それがまず最初にある問題である。

<あなたは何者になりたいか>

このなりたい者につくすということである。

そしてまた、その限りない労で何かを得ることができるのだろうか。

本当は、限りない労とは行為への愛、すなわち、結果を期待しない意志なのではないだろうか。

だから、何を成し遂げたいかということではなく、自分自身は何者であるかということだけが問題となるのではないだろうか。

(8月30日2011年ブログ)(加筆して新掲示板記入予定)

■エネルギー3～<神と人間>・エネルギーの産出

エネルギーを極限まで用いると、深い喜びとともに、深い満足感とともに、自己のうちにエネルギーが流入する。

もしかしたら、これは内なる神を使ったからなのではないだろうか。

人はそのときそのときの極限でのみ<神>にふれることができ、エネルギーに満たされるのかもしれない。

そして、<神>のひとつの相は喜びというエネルギーなのかもしれない。

あるいは、こういうことか。

エネルギーを極限まで使用すると、自己が広がり、その広がりに対して<自然>にエネルギーが流入してくる。

ともあれ、今のわたしがこころがけることは何をするに際しても、エネルギーを絞りきって使うということである。

(8月31日2011年ブログ)

■ エントロピー

エネルギーが流入する

↳こころが整理された（エントロピー減少）ような深い喜びが生じる。

エネルギーを使うとは神を使うことなのだろうか。

● 師弟

出かけるのは師であり、

待つのは弟子である。

出かけるのは神であり、

待つのは人である。

やがて、弟子も師となり、人も神となる。

そして、弟子も人も待つのでなく、今度は出かける。

ところで、わたしは出かけたことはあるのだろうか。

今日は出かけるのであろうか。

(1月25日2004年掲示板) (加筆済み9月14日2012年新掲示板)

■ 「ヒマラヤ聖者の生活探求」の歩行

■ グルジェフ

為すのは師の業であるというグルジェフの言。

■ 意識のある人生～ことわざ

日本語の労を厭わぬ、横着をしない。

■ 意識のある人生～グルジェフ

263～子羊・狼・キャベツ

グルジェフはしばしば、一種のパズルを引用した。子羊と狼とキャベツという、三つの互いに敵対する有機体を連れた男が川辺に到着し、一度に二人だけ——その男ともう一人の「乗客」——を乗せることができる船で川を渡らなければならない。彼らの一人が他の「仲間」を襲ったり、殺したりすることができない方法で、彼自身と「仲間」を対岸へ運ぶ必要がある。この話の重要な要素は、人間に共通する一般的な傾向が、「近道」を見つけようとするということであり、この話が教えていることは、近道はないということである。乗客全員の安全と幸福を確保するには、必要な回数だけ往復することが、常に、絶対必要であるということなのだ。グルジェフは、初めは、たとえ貴重な時間の浪費と思えても、起り得る危険をおかすよりは、かえって余分の回数を往復することが、往々にして必要なのだと言った。しかしながら、彼の訓練と方法に慣れるにつれて、行く行くは、正確に必要な回数だけ往復できるようになれ、しかも、どの乗客も危険に陥らないようになるということであった。男と子羊と狼とキャベツの場合は、時間の浪費に思えても、**返り道には、乗客のだれかを連れて来ることが必要であるという事実も認めなければならなかった。**

1月25日2004年、5月22日2012年

● 創造者

享受する人でなく、創り出す人であること。

あらゆることに対して。

印象でなく、表現を。

1月26日2004年

● 世界

美はルールに含まれているのか、人間に含まれているのか。

1月27日、28日、29日2004年、5月15日2012年

● 実験

人智学での科学の実験に当たるものは個人の変容である。

それは錬金術であり、グルジェフのワークであり、シュタイナーの神秘修行によってである。

その変容によってのみ知識としての学が正しかったのか否かが確認できる。

ただし、この実験は外から見ることはできないので、自分で行なってみるしかない。

追試はできるが、一日や二日でできることではない。

何十年、何百年もかかる追試である。

しかも、科学の実験やその追試と同様に徒労に終わる可能性もある。よくいえば、間違いに気づく可能性もある。

ただし、徒労となる実験よりも不幸な実験は「それを実験と思わない生活」がそうである。実験が正しかろうと間違いであろうと、それが現実だと思えることである。実験はその人の衣服とべたりとくっついているので、それを採用することも不採用にすることもできるということを知らないことである。

(2月7日 2004年掲示板)

●意識のある人生～呼吸

わたしはある瞬間自分自身に気づく。

その瞬間に呼吸をする。

深い呼吸、身体全体の呼吸、世界全体へと通じる呼吸をする。

時には一回、時には百回。

(1月28日 2004年掲示板)

●ある創造

事務所が変わること。

植物が変わること。

部屋がきれいになること。

手足を使うこと。労を厭わないこと。

1月28日、29日 2004年

●忘却

この人生のベクトル、忘却のままで生きていかない。

今回の人生で変えてしまうこと。

できないこととできることがあるが、意識の際にのぼっていることは今回変えることができるはずである。

知っていることと知らないこと。

変えられることと変えられないこと。

●意識のある人生～「のれん」 時事 2012年5月

争ってから争いをやめるのではなく、争う前に争わないところ構えでいること。

朝起きたときに、すべてをゆずるところ構えでいること。

わたしが争わなければ、相手も争わないし、争えない。

(2月2日 2004年掲示板) (新掲示板記入可)

●<所有>

999回虫垂炎の手術が成功したからといって、1000回目の手術が成功するとは限らない。手術するのは外科医の腕であっても、病気が治癒するのは外科医の腕とは関係がないからである。

また、999回手術する腕が動いたとしても、1000回目も動くとは限らない。腕を動かすのは外科医の力によってではないからだ。

ただし、1000回目の手術に腕が動くことを意図することはできる。

1000回目の手術の後に虫垂炎が治癒することを願うことはできる。

これは、意図は人間の力であり、願いは人間のものだからである。

(1月30日 2004年掲示板) (6月15日 2012年新掲示板)

1月29日、2月1日、4日、7日、2月26日 2004年、5月15日、16日、23日、6月16日 2012年

●意識のある人生～<感情>

世界と感情の交流を行うこと。

こどものように。

だが、おとなのいま、今度は意識的に。

(1月29日 2004年掲示板) (加筆済み新掲示板記入予定)

●ごみ～<モノ><身体>

ごみ箱に捨てるまで、わたしはそのモノの全てを使い切ったであろうか。

ごみと化したモノを生かすことができたのであろうか。

そしてまた、火葬場で焼かれるまでわたしはワタシを生かすことができたのであろうか。

(5月23日 2012年新掲示板)

●時事～嘲笑

山崎を笑う男は皆山崎である。

古賀をいさぎよくないと思う男は皆古賀である。

知らなければ、わたしは違う、と言える。

知らなければ、知るしかない。

そのような人生を生きてみるか。

そのような小説を読んでみるか。

わたしが見ないできたところの影をのぞいてみるか。

どちらにしろ、違うものは知るしかない。

知れば、非難はできない。

わたしもそうである、と言い、そして、そのような人生を選ぶか選ばないか、ということだけである。

(1月29日 2004年掲示板)

■共感も反感もわたしの内にあって初めて可能になるものである。

■非難される側の方が人生の二面性を見ているかもしれない。

●意識のある人生

大きな自分、この世界での私、身体、

●二枚舌

わたしがA氏に「CはDである」と言う。

わたしはB氏に「CはDではない」と言う。

世ではこれを二枚舌とか矛盾とか言うが、そうではない。A氏とB氏とに話す言葉が違うことは当然のことなのである。

ただし、何ゆえ異なるのか、ということはとても大切な問題ではある。

わたしのことを考えて異なるのか、それとも相手のことを考えて異なるのか。

不安なるがゆえ異なるのか、愛なるがゆえ異なるのか。

(2月4日 2004年掲示板)

■シュタイナー

●<時空>

重力により時空がゆがむように、
人間存在によってもまた時空はゆがむ。
わたしはどれほど重いのか、あるいはどれほど軽いのか。

もしかして、張子の虎になっていないだろうか。
今日もまた張子にいそしんではないだろうか。

あるいは、他者の時空によってわたしがゆがんでいないだろうか。
(6月16日 2012年新掲示板)

■地球を背負うイエス

●知識～<エネルギー>

理数系の本を理解するためには、時間でなく、エネルギーを費やさなくてはならない。
そのことによってのみ、初めて<知識>を得ることができる。
おそらく、瞑想も精神世界のあらゆるワークもそうなのであろう。
エネルギーを費やさなくてはならない。
<知識>という炎を輝かせるために、薪を焚きつづけなければならない。
(加筆して新掲示板記入予定)

★2月 2004年

2月1日、4日 2004年、5月23日、6月16日、7月12日 2012年

●意識のある人生～自他

相手の顔を見るのでなく、
相手の性格を見るのでなく、
相手のこれまでの所業を見るのでなく、

時には、
相手の魂にまでところをのばしてみる。

もしかしたら、
相手もわたしも、そして世界も変わるかもしれない。

(2月7日 2004年掲示板)

■意識のある人生～<自他>

相手の顔を見るのではなく、
相手の性格を見るのではなく、
相手のこれまでの行いを見るのではなく、

わたし自身のもっとも深い層に身を置き、今のその人それだけに対してみること。

そして、そこから生じることをただ生きること。

(7月12日 2012年新掲示板)

●所有

この世界の中には、
死後にも持っていけるものがある。
また、死後には持っていけないものがある。
今日わたしは、死後に持っていけるものを何か手に入れたのであろうか。
あるいは、今日一日、持っていけないものばかりを手に入れていたのではなかろうか。

(2月2日 2004年掲示板)

■所有

7、8年ぐらい前でしょうか、ある「自己啓発講座」に参加したことがあり、次のような課題が出されました。

「これぞ自分のものと思うあなたのものを何でもいいですから出してみてください」と言って、20人ぐらい円形に座った真ん中に各人自分のものを出させられました。

そして、ひとりひとりに先生が

「それは本当にあなたのものなののでしょうか？」

「では、あなたのものではないとしたら、一体誰のものなののでしょうか？」

と聞いていくというセミナーです。

<こころある人はここまで読んでご自分で数日間、あるいは、数ヶ月間答えをを考えてから以下の文をお読みください。わたしは差し出したものがわたしのものではないということは以前から知っていましたが、大問題は、「では、わたしのものとは一体何であるか？」と

いう問いです。>

わたしはワープロで打った「電話番号が書かれてある紙 1 枚」を出しました。先生に「これは本当にあなたのものですか？」と聞かれた時、「この紙切れはわたしにしか意味のない紙切れであり、わたしのものです」と答えました。それに対して先生がどのような返答をかえしたかは覚えていません。しかし、無意識であれ、わたしが差し出したもの、わたしが答えたことは将来のわたしの答えにつながるものでありました。

所有に関しては以前から考えつづけていたテーマであり、どのような答えが聞かれるか期待していたのですが、意図的か否かは不明ですが、問いかけだけで終わってしまいました。それから時々思い出しては考えをめぐらしていたのですが、半年後ぐらいのある日、突然に答えがひらめきました。

「あの日わたしが差し出したものはわたしのものではない。しかし、わたしが電話帳の紙を差し出した、その行為そのものはわたしのものだ。」

そう、わたしのものとは選択です。わたしがいろいろな所有物からひとつを選んで差し出すこと、このことがわたしのものなのです。これがわたしの答えです。

これがわたしの答えですが、この種の答えは伝えることができないものです。答えなかった方がよかったのではないかとという気もします。

セミナーの先生はおそらく答えを知らずに、「あなたの出したあなたのものというのは、誰のものですか」と聞いていたのだと思います。どうも色々なセミナーに参加した経験があってそれを寄せ集めて構成されたワークショップのようでした。わたしは、わたしなりに答えを知った時、「私のほうがよく知っている」という自己肥大、自我のインフレーションに陥りましたが、いま考えてみるに、「知らない人がいたから、わたしが知ることができた」とも言え、それは皮肉でも何ともなく、<偉大な無知>とも言えるように思えます。おそらく、あのセミナーで先生がわたしと同じ答えを話されていたら、わたしはその答えを<知る>ことはできなかったように思えます。その意味で、わたしの答えも軽く聞き流していただいた方がいいかもしれません。

なお、「あなたの出したものは誰のものだと思いますか？」というわたしの答えは、「解なし」です。大学の数学の授業で、「君たちが今まで習ってきた数学では、答えがあるのが当たり前だったが、本来の数学では答えがないことの方がはるかに多いんだよ」とおっしゃっていました。この問いに関しても同様です。世界にあるものを所有の問題で問いかけることが誤りなのです。問い自体に意味がないのですから、答えることができないのです。このような問いはしばしばあり、こころに留めておくと役に立つと思います。

(2月6日日 2004年掲示板) (原稿要転記)

■発信者

たま出版の編集長に影響されたわけではないが、わたしはこの地球上に宇宙人がいると思っている。意識的か無意識的かは別として、少なくともコンタクトを取っている人はいると考えている。そして、「それは本当にあなたのものなのか」という問いは実は宇宙人から発せられた問いなのではないかとひそかに思っている。

(2月8日 2004年掲示板)

■所有

才能は前世での成果を現世に継続して持ち越したものである、という話があるが、本当かどうかはわたしには分からない。

ただし、はっきりしているのは、前世で才能を開花すべく努力したその力、フォースは確実に時間を超えて持ちつづけていけるものである。

(2月8日 2004年掲示板)

■初めて勤めた会社での出勤前の早起きの話

哲学書を読んでいたが、この哲学書は自分自身は何も役に立たなかったであろう。役に立ったことは、毎朝早起きして勉強したその行為そのものである。

■善と悪

迷いは成長のための試金石である。

だから、迷うことを厭わないことである。

2月2日、3日、4日 2004年、5月16日、23日、9月17日 2012年

●明晰

酔っ払いの人生はずいぶん送ってきた。

記憶のないことなどザラのウルトラ酩酊人生。

あと何年あるか分からないが、後半生、ウルトラ明晰人生というものを送ってみたいものである。

(掲示板記入予定)

これは8年前の2月に書いた。

不思議であるが、8年後にはそうなっている。

(加筆して新掲示板記入可)

●神の行為への愛

この世界の創造はもしかして継続中なのではないだろうか。

創造者は愛を意志しつづけているのではないだろうか。

行為への愛は終わっているのではなく、継続中なのではないだろうか。

(加筆して、掲示板記入予定)

●「気づき・夢想・連想」～<時空><存在>

書いてもコミュニケーションとして成り立たぬ言葉などこの掲示板に書いても意味はない。ただ、そのような言葉のほうが自分自身にとっては広がりをもつ、成長を内包している言葉なのである。ということで、その断片を少しずつ記していこうと思っている。

空間差の存在、時間差の存在

異なる空間に存在してみる。

異なる時間に存在してみる。

(20040202)

■空間差の存在

コインの移動 (テレポテーション) へのヒント

■空間差の存在

成ることはできない、在ることしかできない。

■時間差の存在

遠隔治療ではすでに行っていることである。

▲創造と存在 (この世の)

ヨガナンダの馬

●意識のある人生～選択

何を選択するのか、常に意識する、一瞬一瞬に。

●損得計算

混んでいる電車に乗り込んだ。

席がひとつ空いていた。

得をした。

得をしたと考えた時、何を得したのであろうか。

得をしたと考えた時、もしかして何かを失ったのではないだろうか。

(2月3日 2004年掲示板) (9月17日 2012年新掲示板再掲) (草稿要転記)

■意識のある人生

損得から、何が自分の役に立つかという視点へとシフトする。

●相対性理論

時空の図が理解できないのは、図で考えるからかもしれない。原点の発想そのもので考えつつ
かけてみる。

●教室

この現世でなすべきこと。

わたしが創造者となりうること。

他者が創造者となりうる方策を提示すること。

2月3日 2004年、9月14日。16日 2012年

●知識

われわれは常に新しいことを知りたがっている。

ただ、知ることにはレベルがある。

これは気づかずに通り過ぎられてしまう。

●<愛と不安>

人間はアクセルとブレーキを両方ふみながら存在している。

人間存在が「愛と不安」、その両方を基盤としている以上は必然のことなのである。

しかも愛の発現も不安の発現も無意識的であり、知らぬ間に愛が不安に変わってしまった
り、条件付きの愛すなわつ不安というブレーキの働いた愛になっている。

そして、アクセルとブレーキを両方踏みながら走行すれば自動車が壊れてしまうように、
われわれの体もボロボロになってしまう。

人を疲弊させてしまうこの悪癖から逃れる方法はある。

ひとつは深い呼吸である。

これはブレーキを解除してくれる。そしてもうひとつは何度も書いてきた「魔法の質問」である。

<これが本当のわたしだろうか>。

<今、本当のわたしなら何をするだろうか>。

(蛇足) 魔法の質問は「神との対話」からとってきた言葉である。愛という言葉にはどこか抵抗感があるので言い換えてある。

(9月23日2012年新掲示板)

2月4日、6日、7日、14日、20日2004年、9月14日、17日、23日2012年

●意識のある人生～普通

すべてを楽しむこと。

今日一日を。

重荷に思われることも、楽しもうとすれば、楽しめるようになる。

例えば、平和交通バスの女性運転手、例えば、障害者運営の喫茶店の新入り従業員、誰の周りにも「楽しくなさそうな仕事」を楽しそうにやっている人を見ることができる。

普通に生きていて、最も尊い生き方をしている人がいる。

私も見習うことである。

(2月4日2004年掲示板)(加筆済み9月17日2012年新掲示板)

●成長

わたしの成長は終わらない。

いかなる成長よりも<わたし>の方が大きいからである。

これを不遜と呼ぶ人もいる。

だが、これは30歳のときに感じた個人的な気づきであり、それ以降、その気づきに匹敵するような気づきはない。

ある意味、30歳以降のわたしの人生の土台なのである。

だから、私はともかくも一歩一歩成長を目指す。アキレスと亀のアキレスのようにである。ただしこの場合、亀はゆっくりと歩いてはいない。私のアキレスよりもはるかに早く歩いている、走っている。

亀とは、大きな<わたし>である。<プロセス>と呼んだり、<動詞>と呼んだりしているものである。

(加筆して新掲示板記入可)

●身体

上実下虚

●客観

今の自分の美しさには、今は気づけない。

わたしは時がたたないと、今の美しさに気づくことができない。

わたしの真理は、虚偽にいる時には気づけない。

わたしが虚偽から離れた時にしか、真理の美しさに気づくことができない。

では、今も虚偽も不要なことなのだろうか。

今については、今にいる間は何も分からない。

今については、未来にいる間に知ることができる。

今どれほど美しいとしても、今は気づけない。

今のよさは未来に気づくことができるだけである。

もちろん、このことは今の醜さについても同様である。

そして将来、今美しいものが醜く感じることもあり、また、今醜いものが美しく感じることもあり、その醜悪の価値観は後戻りすることはない。

■<わたし><嘘><知識>

今については今いる間は何も分からない。

今については過去を通じて知る、未来を通じて知る。

仮に今誠実であったとすると、過去に不誠実であったことを通じて今の誠実を知る。

仮に今不誠実であったとすると、未来に誠実であったことを通じて今の不誠実を知る。

(9月15日 2012年新掲示板)

●風景

宇宙旅行をしながら思ったこと、これは神の風景である。

2月5日、20日、26日 2004年、9月17日 2012年

●始まり

ナンセンスな思考習慣はわたしで最後にする。

後世の代に伝えないようにする。

となりの人に伝えないようにする。

●<自他><自己想起>

他人がイライラしているのを見て、笑うように、

自分がイライラしているのを見て、笑えばよい。

他人が自分でないように、自分が自分でないのだから。

自分が困っているのを見て、苦しむように

他人が困っているのを見て、苦しめばよい。

自分が自分であるように、他人もまた自分であるのだから。

(9月15日 2012年新掲示板)

●<愛と不安>

生垣は外に対して開いているが、

コンクリート塀は外に対して閉じている。

これを時代というのであれば、われわれは前に進んでいるといえるのであろうか。

最大のセキュリティは何か。

怖れぬことである。

(9月23日 2012年新掲示板)

死ぬときには、死以外は怖れない。

■例

ニクソンの化学兵器に対する姿勢。「宇宙をかき乱すべきか」

■

壊されればつくればよい。

奪われれば、また手に取ればいい。

●<自他><一体><ヒーリング>

子どもは親がいなければ存在しなかったのであろうか。

実は親もまた子どもがいなければこのようには存在しなかったのではないだろうか。

(新掲示板記入可)

●収穫

迷ったときに、困ったときに多くのものを得る。

これは、わたしがそれだけ多くのエネルギー費やしたからなのか。

それとも、援助がきたからなのか。

それとも、まるで別のことなのか。

(9月15日 2012年新掲示板)

●答え

知らない人がいたから知ることができた。

問う人がいたから答えることができた。

新たな答えは知らない人の中から、問う人の中から生まれてくる。

だから知らない人、問う人には感謝し、誠実に対すべきである。

人間関係と誠実だけが新たな知識の原動力である。

(新掲示板記入可)

2月6日、7日、20日 2004年、9月14日、17日、24日 2012年

●意識のある人生～世界

ところで高塚よ。

ていねいにかいているだろうか。

世界に対してていねいにかいているだろうか。

ゆめゆめ忘れぬこと。

(2月10日 2004年掲示板) (加筆済み新掲示板記入可)

■ (参考) 「ガラクタ捨てれば自分が見える」

● 錬金術師 40 ～ < 機会 >

すべての時に、ルーティンな仕事の時に対しても、意味を見出すことができるようにすること。

そのことの前と後とでは、< わたし > が変わったと自覚できるようにすること。

あらゆる時というものは、すべてそういう機会であるのだから。

そして、その気づき、変容ができるために、

すべての時にエネルギーを注ぐこと。

すべての時にブリキのロボットのように反応するのではなく、評論家のように語るのではなく、こどものように、新鮮に世界に接すること。

(2月14日 2004年掲示板) (加筆して9月24日 2012年新掲示板)

● 雲 (変容)

相手の不幸により己の幸福を知る。

相手の無知により己の知を知る。

病気にならなければ、健康を知ることはできない。

病気になることもできれば、健康になることもできる。

病気であることもできれば、健康であることもできる。

2月7日、8日、20日、24日 2004年、9月16日 2012年

● 時事 ～ 「争い」

よくテレビで政治論争をしているが、論争に決着がつくことはない。まあ、バラエティ番組だと思えば、別に目くじらをたてることではないが、このような論争が結局は殺し合い

の戦争にまで結びつくことを考えれば看過するような問題ともいえない。

こういう論争の不思議なところは「自分の論が正しいので、自分の方法に従えばかならずうまくいく」とお互いが考えていることである。

この論争の不毛なところはこの論争が終わると思っているが、決して終わらないという事実がある、ということである。

そして、不思議なことに、相手がどれだけ無知であるかということもお互いに知っている。

(2月25日2004年掲示板)(9月17日2012年新掲示板再掲)

■うそ

少なくとも発言するときには、お互いに、自分が本心を持っていると思っている。

■感情～意識のある生活

アメンバーのような感情を持つ。

境界線のない感情を持つ。

●エネルギー～睡眠

今日寝る時にどれだけ疲れたか。

疲労困憊するまで自分を使い切ったか。

あるいはまた、

今日寝るときまでどれだけ疲れなかったか。

眠らないで済むぐらいまでエネルギーを浪費しなかったか。

■バスの中で居眠りするほどエネルギーを使う。

■出勤前に喫茶店で勉強したこと～グルジェフのいう意識的エネルギーの使用

2月8日、19日、20日2004年、9月17日、24日2012年

●見る～医者と宗教

病気が治ったのは宗教のおかげであると思いきむのは愚かしいことで、わたしの腕がよかったから患者が治ったと思いきむことは当然のことである。このように、ぼんくらの医者は信じる。

あなたの腕がよかったから患者が治ったと思いきむのは愚かしいことで、病気が治ったの

は宗教のおかげであると思ひこむことは当然のことである。このように、ぼんくらの信者は信じる。

翻って、わたし高塚は何を本当に見ているのであろうか。

わたしもまた高塚のぼんくらの通して蜃気楼を見ているのではないだろうか

わたしは真実を見ていないのではないだろうか。

あるいは、見るということは万華鏡のように変化して見えていく、ということなのだろうか。

(2月20日 2004年掲示板) (加筆して新掲示板記入可)

●ヒーリング

不安が一瞬も入り込まないフォース。

●将棋心得

覚めていながら、指してみる。

●知識

本から「知識」を仕入れるより、掃除から<知識>を仕入れることの方が、はるかに大切である。

このようにいえる人がとても多くいる。

(蛇足) もちろん、逆の人もある。<知識>はあるのだが、その人にとっては古びて使い物にならなくなっているのに、その知識にしがみつき、その知識だけを延々と生き続ける人もいる。

(9月24日 2012年新掲示板)

●意識のある人生～自己想起

いま自分が何を考え、何を話し、何をしているかに気づいている。

これを自己想起と呼ぶ。

これは非常に困難な試みである。

空を飛ぶというのは、延べ何百万回の人々の夢であっただろうか。

この回数だけ自己想起の実現を試みしてみる。

(2月20日 2004年掲示板)

●寿命を1年もらった人、1年喪った人

2月9日、10日 2004年、9月24日 2012年

●ユダ～<時空>

ユダはイエスを売ったが、わたしも今日将来のイエスを売ったかもしれない。
もちろん、それはこころの中の出来事であるが、このこころの中の「わたしのふるまい」
は「過去のユダの行い」の原因となっている。

そしてまた、結果であるユダの行為を見て、わたしはわたし自身を知る。

(2月11日 2004年掲示板) (新掲示板記入可)

●神性

偉人と凡人の違いは神性との接触の有無、長さの問題である。

どのような行いにおいても神性と接触することはできる。

また、どのような行いにおいても神性に接触しないということもできる。

掃除をする時に神にふれる人もいる。

人間を助ける仕事をしながら神にふれない人もいる。

(2月18日 2004年掲示板) (加筆済み 9月24日 2012年新掲示板)

■意識のある人生～「神との対話」

2月10日、14日、19日、20日 2004年、9月25日 2012年

●エネルギー

地球人は身体の貯金をくいつぶして生きている。

しかし、貯蓄する方法もあるはずだ。

身体を創り出す方法もあるはずだ。

■物質とエネルギー

■エントロピー増大と減少

エネルギーの増大とエントロピーの減少とは正比例するのではないだろうか？

(情報量を増大させると精神に近づくという話)

あるいは、エネルギーをとことんコントロールすることがエントロピーの減少につながる
のではないだろうか。

エネルギーをコントロールすると、エネルギーはあるところか増大するのではないだろうか。

▲人類のエントロピー減少

人類にとってのエントロピー減少

- 1 肉体
- 2 芸術行為・工場(?)・創造全般
- 3 感情(ハトホルのいうところの人類の特質)

2月11日、14日、20日、26日 2004年

●神社にて～<行為への愛>「見返り」

ご利益を信じなければご利益がないとしたら、それは<わたし>以下である。

神様に手を合わせなければ願いをかなえてあげないとしたら、それは<わたし>以下である。

お賽銭をいれなければ願いをかなえてあげないとしたら、それは<わたし>以下である。

なぜなら、いつもではないにしろ、<わたし>は<わたし>を信じていない人、<わたし>に感謝しない人、<わたし>に金銭をはらわない人にも願いをかなえてあげることがあるからである。

(2月26日 2004年掲示板)(新掲示板記入可再掲)

■信仰から知識へ

あるいは、こうも考えられる。

そのことはもう終わりである。

わたしが何かを信じるということはもう終わりである。

●知識

試験に遅れて泣く人がいる。

試験に遅れても笑える人がいる。

知らなければ泣き、知っていれば笑う。

2月13日、14日、24日 2004年

●意識のある人生

今どこにいるのであろうか。

物質か、主観的知識か、客観的知識か。

車中、目の前の美人に目をうばわれる。
車中、上司に怒られた不始末にところがゆれる。
車中、窓外の夕焼けとともにいる。

わたしは今どこにいるのだろうか。

●意識のある人生～価値

これは死ぬ気でやってみることだろうか。
これは死ぬ気で考えてみるということだろうか。
これは死ぬ気で話すことだろうか。
それほど価値のあることだろうか。

(2月18日 2004年掲示板)

■死ぬ気の日

■最後の晩餐

今日一日の人生と生きて生きること。
常に死を意識した人生であること。
そうすれば、
内容が同じでも、密度が違ってくる。
外見は同じでも、内側が違ってくる。

●仕事

仕事を終わってからの自由時間のことでなく、仕事を、今を生きる。

2月17日、18日、24日 2004年、9月17日、25日 2012年

●分散と集中

どうも最近すべてがちぐはぐな感じがする。
これはもしかしたら、一日を幕の内弁当のように色々なものを詰めすぎているせいかもしれない。

一日に一つのことを行うことがわたしには合っているような気がする。

(2月19日 2004年掲示板)

■霊学～<エネルギー><愛と不安>

エネルギーの使用法としての集中、密度。数学では、 $1 + 1 + 1 = 3$ で、 $3 + 0 = 3$ であるが、霊学では、「 $1 + 1 + 1$ 」が3だとすると、「 $3 + 0$ 」は5や6になる(要は、エネ

ルギーは凝縮すると増大する（あるいは減少しないというべきか）ということである。

あるいは、こういうこともいえる。

$$3 - 1 = 2$$

$$3 - 2 = 3$$

であるが、

$$3 - 3 = 6$$

である。

これは、いつも引用する「半分の水が入ったコップ」の話である。

このような、霊学の法則を用いないと所詮は奇跡的治癒や物質化などは可能ではない。

(参考)「三分の水が入ったコップの話」

■食事量とエネルギー量

満腹度を高くすればするほど、エネルギーが浪費されるような気がする。

どのような状態でエネルギーが浪費されることなのかチェックする。

これには、普遍性のあることと個人により違いのあることとがある。

他人を生きること。

過去を生きること。

未来を案じること。

●創造

条件を意志するのでなく、

条件から生じる目的そのものを意志する。

その場合、意志により当初の条件は実現されないかもしれないが、目的が実現するための最高の条件が与えられる。

(新掲示板記入予定)

■条件

昔、自分の部屋があればもっと勉強できるのに、と思ったが、自分の部屋を与えられても勉強することはなかった。

昔、仏壇があればもっとお経を称えることができるのに、と思ったが、仏間をつくり仏壇を置いてもお経を熱心に称えるということにはなかった。

必要な条件というのは、蜃気楼のようなものである。

条件を意志するのではなく、目的そのものを意志すること。

条件が仮にあるとすれば、それは意志についてくる。

(新掲示板記入予定)

●質問～＜存在＞

「神との対話」にこういう記述がある。創造の秘密の話である。

「そこまでわかっているならば、強い感謝の気持ちが生まれる。感謝せずにはいられない。それがたぶん、創造の最大の鍵だ。創造が具体化する前に、創造に感謝することだ。願いは当然かなえられると信じることだ。そう信じてもいいどころか、信じたほうがいいのだ。それこそが悟りの確実なしるしだ。すべての＜マスター＞はあらかじめ、ことが成就すると知っていた。」

(ニール・ドナルド・ウォルシュ著「神との対話」1巻123ページ サンマーク出版)

感謝は難しい。それはさておき、

実現できること——創造が具体化すること——が何であるなら、わたしはその実現を前もって感謝できるであろうか。

そして、その感謝できることそのものが＜わたし＞であり、グルジェフのいうビーイングである。

(9月17日2012年新掲示板)

さらに言うと、その感謝できることそのものである＜わたし＞により、今の＜わたし＞を知ることができる。

家を手に入れることが願いであり、その実現が感謝であるなら、それが＜わたし＞である。それがわたしであると知るべきだ。

人のために生きたいと常々言っているけど、そうであるのだ。

これは非難でも何でもない。ただ、自分自身を知ることができ、うそをつくことはないと言っているだけだ。

その意味で、この問いは尊い。今の<わたし>を明らかにしてくれるからである。

■創造の秘密

「あらかじめかかっていることを感謝する」というのは、不安でなく、愛のこころの在り方である。

●神と通じる法

市野さんの人の話をよく聞く姿勢。

■意識のある人生～神と通じる

神と通じるためには…、ひとつには、他人の話をよく聞いてみること。

(2月19日 2004年掲示板)

●錬金術師4 1～<身体>「運動」<動詞>

運動をすると、体全体のひとつひとつの細胞が働く。

同じようにして、体全体のひとつひとつの細胞が働く<わたし>の在り方とは何であろうか。

今日一日、すべての細胞が働いたであろうか。

一日の終わりに身体に聞いてみる。

(2月25日 2004年掲示板) (加筆済み 9月25日 2012年新掲示板)

2月18日、19日、20日、24日、25日 2004年

●相対的世界 (「神との対話」読書会)

因果応報

自我のインフレーション

相対的世界

●行為への愛

「結果を体験するまで、自分が思考と言葉と行為をどう選んでいるか、意識しなかった

ということだ。」(1巻106ページ)

「結果の原因を生きる」

意識することが行為への愛であり、原因を生きることであり、結果をのぞむことが結果を生きることである。

結果を望むことは愛ではない。他人に対しても自分に対しても。

●二つの創造

創造には二つの方法がある。

ひとつは「願いがすでにならっている」「神がわたしの願いをすでにならえてくれている」と究極的な形で信じる方法である。これは神という他力によって創造される方法であり、この意味で、この創造は大乗的な創造と呼べるかもしれない。この創造は他力による方法でその意味では易しい方法、易道といえる。だが他力とはいっても、とてつもなく難しい創造ともいえる。わたしの願いを神がかならず聞き入れてくれるとはとても思えないからである。

浄土真宗では「一声でも南無阿弥陀仏と称えれば、救われる」と言う。しかし、一声でも「南無阿弥陀仏」と称えることが本当にできるかどうか。特に現代人にとってそのようなことは可能かどうかということは疑問のこととして残る(だからこそ、そのように称えることができる人は悪人であり、浄土真宗は悪人が救われるための法であり、そして、まさに悪人こそ救われるという不可思議な論が成立するのである)。同様に、大乗の創造も凡夫にこそ開かれた易道の創造であるが、凡夫が現代に果たして存在するのかどうかという疑問も大いにある。

もうひとつは「願いの目標の成就を常に考えつづけ、言葉に出し、行動する」という方法である。これは、「大乗的創造」よりも難しい。ただし、簡単ともいえる。わたしの努力でできることだからである。時間はとてもかかるかもしれないが。その意味でこの方法は自力の創造、小乗的創造と呼べるかもしれない。

(2月24日2004年掲示板)

●<神と人間><知識>

わたしのカップに入っている紅茶の水は海に由来し、また、いつか海に還っていく水である。

だが、そのことに<真に思い至ること>はできない。

わたしという存在はある存在から出来し、ある存在へと還っていく。

だが、そのある存在に思い至ることはできない。

わたしは紅茶という私も海というある存在もまるで知らないからである。

(2月23日 2004年掲示板) (加筆済み)

■<感情><動詞>

わたしのカップに入っている紅茶の水は海に由来し、また、いつか海に還っていく水である。

だが、そのことに<真に思い至ること>はできない。

わたしは、紅茶も海も知らない。

もちろん、ある意味では知っているが、ある<知>、ある<感動>からは万分の一、億分の一以下の量しか知らない、ふれられない。

だから死があり、死の際で初めてその知にふれるのであろう。

だからまた、死を待つのでなく、生きているときに死とともにいることである。

イエスが言ったように、人生は橋を渡ることと知ることであり、

人生は遊行の行のようにただ歩くことであり、

そして、その歩みとともに積分関数のように積み上げていく、その動きそのものである、

そのようにあることである。

(加筆して新掲示板記入可)

●ヒトラーの選択

ヒトラーの選択は気高い選択であったか。

① 神性のある選択

② 意識のある選択

気高い選択とは「わたしはこれを選ぶ」と言える選択である。

「相手が気に入るからこれを選ぶ」

(要加筆)

● 「神との対話」

神の「わたしの名で呼ぶものは」という名前とは？

<わたし>のことであろうか。「これがわたしである」というわたしであろうか。

● 創造

完了形の祈りとしての「かたち」?????

2月20日、24日 2004年、9月18日 2012年

● 所有

誰も他者から何も受け取ることはできない。

自ら創り出すことができるだけである。

● 錬金術師37～「意識のある人生」「真言」「マントラ」

無意識の呼吸しかしたことの無い人は、意識的な呼吸の感覚を知ることなく死んでいく。

そして、無意識の呼吸を基準に考えるので、意識的な呼吸がもたらすものは何もないと思うかもしれない。

同様に無意識の生き方しかしたことの無い人は、意識的な生き方の感覚を知ることなく死んでいく。そして、無意識の生き方を基準にして考えるので、意識的な生き方がもたさすものは何もないと思うかもしれない。

そしてまた、声もまた同様である。

(蛇足) 意識とは瞬間瞬間の気づきである。

(2月26日 2004年掲示板) (加筆して9月18日 2012年新掲示板)

■ 「空海の夢」

22章「呼吸の生物学」参照

「内外の風気わずかに発すれば、必ず響くを名づけて声というなり」

■ 呼吸

意識的な呼吸は意識がないと成立しない呼吸である。

● スランプ

教室の時間においても、個人の中においても。

<どういう流れになっているか>。

その流れに入りこんでいく。

自己放棄。自意識の放棄。

神性とどのようにしてつながるか。

エネルギー量の欠如に注意すること。

以上は、スランプでなくとも留意すべきこと。

2月21日2004年、9月18日2012年

●日経新聞の記事から

最近いろいろな新聞で「オウム」関係の連載記事が載っているが、今日の日経新聞の記事には感心した。一部抜粋すると、

「森監督も足かけ五年、信者の日常や教団を囲む反対派住民、警察、マスコミの姿を追い続けた。住民と信者の談笑も、あるがままにカメラに収めた。テレビ向けの映像にプロデューサーが言った。「笑う信者はいらない」。森監督はテレビ界を追われた。…

セラピストの服部雄一氏も「すべてのことを善か悪かの二元論で判断させることがカルトの特徴」としたうえで「日本社会がオウムを生み出したというより、社会そのものがカルト化している」。カッターナイフを所持していた信者を銃刀法違反の現行犯で逮捕した警察当局。…

「地下鉄にサリンをまくことが人々の救済につながると思い込んだ教団と、信者はみな洗脳されて感情を喪った殺人集団だと短絡してしまう僕らはどこか似ている」と森監督。」

一読に値する記事だと思う。

(2月21日2004年掲示板)

■時事～視点

感情が熱くなってしまう時にこそ、以下のような視点は大切である。

2004年の2月21日に旧掲示板に書き込んだ内容の再掲である。

以下引用。

(9月18日2012年新掲示板)

2月24日2004年、9月18日2012年

●主観と客観

親が自分の子どもを見るように、親が他人の子どもを見る。
親が他人の子どもを見るように、親が自分の子どもを見る。
主観を限りなく客観に用い、客観を限りなく主観に用いる。
社会面の事件では、悪い方で実現されているが、これは良い方でも実現できる。

2月25日2004年

●共同研究

科学の世界では理論の分野にせよ、共同研究により成果が上がる。
精神世界における共同研究とはいかなるものであろうか。
成立するのか、しないのか。

集団での修行

仏陀の出家時の仲間

進化した宇宙人が集団でいること。

●理論

精神世界で、宇宙物理学での理論に当たるものはあるのだろうか。

2月26日、29日、3月1日2004年、9月18日、25日2012年

●質問～意識のある人生～<創造><わたし>

今、未来永劫、意志しつづけることができるものとは何であろうか。

今、未来永劫、行為への愛として持ちつづけることができるものとは何であろうか。

(2月29日2004年掲示板)(9月18日2012年新掲示板再掲)

■創造

創造的な仕事がしたい。

自分にとって、一瞬一瞬が創造的であること。

■永久機関

行為への愛という永久機関

行為そのものを愛すると、それは永久に動きつづける。

これは止まることのないわたしの永久機関である。

(新掲示板記入予定)

●他者の怒りに接して～自他

自己を見る、厳しく。

他者を見る、温かく。

すべてに意味があること。

そして、この場合、その意味とは何か。

すべては自己が傷つくためにあるのではなく、

すべては自己が成長するためにある。

そのすべてに意味を見る。

そのすべてに意味を見ることができる。

非難される前の、元からそうである自分は、ある意味で、非難によっては何も変わらない。

傷つくことによっても何も変わらない。

変わるのは、その機会を通じてわたしが変えようとするものだけが変わる。

(加筆して新掲示板記入可)

●患者と医師

病気が治らないのは、患者の責任である。

病気が治るのは、医師の責任である。

第三の道とは…、

双方にとって責任がある、

双方にとって意味がある、

ということである。

(加筆して掲示板記入予定)

●箱庭療法～<クリア>「諸行無常」

作って、その後壊す。

子どもの遊びも作ってこわす、ところがある。

いつまでもあった方がいいものと壊した方がいいものがある。

しかし、前者のようなことはあるのだろうか。

すべてが変化して価値あるものとなっていくのではないだろうか。

あるいは、伊勢神宮のように、全うしないうちに建て直すことの意味。あるいは、全うしているのであろうか。

ただし、現代の使い捨ては気が狂っている。

●死

生を愛していないように、死を愛してない。

だからこそ、死を愛さざるをえない時に、

生を愛し、死を愛することができる。

(2月29日 2004年掲示板)

●自他

わたしを理解してもらおうとするのでなく、わたしを正当化するのでなく、他者との共通の土俵で互いにとって生まれてくるものは何か、と問うてみる。

●嵐

平和な時には、愛の人になれる人は数多くいる。

しかし、争いの時にも愛の人になれる人はとても少ない。

だからこそ、争いの時には冷静になり、他人もわたしも見る必要がある眼が必要となる。

外に争いがある時には内にも嵐が吹くが、外は鎮められなくとも、内を鎮めることはできる。

(3月12日 2004年掲示板)

●錬金術師～時事～<自他><わたし>

動物にしろ、植物にしろ、理解し合えるところがあるとしたら、彼らとは仲間であるということである。

そして同じように、敵と呼ぶ人間とも仲間になれるかもしれない。

理解し合えるところがあればである。

その前に、理解し合えるところがあると思っていればである。

その思うことは、わたしの仕事であり、錬金である。

(新掲示板記入可)

●真の姿

宇宙とは、わたしが小さい頃に赤と青のメガネをつけて見た立体漫画のような世界である。

では、＜本当は＞どうであるのか。

本当とは、あるのであろうか。

●時空

光の速さ

意識の速さ（気）

瞑想の時間経過

この場合、時間だけでなく、空間についても考えてみること。

●知ることができないもの～時事

何を怒っているのか、

知らない。

何を喜んでいるのか、

知らない。

何を創り出しているのか、

知らない。

これは、被告のことでなく、

わたしのことである。

(2月27日 2004年掲示板)

■鏡

わたしはわたしの姿を他人を通じてしか見ることができない。

だから、わたしを見たいときには他人を見る。

(3月8日 2004年掲示板)

2月27日、28日、29日 2004年

●鉄拳

映画「A I」でのロボットの処刑

西部劇でのリンチのしばり首

フランス革命でのギロチン

創る人が愉しんで創れば、愉しめるのかもしれない。

創る人が怒って創れば、怒れるのかもしれない。

創る人が悲しんで創れば、悲しめるのかもしれない。

そして、創る人とは一体誰なのか、ということだ。

(2月28日 2004年掲示板)

●映画「ロード・オブ・ザ・リング」を見て

構想でなく、化石、化石を探し出すものはエネルギーである。

使命を果たすということ

悪×悪により生じるもの

純粹な魂（フロド）は召使のようなサムや悪鬼のようなスメタナの力を借りて使命を果たしきる。

●インフルエンザ

風邪をうつされるのは怖いけれど、風邪をうつすことは怖くはない。

鳥が死ぬのは怖くないが、その鳥を食べさせられるのは怖い。

(3月4日 2004年掲示板)

2月28日、3月1日、3月6日 2004年、9月25日 2012年

●妥当性

「それは当然である。」

このように言った人が何十回か、何百回か、あるいは何千回か生まれ変わった後に、「それはひどいことだ」と言うようになるかもしれない。

(2月28日 2004年掲示板)

■妥当性②

殺すことは当然であると考えて人を殺した人間を殺すことは当然である。

(3月2日 2004年掲示板)

こう皮肉っぽく言ったとしたら、前者と後者の妥当性には天地の差があると反論する人がいるかもしれない。

しかし、そのように見えても本当はその天地はつながっているのかもしれない。

■罰

罰を与えてもその人間は変わらない。

他者を変えるということは基本的にできないことである。

できることは、他者自身が変わることであり、それはその人自身によって達成される。

そして、どのような人であれ、変わることができれば、それは人間の最も崇高な行為である。

(3月7日 2004年掲示板)

■内と外

三人殺すと死刑になる。

だが、わたしがこころのうちで殺した人間は三人どころではない。

だが、現実とこころとは違うと言う。

では、わたしはこころの世界で死刑になるしかない。

だが、こころの世界では死刑にならない。なぜか。

こころの世界は人間が支配しているのではないからだ。

その世界を支配しているのは自由だからである。

(加筆して新掲示板記入可)

●神性

散歩をしながら思ったこと。

自然のうちにある神仏との共鳴をこころがける。

こういう瞬間は稀であるが、常であるように。

瞑想のときにもそのようなイメージを試してみる。

接触の実感。

寒天状の実感？～気を受けない気～創造力？

2月29日、3月1日、4日 2004年、9月18日、25日 2012年

●<行為への愛>～「美醜」<内と外><自由><動詞>

美人であれば、相思相愛になる可能性が高いかもしれない。

しかし、好きな人を愛することができるかどうかは、容姿とは関係がない。

愛されるかどうかは外側の問題であったとしても、愛するかどうかは内側の問題だからである。わたしの問題だからである。

愛されることが人生の目的であるなら、美人に生まれた方がよい。

しかし、愛することが人生の目的であるなら、外面の美醜はまったく関係がない。

誰もが顔をそむけるような容姿であっても、他人を愛することができる。

愛されなくとも＜愛することができる＞ことを知るには、
できないことを望むのでなく＜できることをする＞ためには、
顔をそむけるような容姿に生まれた方がよいということもありえる。

人生は長い、50年でもないし、100年でもない。

そして、できること——自由もまた50年でもないし、100年でもない。いつまでもつづいて終わることはない。

だから、どのようなことがあっても、何が起こっても、どのような境遇に生まれても、今を生かすことである。

(3月4日2004年掲示板)(加筆して9月25日2012年新掲示板)

●意識のある人生～神

最近気づいたこと。

わたしの人生のすべては神に刻んでいた。

掃除をするにしろ、他人に悪心をいだくにしろ、路上につばを吐くにしろ、
たまには、人や生き物に親切にするにせよ。

すべてを神に刻んでいることに気づいたならば、

これからは、

わたしの人生のすべては神に刻む。

このことをつねに知っているようにすることである。

(加筆して新掲示板記入可)

★3月2004年

3月1日、2日 2004年、5月30日、0月18日 2012年

●草稿

「気」の体験記

●意識のある人生

不安の除去にあらゆる手立てを取ること。

そのためには、まずわたしのほとんどすべての行為が不安を基盤としていることに気づくこと。

●ヒーリング

戦わない気を知る

抵抗しない気を知る

そして、できれば、邪気をはっきり知ること。

●<わたし><自他>

あらゆる人間関係において、

相手がどのような人間であるか、ではなく、
わたしがどのような人間であるか、である。

相手がどのようにふるまうか、ではなく、
わたしがどのようにふるまうか、である。

相手によってわたしはどのようにふるまうか、ではなく、
わたしによってわたしはどのようにふるまうか、である。

(3月3日 2004年掲示板) (加筆済み9月18日 2012年新掲示板)

■<自他>

喜んでいる人の顔を見て喜ぶ。

怒っている人の顔を見て怒る。

悲しんでいる人の顔を見て悲しむ。

最初と最後はいいが、まん中とは無縁な人でありたい。

■原因三態

殺人者が原因である、社会が原因である、そして、わたしが原因である。

(6月1日 2012年新掲示板)

■ショック死とショック生き

ショックを受けて死ぬのではなく、どのように<わたし>を表現するかという強さを内に持ち、日々新たに生き返ること。

(新掲示板記入可)

●小松幹生 (劇作家) 日経新聞 3月1日 2004年～ピノキオ

昨日1日の日経新聞に劇作家の小松幹生氏が寄稿していた文章を引用させていただきます。

「考えてみると人形のピノキオがなぜ人間になりたいのか。人間になりさえすれば幸せになれると考える人など、現代にはもはやいないのではないか。人形と人間とはどう違うのか、人間とピノキオを議論させる場面を加え、このことを考えてみた。」

3月25日から28日まで紀伊国屋サザンシアターで「ピノキオ」が上演されるようです。おもしろいのかどうかは全く保証のかぎりではありませんが、自分は見にいかうと思っています。

(3月2日 2004年掲示板)

3月2日、4日、5日、6日、7日、8日 2004年、5月30日、9月18日 2012年

●不愉快

不愉快な出来事、不愉快な他人は排除するのではなく、自分にとっての意味、これまでの意味ではなく、<新しい>意味、これを見出すための機会とする。

●意識のある人生

昔、バカじゃないの、と無視していたことが最近はやけに気になる。

たとえば、常に神と、仏と、創造者…と共にいること、という話も最近気にかかり、相当真面目に考えていることである。何というか、常に「あるエネルギー」、「ある気」、「ある感触」、「あるインスピレーション」、「ある喜び」、「ある柔らかさ」と共にいる、それに触れている、ということは相当意識している。

(3月7日 2004年掲示板)

■神仏

今の段階では、
気の交流だけをこころみること。

■知識

体験したことのないことは<知識>ではない。だから、言葉の表面的なことしか知ることができずに、捨て置く。

●穢れ

宗教教団に多額の寄付を行うことは、ひとつには信者のお金に対する価値観の誤解があるのかもしれない。お金は穢れたものである、という価値観が。
ただ、こういう穢れという価値観は他のものにもある。

セックスであり、排泄物であり、・・・

●<行為への愛>

- ①創造の秘訣ということ、すなわち、結果に執着しないこと、結果を望まないこと
- ②<存在>～あるものだけを手に入れることができる
- ③十八願が実現されていること

●コーヒー

子どもが飲んでいけなくて、大人なら飲んでもいい、というものはあるのだろうか。
(モスにて)

成人映画は選べるということ

コーヒー、アルコール、タバコも選べるということ

成人であれば、人に成っていれば

●意識のある人生

門を閉じない、身体を硬くさせない、現象にとりこまれない。
門を開く、身体を柔らかくする、現象をいつも見ることができる。
SOMETHING は人を困らせるようなことは何もしていない。
(3月5日 2004年掲示板)

●錬金術師38～<エネルギー><魔術>

生まれつき持っているエネルギー量の多寡にかかわらず、

今のその人の最善の努力をすれば、すなわち、その人にとっての最大のエネルギーを注げば、信じられないことがつねに生じる。

だから、いつもいつもエネルギーの最大値で生きることである。

(9月18日 2012年新掲示板)

■呼吸

ただし、エネルギーは頑張れば最大値に達するというものではない。

■錬金術師4 2～<エネルギー><わたし><シンクロ>

小学校1年の時に原因不明の骨の病気で右足を股関節から切断しなければならなくなった。しかし、入院して再検査の手術をしたところ、過去に一例、同じ病気で手術して治った例があり、切断せずに患部の病巣を取り除く手術だけで治癒した。

わたしは入院中、毎晩寝る前に神様に足がよくなるようにと祈っていた。わたしはこの祈りが聞き遂げられて、足が治ったと今でも信じて疑わない。

研究所勤務の父は父で簡単に切断と言われて引き下がることはできなかった。理詰めの納得できる話しでなければ承諾できなかったという。その粘り腰により医師がとことん調べることができたと思っている。

東大病院の医師は医師で日本で二例目の病気を治したのは自分の力量によるものであると思っているであろう。

どれが真実なのだろうか。おそらくは、どれもが真実である。

わたしは祈りに帰する。

父は親の願いに帰する。

医師は技術に帰する。

どれもが第一の原因である。

第一の原因は三つある。この世界にいるかぎり、第一の原因が三つあるということは理解しがたいが、「シンクロシティ」、「意味のある偶然の一致」と考えれば不思議でもない。どのような力であれ、そこに多くのエネルギーが注ぎこまれると、不可思議な現象の一致が生じる。そして、その現象はどれもが第一の原因であるような現象である。

(蛇足) この現象は、この世の成功不成功にかかわらない。この世の善悪にもかかわらない。かかわるのは、あくまでも<わたし>である。<わたしは何者であるか>という<わたし>である。

だから成功不成功を考えるのでなく、善悪を考えるのでなく、

<ここで自分は何をするか>

<ここで自分はどのような人間であるか>

ただ、それだけである。

(3月5日 2004年掲示板) (加筆済み 9月26日 2012年新掲示板) (草稿要転記)

●意識のある人生～アドリブ

マニュアルは捨てる。常に時に応じた親身の対応をする。

人間に対して。

生き物に対して。

世界に対して。

(3月6日 2004年掲示板)

●意識のある人生

今という時は、魂の望みと合致しているかどうか。

3月3日、9日、14日 2004年、5月30日、9月19日 2012年

●怖れ

高校の時に飛び箱を飛べなくなった原因は一度飛びそこなって不安になり、ブレーキを心身ともにかけることになったことによる。

人生も同じようにして越えることのできない飛び箱がたくさんある。

もしかしたら、人生はアクセルの踏みっぱなしでよいのかもしれない。

ただし、技術は必要である。知識、知恵は必要である。

●タイタニックゲーム

選択が真剣であるか否か、自分で考えた答えであるか否か、選択そのものが自分を表している。(参考「神との対話」1巻140ページ)

●通信簿

誰もが「他者がどのように考えているか」を知ることは得意であるが、「自分がどのように考えているか」を知ることは得意ではない。

この地球上では、他人の評価によって自分の評価が決まるからである。

だが、天の評価まったく別物である。

そしてもちろん、わたし自身の評価もまたまったく別物である。

(3月10日 2004年掲示板) (9月19日 2012年新掲示板) (草稿要転記)

●入信と退信

わたしは幸せである。

世間でいう幸せを超えて幸せである。

この喜び、有り難さをどう表現したらよいのか。

これがわたしの入信の動機である。

しかし、入信して仏壇の前で手を合わせていても、神棚の前で手を合わせていても、最初に感じた至福は生じてこなかった。

要するに、神棚にも仏壇にも我々の創造者はいないし、我々の創造者はそんなことはちつとも望んでいない、ということに気づいた。

そして、退信した。

(加筆して掲示板記入予定)

3月5日、9日 2004年

●主従関係

従属したい人間がいるかぎり、従属させたい人間が出てくるかもしれない。

あるいは、従属したい人間が従属させたい人間を作り出しているのかもしれない。

3月6日、7日、9日 2004年、9月19日、26日 2012年

●自立<自他>

他人に迷惑をかけずに他人のために生きるぐらいなら、他人に迷惑をかけても自分のために生きる方がはるかによい。

このことは何も他人の迷惑をかえりみずに、わがまま放題に生きることをすすめているわけではない。

自分を生きることの大切さを言っているだけである。

念のために付言すると、他人に迷惑をかけずに他人のために生きていても、他人が迷惑に思うことが数多くある。その際たるものは、親子関係であり、恋人関係の片思いである。

(3月13日 2004年掲示板) (加筆済み新掲示板記入可)

●意識のある人生

小学校の授業で絵を描かされた。

大人になってクレヨンを買ってきて絵を描いてみた。

絵は小学校の時のの方が気に入っているが、行為は大人になってからのの方が気に入っている。

(3月6日 2004年掲示板) (9月26日 2012年新掲示板再掲)

●天才

生まれもつての才能に恵まれている人にはこれまで羨望のまなざしをもって見ていた。
しかし、この年齢になると、天賦の才などくそくらえである、というふうに見方が変わり始めている。凡夫53年のやっかみなどではない。どのような才能をもっているかというよりも、今もてる才をどれだけ生かしたかということの方に魅力を感じるからである。その意味では、よく言われる「最高の才能とは努力できることである」という話はまったくもってその通りだと思う。ただし、天賦の才もなければ、努力できる才もないという「ないない尽くしの人間」であっても、変わることはできる。この変わるというのはこの世界で最も不思議なことで、この変化は諸行無常の響きとしての常ならずでなく、変化することの中で蓄積されてくるものがあるところが不可思議なところである。では、その蓄積とは何かというと、「上手な演奏ができる」とか「最善手を指せる」とかいうのは副次的なものであり、

■神聖なる矛盾

グルジェフの「ひとつのことを上手にやる人は他のことも上手にできる」。

●わたしの望み

わたしの望みは全てを知ることである。
でも、これは「神との対話」での小さな魂の望みそのものである。

毎日、毎日、このことを意識すること。

●意識のある人生～自己観察

身体を自分だとく思って>しまうこと。
他人の考えを自分だとく思って>しまうこと。
不安、怒り、嫉妬、憎悪を自分だとく思って>しまうこと。
この自分だと思ってしまうものをよく観察してみることだ。
いつも、毎瞬毎瞬観察してみることだ。

いつか自分は全く別のものだと知ることができるかもしれない。
あるいは、そこまでいかなくとも、別のものを自分だとく思って>みることができるかもしれない。

(3月24日 2004年掲示板)

■ 悟り

情熱の対象を変えてみることに。

3月7日、8日、9日 2004年、5月30日 2012年

● 存在

何が自分であるかを常に実感していること。

わたしは意識しなければ、たいていは他人の思惑という世界に取り込まれる。
相手は今何を考えているのだろうか、それに対して自分は何をするのが得策だろうか、と
いう世界に取り込まれている。

問題は、
取り込まれていること、
と
損得計算をしていることである。

したがって、変えるべきことは、
自らが原因となること
と
損得計算でなく、これが自分の役に立つ、あるいは、これがわたしである、という選択を
することである。

(加筆して新掲示板記入可)

● 意識のある生活～真空

何もしない時間をつくる。
その時間はいわば宇宙論における真空。
そして、その真空に存在するかもしれないというエネルギー。
それを何もしない時間に取り入れる。
再生のエネルギー、創造のエネルギー、神仏のエネルギー。
緊張せずに入ってくるエネルギー。

(3月9日 2004年掲示板)

3月8日、9日、11日、12日 2004年

● エネルギー～抵抗

抵抗すれば相手は大きくなる。
雲消し

ティッシュペーパー

因果応報

法則

結婚式の時、妻方の主賓のスピーチを頼まれた元職場の女性は連絡なしのドタキャン、以降のお詫びの連絡もなかった。妻とは職場が違って、もう二度と会うことはないとふんだのかもしれない。しかし、1ヵ月後に思いも寄らないビルのエレベーターで偶然一緒になってしまい、謝らざるをえなくなってしまった。彼女は妻に何か悪意をいただいていたのであろうか。ともあれ、ドタキャンにいたるまでの心的エネルギー、そして当日の心的エネルギー、それは彼女にとって心地よいものであったとしても、そのような抵抗の仕方は相手を大きくする。ではここでいう相手とは何か。それは悪意にまといつく様な現象である。それは自分自身が作り出したこの世の現実ともいえるし、この世の幻想ともいえる。現実と呼ぶにしろ幻想と呼ぶにしろ、それは自分自身が創りだしたものであるからである。

(新掲示板記入可)

●映画

悲しい映画「道」を見ている時には悲しい。しかし、見終わった後は楽しい。

怒りの映画「ランボー」を見ている時には怒りがわく。しかし、見終わった後は楽しい。

怖い映画「ポルターガイスト」を見ている時にはおっかない。しかし、見終わった後は楽しい。

同じようにして、この人生を終わった後にも楽しいといえるのだろうか。

死後の世界はそのようにいえる世界にできているのであろうか。

そしてまた、わたしの人生はどのような人生であったにしろ、死後楽しかったといえる人生であらうか。

そしてまた考える。生きながら、現在進行形で楽しいといえる人生を送る手だてはないのであろうか。

(3月9日2004年掲示板)

3月9日、11日、12日、14日2004年、5月30日、9月19日2012年

●形式と内実

楽譜と演奏

プロに勝つコンピューター同士の将棋と人間同士の将棋と。

同じ曲でも、演奏家によって似て非なるものになる。

どのぐらい違うかということ、将棋というゲームで同じルールで対戦しても、わたしとへぼ

二段氏の対局と羽生と森内の対局とが天地の違いがあるように、異なる。

将棋

わたしの指す手はすべて分かっている。

わたしの指す手はさっぱり分からない。

内実は形式によって見ることができるだろうか。

自分と同じ内実は見るができる。

自分を越えた内実は見るができる場合とできない場合とがある。

絵画の真贋論争。

●意識のある人生～創造

毎瞬、毎瞬、同じものを選択する。

毎瞬、毎瞬、同じことを考える。

ただし、その前に同じもの、同じことがあることが前提となる。

(3月11日 2004年掲示板)

●意識のある人生～経穴

地球の経穴となる。生き物の経穴となる。

経脈の流れの中で気の流出、流入のポイントとなる。

●あいさつ

あいさつの仕方が悪いと怒る人間がいる。

しかし、怒らない人間もいる。

神様はどちらであろうか。

二拝、二拍手、一拝を間違えると、怒るのであろうか。

礼儀知らずとどのしるのであろうか。

このあいさつの仕方はいつまで有効なのだろうか。

神様が生きている間であろうか。

あるいは時代が変わればあいさつの仕方も変わるのであろうか。

また、わたしが考える神様のイメージは

■自由

ただし、神があいさつを要求しないといっても、神にわたしがあいさつをするかどうかは

別問題である。

ただし、あいさつは今日もよろしく、でいいかもしれない。

一回頭を下げるだけでいいかもしれない。

3月10日、11日 2004年、5月28日、30日 2012年

●水

雲消し、アルコールの除去、生物へのヒーリング

効果が顕著なものは水が媒介となっているのではないだろうか。

水の存否が究極的ではないにしろ、わたしの現段階ではかなりの必要要素となっているかもしれない。

(補足～手に水を浸すこと)

(注意～アルコールの除去は未開栓の缶ビール)

●意識のある人生

今日は誰と共にいたのであろうか。

SOMETHING とはどのくらいいたのであろうか。

あるいは、前世から繰り返しているわたしの凝り固まったところといたのであろうか。

夜に気持ちよく眠れるかどうかは今日一日「誰といたか」かのメルクマールとなる。

(3月14日 2004年掲示板) (加筆済み新掲示板記入可)

3月11日 2004年、5月28日 2012年

●自他

どうでもいいことは相手のいいなりになるが、決してゆずれないことは自己主張を曲げない、という人生をずっと送ってきた。前者は外的なこと、後者は内的なことである。

この(内的信念に関して)ゆずれないことを誇りとしてきたが、しかし、最近思うにこんな誇りはホコリのようなもので、話しても通じないことを主張しつづけるのは愚かというものであると思うように変わってきた。

やはり自他との関係においては、シュタイナーの黄金律が、たとえ難しくとも、手本とすべきことのように思える。

「私が他人と異なる意見をもっているかどうかはどちらでもよい。大切なのは、私の方から何をつけ加えたら、その人が自分で正しい事柄を見出せるようになれるか、ということだ」。

(「いかにして趙感覚的世界の認識を得るか」 104 ページ イザラ書房)

(3月11日 2004年掲示板)

●意識のある人生～機会

どのような機会であれ、機会は黄金とする。
その黄金の機会にわたしは何を選択するのか。
ただそのことだけを問題とする。

なぜなら、そのことだけがわたしをつくり出すからである。

(3月12日 2004年掲示板) (5月29日 2012年新掲示板)

●神様の碁

神様どうしが碁を打つと、どのような対局譜が生まれるのであろうか。コミを6目とか7目とかにしておけば、結果はジゴになるであろうが、碁の内容はどのようなのであろうか。序盤から激しい戦いになるのであろうか。あるいは、さらさらと並べて寄せて、ジゴとなるのであろうか。

将棋は「持将棋」は別として、まず勝ち負けがつくゲームであるが、囲碁の場合は、現在のように「6目半」のように「半」をつけなければ、神様同士でやれば、ジゴになるであろう。これが呉清源のいう「碁は調和である」ということなのだろうか。進化した星では勝ち負けのつくゲームはやらないというが、そのような意味では将棋と比べて囲碁は勝負を争わないという側面も持っている。

あるいは、やはり勝ち負けの要素もあるにはあるので、神はやらないと言うのであろうか。神は戦争をしないように、囲碁というゲームにも参加しないのであろうか。囲碁というゲームは人類独特のゲームで、その戦闘性とその調和性とに人が惹きよせられて行っていることを、神は神なりに「神ではできぬゲーム」を味わって見ているのであろうか。

3月12日、15日 2004年

●本人確認

最近、静脈や光彩や顔相によって本人確認する記事をよく見る。

しかし、本人とは一体何であろうか。

そして、何のために確認するのであろうか。
預金を他の人に引き出されないためか。
確かに引き出されては困る。

しかし、同時にどこか違っている、という内なる声も聞こえてくるのである。

声の源が何であるか分からないのだが、どうもこの世界での意味の枝葉末節のようなシステムのような気がしてならない。

それは本人でなくともいいのではないか。

●質問～<プロセス><時空>

昔の自分と今の自分とが対話するとしたら、今の自分は昔の自分に何を一番伝えたいであろうか。

将来の自分と今の自分とが対話するとしたら、今の自分は将来の自分とどういう話しをしたいだろうか。

(5月29日 2012年新掲示板) (草稿の質問へ転記済み)

3月13日、14日、16日、20日 2004年

●意識のある人生～不安

人生を不安で覆わないようにすること。

不安でないということ、これは通常外からくるものであるが、内から意識的に行うこともできる。

意識的に行うことができれば、いつも不安から離れていることができるようになる。

●衣装

女性に生まれると、隠そうとする。男性に生まれるとその隠されたものを見ようとする。これはメガネの問題である。生まれる前の問題ではなく、生まれた後の問題である。今は男性として生まれて見ようとし、かつて女性として生まれて隠そうとし、また来世女性として生まれて隠そうとする…。何かこれは、見られたことをののしったり、見ることに莫大なお金と時間を費やすことのばかばかしさを物語っているように思える。メガネをかけたかえてみると違うように見える、メガネをはずしてみると違うように感じる。このようなことはこの世界にどのくらいあるだろうか。

■衣装

女性に生まれたときには見られることを嫌い、男性に生まれたときには見ることを好む。女性に生まれたときには見せることに腐心し、男性に生まれたときには見せることを汚らしく思う。

どちらにしろ、性差という衣装の両面でしかないように思える。

これらはすべて同じものの現象であり、そこにいるときには消し去ることができないもの

である。女性であるときにそうであり、男性であるときにはそうであるものであり、それを消し去ることはできない。この世界に脱衣所は存在しない。

できることは離れて他に向かうことだけである。他のことに関心を向けることだけである。もっとも、向かうところあればであるが。

(3月21日 2004年掲示板)

3月14日、15日、16日、20日、4月1日 2004年、5月28日、9月20日 2012年

● つまづきの石

高校のときの体育教師は元国体に出場した体操選手で、アクロバットな種目の授業が多かった。一方わたしは足が悪く中学になるまでは体育の授業は見学にまわっていたこともあって、運動オンチでずいぶん苦労した。飛び箱の授業があったときも、通常の飛び箱でなく、宙返りして飛ぶやり方であった。

最初のうちは無意識に飛べた。しかし、あるとき一度失敗をしてからは飛べなくなってしまった。不安がわたしの心身にブレーキをかけてしまったせいである。飛べたときには存在しなかった不安が失敗することにより大きな暗雲となりところを占領する。わたしは結局最後の実技試験のときも飛べなくなってしまってその授業は終了したのだが、今となつてはこれはやはり何としてでも克服すべき不安であったように思う。当時は飛べないことで「かっこうが悪い」ということしか考えていなかったが、どのようなことであれ、「あることができ、その後できなくなり、またできるようになる」ということは人の成すべきことでとても偉大なことのように思えるからである。無意識で飛ぶことができるのと意識して飛ぶことができるのとでは次元の違う世界の出来事だからである。

<できないこと>、

これは人にとって宝石のようなつまづきの石である。

わたしを大きくしてくれる石だからである。

(3月15日 2004年掲示板) (加筆済み新掲示板記入可)

■ 将棋

アマのときに好きであった将棋がプロになって指すうちに好きでなくなる、という話をよく聞く。

■ 高橋尚子

高橋尚子選手がオリンピック代表に選ばれなかったが、彼女の態度はなかなか立派であった。

『(名古屋国際を) 走っておけばよかったかな』という思いもある。でも最後は自分自身の意志で決断したので後悔はないです。」

この世的には、オリンピックで連続金メダルを取ることはすごい成功である。しかし、わたしなどはこの答えの方が、あるいはこの決断の方がオリンピックよりもはるかに重要なことのように思えてしかたない。この世的には、名古屋国際に出場していて仮に優勝していれば、代表選手に選ばれて「正しい選択」であったとなる。しかし、「この世的にうまくいくかいかないか」ということと「何を選択するか」ということとはまったく次元の違うことである。結果的にうまくいかなかったとしても、＜自分自身の意志で決断した＞ということは限りなく重い。このつまづきはつまづきではない。

(3月16日 2004年掲示板)

■つまづきの石～光と闇

光と闇があって人間である。

闇を知っていて、闇を選ばないのが人間である。

光しか知らずに、光だけを選ぶのはまだ人間ではない。

だから、どのような行為であれ、どのような考え、言葉であれ、己をむやみに責めるのではなく、

その闇を知り、

次の瞬間にはその闇を選ばず、別の＜わたしの光＞にエネルギーを注ぎ、その＜光＞を明かすこと、

これが人間である。

(3月18日 2004年掲示板) (加筆済み 5月28日 2012年新掲示板)

●所有

人が所有している唯一のもの、それは選択である。

それも選ぶことが＜できる＞という意味での選択である。

このことが人間の持ちものであり、人間の＜存在＞である。

(加筆して新掲示板記入予定)

■種類

無意識の選択、意識的選択、習慣を変える超努力の末に勝ち取った選択

●意識のある人生～自己想起

自己想起のひとつの試みとして、常にあることだけに注意を向けていること。

今日は呼吸。

(新掲示板記入予定) (9月19日 2012年日記)

■参考～シュタイナー流の意識の鍛錬

●意識のある人生～最も大切なこと・スコットカニンガムの三要素の〈必要性〉

空中浮揚や奇跡的治療を望むことより、今すぐできることから行う。今すぐしなくてはならないことから行う。

では、それは一体何であろうか。

わたしにそれはあるのであろうか。

もちろんある。

わたしにそれは見えるのであろうか。

ここが問題である。

とりあえず、今日は夜勤の仕事である。

(3月17日 2004年掲示板) (加筆済み 5月28日 2012年新掲示板)

●意識のある生活～〈プロセス〉

この世界に何百回も生まれ変わってきた旅人であることを実感できること。

この世界で何かを創り出して人生を終えていく旅人であることを実感できること。

いつかこの宇宙の世界をすみずみまで見て回る旅人であることを実感できること。

いつかこのところの世界をすみずみまで見て回る旅人であることを実感できること。

(加筆して新掲示板記入予定)

●体と精神の飽食

人体は飢餓に対する備えは幾通りもある。しかし、創造主は人がこれほど飽食に走るとは思いもなかったのだから、過食に対する備えはインシュリンだけしか用意されなかった。

わたし自身、腹が満たされない心配はするが、満腹が及ぼす身体への悪影響に関しては驚くほど無頓着である。

そして、このことは精神のことに関してもいえることかもしれない。

精神世界の本ばかりを読み、知ったかぶりをして自己満足し、何も実践しない精神のメタボに墮してはいないだろうか。

(9月20日 2012年新掲示板)

■消化

身体にしろ、精神にしろ、飽食はすべて消化されない。

このことはどういうことかという、消化されないものは無意味であるばかりでなく、害を及ぼすということである。多くのことを知っているがゆえに、自分自身に害を及ぼしている、このことは身体の飽食以上に気づかれることはない。「

(新掲示板記入予定)

3月15日、27日、4月1日 2004年、5月28日、9月20日 2012年

●意識のある人生～<自由><選択>

遠足の日の朝のようにして一日が始まる。

今日は遠足の日ではなく、ルーティンな仕事の日の朝であるが、外によってわたしが決まるのではなく、内によってわたしが決まるのであれば、遠足の日の朝のようにして一日を始めることが<できる>。

今日一日の仕事が昨日一日の仕事と外は全く同じようにみえる仕事であっても、内を変えた仕事にすることは<できる>。外からみれば、わたしは昨日とまったく同じようにみえても、内からみれば、わたしは昨日とまったく違うようにみえる。そして、そのようにすることは<できる>。

問題は、

実際に、

内的に、

試みるかどうか、

ということである。

(新掲示板記入可)

■そのためには

小さなものでもいい。これまでとは異なる道を通ることである。この世界と自分自身にしるしをつけることである。

出勤前に、
違う道を通ってみる。
10分でも、喫茶店で外を見てみる。

あるいは、1時間でもある自由な時間を

今日一日の時間
今日一日の人生

もしすべての人が今日一日の人生であったとしたら。

もしかして、すべての人が瞬間瞬間の人生であるのかもしれない。

連続でなく、一瞬一瞬変わっていく人生、変わっていく世界

視点を変えるようにすること。支える思考を変えること。広い世界観をもつこと。

●意識のある生活～方向

罪悪としての自分に浸り、己を責めるのではなく、自己の内にある負を知り、それを選ばず、別のことに関心を向け、それにエネルギーを注ぐこと。

(掲示板記入予定)

3月16日、17日、27日、28日 2004年、5月28日、30日、9月20日 2012年

●意識のある人生～創造 (何者になりたいか)

言葉と行動から思考に影響を与えること

言葉「わたしは、ヒーラーである」

行動、ひとつひとつの身体動作がヒーラーであるように。

ひとつひとつの行為がヒーラーであるように。

(加筆して意識表要転記)

存在から思い、言葉、行為へと及んでいくように。

2012年9月20日現在は、ヒーラーでなく、錬金術師である。

●意識のある人生～「永遠の姿かたち」<身体>

上手な字を書く人が立派であるわけではない。

上手な絵を描く人が立派であるわけではない。
同様に、美しい顔をしている人が立派であるわけではない。
だが、どのような書、絵、顔であれ、内に包含されたものが表面に現われている。
下手な書、下手な絵、下手な顔にさえ。
それがおそらく死後も次回の生も携えていく身体の外殻なのであろう。

だから、今日一日、内に包含されているわたしの変容、成長だけにこころを配ろうと思う。
名詞の肩書き書きや十年後の貯蓄や洒落た服装、化粧品に走るのではなく、ただ自分自身の、
いつまでもつづく外殻への芸術行為にこころを砕こうと思う。

(4月5日 2004年掲示板) (9月20日 2012年新掲示板) (草稿要転記)

●意識のある生活～楽しむこと

人生は楽しむことが肝要である。
笑う楽しみ、悲しむ楽しみ、怒る楽しみ、いろいろな楽しみがある。
楽しめないような楽しみも時間という鍋の中に入ってしまうと、それも良き思い出となる。
ただ、わたしとしては時間の鍋の中で料理<される>のではなく、わたしの意識の中で料理<して>、常に人生を楽しみたいと思っている。
では、楽しめない楽しみの時にはどうするか？
それは神と共にいることにつきると考えているのだが、このように書くと誤解が生じるかもしれない。わたし自身でさえ書きながら誤解が内に生じてくるのであるから…。…例えば、困った時に何気なく開いた本の中に光明を見出すようなことである…。これはタナボタであるが、タナボタでなく、常に神性と共にいる方法はないものかと時々手さぐりをしているのだが…。

(3月27日 2004年掲示板)

■補足

神性とは何か。うまくいった冗談の時にもわたしは神性が働いていると考える、そのような意味での神性である。

(3月28日 2004年掲示板)

■再創造

楽しめない楽しみを創り出しているわたし自身の根っこにある考えを変えること。
そのために、新しい根っこの考えを行動に移し、言葉にすること。

(加筆して掲示板記入予定)

●創造

ルーティンな仕事を創造的な仕事にするように創造する。
その創造は内なる創造である。

■内と外

奇跡的なヒーリング治療にせよ、形而下的な電話応対にせよ、それは内なる目的のために行われた出来事である。

次は、内なる出来事が原因となって外なる出来事が生じるようにする。

●自己管理

高橋春男さんの自己管理の話し。

羽生善治の自己管理の話し。

エジソンの努力の話し。

3月17日、19日、20日 2004年、5月29日、30日、9月20日 2012年

●選択

選んだ行為そのものがあなたである。

では、あなたはどのような気持ちでその品物を選んだのか。

「どれを選んでもいい。とりあえず選んで先を読み進めてみよう。」

「これを選んだのは正解なのか。あまりに俗的なものなので、問題ではないだろうか。」

「何をくだらない質問をしてくるのか。何がしたいのか。」

等々、どのような気持ちであなたのものを出したかということがあなた自身を現わしている。

(草稿記入)

●仏の顔

友人から金を貸してくれと言われ、五十万円貸した。

数年後に会ったときに、三万円貸してくれと言われ、更に三万円貸した。

その数年後に会ったときには更に一万円貸してくれと言われたが、「貸すと会えなくなるから貸さない」と言った。

今考えてみると、実に下らない返答をしてしまった。

貸してあげればよかったと思う。

仏の顔も三度まで、というのが、その話は嘘である。

わたしの中にある仏の顔はそうは言わない。

世間を生きる私の口が三度までと言うだけである。

(3月19日2004年掲示板)(加筆済み9月20日2012年新掲示板)

■うそをつかないこと。～パタンジャリのヨガ体系

古代の聖哲パタンジャリは、ヨガを、

“意識の中に生ずる動揺を静止させること”

と定義している。

パタンジャリのヨガ体系

1 ヤマ (倫理的戒律) (害意をいだかぬこと、他人をも自分をも偽らぬこと、他人の所有物を見て欲心をいだかぬこと、節制を失わぬこと、必要以上のものを求めぬこと)

2 ニヤマ (身心の清浄を保つこと、いかなる境遇にあっても満足を知ること、身心の修練を怠らぬこと、自己の探求に励むこと、たえず神と聖師 (グル) を思いこれに献身すること)

3 アサナ (正しい姿勢、すなわち、瞑想中を通じて脊柱をまっすぐに保ち、からだ全体がくつろいでしかも安定を失わぬこと)

4 プラーナヤマ (霊妙な生命エネルギーの統御)

5 プラティヤハーラ (外界に向かって働く感覚を引き揚げること)

6 ダラナ (精神集中、すなわち、心を一つの目標に固定すること)

7 ディアーナ (瞑想)

8 サマディ (超意識状態)

これら八段階を経て、ヨギは、最後の目標カイヴァリヤ (絶対的存在との合一) に達する。

ここにおいてヨギは、真理を、あらゆる分別的理解を超越して直接体験するのである。

(パラマンハサ・ヨガナンダ著「あるヨギの自叙伝」233ページ 森北出版)

●意識のある生活～<身体><言葉>「言霊」

言葉と行為により根っことなっている偏見を排すること。

すなわち、言葉と行為により、創造の源であるところを変えること。

これが錬金術である。

この錬金術の一例として、過去何度も引用したが、黒住宗忠の話しである。

岡山藩のさる高禄の世臣（せしん）がらい病にかかった時、世間の噂に黒住先生の所では難病・業病もたちどころになおるときき、早速宗忠を訪ねて病状を述べ、どうしたら御蔭をこうむることができましようか、とたずねた。宗忠から、「ただ一心に有難いということをおぼえて百遍くらい唱えなされよ。」との答えを得たので、それに従って、一週間ほど毎日自宅の神前で有難い有難いと唱えた。しかし一向にしるしがしない。また宗忠の所へ出向いてたずねると、「一心不乱に千遍ずつ。」との答。また一週間経ったがしるしがしないので。また行くと、今度は「一万遍ずつ唱えよ。」との答だった。その通り無念夢想に一週間、一万遍ずつ毎日唱えていると、七日目に発熱して吐血し、疲労の果てに倒れ、そのまま熟睡してしまった。そして翌朝起きてみると、らい病の萌芽の見ていた皮膚はすっかりなおってきれいになっていた」（逸話47）

（原敬吾著「黒住宗忠」151 ページ 吉川弘文館）
（5月31日2012年新掲示板）（草稿要転記）

■「神との対話」

言葉と行為が精神（支えとなっている考え）を変えろという話し。

■意識のある人生～＜呼吸＞＜魔術＞＜創造＞

宇宙に告げる。

これがわたしである。

わたしは手である。

わたしは足である。

（新掲示板記入可）

▲道

どのような人生であるかを振り返ってみれば、少しはこの人生における魂の目的が見えてくるかもしれない。

光さんとの出会い、ガン患者の治療、母の治療

■行動

意識のある身体の使用。

たとえば、気功体操。

たとえば、呼吸法。

たとえば、歩行。

■言葉によるヒーリング

■身体

ヒーリングをやり始めた頃は、お酒の量も食事の量も減っていった。
では、酒量と食事量を減らすことで生じることは何かあるのか???

●自由

自分がある自由感と自分がない自由感
自分がない自由は誰でもが入ることができる。
しかし、自分がある自由に入ることはとても難しい。
(K氏の絵を自由に描く喜びに対して)

●所有

自分の持っていることしか体験できない。
ということは、どのようなことであれ、体験はわたしの持ちものであるということだ。

善行も悪行も。

幸運も不運も。

(新掲示板記入可)

■Mさんの手紙

寝起きが悪いと怒るが、宝くじが当たれば怒らない。

●錬金術師39～「質問」「30年ローン」<身体>

内なる建物を築くための、内なる理想の建物を<わたしのもの>とするための、日々わたしが支払うべきローンとはいくらであり、そしてどのような紙幣であろうか。

支払いは滞っていないだろうか。

紙幣が偽札ということはないだろうか。

(4月5日2004年掲示板)(9月20日2012年新掲示板)

3月19日2004年、5月30日、9月21日2012年

●体魂霊・意識のある人生

今この文章を読んだ、この瞬間に思い起こしてみる。

体が主人であったのか。

あるいは、精神が主人であったのか。

それとも、魂が主人であったのか。

あるいはまったく違って、習慣が主人であったのか。

(新掲示板記入可)

●一日の価値

わたしの一日の価値は金銭に換算すると、社会的には現在 5 万円ぐらいである。

まあ、わたしの社会的活動がその金銭に値するかどうかは別問題ではある。気功教室の方は維持費を考えると完全に赤字であるが、個人的には 5 万円以上の価値のある社会的活動

(人間的活動)だと思っている。なかなかうまくいかないというか、あるいは実によくいっているというか。

毎日 5 万円以上の価値のある人生を送ること。

(加筆して新掲示板記入可)

●食事

犬をまねる。

お百姓さんのことを考えるのではなく、自分自身の身体のことを考える。

犬は食べたくないときには食べない。

わたしも食べたくないときには食べないようにしよう。

実に単純で、シンプルで、当たり前で、言うこともないことであるが、言わなくてはならないのが哀しいところである。

あるいは、身体を主人としない。

●行為

自分の過去の行為の中で、最も気高い行為とは何であろうか。

その行為のどこが最も気高いのであろうか。

また、もしそのような行為が思い浮かばないとしたら、最も印象的な行為とは何であろうか。

その行為のどこが最も印象的なのであろうか。

(3月21日 2004年掲示板)

●雪の結晶としての人間

自分の長所をあげてみてください。

最もよいところを。

あなたの内にあるイエスの眼、仏陀の眼を通して見た長所をあげてみてください。

雪の結晶のひとつひとつが違うような、ひとりひとりの長所、ひとりひとりの個性を自分自身含めてあげてみてください。

もしかしたら、それは1千年後に開花するまだ種のような長所かもしれませんが…、どこかメモ用紙にでも書き写せば、その長所ははっきりとした種子となることでしょう。もし種子のまま土の中に埋もれてしまうようであれば、何度も何度も書き写せばいい。何百、何千も散らばっているどんぐりのように、いつかそれらの紙切れがあなた自身となるであろう。

(3月20日 2004年掲示板) (加筆済み新掲示板記入可) (加筆して草稿要転記)

●中年の青春

53にもなって迷いつづけて青春である人間。

3月20日、4月1日 2004年

●意識のある生活

あらゆることがルーティンにならないようにする。

あらゆることに感情の衣を纏わせる。

あらゆることにエネルギーが注ぎこまれているようにする。

●意識のある生活 (精神)

サーチライトとしての精神

行く道を照らしつづける精神

意識としての精神

創造としての精神

無意識に陥るのでなく、他者に陥るのでなく、過去に陥るのでなく、未来に陥るのでなく、精神が意識して常に同じ方向を照らし出している。

常に同じ方向を照らしているので、わたしは常に意図したものを創り出すことができる。

そして、それを<わたし>が創り出したものであることを知っているので、わたしは創り出したものに満足し、<それはわたしである>と言う。

(4月3日 2004年掲示板)

●夢遊病者

15年前富山に行ったときに、ある文房具店に入ってガムテープを買った。お店のおばあさんはお金を受け取った後、にっこりして10円玉をわたしにくれて「おまけです」と言った。そのときのこころの動きを何と表現してよいのか分からない。不思議な感覚であった。今の大都市はどこもチェーン店が席卷し、店員のうつろな「ありがとうございます」のテープが流れつづける。何とも不思議な時代になったものである。この不思議さは機械の不思議さである。それが何を生み出すのか、わたしには分からない。だが、そのような世界にいるとこちらまでもが夢遊病者のようになってしまいそうである。

(3月23日 2004年掲示板)

こころのない愛想とこころのある無愛想とどちらがいいのか。わたしはどちらも嫌であるが、目が覚めるぶんだけまだこころある無愛想の方がいいといえるかもしれない。

(掲示板記入予定)

3月26日、28日 2004年、9月21日 2012年

●長所

「わたしはユニークである」とXさんが言う。

しかし、これは本当のことだろうか。

もしかして、自分自身のコンプレックスを隠すためにそう言っているだけではないだろうか。

このあたりのこころの動きはとても微妙である。

そして、もしかしてこのようなコンプレックスなしで、自分自身を見るということははたしてできることなのであろうか。

あるいは、このようなコンプレックスと関わりを持たない自分らしい行為とは果たしてこの地球上に存在するのであろうか、と思ったりする。

(加筆して掲示板記入予定)

■力

選択に<力>を加えると、どのような長所となるか。

▲錬金術師～感情

選択は、感情を与えることによって<力>を得る。

では、感情はどのような時に生じてくるか。

感情に力を与えるような感情は、怒りを生じさせるような出来事、悲しみを生じさせるよ

うな出来事によって生じる。

このような機会が選択に力を与え、わたしを変える機縁となる。

(加筆して新掲示板記入可)

●呼吸法

☆★に紫色の生命を与える。

この☆★は身体の象徴であり、宇宙の星であり、内なる善悪である。

●群盲

「そうである」ということはなく、「そのようにみえる」ということがあるだけである。

(新掲示板記入可)

要引用～文春のオウムの記事林郁夫

3月27日、4月1日 2004年、5月30日 2012年

●ロボット三等兵

わたしはロボットのようなものである。

健康を損なうことも自動的であれば、健康を取り戻すことも自動的である。

(3月28日 2004年掲示板)

→「草稿」に要転記

●主従関係

Aという男性はBという女性を洗脳して支配し、次にCという女性を洗脳して支配し、今度はDという女性を洗脳して支配した。だから、Aという男性はトンデモナイ奴だと怒り狂う。

しかし、もしかしたら、Bという支配されたがる女性がAという男性を存在させ、次にCという支配されたがる女性がAという男性を再び存在させ、今度はDという支配されたがる女性がAという男性を存在させたのかもしれない。

確かなことは、AもBもCもDも不幸である、ということだ。BとCとDだけが不幸であるわけではない。

男女関係、宗教がらみの目に見えやすい支配・被支配の関係もあれば、目に見えにくい関係もある。例えば…

日本という国は一体誰が主人なのであろうか。

国民が主人なのだろうか。

あるいは、政治家だろうか、官僚だろうか、テレビだろうか。

あるいはまた、独占欲だろうか、嫉妬心だろうか、ロボットだろうか。
(3月29日 2004年掲示板) (新掲示板記入可)

●創造力

そうだ、何でもなくできた。
ひょうたんから駒のように。
そして、そうだ、何でもしなかった。

●フォース

選択する力とそれを押し戻そうとする闇の力
もしかしたら、闇の力は選択する力を強めるように働いているのだろうか。
(具体例の記述)

抵抗すれば相手は強くなる。闇の力とは抵抗するものではない。観察するものである。

●人間

人間は自由であり、隣町まで出かけてしまった。
しかし同時に人間は子どもであるので、昔住んでいた村までの帰り道が分からなくなってしまった。
そして、今いる町はどのような町かというと、他人が支配する町であり、所有が支配する町であり、不安が支配する町である。
もとの村はどのような村であるかかというと、自分が自分を支配する村であり、所有でなく利用が支配する村であり、不安でなく愛が漂う村である。
もとの村にはどうしたら帰れるのであろうか。

●気づき

予期せぬことばかりをしている。

3月28日 2004年

●意識のある生活～身体

「気の身体としての存在」、「物質としての身体の姿勢」を実感し、意識する。

3月31日、8月13日 2004年、9月21日 2012年

●意識のある人生

一方で、この地球という星の雰囲気、日本という土地の色合い、戦後から平成という時代の極端がわたしを包んでいる。

また他方で、内から湧き出るそれとは異なる生き方、考え方がそれらの重しを解き放とうとしている。

●瞑想

姿勢に注意する。

●意識のある人生

わたしがこの身体を動かせることを知っていること。

昨日とは違うようにこの身体を動かせることを知っていること。

わたしがこの考えを動かせることを知っていること。

昨日とは違うようにこの考えを動かせることを知っていること。

同じ場所に居つづけることもできれば、違う場所にも変わることもできる。

わたしの意志で行きたい場所に行けることができる。

空間であれ、時間であれ、考えであれ。

このことを知っていること。

(3月31日 2004年掲示板)

■意識のある人生

このようなことを知っているだろうか。

わたしはこの体を動かせること。

わたしはこの考えを動かせること。

そして、このようなことをしたことがあるだろうか。

わたしがこの体を動かしたこと。

わたしがこの考えを動かしたこと。

(蛇足)

そして、同じことなのだが、このことは言及されることはない。

わたしがこの体を動かさなくできること。

わたしがこの考えを動かさなくできること。

(新掲示板記入可)

●束縛・ヒーリング

自由とは自らが原因(由)であるということである。

自由とは自らが方向に行くことを決めることである。

したがって、そのような自由は結果的に自己の行為を制限することになる。

しかし、そのような意味での自由に生きることができない者は、他から行為を制限され、他から行為を決めてもらうことにより、行く方向を定める。それは不自由というより、「他由」であると呼ぶ方が適切な呼称である。

だが、今日わたしが決めることができる時間が 24 時間あったとしても、この 24 時間を自由に生きることができると言い切れるかどうかとても疑問である。そして、このことが病の根本原因ではないかと考えている。

(加筆して新掲示板記入可) (気功教室パンフ要転記)

■気功教室の意義

●エネルギー

体魂霊によるエネルギーの使用はエネルギーの枯渇の逆作用を及ぼす。

睡眠によってではなく、気功体操によってエネルギーを満たすこと。

あるいは、どうやって短時間にエネルギーを補給するか。

タコが足を食べるようにして、エネルギーを使っていないだろうか。

(注意) 関口存男氏の一日を 12 時間単位で過ごした時間の使い方。

牛乳配達をしていた頃こたつで寝ていて大風邪をひいたこと。

(加筆して草稿要転記)

★4 月 2004 年

4 月 1 日、4 日、7 月 28 日 2004 年

●意識のある人生～鳥

一瞬、一瞬、
人生を鳥瞰しながら生きていく。

わたしは地面を歩いている。
そしてまたわたしは、歩いている自分を空から見ている。
(4月4日 2004年掲示板)

4月2日、7月28日 2004年、9月21日 2012年

●意識のある人生～行為への愛

どういう行為であれば、行為への愛で<ありつづける>のだろうか。
どういう行為であれば、結果に執着せずに行為そのものを楽しめるのであろうか。

また、そのような行為であれば、きっと結果には目が行かなくなるのであろう。

■行為への愛

囲碁将棋で行為そのものを愛せる時はある。ただし、これは相手にもよるし、自分自身にもよる。

その意味では、印象（相手）と表現がセットになっている。

他には・・・。

●「文春」出版差し止め事件～でべその理

小さな子どもが「おまえの母さんでべそ」とからかったら、言われた子どもが怒って母親に言いつけ、その母親がからかった子どもの家に行き、「その子の口にバンソウコウを張ってしゃべらないようにしろ」と怒鳴ったようなレベルの話である。まあ、書く方も書く方なら、そんなことで場違いな裁定を求める方も求める方である。

まあ基本的にこの手の出来事には非常に鈍感であり、「出版差し止めはけしからん」という論説を読めばなるほどと納得し、また「あのような低俗な記事を出すから、あんなことになるんだ」という論を読めば、記事内容がつまらなかつただけに、そういうところがあるんだよなあところが揺れ動く。しかし、今週号の「週刊文春」の立花隆の寄稿を読んで、微妙なところのつかえが取れた。

「もうひとついっておけば、こういう大メディアの論調の影響もあってか、言論にはいい言論と悪い（低劣な）言論があって、悪い言論は叩きつぶしたほうが世のためだという考えが、最近日本で急速に広がっているようだが、これはとても危険な考えである。

…

欧米では、言論の自由について語ろうとするとき、何をおいても、まず読むのは、ジョン・ミルトンの「アレオパギティカ」である。

…（以下同書の引用）

『我々は清浄な心をもってこの世に生まれるのではなく、不浄の心をもって生まれてくる。我々を浄化するのは試練である。試練は反対物の存在によってなされる。悪徳の試練を受けない美德は空虚である。美德を確保するためには、悪徳を知り、かつそれを試してみることが必要である。罪と虚偽の世界を最も安全に偵察する方法は、あらゆる種類の書物を読み、あらゆる種類の弁論を聞くことだ。そのためには、良書悪書を問わずあらゆる書物を読まなければならない。』

『神が人に理性を与えたときに、選択の自由も与えた。神は彼を自由なままにおき、いつもその目に入るように誘惑物を眼前に置いた。その自由な状態にこそ彼の真価が存する。もし彼の行動がすべて許可され、規定され、強制されたものだったら、どこに彼の美德の価値があるか。悪の知識なくして、どこに選択の智恵があるか。』

いい言論と悪い言論は、人間には区別できない。いい言論にも悪い言論にも同じような存在価値がある。だから言論の自由は無差別に守られる必要がある。これが言論の自由を守る意義の根幹にある真理なのだ。」

（4月2日 2004年掲示板）

4月3日、24日、7月5日 2004年、9月21日 2012年

●意識のある人生～＜選択＞＜創造＞＜わたし＞

できないことを夢想しつづけるのでなく、できることを意志しつづける。

したくないことを思い悩みつづけるのでなく、したいことを意志しつづける。

できることであれば、その実現が30年後であろうと、1万年後であろうとかまわないではないか。

したいことであれば、その価値が世間の価値観とは天地の開きであろうとかまわないではないか。

それこそが＜わたし＞であるのだから。

（7月7日 2004年掲示板）（加筆済み 9月21日 2012年新掲示板）

4月4日、7日、8日、7月6日 2004年、9月21日 2012年

●人生

起きている時だけが人生ではなく、眠っている時もまた人生である。

眠っている時だけが人生ではなく、起きている時もまた人生である。

(加筆して掲示板記入予定)

●意識のある人生～＜行為への愛＞＜創造＞＜時空＞

出来ないと言うのではなく、出来ると言う。

出来ないと考えるのではなく、出来ると考える。

出来ないと動かないのではなく、出来ると行動する。

1日かけて出来ることもあれば、100億年かけて出来ることもある。

それをわたしがしたいのであれば、1日も100億年も同じである。

行為そのものを愛すれば、＜出て来る＞。

なぜならば、もともと＜在る＞からである。

(4月8日2004年掲示板)(新掲示板記入可要再掲)

●創りだされたもの・創りだすもの

この世界を楽しむこと、神の創造物としての世界を楽しむこと。

そのことと、この世界でなすべきことがまたある。

■＜印象と表現＞

印象と表現の問題である。どちらも大切である。

■楽しみ

人生は楽しむべきであるというTさんの口癖に対して。

その通りである。だが、楽しむだけでは人は楽しむことはできない。

この楽しむは印象を受けることであるからだ。

4月4日、5日、6日、7日、15日、7月5日、6日、14日2004年、5月30日、6月1日
2012年

●見ること

見たことのないものを見ることはなかなかできるものではない。

見たことのないものには＜意味＞、＜価値＞がつけられないからである。

昔マゼランの大型帆船を初めて見た島民は船を見ることができずに、「海から」ボートに乗った白人がやってきたように見えたという。

同じように、今のわたしは見るができると思っているが実際には見るができない

ものはとても多くある。このことは自分の過去を振り返ってみれば一目瞭然である。

いま 18 歳であれば、大学受験のための勉強はまるっきりしないであろう。

いまは書物の勉強とは何かということが当時より見えているからである。

いま 20 歳であれば、わけの分からない哲学書を何とか理解しようと汗水たらさないであろう。

いまは自分でも分からないことを書いたり、訳したりする人がいることを見ているからである。

いま 22 歳であれば、あのような女性を好きになることはないであろう。

いまは外的容貌の内にある形を当時より見ることができるからであり、また、話したこともない人間にこころを奪われることはないからである。

いま 24 歳であれば、死にたいなどとは決して考えないであろう。

いまはどれほどつらいことであってもそれは自分と関係があることであり、その受け止め方を変えることができることを見ることが出来るからである。

昔見えなかったものがいま見え、いま見えなかったものもまた将来見ることが出来る。

(7月9日 2004年掲示板)

■現出<身体>

身体の顕著な変化は内なる自己の叫びである。

では、どのような叫びであるのか。

身体が瀕死の状態に変化しても、われわれにはその叫びの声を聞くことができない。

何たる無知、何たる無明であろうか。

(掲示板記入予定)

●知識

<知ることができる>ことは元々<ある>ことである。

それは、善も悪もである。

(7月6日 2004年掲示板)

■選択

この意味で、

知っていることは、たいしたことではない。

この意味で、

知っていること、すなわち、悪であったことを「わたしにはない」というのは、不誠実である。

ただし、こうは言える。

わたしにはあるが、〈わたしは善を選び〉、〈わたしは悪を選ばない〉。(逆でも同じ)

これが知識を超えた人間の不可思議さ、崇高さである。

(7月7日 2004年掲示板)

■〈知識〉〈ゆるし〉

〈知ることができる〉ことは元々〈ある〉ことである。

それは、善も悪もである。

この意味で知っていることはたいしたことではない。

体験したことだけがたいしたことである。

これはもともとはなく、この世界で初めて可能なことだからである。

だから、善も悪も体験したことだけがたいしたことである。

(加筆して新掲示板記入可)

●自由と責任

自分の行為であれば責任はある。

自分の行為でなければ責任はない。

子どもでいたければ責任はないが、他者に従属して生きていけなければならない。それもまた安楽かもしれない。

だが、成人であれば、人と成るという意味での成人であれば、責任を持ち、自ら生きていかなければならない。そのような人生は失敗を恐れればつらいことかもしれないが、〈行為することそのものを愛すれば〉〈わたしはその行為を愛すれば〉、輝かしい道となる。

(考慮加筆して新掲示板記入可)

■他者の行為を非難する人はみな成人ではないのではないだろうか。

4月5日、6日、7日、24日、7月6日 2004年、5月30日、6月1日 2012年

●意識のある人生～〈プロセス〉〈意志〉

魚が陸地に上がっていくための〈意志〉。

そのような〈意志〉は宇宙に存在する。

そして、そのような〈意志〉は魚の内にも存在し、人間の内にも存在する。

ただ魚と人間の違いはその＜意志＞を当事者自身が意識して実現するか否かということだけであり、逆にそのことが「人間存在とは何か」ということを物語っている。

(4月2004年掲示板)(新掲示板記入可)

■ふたつの意志

人間にはふたつの意志がある。

魚の意志と人の意志である。

魚の意思は自動的に達成される。

これは＜創り出される＞ということである。

人の意思は意識的に達成される。

これは＜創り出す＞ということである。

これまで、この地球上のほとんどすべてのことは魚の意志によってなされてきた。

(7月6日掲示板)(加筆済み、要再掲)

●労を惜しまない

本にしろしをつけながら読むことは時間がかかる読み方であるが、そうでない場合と比べてとても多くのことが達成される読み方でもある。これのハード版は、1ページ読むのに1時間かけて筆者と同じような体験をするというシュタイナー流の読書法である。

わたしは写経のように著者の言葉を写し取るということを実践している。各駅停車の電車でさらに各駅で降りて、景色を見るような旅行法である。精神世界の本を読む時には特にお勧めの方法である。

(7月8日2004年掲示板)

■写本、瞑想、

■白川静の象形文字の写し

●現象

この世界ではありえないようなことは全てあり、ありえてよさそうなことはほとんどない。たとえば、皆が裸で恥ずかしがらずに歩くこと。

(加筆して掲示板記入予定)

裸でいること自体はセンスのいい発想であるが、この地球上ではそのことがセックス教団へと変性しがちである。

4月6日、7日2004年

●「性自由説」

最近「年金」に関する報道がたくさんされていて、読んだり聞いたりするたびに腹が立つやら、あきれやるやら…。しかし、自分が同じように年金をむさぼる立場になったとき、果たしてそれを国民の立場に立ってどれほど否定し、どれほど改革するかということには少々疑問があるので、世間体に合わせて無気力に批判するだけである。

世に「性善説」と「性悪説」とがある。政治家や官僚の所業を見ていると、「性悪説」の立場に立ち、それを律するのは法律しかないように思われる。しかし、どのような人も自分のこころの内を正直に見ることができるのであれば、善と悪両方が己の内にあることに気づくであろう。法律を作るということは、これを外側から律しようということであるが、考えてみればこれほど情けない話もない。「親に怒られるからしない」という子どものレベルとまるで同じことだからである。問題はシステムをどのように構築するかということではなく、善を選んだり、悪を選んだりする精神の筋力をいかにつけるかということである。これは公教育でも私教育でも行われることは皆無であり、行われる場合には「あるシステムを選ぶことはいかによいか」というヒステリックな教育として行われる。問題はどれを選ぶかということではなく、その根本にある「選ぶことができる」という力の問題である。だからわたしは人間とは「性善」でも「性悪」でもなく、「人間とは性自由である」という説を称え、自由であるための力をつけることが大切であると声を大にする。

(4月7日2004年掲示板)

●岐路

子どもの頃に貧乏で恥ずかしい思いをした。＜だから＞、大人になって恥ずかしくないような金持ちになった。

子どもの頃に貧乏で恥ずかしい思いをした。＜だけど＞、大人になってからそのことは恥ずかしくないことに気づいた。

前者の道は元に戻ってくる。

後者の道は異なる次元にまっすぐ進む道である。

(4月6日2004年掲示板)

4月7日、24日2004年、2月11日2005年、6月1日2012年

●意識のある人生～＜プロセス＞

今日の始まりに、＜わたし＞のすることを知っているのはきっとよいことだ。

今日の終わりに、＜わたし＞のしたことを知っているのはきっとよいことだ。

(4月26日2004年掲示板)(6月2日2012年新掲示板)

●鏡～＜知識＞

精神世界のことをよく知っている女性がの元ヤクザであった人に、

「やくざのように人を傷つけた人は今度は檻の中の動物に生まれ変わります」

ときっぱり言い放った。元ヤクザ屋さんであるが、今は温厚な彼氏は一瞬びっくりしたあと苦笑いしていた。

彼が次回に檻の中の動物に生まれ変わるかどうかはわたしには分からない。ただはっきりしていることは、

『精神世界の知識』は受け取る人間の価値観の中でしか入ってこない」

ということだけである。

見えるものは「鏡の中のわたしの姿」だけでなく、「わたしの内となる知識」もまたそうである。

「あなたは来世では檻の中の動物に生まれ変わります」

この分かりやすさがその人自身を映し出している。

(4月24日2004年掲示板)(加筆済み6月3日2012年新掲示板)



鏡の中のわたしでなく、わたしの知識ではなく、わたしに達する方法、知識に達する方法は、どのような方法であろうか。

●＜時空＞～時間とエネルギー

瞑想や囲碁将棋に耽溺できたときの時間の短縮化とは何か？

他方にまた時間の引き延ばし化ともいうべき出来事もある。

神の宇宙創造が一瞬であるということ。と同時に、それは150億年以上であるということ。

あっという間に過ぎ去った時間というのは、あとで考えてみると、非常に濃厚な時間で、逆に長い時間であるように感じることができる。

本来の＜創造空間＞というのは時間がなく、それをふり返ってみるときに、時間というものも生じてくるのかもしれない。

エネルギーの流入（充実）と時間～一概に短縮とはいえないのではないかと↑
そのときは長く感じられる時間があとではないような時間として感じられる。

●瞑想

初心に戻って、常に眉間へ意識を集中していること。

4月8日、9日 2004年

●日本人拘束事件

わたしが感じたこと。

誰が拘束されたかによって、人間の対応は変わる。

わたしの子どもであれば「撤退させない」とただちに言えるのであろうか。

わたしの子ども、わたしの愛する人、それはどこまでの人なのだろうか。

また、三人は日本の子ども、総理大臣の子どもではないのだろうか。

三人は日本の子どもだが、アメリカの子どもではないのだから、見捨てなければいけない
のだろうか。

わたしは何によってこの二者択一を決めるのであろうか。

国民の安全か、アメリカか、今度の選挙か、わたしの信念か、わたしのメンツか、…。

選択するとき、何が根拠となっているのかを<知っていれば>異なる選択も可能かもしれない。

命よりも大切なことはある。

命より国際貢献の方が大切なこともある。

だが、それは他人の命ではない。

人道復興の人道とは何か。

現実に人の道を歩んでいる人を助けることほどの人道支援、人道復興はない。

テロリストは許しがたい。

しかし、今回の事件がなければ、ボランティア活動の実態、イラク派遣の実態を知らなかった自分もまた許しがたい。

何が良くて、何が悪いのか、何が幸福で、何が不幸であるのか、この世界のことは図りが

たい。

三人の方には悪い出来事であり、不幸な出来事である。

では、わたしにとってはどうであるのか。

あなたにとってはどうであるのか。

総理大臣にとってはどうであるのか。

(4月9日 2004年掲示板)

■わたし

日本人の70パーセント以上の人が

「それは悪い事件であった」

と言っているようだ。

しかし、よくよく考えてもらいたいのは、

「それはわたしにとって悪い事件であった」

のかどうなのかということだ。

(4月25日 2004年掲示板)

■わたし

わたしがいないとどのようなことも言える。

最善から最悪までのスケールの中でどれを選んで言うこともできる。

しかし、もしもわたしがいるのであれば、話せることはとても限られてくる。

最善にしろ、最悪にしろ、中間にしろ、わたしが出てくると、話すことはとても限られてくる。

なぜなら、「わたしとはあらゆる選択肢の中で、その都度、わたしの生き方をひとつだけを選ぶ」ので寡黙にならざるをえないからだ。

ひとつを選ぶということはとても重いことなので、大きな声で話すことなどできないからだ。

そう、わたしの選ぶことはとても重い。

そう、人の命は地球よりも重く、人の選択は人の命よりも重い。

(7月13日 2004年掲示板) (草稿転記予定)

4月9日、14日、7月6日 2004年

●意識のある人生

自己想起・瞑想・創造力

これらのことがすべての人生を覆っている。

このことから人生すべてが展開してくる。

4月10日、7月12日 2004年、6月1日 2012年

●目隠し

なぜあれほど怒るのであろうか、なぜあれほど居丈高になるのであろうか。

それは自分の本心～良心にふれる質問をされるからである。

わたしは悪くない、わたしの判断は常に正しい、声を大にすればするほど、良心は小さくなる。しかし、良心とはもともとすべての人の内にあるものであるから、それを隠しつづけることはできない。目隠しをされた良心はふれると暴れ出す。目隠しを取ってみれば、何も怖れずに生きていけるのに。

子どもの頃に目隠しをして相手をあてるという遊びをした。この遊びは笑いながらする。だが、大人の目隠しは目隠しを取ったことがないので、お互い不安をもって触れ合い、傷つける。

わたしも目隠しをしたまま人生を送っている。だから、他人がどのような目隠しをしてどのような主張をしようと、さほど興味はない。興味があるのは、目隠しをしているという事実だけであり、わたしの最大の関心事はわたしの目隠しを取り去ることだけである。これがわたしにとっての急務である。世界の出来事を見聞きすればするほど、衝撃的事件があればあるほど、このことを痛感する。

(4月10日 2004年掲示板) (加筆して新掲示板記入可)

●意識のある人生～<プロセス>

明日がないかもしれないこと。

そのようにして今日一日を過ごすこと。

明日がかならずあること。

そのようにして今日一日を過ごすこと。

(7月10日 2004年掲示板) (加筆済み新掲示板記入可)

■無常と永遠・<身体>

明日がないかもしれないとは、われわれは現世において身体をまだコントロールできないということである。

明日がかならずあるとは、わたしは死なないということであり、永遠に創造し、それを楽しむということである。

(加筆して掲示板記入予定)

明日が朝から朝までの勤務の前日のように。

明日が休みの日の前日のように。

今日一日が完了せずに、明日に向かって大きな仕事があるように。

4月11日 2004年

●地獄

「事実は小説より奇なり」というが、事実はどんなフィクションよりも地獄である。まさに地獄はこの世界にあるということだ。目の前で見れば、誰もが地獄と思うだろうが、100キロ先の出来事であれば、フィクションの方に地獄を見るかもしれない。だが、感じる目があれば誰でも見ることができる光景であり、感じる目がなければいつかは目の前で見られないであろう。

地獄は人間が作り出したものであり、したがってそれはいつでも天国と変えることもできる。だが、地獄を見たことのない人間には天国も見ることにはできない。何が地獄か分からないし、地獄があってもよいと思っているので（そんなことはないという人は自分を知らない）、地獄の中にいるしかない。どこにいるのか知らないし、ここでいいと思っているので、ここにいるしかない。

地獄はここにあり、ここは現実世界であり、またひとりひとりのこころのことである。

(4月11日 2004年掲示板)

■補足

語弊のある言い方であるが、「天国と変えることができる」という機会は素晴らしい機会である。

変えることができれば素晴らしい、変えることができなければ地獄である。

そして、そのような機会がなければこの世界は永遠の地獄である。

しかし、そのような機会があっても変えなければ地獄のままであり、変える原因に理不尽も善悪もなく、原因の善悪だけを見ているかぎり、最も大切なもの——変容・成長——を失ってしまう。

加害者、被害者、報復の図式でとらえている限り、世界は何も変わらない。

(4月12日 2004年掲示板)

■変容

変わることは何か。

いままでわたしが正しいと思っていた見方が変わることである。

変わることは何か。

いままでわたしが無関係であると思っていたことが「それはわたしと関係がある」と感じ

るようになることである。

(4月13日 2004年掲示板)

■機会

目覚し時計が鳴らなければ、わたしはずっと眠ったままである。

(4月13日 2004年掲示板)

●自業自得

世で自業自得だということは「それは相手のせいである」というのと同じである。だから、そのような人は自分が危険な目にあった時にも「それは相手のせいである」という。真の自業自得とは、他人が困っている時に、そのような状況に対して「それはわたしである」ということである。

(4月12日 2004年掲示板)

4月12日、14日、20日、5月18日 2004年、9月14日 2011年

●美醜の元

月は太陽に照らされると美しく見える。

月だけであれば、暗闇の天体でその美を知ることはできない。

また、仮に月が醜いとしても、太陽の光がなくてはその醜さを知ることはできない。

美しいものであれ、醜いものであれ、わたしは光を通して見ることができる。

美醜は月にあるともいえるが、それを顕現化する太陽の光にあると考えることもできる。

現実世界においても、わたしが美を見るとき、あるいは、醜を見るとき、それはわたしのうちにある太陽の光がそうさせているのかもしれない。

すなわち、もともとの存在には美醜は存在しないのではないだろうか。

●修行と洗脳

たき火と火事とは違う。

しかし、目が見えないと、暖かいものはみなたき火だと信じこんでしまい、洗脳され、火事の中にまきこまれてしまう。

たき火をしているつもりで、火事を出しているような修行となることは多々ある。

■対岸の火事

たき火は暖かいが、火事も遠くからあたっていると暖かい。

しかし、両者はまるで違うものである。

火事を知っていても、たき火のようにあたっている人はとても多い。

対岸にいる人は火事を火事だと言うが、実は火事のことはいくも言っていないに等しい。
(掲示板記入予定)

●意識のある生活

意識がなく、わたしを肉体と一致させること。
肉体を客観的に見て、主人となること。

●意識のある人生

哲学者とはどういう人かという話で、こういう説明を聞いたことがある。
野球選手とは野球をする人である。
観客とは野球をする人を見る人である。
哲学者とは野球をする人を見る人を見る人である。
このような哲学者とつきあいたいかどうかは別として、なるほどという説明である。しかし、まるで異なる見方で世界に参画する人もいる。それはどのような人かという、意識のある人である。
意識のある人とは野球をする自分を見る人であり、野球を見る自分を見る人であり、哲学する自分を見る人である。
すなわち、いつも他人を見るのではなく、いつも自分を見ている人である。

(4月15日 2004年掲示板) (草稿転記予定)

4月13日、14日、15日、20日、27日、5月18日、7月6日、11日 2004年、6月2日、4日 2012年

●現世と来世における<所有>

モノとはこの世界で捨てることはできないものである(形を変えて存在し続ける)。
そしてまた、モノとはこの世界以外の世界へと持っていくことはできないものである。
モノはこの世界にだけ存在し続ける。

捨てることはできないし、持っていくことはできないということをよくよく考えてみる必要がある。

逆に、この世界で捨て去ることができ、この世界で得ることもでき、さらにこの世界以外へと持っていくことができるものがある。

それは一体何であるか。

ひとつひとつの出来事の中でそれは何かと考えると、自分の行動の指針となるかもしれ

れない。

(4月14日 2004年掲示板) (加筆済み 6月4日 2012年新掲示板)

■所有～蛇足

モノとは所有するものではなく、それをを用いて表現するものである。

12色の色鉛筆、24色の色鉛筆、黒の鉛筆

3色の色の方がいろいろな色を表現することができる。

他方また、黒で表現することのできる世界がある。

■捨て子

高僧になった捨て子の話

「…ついでに言っておきますが、見捨てられ体験を持った人が、全部おかしくなるとは限らないということです。

これは、ある有名なお坊さんですが、この方は生まれたとき捨て子にされていた。もう死にかかるところを誰かに助けられて、結局、お寺へもらわれて育ったというお坊さんがおられます。その人がいい加減な人間じゃなくて、ものすごくえらいお坊さんになられたということは、どういうことなのでしょう。

それは、ものすごい見捨てられ体験をされた人は、すごい救いの体験をしているんです。そしてそこがもっと大切なんですけれども、ぼくらが見捨てられる、見捨てられないということでもまず思い浮かぶのは、おとうさん、おかあさんです。『うちのおかあさんは、よく抱いてくれた』とか、あるいは『おかあちゃんは、適当にものを食わしてくれた』とか、そういうレベルでして、このお坊さんのように、まったく見捨てられるというようなことは、まずないんです。

ぼくのおかあさんが、ぼくのおやじが、あの先生が、というようなものじゃなくて、『世界は見捨てないんです』と、そんなすごい体験をする人もおられます。この坊さんが、そうなんです。つまり、この坊さんは、父が捨てようが、母が捨てようが、親戚がなかろうが、『はい、私は救われた』というようなすごい人なんです。私は、それは特別な人だと思います。」

(河合隼雄著「カウンセリングを語る下巻」287ページ 講談社+α文庫)

「人間はわたしを見捨てたが、世界はわたしを見捨てない。」

この言は高僧が捨てられなければ、発することはできないものである。

悪と言われるものがあって、善と言われるもの、感動が表現される。

子どもを捨てるのがよいと言っているのではない。この世界には悪と呼ばれるものを善へと変じる意志があるということである。

その意志は<世界の意志>とも言えるし、<仏陀の意志>とも言えるような意志である。

ところで、いまわたしにとって<捨てられているもの>、いまわたしが拾い上げ、善と化すことができる<捨てられているもの>は何であろうか。

それをわたしは救い上げることができるのであろうか。

わたしの手は「ざる」の手であろうか。

それとも、仏の手であろうか。

わたしの意志は世界の意志であろうか。

この問いは世界からの毎瞬、毎瞬の問いかけである。

(5月23日掲示板)(加筆済み新掲示板記入可)

■ 離別としての捨て方

また、悪意でなく、ときにはわたし自身の中で<捨てなければならないもの>、<離れていかなければならないもの>があるのではないだろうか。それは一体何であろうか。

「別れ——ではない別れ——に際して、師範は私に彼の最もよい弓を手渡してくれた。「あなたがこの弓で射る時には、名人の精神が現在していることを感じられるでしょう。この弓は決して物好きな人の手に渡さないで下さい。そしてこの弓を引きこなしてしまわれても、それを記念に保存しないで下さい。ひとかたまりの灰の外は何も残らないようにそれを葬って下さい。」

(オイゲン・ヘリゲル著「弓と禅」115ページ 福村出版)

救い上げることができるのは世界だけでなく、人間もまたそのような存在である。

(参考) 自他

「親として、配偶者として、愛し愛される者として、あなたの愛を、相手をしぼるための接着剤にしてはならない。そうではなくて、まず引きつけ、つぎに転換させ、反発させる磁石にきなさい。そうしないと、引きつけられた者はあなたに執着しなければ生きられないと信じはじめ。これほど真実とかけ離れたことはない。これほど、他者にとって破滅的なことはない。あなたの愛によって、愛する者を世界に押し出さなさい。そして、彼ら

が自分自身を十分に体験できるようにしむけなさい。それが、ほんとうの愛である。」

(「神との対話 1 巻」 156 ページ)

■

捨てるよいもの～

捨てることにより得るもの～

遠回りをして時間を失ったが、違う景色を見ることができた。

■モノ

昔風のモノを大切にすること。

では、逆に大切にしないことでどのようなことが生じるのか。

大切にすることは、愛の一側面なのであろうか。

■「弓と禅」～灰とこころ

この世の中に残すべきものと残さないべきものがある。

あるいは、残るものと残らないものがある。

残らないものは灰にして元に戻してしまうのがいいのかもしれない。

別れ——ではない別れ——に際して、師範は私に彼の最もよい弓を手渡してくれた。「あなたがこの弓で射る時には、名人の精神が現在していることを感じられるでしょう。この弓は決して物好きな人の手に渡さないで下さい。そしてこの弓を引きこなしてしまわれても、それを記念に保存しないで下さい。ひとかたまりの灰の外は何も残らないようにそれを葬って下さい。」

(オイゲン・ヘリゲル著「弓と禅」 115 ページ 福村出版)

ところで、残るものである阿波研造師範のこころは、この世界のどこにいま見ることができるのであろうか。

(4月27日 2004年掲示板)

知識は伝えることができない。しかし、この世に生きてきた人の偉大なこころの痕跡は必ず次代にひきつがれていく。

灰とは、すべてもとのエネルギーに戻してあげることなのだろうか。

モノが出来してきたもともとの存在に。

■ピンセットですくい上げる

捨てられていたメモ用紙、棄は拾、拾は救。

この世界はピンセットですくい上げられることを常に待っている。
あらゆるところにその宝があり、あらゆるところにその意志がある。

そして、時は今、である。

(11月28日 2003年ノート・掲示板記入予定)

●論争における正邪

相手の言うことが間違えて、私の言うことが正しいのではなく、
分からないことは間違えて、分かることが正しいのではなく、
分かるものがわたしであり、分からないものはわたしでない、
という、単にこのことだけである。

(4月15日 2004年掲示板)

●瞑想

額を見つづける～基本に還ること。

●壁 (安部公房)

昔、自分が自分を知ることはできないと考えていたが…

～動く壁

(加筆して掲示板記入予定)

4月14日、28日、5月18日 2004年、6月2日 2012年

●ロボット～シンクロ

人がアイデアを紡ぎ出すのか、ワープロの機械が紡ぎ出すのか…。

(加筆して掲示板記入予定)

■モノと人間とのシンクロ

●教室

この1ヶ月で印象に残ったことを各人話す。

●意識のある人生～原因

他人が言うように、人を殺す
他人が言うように、ハンバーグを食べる
他人が言うように、人の命を救う

これらはすべて、わたしにとっては等価である。

どのようなことであれ、「わたしが言うように、わたしは為した」、このことだけがわたしにとっては価値がある。

ただし、このことはおそろしく困難である。

なぜなら、生まれてからこの方ほとんど全ての時間を他人の操縦で動くロボットとして生きてきたからである。

そうではなく、人間として語ること、人間として為すこと、人間として創り出すことはとても難しい。

(5月5日 2004年掲示板) (加筆済み新掲示板記入可)

●モノ

わたしは今自分の意志で指を動かすことができる。

だからといって、この身体が存在しなければ、動かすことなどできない相談である。

わたしは、もともとは、動かすことができない。

いま動かすことができるからといって、もともと動かさせたわけではない。

わたしは今財産をもっている。

だからといって、もともと持っていたわけではない。

4月15日、16日、17日、21日、29日、30日、5月1日、18日、7月6日 2004年、2月14日 2005年

●意識のある生活

グルジェフは特殊能力を放棄することにより、自己観察というフォーースを手に入れる。

わたくしは逆に脳に太陽の光を持ちこむという能力を獲得することにより、自己観察というフォーースを手に入れてみようと思う。

●囲碁

囲碁はいろいろな表現方法で強くなれるというのが、この世界ととてもよく似ている。

●犬に倣う

犬のように場所を変える人生。

●石ころの道（ヤマさんへの返事）

わたくしの願いは普通の生活をしながら、イエス、仏陀、シュタイナー、グルジェフ、マスター（「神との対話」）になる道を歩いていくことです。

偉大な先人のような人物になることにあくせくするでもなく（これは自信あり）、かといって怠惰に陥ることなく、意志しつづける（これは自信なし（笑））道。

面壁八年の道ではなく、日常生活八年で変われる道。

創造主の化身のような人間にあっても呑みこまれて従属することなく、自分自身が始まりとなれるような道。

精神世界グッズや超能力や呪文によって自分が変わるのでなく、自分がモノや能力や言葉に力を与える道。

わたしだけが変わることにしか関心がないが、同時にすべての人が変わらなければ意味がない道。

そのような道を石ころをけとばしながら、歩いていければいいなあ、といつも（時々かなあ〜）思っています。

■怒りの感情（ヤマさんへの返事）

対人関係における腹立たしい感情をどのようにすればよいかは、とても難しい問題です。

伝記を読むとグルジェフも晩年までこの感情に振り回されていたようにも思えますし、またシュタイナーも

「たとえば誰かが、われわれを侮辱したとしよう。神秘修行をする以前には、侮辱した相手に対して敵意を感じ、怒りがわれわれの内部に燃え上がった。しかしこのような場合、神秘道の修行者の心中には、直ちに次のような思考内容が立ち現れる。「このような侮辱によって私の価値が変わるわけではない」。そしてこの侮辱に対して、必要と思われる処置を彼はとる。怒りからではなく、平静な心をもって。」（「いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか」98 ページイザラ書房）

と述べていますが、この言葉に至るまでどれほど自分の内に湧き上がる怒りの感情と格闘していたかが逆に読み取ることができます。シュタイナーは賛同者も多いかわりに、反対者も多く、非難中傷も相当なものがあったようです。

新約聖書がどれほどイエスの言葉を反映しているか分かりませんが、イエスも怠惰な弟子に対して怒りを含んだ叱責をしています。

腹立たしい感情、怒りの感情に関してわたしがいま言えることは次の二点です。

いま、こころを寄せていた異性から「わたしもあなたのことをずっと思っていました」と言われれば、わたしはどのような理不尽な仕打ちがあつたとしても怒らないであろう。

いま、余命 1 ヶ月の末期癌と言われていたのが誤診であつた知らされたら、わたしはどのような理不尽な仕打ちがあつたとしても怒らないであろう。

いま、ジャンボ宝くじ三億円が当たつたとしたら、わたしはどのような理不尽な仕打ちがあつたとしても怒らないであろう。

……

怒る第一の原因は相手にありますが、実は第二の原因があつてそれは自分自身である、とうことです。そして、第二の原因の方が大きいのです。しかし、毎日異性から愛を打ち明けられるわけでもなく、誤診の連絡があるわけでもなく、宝くじに当たるわけでもないので、結局は自分自身で内なる原因を変えるしかないわけです。

たとえば、いまこのような言葉を書き記している自分であれば、わたしはほとんどのことに対して怒りの感情が湧いてこないであろう。だから、怒りの感情を嫌うのであれば、<いつも>いまのようなわたしであればいいわけです。でも、わたしはしょっちゅう眠っているので、いまのようなわたしでいることはなかなかできないわけです（わたし自身は眠っていていつもワンパターンで反応するロボットがわたしであるからです）。<いつも>こうありたい自分であるためには、<いつも>自分が何をして、何を言葉にして、何を行なっているかを知っている必要があるわけです。これが、グルジェフもシュタイナーも「神との対話」の神も薦めている、新しい生き方をするための第一歩です。しかし、このことはグルジェフのメインテーマであつたようにとても難しい。わたくしは数年間取り組んでいます、未だできずにいます。何か方法に誤りがあるのではないかとも思ってしまいますが、「神との対話」の神も簡単なことではないと言っているのです、いまの自己流のやり方でしばらくは進めていくつもりです。

もう一点は、腹立たしい感情というのはある意味で「エネルギー」の発露です。エネルギーそのものに問題があるのではなく、エネルギーの向け方に問題があるわけです。ですから、エネルギーの向け方、方向性を変えればいいわけで、「怒るのをやめるようにする」というよりもエネルギーの流れの<新しい水路>を作ってやるようにすれば、次第に怒りの水路にエネルギーは流れこまなくなるのではないかと考えています。いつもくさりにつながれた犬が怒りっぽくなるように、われわれのエネルギーもいつもせき止められていて、怒りという水路しか通らなくなってしまうのかもしれない。

まあ、この場合も<いつも>何をしているのかが問題であり、そして、何かを変えるには<いつも>何をするのかが問題となります。そして、<いつも>ということは、<存在>

すなわち、〈わたしはこうである〉ということです。

いまの怒りは〈わたし〉であり、いつか怒らなくなれば、そのとき〈それはわたしである〉ということです。

■目を開ける（ヤマさんへの返事）

〈引用〉

そのようにご理解いただいて結構です。

以下、蛇足ながら補足させていただきます。

私は戦場に行くとき人間を殺す。

だが、私は平和であれば人間を助ける。

私は朝トイレトペーパーが切れていたのに腹を立てる。

だが次の瞬間、私は朝刊で将棋の羽生が勝ったことを知り、上機嫌となる。

私は車内で気持ちよく老人に席をゆずる。

だが、私はその老人が礼を言わないことに腹を立て始める。

……

このような「私」は枚挙にいとまない。

これははたして〈わたしである〉と呼ぶことができるものであろうか。

これは、「外」とでも呼ぶべきものではないだろうか。

あるいは、「ロボット」とでも呼ぶべきものではないだろうか。

私はとても巧妙に外に反応するロボットのようなものである。

私は時代、地域に即して反応する。

私は皆と同じように反応するので、戦争では人間を殺し、平和では人間を助け、補充しておくものがなければ腹を立て、ひいきの棋士が勝てば怒りが鎮まり、好意に対して礼を言わない人間がいれば怒る、そしてこのことを当然のことと思っている。

だが、このような私はもしかしたら教えこまれた私、インプットされたにすぎない私なのかもしれない。なぜなら、何に対してどのように反応するかは、時代、地域によって異なるし、また、一番大きなことは〈わたし〉はそのような私に対して不全感をいだいているからである。このような私は〈これはわたしである〉というわたしではないと感じているからである。

ただし、このようなロボットの行為というのは信じがたい不可思議さそのものであり、おそらくは偉大なるプレゼントとでもよぶべきものであり、非難するにはあたらない。それは、わたしの前にあらかじめ置かれたものであり、わたしがそれを手にとっていつもそれと共にいるというのは自然なことである。だが、そのプレゼント、ロボットとしての私というプレゼントはいつかまたいでいく贈り物である。わたしはそのプレゼントでは満足できないので、ロボットではなく、〈わたし〉が生きていきたいと願っている。

「おはようございます。今日はいい天気ですね。」ロボットとしての私の出番はこれだけで十分であると思っています。現実にもどのような言葉を口にするかは別として（シュタイナーが言っているように、対人関係では、相手に発する言葉は自分のためでなく、相手のためにあるのだから）、日常生活すべてにおいて〈わたし〉が主役となる生き方をしたいと思っています。

なお、日常生活というのは沖合いの海のようなもので、いきなり放り出された者はそこでひたすらもがくだけです。でも、もがいているうちに自然と泳げるようになるものです。それに対して、修行というのは足のつくプールで泳ぎの練習をするようなもので、これはこれでしんどいところもあるのですが、上手に泳げるようになれます。ただし、プールで泳げても沖合いの海で泳げるかどうかは別問題であり、シュタイナーもグルジェフも日常生活をとっても重視します。日常生活は瞑想や読書、勉強等々の特殊な時間のおまけのようなものではなく、むしろ逆であるのですが、地球上でよくあるように、大切なものであるがゆえにおざなりにされてしまいます。まあ、この話はわたし自身耳の痛い話で、掲示板の話と日記の乖離のほどを見ていただければ、一目瞭然です。

また、この世界には日常生活の他に非日常的世界が存在してくるときがあります。それは個人レベルでも国レベルでも地球レベルでも生じる世界です。今回の「イラクでの日本人三人拘束事件」もそうです。いろいろな見方があり、それぞれの意見の正誤について争う気持ちはまったくありません。ただひとつ言いたいことは、日常生活に〈わたし〉を持ちこむことは困難であっても、非日常的事態のこのようなときにもまた「ロボットのように聞き、ロボットのように話す」というのは、わたしにとっては信じがたい無意味な行いです。わたしの目から見たあの事件は、どちらを選んでも痛みのある局面で〈わたしは何を選ぶのか〉ということで生じた世界です。ですから、〈わたしが選んだ〉意見、決定であれば、わたしはイエスです。しかし、〈ロボットが選んだ〉意見、決定であれば、どのような高邁な決定であれ、わたしはノーです。（もちろん、選択の結果の結末はあります。ただし、それを論じる前の段階にいるというのが自分の立場です。）

何がよかったのか、何が悪かったのか、…これは歴史が明らかにする…というのも見方のひとつですが、今回の事件のような場合は人類として人間史、宇宙人として人間史が明らかにする、というような出来事だと個人的に思っています。わたしにとって、無事に帰ってきてよかったということで一件落着の話しでは全くなく、おそらく相当尾を引く事件です。

■自己想起

わたしは血液型A型のせいか、昔から記録をとるのが好きである。昔陸上部にいたときには、どんなタイムで走ったかを毎日丹念につけていた。今では、毎日何分瞑想し、それが瞑想開始から何日目の瞑想であるかをHP上の日記にしるしている。同様に、自己想起の回数の記録もつけている。

自己想起、自己観察とはグルジェフの言葉である。シュタイナーはこの能力をあらかじめ持っていたのか、あるいは容易に手に入れることができたのか、さほど紙幅をさいているわけではないが、それでもさすがにチャクラの開発の第一番目の条件としてあげている。

これに対して、グルジェフは人間が機械であることをこれでもかこれでもかと筆をふるい、熱弁して我々に気づかせようとする。結局彼自身、この「自己を想起しつづける能力」をサイキックな超能力を放棄することにより得たと語っているが、はたして彼はこの能力を獲得できたのかどうか、恒常的に自己観察しつづけることができたのかはわたしには不明である。

また、「神との対話」でも地球は夢遊病者の星であるという話題など、何回かこのことがテーマとなっている。…更に読みこむと、これは隠れたメインテーマではないかとも思えるほど、あらゆる言説が関わってくる。

(いずれも、下記引用ご参照ください。表現は三者三様であるが(といってもひとり様であるが)、それぞれ独特の味があります。)

日常生活で「自己想起」に一番近いことは「こうしたらどう思われるだろうか」「これを着ていったらおかしく思われないだろうか」というこころの働きである。これは、「他人にどのように思われるか」ということであるが、これを「わたしはどのように思うか」という視点から見ることが自己想起である(両者の違いは天地である)。

わたしは一日に何回か瞬間目が覚める。そして、

「いま私は何を考えていたのか」

「いま考えていたことは愛だろうか、それとも不安だろうか」

「いま考えていたことは、他人の思惑だろうか、過去の悔恨だろうか、未来への不安だろ

うか」

「いまの私、これはほんとうのわたしだろうか」

と、他人の目から自分をチェックするのではなく、わたしの目から自分をチェックする、これが自己想起である。

わたしの場合、自己想起は少ないときは一日に 20 回、多いときは 150 回くらい行なうが、これは回数が多いということは自慢にならず、<1 回>というのが近未来の目標値である。1 回とは、「ずっと」ということで、常に自己想起しつづけているので、1 回となる。しかも、一日に 1 回でなく、未来永劫の 1 回である。

この自己想起は簡単そうで、えらい難しい。二年半以上取り組んでいるが、進歩は微々たるもので、何か方法が間違えているのではないかと疑心暗鬼に時々陥る。まあ、いろいろ工夫しながら右往左往して実践しているのが実情である。

ここで、なぜそのような自己想起することが重要であるかという、「わたしが何を考えているか、わたしが何を言葉にしているか、わたしが何を行為しているか」ということがわたしの体験の源になっているからです。もっと端的に言うと、

<わたしがいつもどうであるか>ということがわたしが創造するものの原因だからです。

<わたしがいつもどうであるか>ということがわたしが体験する原因だからです。

<わたしがいつもどうであるか>、すなわち、それが<存在>ということですが、この<存在>は通常「支離滅裂」であるというのが現実であり、これは自分自身のこころの動きを多少なりとも誠実に追えば悲しいほど明らかなことです。ただし、ひとつひとつの反応の仕方に関してはつじつまが揃っているように見えるので、そこだけをとらえて正常な人間であると思ってしまうわけです。しかし、たった 10 分間のこころの動きでさえ、もし正確に再現できたとしたら、この 10 分間におけるつじつまというのは全く存在せず、これははたして同じ人間が考えていることなのだろうかと思えるほどの、「風が吹けば桶屋がもうかる」式の支離滅裂な連想世界が展開されることとなるであろう。したがって、このようなく支離滅裂な存在>から創り出される世界、体験も支離滅裂となり、実際「こんなことは望んでいない」という世界、体験に遭遇することになるわけです。

わたしは「気功教室」で熱弁をふるうときにはこころは聖人であるが、教室から一步出て、目の前にミニスカートのグラマーな女性がいれば、ストーカーまがいの人となるわけで、このような人間には何も出来ず、出来事は万華鏡のように予想しがたいものとなる。この

意味で、わたしは自由でない、つまり自らが原因（由）となれないわけです。わたしの思考・言葉・行為はわたしの内側が常なる原因でなく、多くの場合わたしの外側が原因となるからです。

この自由な創造者となるための第一条件が常に自己を観察し、常に自己をコントロールすることなのです。（なおシュタイナーは畏敬、尊敬、敬意という感情をあげているが、これはこれで、シュタイナーらしい条件です。）

ですから、わたしは掲示板で「意識のある生活」として様々な提案を行なっているわけです。それらは自戒の言で、現実に常に適用するというのは困難極まりないことですが、いつかはくわたしは始まりである」と自由を宣言できる日がくることは毛ほども疑っておりません。駄文がつづいたので、シュタイナー、グルジェフ、「神との対話」のチャーリーの話引用いたします。

<シュタイナー>

「この十六弁（チャクラ）の開発は次のような仕方で為される。日常不注意に行ってきた魂の特定の働きに対して注意深い態度でのぞむ。魂のこのような働きは八つの種類に分けることができる。

第一は表象（意識内容）を獲得する仕方である。通常、人はそれをまったく偶然に任せている。日々さまざまな事柄を見聞きし、それを基にさまざまの概念が作り上げられる。そのような態度で生活している限り、十六弁の蓮華はまったく活動を停止している。これを活動させるためには、これに意識的態度でのぞまなくてはならない。この目的のために必要なことは、自分の表象に対する注意力の喚起である。どの表象も彼にとって有意義なものにならなければならない。どの表象の中にも、人は外界の事物についての特定の情報を見出さなければならない。意味のない表象に満足してはならない。自分の所有する概念の働きをすべて自分で統禦し、それが外界の忠実な鏡となるようにしなければならない。歪んだ表象は自分の魂から遠ざけねばならない。」（「いかにして超感覚的認識を獲得するか」127 ページ イザラ書房）

<グルジェフ>

「人間とは、「為す」ことができる人であるが、凡人はもとより、非凡とみなされている人々の中にさえ、「為す」ことのできる人はただの一人もいない。彼らの場合、何ごとによらず、初めから終わりまで「なった」のであり、彼らが「為せる」ことは一つもない。

個人として、家族の成員として、社会人の生活においても、政治、科学、芸術、哲学、宗教の分野においても、すべては初めから終わりまで「なった」のであり、誰も何一つ「為す」ことができない。二人の人が人間に関して話すとき、人間とは行動でき、「為す」能力を持つ生命体である、ということに初めて意見が一致すれば、この二人は常に互いに理解

し合える。確かに彼らは、「為す」とはどのようなことであるか、十分に明確にするであろう。「為す」ためには、きわめて高度の存在（ビーイング）と知識が必要である。凡人には「為す」ことが何であるかさえわかっていない。というのは、その人自身もその人の周囲のいっさいも、みな常に「なった」からであり、「なってきた」からである。それでも、なおかつ、人間は「為す」ことができるのである。

眠っている人間は「為す」ことができない。すべてが眠っている間に「なって」しまう。ここで言う眠りとは、文字どおりの有機的睡眠ではなく、ただの連想的生存状態という意味である。何よりもまず目覚めなければならない。目覚めれば、このままの自分では「為す」ことができないのに気づく。自主的に死ななければならないであろう。死ねば、新たに生まれることができるかもしれない。だが、生まれたばかりの存在（ビーイング）は、成長し、学ばなければならない。成長し、知識を獲得して、初めて「為す」のである。」

（「グルジェフ・弟子たちに語る」108ページ めるくまー社）

<チャーリー、神、ほとけ、SOMETHING>

「まず、最も気高い、こうありたいと思う自分を考えなさい。そして、毎日そのとおりに生きてらるかなるかを想像しなさい。自分が何を考え、何をし、何を言うか、ほかの人の言動にどう応えるかを想像しなさい。そんなふう想像した姿と、いま自分が考え、行い、言っていることが違うのはわかるだろうか？いまの自分とこうありたいと望む自分の違いがわかったら、考えと言葉と行動を気高いヴィジョンにふさわしく——意識的に——変えようと決心しなさい。

それには、とても大きな精神的、肉体的努力が必要になる。一瞬も怠らず、つねに自分の思考と言葉と行為を見張っていなくてはならない。つねに——意識的に——選択を続けなければならない。このプロセスは、意識的な人生への大きな一歩だ。そう決意すると、人生の半分を無意識のままに過ごしてきたことに気づくだろう。結果を体験するまで、自分が思考と言葉と行為をどう選んでいるか、意識しなかったということだ。しかも、結果を体験しても、自分の思考、言葉、行為がそれと関係があるとは考えられない。

これは、そんな無意識の生き方はやめなさいという呼びかけだ。あなたの魂が時のはじめからあなたに求めてきた課題なのだ。」

「そんなふうには、精神的見張りを続けているなんて、へとへとになりそうですが——。」

「そうかもしれない。だが、いつかは第二の天性になるだろう。実際に第二の天性なのだから。無条件に愛するというのが第一の天性。その最初の天性、真の天性を意識的に表現する——そう選択することが第二の天性だ。」

「すみませんが、そんなふうにはいちいち自分の言動を検閲していたら、「愚鈍で退屈な人間」になってしまいませんか？」

「そんなことは決してない。違った人間にはなるだろう。だが、愚鈍で退屈だということはない。イエスは退屈だったか？ そうではないだろう。ブッダはつまらない人間だった

か？ 人びとは彼のまわりに集まり、そばにいたいと懇願した。悟りを開いたひとは決して退屈ではない。ふつうではないかもしれないし、非凡かもしれない。だが、退屈ではない。

あなたの高いヴィジョンにそぐわない考えが浮かんだら、そのとき、その場で「新しい考え」に変えなさい。立派な考えにそぐわないことを言ってしまったら、二度とするまいとここに銘記しなさい。最善の意図にそぐわないことをしたら、これを最後にしようと決心しなさい。そして、できれば関係者たちに訂正してまわりなさい。」

（「神との対話 1 巻」 105 ページ サンマーク出版）

（4 月 20 日掲示板）

■ 尊敬・敬意・畏敬（ヤマさんへの返信）

ヤマさん、返信いただきありがとうございます。

拙文が少しでもお役に立てればこれほどの喜びはありません。

<引用>

シュタイナーの言葉に関心をお持ちのようなので、少し補足させていただきます。

他者に対して、あるいは人生に対して、尊敬、敬意、畏敬という心的態度で臨むことがなぜ大切であるかという、そのような姿でいるときにだけ、<世界がわたしの内に入ってくる>ことができるからです。通常、多くの人々は他者や人生に対して批判的態度で臨みますが、そのような態度とは<受け容れない>ということであり、このような態度は他者に対して愛がないという以上に、自分に対して過酷な桎梏を課すことになるわけです。偏食の子どものようなもので、そのことが体に悪影響を及ぼすと同じように、世界への偏食は人間存在に悪影響を及ぼします。

また、この心的態度は認識行為や知識に関しても大きな影響を与えます。何回も書きこんで、その大学教授には恐縮ですが、典型的な例なので…学生時代、大学の演習に他大学から超有名な仏教学者を呼んで講義があったとき、聴講生が少ないということで、担当教授からわたしのゼミには出なくていいからそちらの演習に出てくれれば、わたしの方の単位もあげるということで、急遽学生が集められました。そういうこともあってか、その仏教学者にとって何か不愉快なことがあったのでしょうか。2 回目か 3 回目かの講義からはモロふてくされた態度の講義で最後の講義までその態度で終始しました。大学の先生にとって「批判精神」「批判能力」というのは不可欠な要素であり、知識と実態が異なっても不思議でも何ともないのですが、扱うテーマが「仏の教え」ですから、わたしは相当違和感をおぼえました。この世的に見れば、この仏教学者の知識、学問の質量は文化何とか賞を受賞するようなものですが、あの世的に見れば、一枚の鼻紙以下の価値しかないようなもので

す。ですから、この世的な知識の少ない「市井の下駄職人である才市」の方が仏の教えに関してとても多くのことを<知っている>ということがあるわけです（水上勉「才市」講談社）。どのような知識もその内に尊敬、敬意、畏敬があるのか、それとも軽蔑、裁き、批判があるのかでまったく異なるものになってしまうわけです。

シュタイナーの言葉です。

「正しい知識は、それを敬うことを学んだときにのみ、自分のものにすることができる。人間は確かに眼を光の方へ向ける権利がある。けれどもこの権利は他人が与えてくれるのではなく、自分が自力でそれを獲得しなければならない。」

（「いかにして超感覚的認識を獲得するか」26 ページ イザラ書房）

ですからシュタイナーは、この心的態度をまず育てるべきであり、生まれながらにこのような素養を持っている者は幸いであると言っています。さらにまた、次のような人が陥りがちな陥穽に対して注意を促しています。

「とはいえ、高次の知識を得るために必要なのは人間崇拝ではなく、**真理と認識**に対する畏敬である、ということが強調されねばならない。」

カルト集団、新旧を問わず、あらゆる宗教教団にいえる真実です。この言は、師にあたるような人物から話を聞く立場の者のみならず、師にあたるような人自身もまた心得おくべきことです。

この世界には「人間に属するもの」と「人間に属さないもの」とがあり、言葉のうちで、<大きな言葉>というのはその「人間に属さないもの」にあたります。<大きな言葉>というのは、それを発した人物よりも大きいことを自覚していなければならないのですが、発言した人物が<その言葉はわたしのものである>と悪しき自己同一化するのちまたにあふれている現象です（わたしの経験でいくと、その<大きな言葉>から一番学ばなければいけないのは、通常発話者自身です）。ここをカン違いして、<大きな言葉>を聞く者も発する者も、言葉と発話者を同一化すると、<大きな言葉>は現われてこなくなり、やがて<小さな言葉>、発話者自身の卑小な世界の言葉が現出してくることになります。ここでもまだ、「発話者が<大きな言葉>と同一の立派な人物であり、卑小な言葉も見習うべき言葉である」と思いこんでいると、世の事件となるような事態が生じてしまうわけです。

精神世界で学ぼうとしても、<わたしのものとは何か>、そして、<わたしとは何か>ということによくよく注意していないと、思わぬ袋小路に入りこんで、そこで人生の大半を過ごすはめになってしまいます。

（4月21日掲示板）

●ヤマさんへの返事

ヤマさん、こんばんは。

書きこみいただき、ありがとうございます。

<引用>

そのような形でお使いいただき、光栄です。

実はわたくし自身も自分の書いたノート及びそのダイジェスト版みたいなものを常に携帯して読み返しています。

また、シュタイナー、グルジェフ、「神との対話」シリーズは印象に残る言葉を書き写し、これまた持ち歩き、時々読み返しています。

喫茶店や事務所でゆったりとした気分で、自分自身のノートや偉大な先人の言葉を読み返しながらいろいろ書き加えたりする、こういう時がわたくしが一番幸せを感じる時間です。だが、この特別な時間は日常生活の瑣末な出来事や仕事上のトラブルの中ではたちまち嵐のような、コールタールを塗りたくったような時と変じてしまいます。グルジェフは確か「修道院の中では良い人であることはできても、修道院の外で良い人であることは難しい」というようなことを言っていたと思いますが、まさしくその通りで、この言は別の側面からみると、真の自己というのはこの日常の現実世界の中でのみ達成される、ということです。ですから、喫茶店や事務所にいる時間も大切なのですが、日常生活や仕事上のトラブルもまた黄金の時であり、黄金の場であるということです。イエスは弟子が目をそむけた腐敗した犬の死体を見て、その歯並びの内にある神性を感じ取り、美しいと感嘆したようですが、おそらくわたしが今日出会う出来事の中でわたしにとって無意味なことなどただの一片たりともない、というのがこの世界の摩訶不思議なところでは。

世界は完璧である。その完璧さ全てを見たことはないが、人生の中でほんの一瞬感じ取ることができた体験からいって、おそらくは真理の言であると思っています。身体の完璧さ、ガイアとしての地球の完璧さを、この時代にいて知れば知るほど、この外なる宇宙と内なる宇宙を含めた世界全体にたったひとつの瑕疵があるとはよもや思えない、というのがわたしの世界観です。

だが、同時に理解しがたい不可思議なことがあります。それは人間存在であります。

人間とは、月世界にまでたどり着ける移動方法の可能性を持っていたが、ある時には徒歩によって移動していた存在である。

人間とは、一点の光としても見えない暗黒の中に 100 億年前の銀河の姿を見通せる眼を持つ可能性を持っていたが、ある時には目の前のマンモスだけしか見ることができなかった存在である。

人間とは、人類の救済のために自ら命を投げ出すことができる可能性を持っていたが、ある時には自分の財産と偏見のために他人の命を奪っていた存在である。

人間とは、今戦争を終わりにし、今飢えを終わりにし、今共感をともにできる可能性を持っていたが、ある時には昨日と同じように今日も生きていた存在である。

阿弥陀如来の別名は不可思議光であるが、人間存在こそ、まさしく不可思議光とでも呼ぶべき存在であり、この存在はまた不可思議闇とでも呼ぶべき存在である。

外なる宇宙と内なる宇宙から成るこの世界において、時には信じがたい栄光を達成し、時には信じがたい蛮行を為す。

どちらも人間であり、両方であることも、栄光だけであることも、蛮行だけであることもできる。そして、このような存在はこの世界で人間だけである。

人間は時には腐敗した犬の歯よりも醜く、時には腐敗した犬の歯のように美しく、そしておそらくこれが人間存在の意味である、いつかは犬の歯よりも美しくなる、そのような不可思議な存在である。

現実のわたしはというと、上の歯は全部「差し歯」！ 下の歯は一部「入れ歯」！という現実とシンクロする、犬の歯のように美しいとは言えぬガタガタの状態です。しかし、喫茶店や事務所における特別な時間、特別な場所、また日常、仕事上の特別な時間、特別な場所、つまり、この世界という特別な時間、特別な場所を通じて、見たこともない、感じたこともないわたしを実現できると信じて疑いません。わたしの可能性としての大きさは、これまで生きてきた「ちっぽけな存在」では決してありません。もっとはるかに大きな、想像できる大きさよりもはるかに大きな存在です。それはもちろん、すべての人に対しても言えることです。

(内の大きさはいくら大きなものを望もうとも、この世界は裏切りません。逆に大きなものほど容易に達成されます。これが如来の前身である法蔵菩薩が「一声であってもわたしの名を称えた人はすべて救われる」という願をかけ、それはただちに実現され、阿弥陀如来となった由縁です。)

<引用>

この世界とは図書館のようなもので、本来は誰でも本を借りることができます。ただひとりの人が、あるいは特定の集団の人がひとり占めにすると、残りの人は借りることができなくなってしまいます。だからといって、いつも1冊しか借り出さなくとも、読めるのであれば、10冊でも20冊でも構わないわけです。ただし、読まない本をいつまでも借りておくことは「意味がない」ということは自明なことに思われます。本は読むためにあり、モノは利用するためにあります。利用できるのであれば、モノもまたいくら持っていても構わないわけです。とはいえ、10年先に利用するものを10年間ひとり占めにしておく。あるいは、1回利用したものは他人には渡さないというのは、借り出しの心得がなっていないと言われてしかありません。

また、モノというのは利用するだけでなく、活用できるものでもあるということです。

「その当時師範は今ひとつ別な援助方法、同じく彼が直接の精神伝達といったものを実施してくれた。私が引き続いて射損ねると、彼は私の弓で二、三回射放したのである。すると弓はてきめんに良くなった。あたかも弓が、前と違って物分りがよくなり、自ら進んで自分を引かせるかのようなのであった。単に私だけにこんなことが起ったのではない。彼の最古参の、最も練達した弟子達ですら——それはいろんな職業の人々だが——この事を決まりきったことと考えており、私が、石橋を叩きたがる人のように質問するのを不思議がったのである。同様に剣道師範もまた、彼等の確信、すなわち数え切れぬ細心の注意を払い、粒々辛苦して作製した刀剣は、その刀鍛冶の精神を受け継いでいる——さればこそ刀鍛冶は実際また礼装して仕事にとりかかるのである——という確信を持っていて、どんな非難にも惑わされない。彼等の経験はあまりにも一本筋であり、しかもこの一本筋の剣道に、彼等自身があまりに熟達しているので、彼等は一振りの刀が彼等に訴える精神を覚知せずにはいられないのである。」

(オイゲン・ヘリゲル著 稲富栄次郎・上田武訳「弓と禅」106ページ 福村出版)

これこそ、真の錬金術と呼ぶべきものでしょう。

モノはいつも生命を吹きこまれることを待っているのです。

モノの持つ生命性のゆえに、逆の事態も生じます。それは、モノに取りこまれてしまうということです。

かなり小さい頃のことですが、大事にしていたネズミの風船のおモチャで近所の年下の子と遊んでいて、その子がうっかり割ってしまった時、烈火のごとく怒ったことを昨日のこ

どのように思い起こします。とても小さな頃の出来事ですが、とても大きな年齢になった今でも同じようなことを繰り返しているようです。

モノはわたしと共にあり、その時には生命があり、また生命を吹きこむことができる存在であるのですが、もうそのモノがわたしにとって不要になったのであれば、あるいは、わたしが眼をかけることができなくなったのであれば、また、何かのアクシデントで共にあることができなくなったのであれば、静かに別れを告げるべきことなのです。

(4月30日掲示板)

■所有

所有に関してはもうひとつ重要な話があります。

それは、<人間が所有できるもの>があり、また、それは<来世に持っていくことができるもの>であり、ある人にとっては<来世に持っていかなざるをえないもの>というのが適切な言い方になるようなものです。

それゆえに、これが<人間である>ものと言えるものです。

それは一体何だと思いませんか？

(5月2日掲示板)

わたしは図書館に入る。いつも書庫の右に入る。なぜか、いつもそうだからだ。なぜそうするのか。昨日も一昨日も一年前も右に入ったからだ。左に行く人もいるが、わたしにはそのような行いは信じられない。図書館とは右に入って、二つ目の書棚から選ぶに決まっているのだ。ほかにも本はあることは知っているが、そんな本はくだらない本か。あるいは、読むことができない難しい本だ。だから、わたしはそのような本は一顧だにしない。

■時計①

わたしが大切にしている時計がある。

この時計は今では製造中止の珍しい時計である。

あなたは、この時計をほしいと言う。

わたしは、この時計をあなたに与えることができる。

わたしのものだから与えることができるのだろうか。

それとも、わたしのものでないから与えることができるのだろうか。

(9月6日2003年、5月5日2004年掲示板)

別の文章挿入

■時計②

いま、この時計の持ち主はわたしである。

でも、いまあなたに手渡せば、この時計の持ち主はあなたになる。

では、あなたはこの時計をわたしのものである、と言えるのであろうか。

そう、言える。

でも、言えない。

言えるというのは、あなたはこの時計を使うことができる、という意味である。

言えないというのは、この時計はあなたではない、この時計はあなたには属さない、という意味である。

(5月6日 2004年掲示板)

■所有～グラス半分の水

砂漠にあなたとわたしがいる。

わたしはのどが渇いて自分の水をすべて飲んでしまった。

あなたが大切に取っておいた水がグラス半分ある。

あなたは年寄りのわたしを気の毒に思って、グラス半分の水すべてをわたしに与える。

それはあなたのものではないので、わたしに与えることができる。

あなたのグラスは空っぽになってしまった。

しかし、あなたは偉大な贈り物を得る。

それは、与えたという行為である。

これほど大きな贈り物はこの世にはない。

これは永遠にあなたのものである。

しかも、この贈り物はあなたがあなた自身に与える贈り物である。

(2月12日 2005年掲示板)

■続グラス半分の水

わたしはあなたから水をもらったにもかかわらず、お礼をいわない。

当然のような顔をする。

あなたの方が若くて、元気なのだから、年をとって疲労困憊のわたしの方が水を飲むのは当然だと思ふ。

すると、あなたは怒り出す。

顔には出さないようにするが、わたしのことをお礼も言えない情けない人間であるとばかにする。

感謝されないのなら、自分のものをあげなければよかった、とさえ思うかもしれない。

だが、そのように怒り出した瞬間、

あなたがあげたグラス半分の水、

これはあなたがあげたはずであるが、あげてはいなかったことになる。
水はわたしのおなかのなかにあるが、これはあなたがくれたものではなくなる。
あなたが見返りを求めた瞬間、
これは右にあった水を左に移しただけとなる。

この世界では与えることは報酬とむすびつく。
与えれば感謝されるし、時には金銭でお礼をされる。
だが、この世界にはもうひとつの世界が内在していて、そのもうひとつの世界では、
<与えることそれ自身が報酬である>
という。

これまでは手放せなかったものをいま初めて手放すとき、あなたは生まれ変わるのであり、
これ以上の報酬というものはないからである。また、もしそのような行為がすでにあなた
のものであるならば、あなたは何も報酬を要求しないであろう。それはあなたであるのだから。

(2月15日 2005年掲示板)

■ヤマさんへの返事

高塚様へ

いつもありがとうございます。
与える事と受け取る事について、これ程簡潔にわたしが理解できたことはありません。
ものすごい気付きがありました。

私はできるだけ人には頼らずに何でも自分でできるようにする事がいい事だと、子供の頃から教わりずっとそう考えて生活をしてきました。

しかし、実際の社会生活ではどうがんばってみても人に頼らねばできないように動いていく場合がある事に気付きました。
それでもできるだけ頼らずに進めていくと、どうにもならない状態になります。
結局私が望もうと望むまいと多くのサポートを受けて助けてもらい解決？していく事になります。

ひょっとして私はもっともっと人の愛を受け取る事が必要なのではないかと考えるようになりました。

そう気付いて初めて私のまわりに愛が満ちている事がわかりました。
わかっているけど、それでも何やら「受け取る事」に引け目を感じておりました。
今日、<与えることそれ自身が報酬である>という高塚さんのお話を読んで、本当に「あ

あそういう事だったのか」と・・・ショックを受けました。
私は相手に報酬を受ける機会を与えるのを拒んでいたのか！と。
上手く書けません何かが変化したのは確かです。
もっと「与える事と受け取る事」について考えてみたいと思います。
いつも大切な気付きを与えてくださりありがとうございます。

ヤマさん、おはようございます。
書き込みいただき、ありがとうございます。

<与えることそれ自身が報酬である>というのは、実はグルジェフの弟子のキャサリン・リョルダン・スピースという人が「グルジェフ・ワーク」(96 ページ、平河出版社)で取り上げている考えです。彼女は「自己同一化」「内的考慮と外的考慮」という考え方を提起しながら、<外的考慮はそれ自身がすでに報酬である>と語っています。まあ、この言葉に出会ったときにはわたくしも衝撃を受けたことをおぼえています。さりげなく流されている言葉ですが、意味深であり、同時にその真意は示されてはいません。自分なりに解釈して表現したのが昨日の書き込みです。

以下に同書から引用しておきます。ご理解いただく一助となるかもしれません。

「自己同一化の状態にある人間は独立した意識をもたない。彼はたまたま自分のしていること、感じていること、考えていることに埋没している。彼は夢中になり、対象に没頭し、自分というものが存在していないので、この状態はいわば目覚めた眠りと呼ばれている。自己同一化は自己意識の対極にある。自己同一化の状態にある人間は、自分自身を記憶しない。自分に対して自分自身が失われている。注意力はもっぱら外界に向けられ、内面の状態への意識は全く残されていない。このため日常生活のほとんどは自己同一化の状態で過ごされるのである。

他人の期待への同一化は考慮と呼ばれる。これは内的考慮と外的考慮との二種類に区別することができる。内的考慮は未発展の状態にいる人が始終感じている不満感がもとになっている。この場合、人が自分に十分な注目あるいは評価を払っていないと感じる不満である。自分が与えたもの——それは今もなお自分のものというわけなのだが——に心中こだわり続け、他人が十分な評価を払わないと機嫌を損ね、無視されたように感じ、そして傷つくのである。これは自己同一化なしには起こりえない。

一方、外的考慮とは感情移入と気転の実行である。つまりこれが真の思慮深さというものなのである。これはそれを実行しようとする人の注意力と努力に特定の確実性と一貫性があるかどうか条件となる。おもしろいことに、外的考慮を実行しているはずなのに、実際は内的考慮に逆戻りしてしまうことがよくある。それは、他人に気を配ろうと努力はするのだが、相手からその努力に対して感謝も注目もされない場合である。<外的考慮はそ

れ自身がすでに報酬である>べきなのであり、見返りを期待すべきでない。」

グルジェフの考えに通じていない方には分かりづらいところもありますので、蛇足の解説をつけさせていただきます。

わたしはいつもどのようなようであるかという、
昨日へまをやって恥をかいたことにころの中は一杯である。
今日の晩御飯を何にするかでころの中は一杯である。
明日の試験で失敗するのではないかところの中は一杯である。
あの人はわたしのことをどのように見ているかということでころの中は一杯である。
わたしはいつもわたし以外の何かに「自己同一化」してしまっていて過ごしている。
わたしは目が覚めているのだろうか。
もしかしたらわたしは眠っているのではないだろうか。
わたしはいつもわたし以外の中で眠っているのではないだろうか。
わたし以外のもの、それがわたしである、と思っているのではないだろうか。
グルジェフの人生はこの眠りからの目覚めにすべてが費やされたのではないかと思うほど、この眠りから覚める重要性を強調しています。この訓練をグルジェフは自己想起と呼んでいて、シュタイナーも「神との対話」の神も「ヒマラヤ聖者の生活探求」のマスターも言い方は違えど、皆が口をそろえて言っていることです。

この「自己同一化」が自他との関係で現われてきたものをスペースは「考慮」と名づけ、その方向性によって「内的考慮」と「外的考慮」とに分けます。「内的考慮」とは相手から自分の内側に向かう同一化です。すなわち、相手からどのように思われているか、相手は自分を評価しているか否か、あの人はわたしのことを好きなのかどうか、…というのが「内的考慮」であり、通常この「内的考慮」に人は莫大のエネルギーを費やします。だが、これは悪しき「自己同一化」と呼ぶべきものであり、シュタイナーはこの内的考慮に関して次のように喝破しています。

「たとえば誰かが、われわれを侮辱したとしよう。神秘修行をする以前には、侮辱した相手に対して敵意を感じ、怒りがわれわれの内部に燃え上がった。しかしこのような場合、神秘道の修行者の心中には、直ちに次のような思考内容が立ち現れる。<このような侮辱によって私の価値が変わるわけではない>。そしてこの侮辱に対して、必要と思われる処置を彼はとる。怒りからではなく、平静な心をもって。」

(シュタイナー著「超感覚的世界の認識」98 ページイザラ書房)

「内的考慮」がどのようなものであっても、<わたしの価値は変わらない>とシュタイナ

一は言っています。まあここに至るまで、内的考慮すなわち他者の視線にシュタイナーがどれほど苦しんだかも逆に見て取れるのですが、このような考えに自らたどりついたとしたら、これは信じがたい達成であると、わたしなどは考えてしまいます。

そして、スピースは人間が本来とるべき自他との関係における「自己同一化」はわたしから相手に向かう自己同一化であり、これはわたしが相手の立場に立つという自己同一化です。これをわたしから外へ向かう考慮として「外的考慮」と名づけたのです。この相手の立場に立つということは薄っぺらなヒューマンな行為とはまるで違うものです。〈わたしというものがいて初めて立つことができる〉、非常に峻厳な行為であるわけです。

お釈迦様が生まれてときに「天上天下唯我独尊」と言ったという逸話もわたしは全く同様のことを言っていると考えています。これは人が人と成るための第一歩であることで、わたしはわたしであればよいのです。そして、わたしはわたし以外にはなれないのです。わたしがわたしであって、そこで相手の立場に立って何か手助けをした。そこに必要な報酬という考えは生まれようがありません。相手の立場に立つ、それはわたしであるのですから、何ものをも必要としません。これは別名〈行為への愛〉と呼ばれていて、なかなか理解しがたい考え方ではあります。

この〈わたしが立って〉、相手の立場に立つことができ得れば、〈相手にもまた立ってもらいたい〉と思う。しかし、なかなかそうはいかない。これが愛を達成するための厳しさで、愛は自らが獲得するしかないという側面がまたあります。以下はグルジェフとヒマラヤのマスターの言葉です。

人々の間——一人ともう一人の人と——の適切な、客観的な道徳に基づいた愛について説明を求められたとき、グルジェフは答えた。

「他の人が、その人自身に必要なことをするのに助けることができるほどに、あなた自身を発展させる必要があり、たとえ、相手の人がその必要性に気づいていないときでも、また、あなたにとって不利なことになっても、助けることができなければならない。この意味においてのみ、道理に適切にかなった愛と言え、真の愛の名に値する。」

彼は、さらにつけ加えた。たとえだれにも劣らぬ心積もりでも、たいていのひとは、積極的に人を愛することにかけてはあまりに臆病であって、相手に対して何かをしようと試みることさえ恐れる——愛が恐るべき一面をもっていることの一つは、相手がある程度助けることはできても、その人のために実際に何かを「する」ことはできないということである。「ある人が歩かなければならないときに、その人が転んだなら、起してあげることはできる。だが、その人にとっては、もう一步踏み出すことが空気以上に必要であっても、その一步は、その人が一人で踏み出さなければならない。その人に替わって、もう一人の人

が、その一步を踏み出すことは不可能である。」

(フリッツ・ピーターズ著「魁偉の残像」261 ページ メルクマール社)

「これからこの廟を、部屋から部屋へと上に昇って行くわけだが、この際、＜何人も自分の権利を他人に与えられるものではないということを、どうか忘れないで頂きたい。＞自分の理解力を発達させれば、誰にも負けないようになることがお分りになります。自分の権利や自分の持っているものを人に与えようとするのは、丁度与えることができないものを与えようとするようなもので矛盾です。＜人は同胞に対して道を示すことは出来るが、自分の持っている徳を人に与えることは出来ないのです＞」。

(ベアード・T・スポールディング著「ヒマラヤ聖者の生活探求」第2巻 23 ページ 霞ヶ関書房)

あなたはわたしに水を与えることはできます。そして、そのことによって道を示すことはできます。しかし、あなたの徳をわたしに与えることはできないということです。あなたは道を示す。文字通り、人でなしのわたしはその道を通らない。これは悲しむべきことであっても、怒り出すことはありません。だが、どれほど悲しいことであっても、人として大切なことは自由である。自らが原因であることで、たとえ、その自らが自らでないとしてもです。

「グラス半分の水」の話を知ったのは20年ぐらい前でしょうか。

■続々グラス半分の水

更に信じようが信じまいが、こういう話もある。

砂漠にあなたとわたしがいる。

わたしはのどが渇いて自分の水をすべて飲んでしまった。

あなたには大切に取っておいた水がグラス半分ある。

あなたは年寄りのわたしを気の毒に思って、グラス半分の水すべてをわたしに与える。

それはあなたのものではないので、わたしに与えることができる。

あなたのグラスは空っぽになってしまった。

ところが、空っぽになったと思ったあなたのグラスには水があふれんばかりに一杯になっている。

＜この水はあなたのものである。＞

これは比喩の話ではない。
こころの中のグラスの水が一杯になったというような話ではない。
これは実現する。
見たことはないし、やったこともないが、実現する。
信じようが、信じまいが、
事実であろうが、事実でなかろうが、
実現する。
わたしはそう思っている。
(2月18日 2004年掲示板)

与えることができないもの

また、逆に、
わたしはあなたからグラス半分の水を奪い取る。
それはあなたのものでないので、あなたから奪い取ることができる。
しかし、奪い取ったとしても、それは自分のものとはならない。
自分のものとは時計や水ではなく、奪い取った行為そのものだからである。
(掲示板記入予定) (草稿転記予定)

そのような時計、水はまた他人から奪い取ることができる。
なぜならその時計も水もその人のものではないからだ。
しかし、また奪い取ったとしても、それは自分のものとはならない。
自分のものとは時計や水ではなく、奪い取った行為そのものだからである。
(掲示板記入予定)

■この世界では、最悪のときに、最高の贈り物を得る可能性がある。
(掲示板記入予定)

■愛の対極

今日「神との対話」を読み返していて偶然(必然)に所有に関して語っているところに遭遇しましたので、ご紹介します。ここでは、所有は愛の対極にあるものとして語られています。

「前におっしゃった愛の法とは、どんなものですか？」

「愛はすべてを与え、何も要求しない。」

「どうして、何も要求しないでいられるんでしょうか？」

「人類の誰もがすべてを与えたら、何を要求するのかね？ 何かを要求するのは、ただひとつ、誰かがそれを握って離そうとしないからだ。握りしめてしがみつくのは、やめなさい。」

「でも、全員が一度にそれをしなければ、実現できませんよね。」

「そのとおり。そこで地球的な意識が必要になる。しかし、そのためにはどうするか？ 誰かが始めなくてはならない。そのチャンスがいまここにある。あなたは、新しい意識の始まりになることができる。あなたは、インスピレーションのもとになることができる。そうしなくてはいけないのだ。」

(ニール・ドナルド・ウォルシュ著 吉田利子訳「神との対話」ハードカバー本 2 巻 224 ページ サンマーク出版)

(5 月 3 日 2004 年掲示板)

■ それ

弓と禅における<それ>と自己想起との問題

「私」から<それ>へと行き、さらに<わたし>なのか

創り出すことは不可能で、常に創り出されるこのみがあるものであろうか。

また、創り出されることと自己想起との関係はいかなるものであろうか。

4 月 16 日 2004 年

●意識のある人生

●時空論は仮想世界の項目に入れる。

●瞑想

瞑想における仮想空間

そこに来た者は皆、神社のようなすがすがしさを感じることができる、そのような内なる神社として存在している。

そこは内なる神社であると同時に光の源でもある。

わたしはいつもそこをきれいにしておく。

4月17日、18日 2004年

●世界

この世界ではすべてのことがオリジナルである。

オリジナルとは他に代替できないということである。

好ましいことであれ、好ましくないことであれ、そのオリジナルなこと、代替できないことをよく見てみることだ。

二度と見るできないことを、よく見てみることだ。

見れば知ることができるし、見なければ知ることはできない。

人であれ、出来事であれ。

(4月18日 2004年掲示板)

●知識

よかれ悪しかれ、私が有名人になったら、週刊誌にまず書かれることは「あいつはタチシヨンの常習犯である」ということだろう（これ、昔はホント）。あるいは、人をだまして高額の治療費をとっていた、ということも書かれそうである（これはウソ）。あるいは、洗脳して弟子をつくらうとしていた（これは半分ホント、ただし洗脳は脳を洗い、リフレッシュさせることだけである）。

まあ、どのような知識が週刊誌によって伝えられそうか、わが身を振り返って想像してみるのも一興である。

(4月18日 2004年掲示板)

■知識

A「あいつの親は実は共産党員らしい。」

B「そうかそれでよく分かった。」

C「あいつの生年月日を知っているのか。」

AB「もちろん、そんなことは知らない。何を言ってるんだ。」

C「そうだ、何を言っているのか。」

生年月日など知らなくとも共産党員の子どものことを知っていれば子どものことはよく分かるという。

だが、また別の人共産党員の子どものことであるという知識は邪魔な知識であり、生年月日とその日時の方が重要な知識であると言うかもしれない。

また、別の人はその子どもの持っているハンカチの方が重要な知識であると言うかもしれない。

(4月18日 2004年掲示板)

●スプーン曲げ・指曲げ・へそ曲げ

十数年前、スプーンや鍵を曲げたとき、驚かないへそ曲がりもいたが、通常は皆が驚いた。他方、わたしが指を曲げるのを見て驚いたへそ曲がりにはお会いしたことはなく、通常は皆が当たり前のように思っているようだ。

だが、わたし自身はそのへそ曲がりであり、二十数年前、指が曲がったことにえらい感動した。しかし残念ながら、その感動はそれ以来湧いてこない…、もういちど何とかへそ曲がりになってみたいと切に願っているのだが…。

(4月19日 2004年掲示板)

4月18日、19日、20日、5月14日、15日、7月10日 2004年、6月3日 2012年

●創造

創り出すことと創り出されること

もしかして創り出されることだけしかなく、そこに至ることのみ腐心すべきなのだろうか。(参考「弓と禅」161ページ～絶対無)

■エネルギー～労力

最も多くの労力を費やしたものに最も多くの収穫がある。

だから、労力を費やせるものを見つける必要があるし、見つけ出したものには労力を費やすべきである。

(5月17日 2004年掲示板)

■囲碁将棋～<それ>

囲碁将棋でわたしより強い人は間違えなくわたしより番数をこなしている。彼らは<それ>に労力を費やしている。

他方、わたしより番数をこなしているが、弱い人もいる。どうもそのような人を見ていると、ロボットのように囲碁将棋をやっている。そう、彼らは<それ>に労力を費やしていない。ロボットに労力を費やしている。

(加筆して新掲示板記入可)

「弓と禅」の<それ>

■エネルギーと第三の道

河合隼雄「カウンセリングを語る (上)」45ページ

●フィクション～<仮想空間><感情><魔術>

小説にはうそが書かれてある。

では、本当のことが書かれてあるとはどういうことだろうか。

ノンフィクションの本だろうか。

そこには本当のことが書かれてあるのだろうか。

もしかして、小説のフィクションの方が本当のことが書かれてある、ということはないだろうか。

なぜ、こんなことを言うかという、本当とは感情だからである。

(6月5日 2012年新掲示板)

フィクションは入っていないのか。

この世界のことをそのまま書くということは可能なことなのか。

あるいはまた、そもそもこの世界のことがそのまま書かれていれば、それは本当のことが書かれていると言えるのであろうか。

そしてまた、わたしの十年前の体験は本当のことと言えることなのだろうか。

さらにまた、今現在の体験はノンフィクションの本当のことと言えることなのだろうか。

(5月15日 2004年掲示板) (加筆して新掲示板記入可) (草稿要転記)

もし、それが本当のことであるなら、いまのわたしにとっては小説の世界の出来事も本当のことと言えはしないだろうか。

(掲示板記入予定)

■ 曾根さんへの4つの知識

■ <時空>

もしかして、後になれば、現在進行形でそこに存在していなくとも<本当のこと>となることがあるのではないだろうか。

後になると、事実生命が吹き込まれるということはないだろうか。

昔のことを思い起こしたところの中の体験の方が本当のこととなったりはしないだろうか。

誰もが、思い出の中で二度目の人生を生きる。

そして、その人生をもっとすばらしく生きることができたのではないかと思い、また、その時間にさかのぼって生きてみることはないだろうか。

そのようなわたしもいるのではないだろうか。

これは、たわごとだろうか、真実だろうか。

(加筆して新掲示板記入可)

■日の出

早起きして空が明るくなるのを見た時、お日様が昇ってきたというウソの方が、地球が自転して太陽が見えたという本当よりもわたしにとってはしっくりする。

(掲示板記入予定)

宇宙旅行士になったら、地球の自転から太陽の出を感じるようになるのであろうか。

4月19日、20日、22日、5月14日、18日、7月10日 2004年、6月3日 2012年

●鏡とわたし～＜存在＞

鏡にうつっているわたしの顔を見る。

はたしてそれは、わたしを見ているのだろうか。

それとも、わたしの顔といわれるものを見ているのだろうか。

鏡にうつっているわたしの顔をみるとき、わたしはどこにいたのであろうか。

鏡の中であらうか。あるいは、外であらうか。あるいは、両方であらうか。あるいは、いないのであらうか。

(4月22日 2004年掲示板)

●ヒーリング

過去、何時間でも。

現在、一瞬間だけ。

未来、実現される前に。

(掲示板記入予定)

●エネルギー

エネルギーは使用法により、浪費されることもあれば、蓄積されることもある。

■創造

穴を掘らせて、また、その穴に土を埋めさせるという刑罰。

非創造的な作業は人からエネルギーを抜き取る。

逆に、創造的行為は人にエネルギーを注ぎこむ。
ただし、何が創造であるかは人によってずいぶん違うようである。
(加筆して掲示板記入予定)

同じような生き方をしているのではないだろうか。

変えることはグルジェフのいうところの意識的な労働であろうか。



エネルギーを入れるためには、形が必要である。法則である。
好きであることが必要である。

ただし、身体が好きなこと、感情が好きなこと、習慣が好きなこと、自我が好きなこと、それぞれ違う。

●気功体操

自由な動きの気功体操
自由に至るまでの型
わたしが考案した型
音楽の動きの型
イメージを用いた型

●集中力

昔読んだ心理学の本によると、猫にネズミを見せるとその他のすべての情報はシャットアウトされ、猫にはネズミだけしか見えなくなるという。
母宅の駄犬ハッピーは母が留守にする時にわが家にくるが、その時には「おやつ」持参である。おやつがない時には私に愛想をふりまくが、おやつがある時には完全無視で、食べ終わってからあいさつにくる。まあ、犬だから仕方がないかと思っているが、イエスも同じような目で我々を見ているようである。

「だから、言うておくが、何を食べようか何を飲もうかと命のことで、何を着ようかと体のことで思い悩んではならない。命は食べ物よりもたいせつであり、体は衣服よりもたいせつではないか。」

わたしは命や体を見たことがあるのであろうか。
(加筆して新掲示板記入可)

4月20日、29日 2004年

●自己責任

私に出来ないことをする。

その出来ないことを私が好むかどうかは別問題で、私に出来ないことをする人はよく見た方がよい。

私では出来ない経験を、世界を見せてくれるのだから。

狭い自己責任の範囲で生き、誰にも非難されずに生きていく。それがすばらしい世界であると思うのであれば、そのように生きればよい。だが、世界はもっと大きいし、人間ももっと大きい。いつかは、誰にも出来ない経験を他人に見せてあげたい。いま生きている間は唾棄すべき世界を。

(4月22日 2004年掲示板)

■自己責任②

自己責任？

他人の言うがままに生き、他人に責任をおいかぶせるよりも、自己の思うがままに生き、自己責任を負う方がはるかにわたし好みである。

自己で責任をとれなくて、他人に迷惑をかける？

そんなに迷惑がかかったのだろうか？

(4月23日 2004年掲示板)

■自己責任③

もちろん、すべて自己で責任を取らざるをえない。

これはあらゆる人が結局は自己で責任を負う。

他人を生きようが、自分を生きようが。

他人を非難しようが、他人を賞賛しようが。

自分の人生のすべての責任を負う。

(4月24日 2004年掲示板)

■わが家の火事

わたしはろくでなしの三人が税金を30億円浪費したと怒るよりも、

わたしは車内で隣のおっさんの足がわたしにひっついてくるのに腹を立てる自分に千倍もの怒りを感じる。

わたしは自分に対して腹立たしいことが山ほどあり、とても他人の所業に関わっている暇などない。

(5月14日 2004年掲示板)

■バッシング

人をののしったことなどもう忘れてしまった。
もうそれはニュースではないからだ。
もうそれは井戸端会議ではないからだ。
ようするに、忘れてしまう程度にしかののしらなかった、ということだ。
(掲示板記入予定)

4月21日、22日 2004年

●叫び

高円寺の家での投石被害～助けを求める叫び

●反復

読書法～彩の映画鑑賞の反復

●神聖なる二分法

他者に尊敬・敬意・畏敬を抱くこと。
尊敬・敬意・畏敬を抱くのは言葉に対してであること。
矛盾するが、両方とも真実である。

●言葉

その言葉が私の言葉になるとき、言葉は変質する。
言葉の力。

■

言葉と人とを同一化する愚。
では、人とは何であろうか。
言葉が出て来るまでの行為すべてが人なのであろうか。
もし、そうだとしたら言葉はどのような条件で、どのような形で出来てくるのであろうか。

4月22日、24日、25日、26日 2004年

●感謝と創造と存在

一度でも感謝できれば人生は変わる。
なぜなら、感謝は創造力の源だからである。
しかし、感謝することは一度としてできない。

なぜなら、感謝するとは存在することだからである。

(掲示板記入済み)

■存在と非存在

出来ることと出来ないことがあり、出来ないことというのが存在である。

出来ることには存在と非存在とがある。

非存在なるがゆえに出来ること。

存在であるがゆえに出来ることとがある。

では、わたしにとって、

非存在であるがゆえに出来ること

存在であるゆえに出来ること

存在であるがゆえに出来ないこと

とは、それぞれ何であるか。

■タナボタ

昔の感謝はタナボタであった。では、このボタモチはどういう原因で落っこちてきたのだろうか。

昔の感謝はタナボタであった。

昔、感謝は創り出された。

今、感謝を創り出そうとしている。

前者は贈り物であり、後者は人間である。

(下記書き込みの後に、掲示板記入予定)

■感謝と創造

感謝が創造であるということは、(望むもの、望むことが実現される、実現されているということを含んだ意味での、そしてそれらをはるかに超えた) 充足感が内側に生じているからだ。

(加筆して掲示板記入予定)

今の肯定、行為への愛

「神との対話 2 巻」40 ページ前後参照

●意識のある人生～呼吸法

もしかして、日常の呼吸も心身に適した呼吸法ではないのかもしれない。

日常の呼吸もまたゆっくりとした大きな呼吸であるべきなのかもしれない。
怒ると呼吸が速くなるように、われわれの日常生活のありようが理想の呼吸よりも速くしてしまっているのかもしれない。

(4月27日 2004年掲示板)

4月23日 2004年

●初心者

わたしが当初得たヒーリング能力は、「弓と禅」との剣道でいうところの初心者、あるいは子どもの絵ということなのだろうか。

その初心者の力とは何なのであろうか。

4月24日、7月30日 2004年、8月24日 2011年、6月4日 2012年

●自由

「自由が与えられている」ということと「自由である」ということとは異なる。もちろん自由が与えられているということは人生で重要な条件ではある。しかし、自由が与えられていなくとも、自由であることはできる。だが現実には、自由が与えられていても不自由であるというのが人間である。なぜなら自由であるためにはわたしの意志が存在しなければならぬし、いつもわたしの意志が存在するためにはいつもわたしの意識があることが必要条件だからである。わたしの意識が常にあり、わたしの意志が常にあり、わたしはわたしが原因である、わたしはわたしが始まりである、という人間に現実にお目にかかることはできない。だから皆が自由であるための外的条件「自由が与えられている」ということに腐心し、いま自由であっても、その自由の範囲で己の道を実現するのではなく、もっと余暇時間を作り出すための仕事に人生を浪費する。自由の女神は外に建てるだけでなく、内側にも建てる必要があり、それが真の自由である。

(5月8日 2004年掲示板) (新掲示板記入可)

(加筆して草稿へ)

■エネルギー

エネルギーは使用すればするほど湧出してくるが、使用しなければ、やがて凝り固まって使用できなくなる。

(「グルジェフ・弟子たちに語る」ノート5ページ)

■自由

自由は使用すればするほど湧出してくるが、使用しなければ、やがて凝り固まって使用できなくなってしまう。

自由を動かすことである。

●自己意識

自己意識にとってのエネルギーは呼吸かもしれない。

速い呼吸でなく、ゆっくりとした呼吸である。

呼吸と時空との関連性があるかもしれない。

4月26日、28日、5月1日、7月27日 2004年

●二つの自由

明日の読書会が中止になり少しほっとしている。

それは嫌なことをしなくてすむというのではなく、あらかじめ一日のことが決まっていることが嫌だからだ。

そして、普通用いられる「自由」という意味合いはこのような意味で使われる。

今日これから何をしてもいい、という意味で自由という言葉は使われる。

しかし考えてみるに、わたしが用いる「わたしが原因である」という意味での「自由」ということでは、わたしが読書会の予定がなくなり、ほっとしているというのは矛盾である。なぜなら、わたしがそれを主催し、意志したからであり、わたしが自らが原因となっている行いだからである。

(加筆して掲示板記入予定)

●原因（時空）

映画を見ていると人間が動いているように見えるが、実はフィルムが動いて人間が動いているように見えるのである。

同じように、人生においては出来事が生じているように見えるが、実は人間が出来事を生じさせているのである。

映画ではフィルムは自由に動けることはできるが、登場人物は自由に動くことはできない。人生においては出来事は自由に動くことはできないが、登場人物は自由に動くことができる。

しかし、人生において登場人物が自由に動くためには、自由に動けることを知っていて、なおかつ意志することが必要となる。

自由に動くことができれば、たとえ（他者や集団意識が原因となっている）出来事の大波が襲ってきても、出来事に呑みこまれることはないし、出来事におぼれてしまうこともない。

でもそうでなければ、すなわち登場人物であるわたしが自由でなければ、人生は出来事が動いていて、わたしは偶然幸運であったり、偶然不運であったりするものだと思うかもしれない。

(5月1日 2004年掲示板)

(草稿「時空」へ記入)

●シンクロシティ

シンクロシティとは夜空の星の配置のように、人と事象との配置である。

事象が人に吸い寄せられたのか、人が事象に吸い寄せられたのかは何とも言いがたい。

何とも言いがたいように、しるしが現れる。

人間が事象に影響を与えるのか、事象が人間に影響を与えるのか、これはシンクロシティの場合は何とも言いがたいところがある。

この意味で、身体の動きもそうである。

わたしが身体を動かしているのであろうか、身体がわたしを動かしているのであろうか。

これは相当判じ難いことである。

実は、もしかしたら身体がわたしを動かしていたのではないかということにわたしは死ぬ時に知る。

事象がわたしに影響を与える場合、あるいは、身体がわたしに影響を与える場合、共に

身体がわたしを動かしている場合でも、わたしは「意味のある一致」をしているのだろうか。

(加筆して新掲示板記入予定)

●意識のある人生

自己想起は意識そのものを出すのではなく、対象のある意識を出すようにする。

(このことは瞑想において、蓮の花や死体をイメージするのと似ている。)

ヒーラーである眼

一体である眼

細く静かな声

求める、叩く、続ける、

●自己想起～視点

漫画「三丁目の夕日」を見ながら思ったことであるが、あるひとコマの絵を少し斜め上の視点から描かれてある。そうすると、世界がまるで違って見えてくる。

同じようにして、人生も見る視点、見る方向を、見る時間（過去・未来・現在）を変えて見てみる。

4月28日2004年

●成長

30年間のことを思い出すと、闇の中を手さぐりで歩いていたことを今自覚できる。今現在もまた、30年後には闇の中で歩いていた、ときっと自覚できるであろう。

●旗色

国の旗が赤であれば、世間の旗が赤であれば、自宅の旗が赤であれば、わたしは赤になりやすい。白ならば白色の旗に。黒ならば黒色の旗になりやすい。だが、時代、地域、地球という環境、人間種の高塚という遺伝子を超えた旗色を鮮明にしたい。

●音楽

昨日駅頭売りの「音楽CD」を何枚か買ってきて聞いているが、昔の音楽を聞いていると、その時代に生きていなくとも何か時代の雰囲気伝わってくるから不思議である。

4月29日、5月1日、3日、9日2004年

●意識のある人生～為すための条件

条件が変わって、何かを為すのではなく、何かを為して、条件が変わる。条件は為すための原因ではなく、結果である。

この意味で、条件というものはこの世界に存在しない。

為すために存在しなければならないのは、<これはわたしである>、<わたしはこうする>、<わたしは始まりである>という、このような<わたし>だけである。

(5月4日2004年掲示板)(新掲示板記入可)

■ 為すこと

今の人生をいくら肯定しようとしても、今の人生に満足していなければ、満足させるように肯定すること、満足させるように為すことはできない。

肯定しようとしても、為そうとしても何も変えることはできない。

満足するためには、そのように存在するしかない。

(掲示板記入予定)

● ふり

犬のレディが知らないふりをして遊んでいたように、神もまた知らないふりをして遊ぶというのだろうか。

4月30日 2004年

● 人間

どのような才能を持った人間として生まれたか、どのような恵まれた境遇で生まれたかは、ゲームでいうところのルールに過ぎない。

そのようなルールで、そのような才能で、そのような境遇で何を表現して生きていくのか、これだけが人間である、すなわち、そのことだけがその人の知識となり、存在となる。

(掲示板記入予定)

★5月 2004年

5月2日 2004年

● ノート

真っ白な時があってもよい。時には休養が必要であり、また白は白なりの、「なし」は「なし」なりの意味があるからである。

● 為す

治す 治る

為す 成る

創り出す 創り出される

前者というのはありうるのだろうか。

● 所有

こうでありたいことに嘘をついてはならない。
自我への嘘も、魂への嘘も。

5月3日、4日、6日、19日、6月11日、12日 2004年、6月6日 2012年

●意識のある人生～イラク人虐待事件・殴打

わたしは、今この人を殴るために大人になったのだろうか。

わたしは、今このことをするために人間になったのだろうか。

(5月3日 2004年掲示板)

●天網

「天網恢恢疎にして漏らさず」という。漏らさないのは悪事の話であるが、実は善事の話でもある。

この世界は、悪しろ、善にしろ、すべては天の網にかかるようになっている。ただし、その網は人間が考える賞罰ということではなく、すべてをある方向へと変ずる網である。ある方向とは、創造者の意志であり、「真善美」であり、それは愛と呼ばれたり、仏の心と呼ばれたりする意志である。

(5月6日 2004年掲示板)

■グルジェフの言う「宇宙の負債」

●気

スプーンに入れる。

人間に入れる。

植物に入れる。

幽体に入れる。

空間に入れる。

時間に入れる。

そして、最後はどうなるのか。

入れるのではなく、自ら発するだけであろうか。

(6月6日 2004年掲示板)

■スプーンに入れる

平成元年のことだから、もう16年前になるのか。12月に父が間質性肺炎の再発で危篤状態になり、あわてて病院にかけつけると、いとこの高塚光さんがいて、それが彼との出会い

であった。彼は父の兄の長男で、最近不可思議な治癒能力に目覚めたということが親せき中に知れ渡っていて、この日仕事にも関わらずお越しにいたっていた（若い方はご存知ないかもしれないが、いとこの光氏はこの数ヵ月後テレビに出たり映画が作られたりしてヒーラーの有名人となった。）。

初めてお会いして簡単なあいさつした後、最近不可思議な能力が出てきたということで、彼が見せてくれたのが「鍵曲げ」であった。軽くふれるとステンレス製の鍵がくじりと曲がる。さらにすごいのはまたきれいに元に戻してしまうことであった。（以降いろいろな方にお会いして、スプーン曲げ、鍵曲げができる方にもずいぶんお会いしたが、完璧に元に戻せる人には会ったことはなかった。）東洋医学では、驚と笑とはワンセットになっているが、その意味が初めて分かった。驚くと笑い始めるのである。何がおかしいのか分からないが、鍵を曲げたり戻したりするのを見るとわたしは笑い始めてしまうのであった。

彼は病院に泊りがけで父親に「気」を送ってくださったが、中国へ海外出張せざるをえないので、向こうから遠隔で気を送るからわたしが受け手になって父に手をかざしておいてもらいたいと言う。別に何も考えずに手をかざすだけでいいのだが、スプーン曲げぐらいはできた方がいいだろうということで、そのやり方を教えてくれた。それは「右の額からスプーンに白い光が入っていくようにイメージする」という方法であった。その時は深夜で売店が終了し、スプーンを手に入れることができなく鍵でやってみたがうまくいかなかった。「いきなり、鍵ではちょっと無理だったかもしれない」ということで、翌朝売店で買ったスプーンでやってみたところ、すぐ出来るようになった。

わたしの場合、「白い光を入れる」という感じよりも、一度曲がったので、次もまた曲がるであろうという確信の方が大きかったように思う。この確信を何と呼ぶのかはとても難しい。グルジェフならば、それを<知識>と呼ぶであろう。この<知識>とはく曲がることを知っている>という<知識>である。この<知識>があればスプーンは曲がる。また、この<知識>はく曲がることを知らなくなる>という側面を持っている。この意味でこの<知識>は失われるところが通常の知識とは異なる。

このようなく<知識>は他者から伝えることはできずに、自ら得るしかない。<知識>は自己伝授によってのみ得ることできる。（ただし、別の話として、<知識>を自己伝授する準備がととのったときにはその<知識>を伝えるものと関わりができる。）

スプーン曲げができるようになってからは鍵曲げもできるようになったし、スプーンも真横に曲がるぐらいよく曲がった。しかし、光さんから「毎日やってないとできなくなるよ」と言われたように、やらなくなってしまってその力、<知識>は消えうせてしまった。曲がるのが<当たり前の世界>から曲がらないのが<当たり前の世界>に戻ってきてしまった。この世界にはいろいろな<当たり前の世界>が同居している。

なお、父は光氏と家族の看病もむなしく、数日後に亡くなった…。まあ、しかし、わたしは看病もむなしくとは全く思っていない。父の死によってとても多くのものをわたしに残してくれたことを<知っている>からである。

(6月12日 2004年掲示板)

■モノに入れる②

時計とのシンクロ

■人間に入れる

5月6日、10日、11日、13日、14日、6月19日、7月11日、30日、8月1日 2004年、
6月6日 2012年

●二つの創造

疑わないということ＝同じことを選択しつづける

創り出されたこと 創り出したこと

●意識のある人生～自他

他者を喜ばせること。

他者の望むようにさせてあげること。

●意識のある人生～自己想起

魂にふれる。

仏にふれる。

神にふれる。

そして、わたしのしたいことにふれる。

あらゆる時間に。

あらゆる空間で。

(5月10日 2004年掲示板)

●光・仮想空間・表現

わたしが見るのは星ではなく、星から発せられる光である。

あるいは、星にふれた光である。

わたしが見せるのはわたしの身体でなく、わたしにふれた光である。

あるいは、わたしから発した光である。

その光はわたしが何をしたかを見せる。
宇宙中を駆けめぐりながら。
それはわたしであると。(加筆して新掲示板記入可)
(5月16日2004年掲示板)
(草稿「宇宙」に追加予定)

■所有

わたしは光ではない、わたしは身体ではない。
わたしとは、わたしがどのように見えたかというそのありようであり、身体をどのように使ったかという行為である。
(加筆して掲示板記入予定)

●放棄(時空)

夢の中で放棄したものは、放棄したままであり、目覚めによって救われることはない。
たとえ報われなくとも、たとえ成し遂げられなくとも、救われるのは夢の中での最後の瞬間だけである。
もちろん、この世界の出来事も同じである。
この世界にいるときにだけできることがあり、この世界にいるときにだけ救えることがある。
(7月30日2004年掲示板)

■意識のある人生

夢の中で困って寝汗をかいて目覚める。夢でよかったと思うが、夢で解決つかなかったことは、夢でまたくり返される。なぜなら、そのことは目覚めて解決したことではないからである。
同じように、この世界で解決できなかったことは、死んで解決するということにはならない。

この世界でだけしか解決できないこと、この世界でだけしか達成できないことがある。

まずは、この世界での人生の課題を知り、日々明確に自覚することである。

(6月6日2012年新掲示板)

■死

夢の中でどうしようもない危機状態に遭遇すると夢から目覚めて夢の中にいなくなるのと

同様に、危機状態のときに現世から自ら死んで目覚めてみることを誰が否定できようか。

(5月10日 2004年掲示板)

だが、夢から目覚めてしまえば、現世から目覚めてしまえば、もう少し夢見てもよかったかなあ、と残念に思うかもしれない。

終わってしまえば、悪夢も楽しめるから不思議である。

(5月11日 2004年掲示板)

■意識のある死

無意識のうちに亡くなるより、意識して死ぬ方が人間らしくてよいと思っている。

ただし、意識して生きてきたようにして、意識して死ぬということである。

ただ、我々はまだ夢から目覚めるようにして死ぬ方がよいのかもしれない。

わたしは無意識に生きているので、無意識に死んでいくしかないのかもしれない。

<意識して目が覚める、意識して死ぬ>

このことのためには、しなければならないことが数多くある。

(5月13日 2004年掲示板) (加筆して新掲示板記入可)

■意識のある死～<身体>

意識のある死とは身体のコントロールのことである。

身体を使えるようにコントロールするように、身体を使わないようにコントロールするということである。

生きていたい時には死なないように身体をコントロールし、生きていたくない時には身体から離れていくというのが、理想の生き方、死に方である。

だが、われわれは身体のコントロールができないし、その意志もないので、生きている時には、死んでいくように暮らし、死んでいく時には、生きているように暮らしたがる。

(5月25日 2004年掲示板) (草稿要転記)

●意識のある人生

ゴールとしての死。

ゴールとしての目標。(30年後、300年後、3万年後)

■道標

誰も3万年後の人生など考えてもみない。

30年後の死など考えてみないように。

だが、それらの道しるべは、ほんとうは今現在よく見ておくべきしるしかもしれない。

(5月17日 2004年掲示板)

■<プロセス><意志>

明日の出来事は今日思い描くようにはならない。

30年後の出来事であれば、もっと想像もつかない。

では、3万年後では？

膨大なスパンでは、偉大な変化が生じる。

■<時空>

わたしは何年ぐらいこの世界に存在しているのだろうか。

そして、これから何年ぐらいこの世界に存在するのであろうか。

もしかして今は、赤ん坊のような年齢かもしれない…。

否、そういうことではなく、時間があるのではなく、選択だけがあるのかもしれない。

年齢があるのではなく、卑小な選択と崇高な選択という意志だけがあるのかもしれない。

選択がなければ、百万年の時間もないに等しい。

選択があれば、一瞬もまた永遠である。

(8月1日 2004年掲示板) (加筆して新掲示板記入可)

■<選択>

死体は朽ちる。よく知っていることだ。この世界とはそういうことであろう。

そういう面では。

どういうことかという、元に戻るということである。

リサイクルの側面がある。

宇宙はエントロピー増大と化しているという論者とエントロピー減少しているという論者がいると読んだことがあるが、わたしはリサイクル派である。

だが、逆の面もある。成長という側面である。

リサイクルされつつ成長しているという側面もまたある。

たとえば、美しい選択がある。この側面では確実に成長している。

これは果たして残るのであろうか。

(新掲示板記入可)

●感謝のある捨て方

感謝できる捨て方とはどのような捨て方であろうか。

使い切ったもの

使い切るとはどういうことであろうか。

人生を使い切るとは？

シュタイナーの生き方

残すもの、残さないもの

残すもの

ノート、どのようなインスピレーションも無視しない。

どのようなメッセージも無視しない。

最も嫌なものがわたしの中で残さなければいけないものかもしれない。

「弓と禪」

～師以外に使いこなせないもの。

師が使用していたものは師以外に使いこなすことはできない。

一流の料理人が用いる包丁と三流のアルバイト料理人が用いる包丁の違い

作る料理だけではなく、使う道具にも違いがある。

●ギブあんどテイク

受けとる喜びがある。

これは受けとってみなければ分からない。

モノであれ、愛情であれ、受けとったことがなければ、大きなキズとして残る。

■分(ぶん)

いつでも手離せるモノ以外のモノを持っていると、トリモチにくっついたセミのように、わたしはモノにくっついたままである。

モノを所有するには、分がある。分をすぎた所有を行なうと、モノにとりつかれる。

いま持っているモノの何を手離すことができるか、ひとつひとつ考えてみるとよい。
手離すことができるモノが、わたしが所有するにふさわしいモノである。

(6月19日2004年掲示板)(新掲示板記入可)(加筆して草稿要転記)

5月8日2004年、11月17日、20日、21日2010年、6月6日、11日2012年

●意識のある人生～<選択><所有><クリア>

同じ少量の荷物しか持たない人間であっても、
モノを失ってしまったことを「選択させられた」ホームレスと
モノを持たないということを「意識的に選択した」托鉢僧とでは
まるで見ている世界が違う。

当たり前の話である。

当たり前の話であるが、もしかしたら気づかずに私もまた多くの面で「選択させられた
世界」にがんじがらめになっているかもしれない。

モノを失い、またモノを手にしようとしているホームレス氏のようにである。

もしも私が「選択させられたモノ、食事、住まい、プライド、常識」、等々を意識的に手放
してみれば、違う世界が見えてくるのかもしれない。

(11月21日2010年掲示板)(6月11日2012年新掲示板)(加筆して教室資料「所有」の
項要転記)

■創造・わたし

意識的に選択すれば、世界は変わる。
なぜなら、その時、世界はわたしになるからである。
それまでは、世界はわたしではない。

(新掲示板記入可)

■創造

粘土細工のような世界のその実感を手にすること。その触感。。ただし、この触感は将来
変わるかもしれないが。

●「山道」～<自他><慢心>

山道では、下の方から登ってきている人を間違っているとは言わない。逆に、上の方を登
っている人を間違っているとも言わない。

しかし、人生では常にそのように言う。

上の方をを登っている人は下を登ってきた経験を忘れていないので、下の方をを登ってきている人を温かい目で見ることができない。

下の方を登っている人はどこに登ろうとしているのか知らないで、上の方を登っている人を非現実的だとののしる。

必要なことは、上を登っていると思う人は、下の道は私が通った道であると知ることである。下を上っていると思う人は——そのように思う人はほとんどいないので、ほとんどすべての人にいえることは、そんなことはありえないと思うことは、今のわたしが知らないことがあり、今の道が知らない上へとつづく道であるということである。

(新掲示板記入可)

下の道は今の道に続いている道であると知ることである。

下を歩いていると思う人は、どこに登ろうとしているかを定めることである。

そして、たぶん二人にいえることは、下を歩いていることを知ることである。

(11月22日2010年掲示板)(加筆して新掲示板記入可)

●身体

身体に耳をかたむける。

飽食を好んでいる身体と拒んでいる身体とがある。

あるいは、前者は身体ではないのであろうか？

疲れている身体とさぼりたがる身体とがいる。

●自他

男女間では敬意という気持ちがなくなるとその関係は終わりである。

自他間でも同様であるが、自他の場合はなくなるというよりも最初からない方が多いかもしれない。

あるいは、男女間でも初めから関係がない関係というのが多いかもしれない。

■イエスの「あなたがたもわたしと同じである」という敬意の視点が欠けている。

5月9日2040年、11月21日2010年、8月24日2011年

●時空

多層の時間

A○ → ○A´ → ○A → ○ A´´

A、A´、A´´も仮想であるがゆえ

●瞑想のエネルギー

瞑想～他と同じようにエネルギーを注ぎこむこと

↳どのようなエネルギーか

気功治療のエネルギーとはどのようなエネルギーか。

5月10日、11日、14日、15日 2004年

●不憎

汝の隣人を愛せよ、と言われたからといって、愛することはできない。

愛するふりをすることはできても、愛することはできない。

だが、愛することができなくとも、少なくとも、憎まずにいることはできる。

それは、わたしがわたしの自由を駆使して人生を送ること。

そして、相手もまた相手の自由を駆使して人生を送っていることを見ることができること。

それもまた人生である、と見ることができること。

自分に自由を与えることができ、そのことを知っていて、

相手に自由を与えることができ、そのことを知っている。

そうすれば、憎まずにすむ。

相手も自分も。

(5月11日 2004年掲示板)

■迷惑

よく言われることは、他人に迷惑をかけなければ何をやってもいいという。

しかし、さらに過激に「他人に迷惑をかけても何をやってもいい」というのがわたしの持論である。

迷惑というのはかなり仮装的なところがある。我々が迷惑を受けるというのは、一種の仮装舞踏会のようなもので、迷惑なふりをしているのではないかということである。ふりも本気ですると、本当に迷惑だと思ってしまう。

(5月15日 2004年掲示板)

■迷惑

分かりやすい迷惑と分かりにくい迷惑とがある。

河合隼雄が語る例は分かりにくい迷惑である。

～「カウンセリングを語る」上巻

ただ、通常の迷惑は分かりやすい迷惑で、こちらの方がはるかに罪が軽そうである。

■

死期を知っていたとしても、それを言わないとしたら、それは知っていると言えるのか。
空中浮揚は見世物ではないと言って、見せた人。

●世界

自己想起としての勤務時間

外的世界としての勤務時間

●似顔絵

似顔絵がわたしに似ているか否かでなく、わたしが似顔絵に似ているのか否か、という問題のようだ。

5月11日 2004年

●人間の自由～「デミアン」

5月13日、14日、15日、19日 2004年、6月11日 2012年

●モノの意志

モノにはモノの生命というか、元型というか、意図というか、そのような何かがあるに違いないと思っている。

この現代地球上でのモノの扱いを見ていると、いつかこの<モノの生命>が反乱を起こすのではないかと危惧している。ちょうど漫画「火の鳥」で人間の忠実なロボットであるロビタが反乱を起こしたようにである。

(7月5日 2004年掲示板)

■

昔の人工物は自然を利用し、自然を生かしていた。

もちろん、今の人工物も自然を利用しているのだが、自然の造化としての美しさはほとんどが人工的な醜悪さに隠されてしまっている。

現代の人工物は使えば使い込むほどよくなるというのでなく、使えば捨て去るしかないようなモノである。

自然のモノには生まれたてのよさ、成長後のよさ、終焉後のよさ、それぞれのよさがある。

昔の宇宙船の中は美しくないが、それよりはるか以前の木の机は美しい。

■配慮

もしかして、自然界にあるモノは創造者がいつも気をかけているのだろうか。

いつも生き生きとしている。

人間が作りだしたモノも同様に人間が気をかけてあげる必要がある。

100円ショップの道具でもいつもこころを配れば、いつまでも美しくあるのかもしれない。

■道具としてのモノ

人生は絵を描いているようなものである。

描いているときには気づかないよさが、描き終わってあらためて見直すと、その良さが分かることがある。

わたしは絵を描いたのであり、絵がわたしではない。

<わたしは絵を描く>

5月14日、15日、8月1日 2004年

●意識のある人生～諍い

相手とわたしとどちらが正しいのかということではなく、

相手が何を望んでいるのか。

そして、

わたしは相手の望みの手助けできるのかどうか。

あるいは、

わたしは相手の望みを打ち砕きたいのか。

そして、そのことはわたしを表現しているのか。

(加筆して掲示板記入予定)

5月17日、18日、19日、8月1日 2004年、6月11日 2012年

●フィルター～<わたし>

時というフィルター、

場所というフィルター、

私というフィルターがある。

これらのフィルターを通じてわたしは世界を見る。
あるいは、見ない。

ただ、このフィルターの中で変えることができるフィルターがある。
それは、わたしというフィルターである。
このフィルターを変えたならば、これはもうフィルターと呼ぶには適さない。

これは、フィルターでなく、人間と呼ばれる。
これは、フィルターでなく、〈わたし〉と呼ばれる。
(5月18日 2004年掲示板) (改変再掲予定)

●ルーティンとしての仕事

この仕事をワークとするにはどのようにすればいいのだろうか。

シュタイナーは姿勢、こころ構えのことを述べている。

<引用>

????

今の仕事は自分の存在とリンクしている。
自分の何と関係があるのか。
自分の仕事の意味とは何か。

旅をしている時のように仕事をする。

自己想起としての仕事。

●〈わたし (自己研究) 〉

誰もが本心をなかなか語りたがらない。というか、知らない。

本心は週刊誌や新聞の活字によって隠されてしまっていて、活字が自分の本心であると思
いこんでしまうからである。

あるいは、プライドや虚栄心、嫉妬に隠されてしまっていて、それらにまみれた言葉を本
心であると思いきこんでしまうからである。

活字は活字であり、虚栄は虚栄であり、嫉妬は嫉妬である。

しかし、これらの覆いをまとった言葉がいったんわたしの口から発せられると、それは活字でも、虚栄でも、嫉妬でもないかのように思いこんでしまう。

わたしの言葉、わたしの本心は何か、逆の結論かもしれないし、もしかしたら沈黙かもしれない。

わたしにまとわりついている覆いをよく見てみることである。

(新掲示板記入可)

5月18日、8月1日、13日、14日、9月24日、26日 2004年、6月11日 2012年

● <エネルギー>

「エネルギー⇄物質」のように、

「エネルギー⇄行為」という関係があるのではないか。

(8月14日 2004年掲示板)

物質～エントロピー増大→エネルギーの拡散

物質～エントロピー減少→エネルギーの囲い込み

行為～エントロピー増大→エネルギーの拡散

行為～エントロピー減少→エネルギーの囲い込み

意識のある行為によってエントロピー減少となる(ただし、8時間銃をかまえて身動きしない山賊の話もある)

世界3の構築

行為は通常エネルギーを消費すると考えられていて、確かにそのような行為が大部分である。しかし、なかには行為がエネルギーへと変じ、エネルギーが生じる行為というものもあるのではないだろうか。ちょうど、物質がエネルギーに変じると莫大なエネルギーが生じるように。聞きかじりであるが、ペーパー1枚を完全にエネルギーに変えることができれば、人類の1年分のエネルギーがまかなえるという。物質のペーパー1枚をエネルギー変ずるような、ペーパー1枚の行為とは一体どのような行為であろうか。

行為は通常エネルギーを消費すると考えられていて、確かにそのような行為が大部分である。しかし、なかには行為がエネルギーを生じさせたり、行為がエネルギーを自己のうちに蓄積する行為というものもあるのではないだろうか。ちょうど、物質がエネルギーと等価で、物質がエネルギーに変じると莫大なエネルギーが生じるように、物質化される行為、エネルギー化される行為というのがあり、その行為がエネルギー化されるときには莫大な

エネルギーが生じるという事態があるのではないだろうか。聞きかじりであるが、ペーパー1枚を完全にエネルギーに変えることができれば、人類の1年分のエネルギーがまかなえるという。物質のペーパー1枚を変ずるような、ペーパー1枚の行為、そのような行為があるとしたら、それは一体どのような行為なのであろうか。

グルジェフはこのような行為を超努力と呼んだ。

これは意識のある行為である。・・・意識とエネルギーの問題。

たとえば、無意味な石積み、無意味な労働など。

5月19日2004年、6月11日、12日2012年

●わたし～阻害＜動詞＞

個としてのわたしが阻害されるのではなく、行為としてのわたしが阻害される時に、人は阻害されたと感じる。

このことが人間存在を物語っている。人間とは個ではなく、行為であるということ。

●＜わたし＞＜動詞＞

死に際して、

この世界で「わたし」と考えていたものはすべてこの世界に置いていかざるをえない。

この世界で＜わたし＞とは考えていなかったものだけを携えて、わたしは旅立つ。

人生とはこの世界だけであると思うのであれば、「わたし」と共に生きればよい。

しかし、この世界でもあの世界でも生きようと思うのであれば、「わたし」だけでなく、＜わたし＞と共に生きることである。

では、＜わたし＞とは何か。

それは、動詞であり、芸術である。

以下、引用。

「私は地球で生きている。
けれども私が何者か、今も自分でわからない。

カテゴリーなんかでないことは、
それでもちゃんと知っている。
私は名詞なんかじゃない。
どうやら私は動詞のようだ。
進化していくプロセスだ。
宇宙の積分関数だ。」

(バックミンスターフラー著「宇宙船地球号 操縦マニュアル」184 ページ ちくま学芸文庫)

ゲーテ「芸術家礼賛」

高貴な人間が何百年にもわたって
自らに等しいものに働きかける。
善き人間が目指すものは、
人生という狭い空間の中では到達できない。
それゆえに人間は死ののちも生きて
生きていたときと同じように働く。
善き行い、美しい言葉を求めて、死ぬほど努力したように、
いまや死ぬことなく努力する。
芸術家よ、君は限りない時を貫いて生きる。
不死を楽しむがよい。

(5月20日2004年掲示板) (6月12日2012年新掲示)

●意識のある人生～形と存在

仏陀、イエスが残したものは書物ではなく、存在であり、行為であり、選択である。
文字に残らなくとも、形に残らなくとも、偉大な人間の足跡(そくせき)は二千年後にも
大きな力を及ぼす。

ところで、彼らを雲上人として祭り上げるのでなく、われわれひとりひとりの後々まで世
界に残る足跡とは一体何であろうか。

どのような小さなアシアトでも残るものは残る。

今日一日、残るものとしてのアシアトを何か標したであろうか。

(5月19日2004年掲示板)

●<意識のある人生><感情>

最も好きな人を最も嫌いになることがある。

好きになるころの動き方と嫌いになるころの動き方が同じであるからだ。

このようなころの動き方で人生を過ごそうと思うのであれば、最も嫌いな人を最も好きになるように変えてみれば人生は有意義になる。

それは、嫌いになることよりも好きになることがよいという意味ではなく、嫌いな人を好きになるころの働かせ方がよいという意味である。この意味では、最も好きな人を最も嫌ってみることも同じように有意義である。

そんなことはできないか。

だが、このころの動き方はとても排他的なので、逆向きに水を流すことは難しいかもしれない。

エントリピー減少の方向。

感情のコントロールの問題。

意識のある人生の問題。

(5月24日 2004年掲示板) (加筆して要再掲)

●意識のある人生～＜感情＞という道しるべ

何かをする前の感情でなく、何かをした後の感情を人生の道しるべとする。

何かをする前の感情は、わたしがこれまで身につけてきたメルクマールとしての感情である。そのような感情を元にして行動し、気持ちよければ、何も問題はない。

しかし、何かをした後に気分が悪くなれば、その行為は＜これからのわたし＞にとって無意味な行為である。

何かをする前の感情ではなく、何かをした後の感情を人生の道しるべとすれば、何かをした後の感情をする前に持つことができれば、人生は＜わたしの思い＞通りとなる。

(5月21日 2004年掲示板) (加筆済み新掲示板記入可)

●雨

われわれは濃い薄いは別として、いつも海の中に住んでいる。

雨を嫌がる理由は何もない。

しかし、小さい頃のように天を見上げて雨にぬれるようなことは今はもうできなくなって

しまった。

でも、今日は快晴。快晴の水を味わって一日を過ごそう。

(5月21日 2004年掲示板)

●殺人

殺人とは、個体としての人を殺しているのではなく、行為としての人を殺している。その意味で、あらゆる束縛もまた、人を殺しているということができる。

そんな理想論でこの世界をつくったらとんでもないことになる、という論法が必ず出る。

だが、多くの悪事というのは、束縛により生じてくるものである。

束縛とは他者だけでなく、自分自身に対しても行なう。

多くの権力者は自分が(外的)自由を持っているので、束縛されていないので気づかずに、悪事を働くような人間を警戒するであるが、

それに対して、

「とんでもない」というのはあなた自身である、

と言いたい。これは世の権力者が現実に行なっているということではなく、「他人が悪人に見えるのは、自分がそうだからである」という意味である。

このことが分かれば、この世界に机上の空論の理想世界が実現する。

なぜなら、わたしが変わるときに世界は変わるのであり、権力者とはわたしのことだからである。

(加筆して掲示板記入予定)

5月21日、28日 2004年

●ベクトルの方向

わたしの預金通帳の残高はわずかである。だから、わたしは何とか残高を増やす方策を探そうとする。

しかし、わたしは今気づいていないが、もしかしてわたしの預金通帳にすでに誰かが振り込んでくれているかもしれない。

そうであれば、わたしは預金残高に気を使う必要はない。

わたしは、もしかして預金通帳の残高をいつも見誤っているのかもしれない。

預金通帳にはいつも充分のお金が記されている。

だから、わたしが人生で気をかけることは全く別のこともかもしれない。

(5月28日 2004年掲示板)

5月24日、25日、27日、28日、6月24日、25日 2004年

●究極の愛

昨日の教室で出た話題ですが、「究極の愛」とは何だと思えますか。

(5月24日 2004年掲示板)

わたしの答えは将来きっと変わるような気がする。だが、いま現在思う究極の愛とは、人間に自由があるということである。

人間は醜悪な考えをし、悪辣な行動をする。

それは<することができる>。

また、崇高な考えをし、気高い行動をする。

それは<することができる>。

わたしはどちらも選ぶことができる。

通常、悪辣な行為が惹き起こすことばかりを心配して(ただし、自分がする心配はしないが)、崇高な行為が惹き起こす未来に期待することは少ない。崇高な行為とは過去の特別な人の行いでなく、ひとりひとりに与えられている未来であり、現在である。影響とは負の方向ばかりでなく、正の方向にも及ぼされることを忘れてはならない。

今日わたしが悪辣であれば、その力は今日世界に何らかの影響を与えている。

同様に、

今日わたしが崇高であれば、その力は今日世界に何らかの影響を与えている。

わたしは、善か悪、そして善と悪から生じる第三のもの、どの道を行くこともできる。

このことはわたしに与えられた究極の愛である。

(5月27日 2004年掲示板) (加筆して新掲示板記入可)

●意識のある人生～究極の選択

今この一瞬の選択がこれまでの人生での最も輝かしい選択であるように、これまでの人生での究極の選択であるように。

(5月28日 2004年掲示板)

●テレポーテーション

テレポーテーションと記憶喪失

●シンクロ

シンクロとは魂の自我へのサイン、道するべかもしれない。

(6月24日 2004年掲示板)

■ベクトルの方向

この道するべはいつも無視していると、だんだん出てこなくなる。

だから、いつもしるしには気をつけていることだ。

かといって、このしるしを執拗に求めるものには、少々意地悪な道するべがしるされるかもしれない。

(掲示板記入済み??)

■至高体験

至高体験、絶頂体験というのはタナボタのようにして生じてきます。わたしの意志とは無関係に生じてくる体験であり、その意味ではシンクロニシティと同じです。ただし、そのタナボタを「生じさせる」ことができるという話があります。

「それではこの状態（生き生きと感じて生きるのではなく、ロボットのように自動的に生きること）を打開するにはどうしたらいいか。根本的な答えは現代の心理学者エイブラハム・マズロウによって発見されている。健康人の心理学を研究する決意をし、健康人ならば誰でもしばしば「絶頂体験」——幸福と自由がふつふつと生じる喜ばしい感覚——を経験するらしいことを発見したのがこのマズロウである。マズロウが学生に絶頂体験のことを話したところ、学生たちは、そういえばそんな体験をしたことがあります、じきに忘れてしまいましたと言いながらも、ぼつぼつ思い出しはじめた。そうして、「絶頂体験」のことを話したり考えたりしているうち、学生たちはいつも絶頂体験をするようになった。これはいつも絶頂体験のことを考え、心をその方向に向けていたからにはほかならない。」

(コリン・ウィルソン著「ルドルフ・シュタイナー」32ページ 河出書房新社)

■夢

カウンセリングでクライアントに夢を書いてくるようにと言うと、夢など覚えていないという人も…。

■創造力

わたしとは無関係と思える出来事もまた実はわたしの在り方と関係しているかもしれないということ。

5月25日 2004年

●ベクトルの長さ

意識のある人生の矢の方向と長さ。

5月26日、27日 2004年

●メガネ

昔「月刊漫画」の付録に「飛び出るマンガ」というのがあった。マンガは赤と青でずらして描かれてあり、赤と青のセロハンのメガネをかけて見ると、マンガが飛び出して見えるというしかけである。(なぜそうなるのかは、いまだによく分からないが)

この世界ではどうかというと、平面に描かれている絵を見ても、我々は立体的に見ようとするし、また、逆さに見えるメガネをかけても1週間もすれば正立した世界に修正して見えるようになるという。まあ、おそらくこの手のおもしろい話はゴマンとあるのだろうが、残念ながらわたしはよく知らない。

捨てられた工具を見たとき、

5月27日、29日、8月14日 2004年、6月11日、13日 2012年

●モノ～身体

この世界で最もわたしにシンクロするのは、身体である。
だから、わたしはそれを「わたしの身体」と呼ぶ。

まあ、そのような誤解は誤解でよい。

しかし、考えることがある。

わたしは、その身体の手を喜びと共にシンクロさせて動かしてきたであろうか。
あるいは、その身体の足を喜びと共にシンクロさせて動かしてきたであろうか。

わたしの忠実な召し使い、わたしへの偉大な贈り物、それを常に不安や憎しみのむちでたたきつけてきたのではないだろうか。

わたしは身体のことを知らない。

だから、たたくことしか知らない。

あるいは、

身体をわたしとと思っているので、たたいていることさえ知らない、
のかもしれない。

はたして、たたきつけた身体のことを、死んだら知ることができるのであろうか。

(8月15日 2004年掲示板)



本当は、隣の芝生もわたしにシンクロする。
だが、わたしはそれを「わたしの芝生」とは呼ばない。

■モノ<神と人間><シンクロ>

わたしは世界と共鳴するために生きている。
だから、世界の声を聞く必要がある。
わたしは世界を共鳴させるために生きている。
だから、わたしの声を聞く必要がある。

(5月29日 2004年掲示板) (新掲示板記入可)

■意識のある生活～身体

喜びと汗を友とする、そのような身体。
(掲示板記入予定)

■意識のある生活～こころ

喜びと与えたことを友とする、そのようなこころ。
(掲示板記入予定)

●鏡

頭の悪い人を見て、バカにする人もいれば、謙虚になる人もいる。
情に薄い人を見て、己の情の厚さを誇る人もいれば、あらためてわが身の情の薄さを知る人もいる。

(8月14日 2004年掲示板) (加筆済み新掲示板記入可)

5月29日、8月14日 2004年、6月11日 2012年

●意識のある人生～創造

どのような環境にあっても、自分のしたいことができる。
自分のしたいことができない環境というものはない。
どのような環境にあっても、<本当のわたし>の行為の芽は出ている。
ただ、
どれがその芽であるのか見ることができなければならないし、
そしてまた、その芽を育てなければならないが、
これはどちらも簡単ではない。どちらもちょっと辛いことであるからだ。

(新掲示板記入可)

5月30日2004年

●それが達成された日

無料着物教室

●

わたしに欠けているもののひとつは継続性、ベクトルの長さである。

●意識、自己想起と自由

(自由の哲学 30 ページ、32 ページ)

★6月2004年

6月1日2004年

●小6 女児殺傷事件雑感

このような事件があるといつも思う。

殺傷した11歳の少女が生まれる前から今回の出来事は組みこまれていたことなのか。

あるいは、生まれて以降の人生の中で生じてきたことなのか。

それとも、ある<偶然>が生じさせた事故と呼ばれるような出来事なのか。

ただ、どちらにしろ、彼女はこの事件を引き受けて生きざるをえない。

また、このことは、どのような人にとってもいえることである。

新聞の社会面に載るような事件と関わりなく生きていく大部分の人にとっても、人生の中で引き受けざるをえない事件はかならず生じる。ただし、わが身が引き受ける事件とは考えにくく、見逃してしまうことが多いかもしれないが。

(6月1日2004年掲示板)

■軽重

加害者という言い方にせよ、被害者という言い方にせよ、わが身にふりかかるショッキングな事件というのは、どちらにしろ、とてつもない重さととてつもない軽さがある。渦中にいるときには、とてつもなく重い。しかし、その渦から離れてしまうと、信じがたいほど軽いものになってしまう。あの重さは何であったのだろうかというような軽さである。

他方、軽い出来事が後になって重くなることもある。それはどういうことかという、他者から受けた恩というか、気配りというか、思いやりというか、そのときにはそれほど重く感じなかったものが、後になると、ずっしりとところの中心にすわっていることがある。この重さの感覚は何とも表現しがたい重さであり、おそらく生まれ変わってもこの重心はずっと変わらずに存在しつづけるのではないかという重さである。

(6月3日 2004年掲示板) (加筆して新掲示板記入可)

6月2日、9日、11日、13日、8月2日 2004年

●意識のある人生～<身体>

身体、

疲れてから休息させること。

使用してから休息させること。

どのような疲れか。

どのような使用か。

どのような休息か。

(6月13日 2004年掲示板)

■ころ (なみこさんへの返事)

なみこさん、こんばんは。書きこみいただき、ありがとうございます。

将棋でも囲碁でも、勝ち負けとは関係なく、「ころが疲れたけれど気持ちよく終えられた」ということがあります。

これは<ころを使うことができた>からだ自分は思っています。

<わたしのころが望むようなしかたでころを使うことができた>からだと思っています。

この<使用>は本来相手に依存することなく行なわれるはずですが、凡夫の身としては往々にして相手次第ということになってしまいます。相手が勝ち負けだけにこだわる好戦的な人、へぼ塚から金をまきあげてやろうというトンデモナイ輩には、当方のころの働き方も<本来のわたしが望むような使い方>でなく、卑しい指し手、卑しい打ち手に墮してしまいます。このような場合には、<わたしのころを使っていないのに等しい>ので、一日が終わってもわたしはころを休息させることができないのです。ころは使用してこそ休息させることができます。その意味で、身体の使用と同じだと思えます。

ただし、「わたしのころが本当は何を望んでいるのか」を知ることはなかなか難しいこと

です。というのも、世間の常識としばしば食い違いが生じるからです。また、ひとつひとつのころは違うので、他人を基準にできないということもあります。それにも関わらず、通常は常識や他人にあわせたころの使い方をしているので、本当に安らかな休息を取っている人はとても少ないように思います。

わたしが 20 年前から用いている「物指し」があります。それは、終えて気持ちがよければ、その行為はわたしにとって<よし>とする。すなわち、わたしのころの望むような使い方をしたということです。これは事後にしか用いることができない「物指し」ですが、この方法で経験的にわたしのころを探っていくしかないというのが自分の考えです。

ですから、本来の使用法であるならば、「使いすぎて疲れる」ということはありえず、おそらくは使っていないから疲れてしまうのだと思います。まあ、われわれはマニュアルのないスーパーコンピューターのようなもので、なかなか使いこなすのは難しいようです。アーサー・ケストラーという人は「人類はスーパーコンピューター以上の存在であるのに、このコンピューターを使って釣り銭の計算しかしていない」と言っています。

耳の痛い話で、明日はせめて掛け算ぐらいやって気持ちよく休息を取りたいものですね。

(6月14日 2004年掲示板)

■ (なみこさんへの返事)

自分が望んでいない「心の使い方」をすると疲弊してしまう、ということですね。

確かに「疲れたけれど、それは心地よい疲労感」であるときとそうでない時がありますね。カウンセラーの方にも同じようなことを言われました。

精神の養生のコツは、自分が気持ちいいと感じる事をする・・・だそうです。

ただ1つ難点は「気持ちの良い事だけをしていては生活が出来ない点」です。でもそれも何とかならないかな〜と今模索中です。

確かにそれはわたしにとっても大問題の課題です。

気持ちの良いこと、好きなことだけをして人生を送ることをわたしは望んでいますし、また、それはできることだと考えています。ただ現実にはできていないので、できるような方法を自分も模索中です。まあ、だいたい見当はついているのですが、なかなか難しい。

日記をご覧いただいてもお分かりいただけるように、わたしには仕事以外の余暇時間がずいぶんあります。20年前に現在の仕事にかわるまではブタのように働いていたので、以前の仕事からみると、余暇に関しては天国のような状況にあります。しかし、天国も長くいると不平不満も出てくるもので、最近はずべての時間を余暇に使いたい！ という、まあ一昔前の日本人からするとトンデモナイ望みを抱いています。それでは「やめてしまえば

いい」ということになるんですが、なみこさん同様「生活の問題」があります。(本当に問題かどうかは難しいのですが…、問題ないのかもしれないのですが、なかなか踏み切れません。二十歳の時であったら何の躊躇もなく退職していると思いますが…。)

とって天国の上に極楽を望む高塚の野望をあきらめたわけではありません。以下はわたしの野望実現マニュアルです。万人向けかどうかは分かりませんが…。

① まず生活の心配なく、すべての余暇時間を手に入れたとしたら、すなわち、望みがかなったとしたら、その時間を何に使うのかをはっきりさせる。

わたしの場合は、以前にも書いたように、(いちおう拠点をさだめておいて?) 全国を巡りその土地その土地に浸って、自然のもの、人の手によるものを感じながら過ごす。「気・人間・宇宙」について話し合える人がいたら、セミナーを開く。気が向けば瞑想し、気が向けば囲碁将棋する。また、ご縁があれば、ヒーリングを行なう。夜は星を見上げながら、時にはネオンを見上げながら、一合の冷酒と具たくさんの冷奴で一杯やる。

② 次にこのような自分を今ゆるされた時間の範囲で行なうということです(う～ん、酒だけはしっかりやっているかなあ～(∩o∩))。どんなに短い時間であっても、「気持ちの良いこと」「やりたいこと」「理想」を現実に行なうことです。芽はこころをかけてあげれば育っていくものです。育っていくうちに、環境、条件も変わってくるというのが自分の世界観です。

③ また、今の現実というのは自分が創り出したものであり、そのことを認めて、避けようとしなないことです。今の現実というのは四六時中無意識に生きてきた、しかも大部分不安のうちに生きてきた自分が創り上げたものであり、そのことを認め、その現実を遠ざけようとしなないことです。どのような現実であれ、その現実にはかならずわたしにとって有益となる何がしかの意味が存在し(それは、まことに魔法のようであります)、その現実の在り難さを感じることです。

そうはいつつも、そのような現実以外を望むのであれば、①と②のように、気持ちの良いこと、本当にやりたいことを自分自身の中にしっかりと定めて、一瞬でもいいから現実に移していくことです。現実を嫌うのではなく、理想を好きになることです。嫌う方向に自身のベクトルを向けるのではなく、好む方向にベクトルの矢の方向を向けるのです。(現実を嫌うことは現実を変えるための一番の禁忌です。)

また、ちょっと哲学風に言うと、ああならいいのにと望みのところにいるのではなく、ああならいいところにいつもいる、ということです。たとえ現実にはいることができなく

とも、こころのうちで、また実現できる範囲で<常に>そこにいることです。

人間は、通常の意味をはるかに超えた意味で、創造的な存在です。別の言葉で表現すると、自由な存在です。これが釣り銭の計算以上の存在であるということです。ただ、スーパーコンピューターの使用が簡単でないように、創造的、自由な存在であることもまた簡単なことではありません。ですから、今日もまたうまくいかなかったとモンモンとして過ごすことになってしまいます。

■掛け算

蛇足ながら、付言しておきますと、掛け算とは

「××に生きる」

ということです。××とは、現代の伏せ字です。フロイトが生きていた時代の伏せ字はセックスでした。十年ぐらい前の伏せ字はこころで、現代の伏せ字は??

わたしが思うに、愛、神です。

誰かに

「わたしは愛に生きます」

「わたしは神に生きます」

と言われると、わたしでもひいてしまいます。(でもちょっと突っ込みたくなりますが(^^)。)

街頭でサラ金のティッシュを配っている分にはお咎めはありませんが、「わたしは愛であり、わたしは神である」などと演説しようものなら、職務質問を受けてしまいそうです。まあ、警察をおそれて言わないわけではないのですが、どこかひっかかりがあります。だから伏せ字になってしまい、掛け算は無理で、釣り銭の計算しかできないのかもしれない。

(6月15日 2004年掲示板)

■なみこさんへの返事

ここは八百万の神の国ですからね(^_^)、「あなたにとっての神とは何ですか?」とツッコミを入れましょう。

(ツッコマレタとして)

「神との対話」の神は神のことをチャーリーと呼んでもらって構わないと言っています。この神はわたしが小さい頃からおつきあいさせていただいている神だと思っているので、わたしの神は「太郎」と言っておきましょう。う~む、「花子」かなあ~(^o^)

> 街頭でサラ金のティッシュを配っている分にはお咎めはありませんが、「わたしは愛であり、わたしは神である」などと演説しようものなら、職務質問を受けてしまいそうです。

まあ、警察をおそれて言わないわけではないのですが、どこかひっかかりがあります。だから伏せ字になってしまい、掛け算は無理で、釣り銭の計算しかできないのかもしれませんが。

ほんの4～5年前まで町行く人に手をかざし、「あなたの健康と幸せをお祈りさせてください」・・・という団体をよく駅前などで見かけましたが、最近は見ませんね。彼らは今も活動しているのでしょうか。活動拠点を他の地方都市にでも移したのかも・・・。

能ある鷹は爪を隠すと言いますが、能のない人間は爪をみせて使おうとします。渦中にいる時に「自分のところをのぞきこんで見る」のはなかなか難しいですね。でも、他人から見ると、このような慢心、自己顕示欲というのは一目瞭然なのですが…。(このような尊大さを乗り越えるというのはとても難しい。以前、我がヒーリング能力が旬だった頃(^^)、街頭でこそやりませんでした。自分もその能力を使いたくてウズウズしていました。だから、分からないでもありません。そして、今でもそういう気持ちは多少なりともあります。)

また、街頭で手かざしをしている人は勧誘という別の目的もあるのでしょう。あるいは、善行を施した見返りという目的かもしれません。そういう目的がある以上、手かざしもそのような手かざしである、ということです。どのような行為も行為それ自体で完結しているのが理想であり、また目指すべき理想だと思います。とても難しいことですが、よくよく肝に銘じておくべきことだと思っています。(昨日も「虫の息の虫」を能力確認の気持ち半分でヒーリングして、えらい後悔しました。)

(6月16日 2004年掲示板)

■ 太郎氏の話

昨日「神との友情 (上巻)」を読んでいて、スーパーコンピューターの話が出てきたのでご紹介します。ここでは、掛け算に使うのではなく、高等数学に使うような話しです。

神と友達となるためにはどのようにすればよいかということがメインテーマで、そのためには「神を知ること、神を信頼すること、神を愛すること」であり、「神を愛すること」を最も困難にしているものとして「必要性、期待、嫉妬」をあげられています(まあ、こう書いても読まれたことがない人にはさっぱり分からないとは思いますが)。

ここでは、必要性に関連して、人間存在がどのようなものであるかが語られています。

以下は太郎氏の言葉です。

「…「必要性」というのは、最も強力な愛の殺し屋だ。だが、あなたがたのほとんどは、

愛と必要性のちがいを知らず、二つを混同してきたし、いまでも毎日混同している。

「必要性」とは、いまは自分のものでない何かがある自分の外に存在し、幸せになるにはそれが**必要だ、ということだ**。それが**必要だ**と信じているから、それを獲得するためには何でもしようと思う。あなたがたは、必要だと思うものを獲得したがる。

ほとんどのひとは、必要だと思うものを取引によって手に入れる。すでにもっているものと、欲しいものを交換する。このプロセスを「愛」と呼んでいる。」

(中略)

「…こうして、人間は神話のなかで創り出した物語を日々、生きている。愛は条件つきだ。だが、これは真実ではなく神話だ。あなたがたの文化の物語の一部になっているが、神の現実の一部ではない。**実際には、神は何も必要としないから、あなたがたに何も求めない。**

神が何かを必要とするはずがあるだろうか？

神は**すべて**であり、ありとあらゆるものであり、**動かない動かし手**であり、あなたがたが、神が**必要**とすると想像するすべてのものの**源**である。

わたしは**すべて**をもち、**すべて**であり、**何も必要としない**。それを理解することが、わたしを知ることのひとつだ。」

(中略)

「…あなたがたは、神のイメージで、神に似せてつくられている。このことは前から理解してきた。そう教えられてきたからだ。だが、わたしのイメージがどのようなもので、何に似ているかを誤解している。

あなたがたは、わたしが何かを必要とする神だと想像している。なかでも、あなたに愛されことを必要としていると思っている（あなたがたの教会のなかには、あなたがたの愛を必要としているのではなく、望んでいるだけだと説明しているところもある。あなたがたが神を愛するのがわたしの望みだが、決して強制はしないと言う。だが、望むとおりにならなかったら、あなたがたを永遠にしいたげるといふなら、「望む」とは「必要とする」ことではないか？ そんな「望み」とはどんなものだろうね？)

だから、わたしのイメージで、わたしに似せてつくられたあなたがたは、同じ欲求を経験するのが正常だと言う。そこで、危険な愛情を創り出した。

だが、言うておくと、わたしは何も必要としない。わたし自身のなかにあるすべて、わたしが自分自身を外に向かって表現するときに必要なのは、それだけだ。これが、真の神というものだ。そのイメージで、それに似せてあなたがたはつくられている。

これがどれほど驚くべきことか、理解できるかな？ 意味が分かるかな？

あなたがたもまた、何も必要としない。あなたがたが完璧に幸せであるために必要なものは、何もない。必要だと思っているだけだ。

深い完璧な幸せは、自分の内側に見いだされる。それを見いだせば、外にあるものなどくらべものにならないし、それを損なうものは何もない。」

「神との友情（上巻）」（ニール・ドナルド・ウォルツシュ著 吉田利子訳 サンマーク出版 190～198ページ）よりの引用です。一部の引用なので分かりにくいかもしれませんが、興味のある方はお読みになってください。

何度も読んだ文章ですが、最後の話に今回はあらためて驚愕して、引用させていただきました。

人間とは何か？ 別の個所でちょっとしゃれた言い方もしています。

「あなたがたは贈り物である」
（6月18日2004年掲示板）

■身体運動

身体運動、
神経を使い、筋肉が収縮したままである。
解放せずに、収縮状態に置く。
これもまた、身体運動と呼べるのであろうか。
（掲示板記入予定）

不安という身体運動

■身体チェック

肩を下げる
呼吸に注意する

6月4日、5日2004年

●神の宿

日経新聞「将棋欄」を島朗八段が書いているが、6月4日の見出しは
「神は細部に宿る」
であった。これは将棋の話である。

わたしの神はいつもどこに宿るのか、考えてみるのもよいかもしれない。
わたしの神といつもどこで会っているのか、考えてみるのもよいかもしれない。
あるいは、わたしはいつもどこに宿るのか、考えてみるのもよいかもしれない。

ちなみにイエスはこう言った。

「私は彼らすべての上にある光である。私はすべてである。すべては私から出た。そして、すべては私に達した。

木を割りなさい。私はそこにいる。石を持ち上げなさい。そうすればあなたがたは、私をそこに見出すであろう。」

(「トマス福音書」77 ページ 講談社学術文庫)

(6月5日 2004年掲示板)

6月5日、20日 2004年

●共有

言葉を伝えるのではなく、感情を伝える。

言葉を共有するのではなく、感情を共有する。

言葉はうそをつけるが、感情はうそをつけないからである。

だから、もしうそをつきたいのであれば、上手に言葉だけを伝えるのがよい。

また、もし本当の気持ちを理解してもらいたいのであれば、感情を伝えるようにした方がよい。

ただ、いつも言葉だけを使っていると、言葉によって感情が変わり、

ただ、いつも言葉だけを自分だと思っていると、感情のうそを見抜くことはできないかもしれない。

(加筆して掲示板記入予定)

伝えられるか、共有できるかどうかは別問題ではあるが。

●食べ物

少食・歯列・赤ん坊の食べ物の選択・捕れるものを食べる・すし屋の体調とにぎり・プラスチックとしての食べ物・

●フルーツ

フルーツの先～宇宙の大きさの気としての実感

●影響力

残るもの～弓と禅・透明な力～南京錠の鍵曲げ～ニュートンとライプニッツの微積分

6月7日、8日2004年

●<それ>と<わたし>

弓は<わたし>が射るのでなく、<それ>が射るのが本来の姿であるという。「弓と禪」(オイゲン・ヘリゲル著)の中で師範は弟子が弓を射るとき、時々「いま<それ>が射りました」と言って深々と頭を下げののだが、それは弟子に頭を下げたのではなく、<それ>に対してあいさつをしているのだという。

また、スティーブン・キングは「小説作法」の中で次のように述べている。

「ある時<ニュー Yorker>のインタビューに答えて、作品を書くのは地中に埋もれた化石を発掘するのと同じだと話すと、聞き手のマーク・シンガーは、信じられない、と眉を寄せた。私自身がそう考えていることさえ知ってもらえれば、向こうが信じようと信じまいと構ったことではない。実際、私はそう考えている。作品は観光土産のTシャツや、ゲームボーイとはわけが違う。作品は以前から存在する知られざる遺物である。作家は手持ちの道具箱から目的にかなった用具を選んで、その遺物をできる限り完全な姿で発掘することに努めなくてはならない。貝殻のように小さい化石もあれば、見事な肋骨と恐ろしい歯をしたティラノザウルス・レックスのように巨大なものもある。しかし、短編小説も、千ページを超える長編も、発掘の技術は基本的に変わらない。」(188ページ)

ここでは、<それ>は化石として表現されている。<それ>は<わたし>が創り出すものではなく、発掘するものであるという。

われわれは弓であれ、小説であれ、どのようなものであれ、<わたし>が出てくるのでなく、<それ>が出てくるように修練を積む。目に見えるものであれ、見えないものであれ、いつまでもこの世界に残っていくものは<それ>が出てきたものである。

では、こういう世界観をもつとき、<わたし>とは一体何なのであろうか。

(6月8日2004年掲示板)(新掲示板記入可)

■我欲

わたしとそれとの一致。

我欲としての私。

6月8日、11日、20日2004年

●意識のある人生～自己想起

常に方向を一定にしておく。

●逆

わたしが最も信頼している人には、その人も間違っているかもしれないという眼を。
わたしが最も嫌悪している人には、その人も正しいかもしれないという眼を。

(6月20日 2004年掲示板)

■順

わたしが最も信頼している人には、ひれ伏す。トコトンひれ伏す。どこまでアタマを下げる
ことができるか。

わたしが最も嫌悪している人には、唾棄する。トコトン唾を吐く。どこまで唾を吐くこ
とができるか。

(6月21日 2004年掲示板)

6月9日、10日、11日、7月13日、14日、7月28日 2004年

●夢

今朝は久しぶりにリアルな夢を見た。

よくあることだが、夢の中で自分が飛べることをふと思い出して空を飛ぶ。この日もそん
な夢で、それはとても爽快なのであるが、悪いことに「追いかけられる」といういつもの
テーマがそれにくっついてきて、爽快だけでは終わらないのが悲しい。この日は空を飛べ
るだけでなく、透明人間にもなれるという強力な武器を携えているにも関わらず、最後は
つかまってしまう。

まあ、他人の夢などあまりおもしろくないので、これ以上書かないが、目が覚めてふと思
ったことは、夢の世界は実在する、この感覚がかなりはっきりと自覚できたことである。
この世界はいわば<創造者の夢の世界> (創造者の念写の世界) のようなもので、個人の
夢は個人という創造者の夢の世界なのではないだろうか。

問題はこのわたしという個人の夢がいつも見ているような夢ばかりであれば、非常に不本
意なことである。個人の夢は死んでしまうと創り出すことができない世界なのだろうか？
このことは分からないが、少なくとも個人の夢はこの現実界と呼ばれる世界に暮らしてい
ることと密接に関係していることは確かであり、何とか生きているうちに<もっと積極的
に関わる><もっとわたしの世界として存在させる>ことができないだろうか、というこ
とを今朝目が覚めたときに考えたことである。

このことは、わたしの場合<意識的に生きる>ということと大いに関係してくることであ
る。

(6月9日 2004年掲示板)

●意識のある人生～たなぼた

どんな不愉快なことであれ、愉快なことに変わることがある。

これは無意識の人生である。

無意識の人生では、たなからぼたもちが落ちるまで待つしかない。

すぐ落ちてくる場合もあれば、50年かかっても落ちてこない場合もある。

だから、一生の間同じ人を憎んだりすることができる。

また、どんな不愉快なことであれ、愉快なことに変えることができる。

これは意識のある人生である。

たなからぼたもちを取る人生である。

すぐには達成できなくとも、いったん達成されれば、人生はいつもわたしのものとなる。

(7月15日 2004年掲示板)

●犬

いま母が入院中で、隣の母宅の駄犬を預かっている。

母のお見舞いの中には犬は留守番であるが、室内犬のせいか犬は留守番をえらくいやがる。

わたしは出て行くときに犬に因果を言い含めて、だいたいそれが伝わるのであるが、それでも簡単ではない。

ところで、もし、わたしという人間が犬を尊重して、あるいは犬のわがままを尊重して、わたしは犬に留守番をさせずに一緒に家に残っているとすると、わたしはきっとものすごく感動するのではないかと思う。

ただ、わたしはそうしないので、わたしはわたしに感動しない。

ただこう書いて明日実際にそうしたとしても、感動させてくれるわたしは出てこないし、感動させてくれる瞬間は生じてこない。

感動させてくれるわたし、感動させてくれる瞬間とは、どのようなわたし、どのような瞬間なのであろうか。

(6月10日 2004年掲示板)

●テレパシー雑感

この地球上では意志の伝達は言語で行なう。しかし、言語がなく、すべてテレパシーで行なわれるとしたら、どんな世界になるだろうか。

政治家の9割は少なくとも落選するだろう。選挙の立候補で本当は何を考えているのかすべて分かるのだし、国会の論戦でも本当は何をしているのかが分かるからだ。

商売もかなり変わるであろう。仕入れ値100円で売り値が1000円などという商売は誰も相手にしないだろうし、ボーナス1000万円も出すような会社の商品は誰も相手にしないであ

ろう。

世事にうといので、あまり具体的なことは書けないが、少なくとも今のこの世界でステータスのある人は大部分ガラガラと落っこってってしまうであろう。また、隠すことが何もなくなくなってしまうえば、落っこちた人も別に腹を立てることもないかもしれない。

言語がなく、テレパシーだけある世界、これはとてもすばらしい世界である。しかし、現実にはとても困る世界である。政治家、悪徳商売人だけでなく、誰もが隠しておきたいことをいっぱい持っているからである。まあ、だからテレパシーだけの星にならないということなのかもしれない。

でも、この地球を変える最終兵器はひょっとしたら、テレパシーではないだろうかとも思っている。うん千年も変わらぬ地球を見るに見かねた魔法使いが杖を一振りし、言語がなくなりテレパシーだけの世界になったら、最初はえらく混乱するかもしれないが、意外とそれはそれで落ち着くところに落ち着くのではないかと思っている。そして、その落ち着く先は少なくとも今の地球よりまともな世界ではないだろうかと思ってみたりしている。

まあ夢物語のような話であるが、わたしはこういうことというのは意外とぱっと実現してしまうのではないかと思っている（魔法使いは出てこないが、別の魔法で）。その日に備えて、自分の隠し事を整理整頓しておくのもよいかもしれない。

（6月11日 2004年掲示板）（加筆して新掲示板記入可）

6月11日 2004年

●仕事

「プロセスを我慢するのではなく、あらゆる時を通じて最もすばらしい創造を行う道具（ツール）として使いなさい。あなたの神聖な自己を実現するために。」

（「神との対話」2巻102ページ）

「前にも言ったように、宇宙の深い謎をあばこうと、よけいな時間を費やしてもしかたがない。だが、「壮大なプロセス」を簡単な寓話として、しろうとなりに理解しておくのも悪くはないよ。」

「どんな利点があるんですか？」

「たとえば、生命そのものもふくめて、すべては循環することがわかる。宇宙の生命を理解すれば、あなた自身の内側にある世界の生命を理解できるだろう。

生命は循環する。すべては循環する。それがわかれば、ただ耐えるだけでなく、もっとプロセスを楽しむことができる。すべての動きは循環だ。生命には自然のリズムがあり、すべてはそのリズムで動いている。すべてはその流れにのっている。だから、「天のもとのすべてのことには季節があり、すべてのわざには時がある」と書かれているのだよ。」

(「神との対話」2巻107ページ)

6月12日、13日、14日、17日、7月10日2004年、6月12日2012年

●意識のある人生～創造

呼吸～創り出している感覚

三点セット～著作・金銭・全ての時間

満腹でなく、自腹

シンクロ～起床時間・下痢

●意識のある人生～<出来事><機会><創造>

この世界に無意味なことなど何もない。

どのような出来事も、それは、わたしが創り出したものであり、

どのような出来事も、それは、わたしにとって意味があり、

どのような出来事も、それは、わたしが変えることができる。

(7月12日2004年掲示板)(新掲示板記入可)

●焦点

下手な絵には焦点がない。どの距離から見てもぼけたままである。

だが上手な絵には焦点がある。くっきり見える距離がある。いい絵になると、その焦点がいくつかある。

しかしすごい絵があり、この絵はあらゆる距離が焦点となる。その絵は自然という風景画であり、生き物であり、宇宙である。

(6月20日2004年掲示板)

しかし、人はこの風景画に満足せずに、人の眼で見た風景を描く。

この風景画は時として、自然の風景画、すなわち神の風景画よりも人を感動させる。

神もまたこの風景画を見て感動するのであろうか。

(掲示板記入予定)

■わたしの人生の焦点

肉体の視点

ヒーリングは相手を治すためだけではないこと。

6月13日、26日2004年、6月12日、13日2012年

●<Be Here Now><時空><わたし>

現在は過去のわたしの結果としてある。それは必然としてある。だが、<今のわたし>は現在を変えることができる。

現在を変えれば、過去のわたしの意味は変わる。

現在は未来のわたしの原因である、それは必然としてある。だが、<今のわたし>は現在を変えることができる。

現在を変えれば、未来のわたしの意味は変わる。

<今のわたし>は、過去、現在、未来に意味を与える。昨日、明日を現在に引きずるのではなく、<今>を生きることである。<わたし>を生きることである。

では、<今>とは何か。<わたし>とは何か。これが実に難しい。

(6月26日2004年掲示板)(加筆済み新掲示板記入可)(草稿要転記)

●学習

使える道具(意志、持続)～自分のもの

使えない道具(年号の暗記)～自分のものでない

■宇宙の収束

この世界はある意味で砂上の楼閣である。しかし、波に洗われて楼閣が消えたあとでも残るものがある。

●魂の声

「魂よ、お前は何を望んでいるのか」

現在のわたしの望みは子どもの頃のテレビへの渴望のようなものなのか。

6月14日、17日2004年、6月12日、13日2012年

●意識のある人生～<自他>

常に意識し、知っていること。

他人に対するすべての思いはわたしである。

他人に対するすべての言葉はわたしであり、

他人に対するすべての行為はわたしである。

他人への思い、言葉、行為を野放図にしないことである。

思い、言葉、行為を発する前に、わが身を振り返れば、わたしを知ることができる。

わたしを知れば、わたしが変わり、思い、言葉、行為も変わる。

(6月17日 2004年掲示板) (加筆済み新掲示板記入可)

■意識のある人生～他自

常に自己想起すること。

わたしの思いは他人の目を意識した思いではないだろうか。

わたしの言葉は他人の目を意識した言葉ではないだろうか。

わたしの行為は他人の目を意識した行為ではないだろうか。

(6月21日 2004年掲示板)

6月16日、7月9日、8月1日、2日 2004年、6月12日 2012年

●<所有><モノ>

手渡すことができるものだけを受け取る。

なぜなら、手渡すことがわたしであるからだ。

今日、わたしは何を手渡したであろうか。そして、何を手渡さなかったであろうか。

今日、わたしはあったのか。

それとも、今日、わたしはなくて、モノだけが残ったのであろうか。

(8月2日 2004年掲示板) (新掲示板記入可)

■モノ

手渡すことができるものを受け取り、

手渡すことができるものだけを持っている。

今日手渡したものがわたしであり、

それは愛のひとつの形である。

(7月10日 2004年掲示板)

●意識のある人生～<愛(真善美)><選択><わたし>

身体が嫌がる愛がある。
習慣が嫌がる愛がある。
感情が嫌がる愛がある。

捨てられてしまう愛がある。

身体、習慣、感情をよく見る必要がある。
(6月12日2012年新掲示板)

6月17日、21日、7月9日2004年、6月12日2012年

●腕

心臓カテーテルの医師の腕～道具が伸びる
「弓と禅」
「透明な力」

そしてまた、
創造力として伸びる意志がある。
(加筆して掲示板記入予定)

時空に伸びる意志

●成人

生まれて赤ん坊になり、小学生になり、中学、高校と進んで、大人になる。この大きさだけを人間であると思っていたら、とんでもない無知である。

大人になって、小さくなってしまった

というところもあるからである。
(新掲示板記入可)

小さい大人
大きいこども

そして、中年、初老、老人となり、死んでいく。

●時空

仏陀は王家にいたままでは悟りを開けなかったのだろうか。
そういうイフという問いは成り立つのであろうか。

(7月15日 2004年掲示板)

■時空

そういうイフに答えるとしたら、
王家にいたまま、悟りを開けなかったゴータマ・シッダールタと
王家を出て、悟りを開いたゴータマ・シッダールタと
両方が存在しているのかもしれない。

そういうわたしはアタマがおかしい？
いや、多分少し違っていて、少しあっていると思う。

(7月17日 2004年掲示板)

わたしは今王家を出て悟りを開いて仏陀となった時空にいる。
わたしはまた王家にいて悟りを開けなかった時空にもいるかもしれない。

このことは自分自身についてもいえることである。
わたしが今日選んだことは、明日その時空の延長上にいるということである。

■エネルギー

過去にエネルギーを贈ること。
通常の白昼夢の過去の想起も一種のエネルギーを送っていることになるのかもしれない。

■機会

そしてまた、出家したときの環境は不幸であったのか、幸福であったのか。

●意識のある人生～時空

自分の時間の最大限を。
自分の空間の最大限を。
自分の人生の最大限を。
生きる。
シュタイナーのように。
グルジェフのように。
そして、わたしのよう。

(7月11日掲示板)

6月19日、7月9日、12日 2004年

● 桎梏（しっこく）

高校時代、友人が「うちは何でも自由なんだよ。勉強しろとも言われたことないし。でも信頼されていると思うと、意外とメチャクチャなことはできないんだよ」と言っていたのを思い出す。

われわれは、ひょっとしたら、自由であることを知らないのではないだろうか。

「」に次のような話が出てくる。

「」

なるほどという話であるが、このような話になったときに

自由の問題（元最高裁検事とたけしの対話）（立花隆のトインビーの話し）

「親として、配偶者として、愛し愛される者として、あなたの愛を、相手をしぼるための接着剤にしてはならない。そうではなくて、まず引きつけ、つぎに転換させ、反発させる磁石にきなさい。そうしないと、引きつけられた者はあなたに執着しなければ生きられないと信じはじめ。これほど真実とかけ離れたことはない。これほど、他者にとって破滅的なことはない。

あなたの愛によって、愛する者を世界に押し出しなさい。そして、彼らが自分自身を十分に体験できるようにしむけなさい。それが、ほんとうの愛である。」

（「神との対話 1 巻」 156 ページ）

6月20日、21日、23日 2004年

● 過ぎ去った風景（水仙の球根）

過去の写真を見ると、過去の映像を見ると、そして昔の記憶を思い起こすと。

当事者でいるときには決して見るできないものがある。

過去を振り返ってみて、くっきりと見えてくるものがある。

過去を振り返って見えるものは単なるノスタルジーではなく、意味の塊のようなものとしての出来事である。

過去は、何回も何回も思い起こして、何回も何回も思い起こされて、意味が吹きだしてくる。

そして、今日のわたしは将来何度も何度も思い起こされるわたしであるのだろうか。

そしてまた、今日のわたしは過去に何度も何度も思い起こされたわたしであったのだろうか。

(6月23日 2004年掲示板) (新掲示板記入可)

6月21日 2004年

●解放感覚

昔は1時間でも自由時間があると無限の自由時間のように感じた。

いまは24時間の自由時間があっても、24時間後に仕事が入っていると、気分的に解放されない。

これはとても不幸なことだ。

わたし自身の問題で、わたし自身が後退していることは不幸なことである。

(6月22日 2004年掲示板)

6月23日、25日、7月3日 2004年、6月12日 2012年

●BOX

わたしに入ってくるモノがあり、わたしから出ていくモノがある。

わたしは自動販売機のようなBOXである。

(掲示板記入予定)

とはいえ、わたしは自動販売機と似て非なる存在である。

どこが違うか。

■A=A

わたしのBOXは自動販売機のようにお金を入れてジュースを出すようなことはしない。

わたしのBOXはお金が入ると、お金を出し、ジュースが入るとジュースを出すようなBOXである。

(6月30日 2004年掲示板)

■

とはいえ、いつも入れたものを出すばかりではない。やがては、入れたものと違うものを出したり、入れないのに出したりする。

■対価

自動販売機は120円入れないとコーヒーが出てこないが、わたしというBOXはたまには120円入ってこなくとも、コーヒーやジュースを出したりする。自動販売機は出してばかり

いると、不良品としてお払い箱になるが、わたしというBOXはどうも違うようである。

入ってくるものに気を取られて、出すことは入ってくるものの条件次第である。

入ってくるものを変えることはできないが、出ていくものを変えることはできる。
いつも 10 円玉やニセコインしか入ってこない自動販売機であっても、出ていくものを変え
ると、

■

永久運動機関としてのBOX

永久創造機関としてのBOX

■ハトホルの四大元素

厳然としてあるわたしを支えている存在、世界を支えている存在。

BOXはわたしではない。

●自己想起とペンフィールドの実験

昨日読み返していた本のなかに、自己想起に関する記述があったので紹介させていただきます。

「…ワイルダー・ペンフィールドが大脳皮質の実験を——正常な意識のある患者に——していたとき、患者は自分の幼い頃のことを心の映画を見るように体験しながら同時に今いる部屋を完全に意識していた、という事実が判明した。要するにこれは意識の二つの流れが同時に、混ざりあうことなく流れていたということである。マ스로ウはこれにはびっくりさせられた。というのも、これまでマ스로ウは、意識は神経細胞（ノイロン）の活動であり、脳が生み出したものにすぎないという見方をしていたからである。が、もしそうであるならば、この二つの流れは、一つのどんぶりに流れこむ湯と水のように混ざり合うはずである。それが混ざり合わないというのは、何か二つの流れを分離させているということである。もし脳が一つのコンピューターであるとするなら、その活動の上に立つ「プログラマー」がいるはずである。ペンフィールドは魂が存在することを証明したといえよう。」

（コリン・ウィルソン著「ルドルフ・シュタイナー」河出書房新社）

魂の存在の証明になっているというのは承服できませんが、二つの意識が存在しうるとい
うのはとても興味深いことであり、わたし自身三年間挑戦しつづけてことが無駄ではなさ
そうだという気持ちにさせられます。

まあしかしわたしの三年間の苦勞は、脳に穴をあけて電極針をつけていれば即座に解決することのようでもあり、複雑な心境です。しかし、針のついたヘッドバンドつけて歩いていたら、それこそ人は避けて通るでしょう。

(6月24日 2004年掲示板)

6月24日 2004年、6月12日 2012年

●<条件><必要性>

虚空に手を合わせる～仏壇を手に入れる～仏間を手に入れる

必要性はただ手を合わせるころにあつた。

●臓器移植～クローン臓器

確かなことは、人間はクローン人間をつくる、ということである。

心肺同時移植を受けた患者の手記を読むと、臓器にも意識があることが分かる。

■臓器移植～腎臓の対価

某国の極貧の男性が、腎臓を百万円で買ってもらいたいとある人を介して頼んできた。

あなたは腎臓移植が必要であるが、ドナーがない。でも、百万円はある。

ドナーの腎臓は二つあるが一つでも生きていける。

あなたはこの申し出を受けるであろうか。

それとも、それはできないと言うであろうか。

それとも、それは人助けであると言い、この申し出を受けてあげるであろうか。

(6月25日 2004年掲示板)

二者択一の答えのない質問には第三の道がある。

この場合は、腎臓移植をせずに百万円をゆずることである。

(売血の輩であろうか否かは<わたし>には無関係である)

6月28日、7月2日、7月13日、14日、8月9日 2004年

●歎異抄

日曜日の朝日新聞の読書欄に、山折哲雄氏が「悪人救済は無条件か」というテーマで自作の紹介をしている。歎異抄で唯円は「善人なおもて往生す。いわんや悪人をや」という、禅問答のようなフレーズを残している。山折氏はこの無条件の救済が麻原彰晃氏にもなされることがどうしても得心がいかないと、親鸞の「教行信証」を読み返し、極重悪人が救われるには二つの条件が記されてと述べている（善き師につくことと深く懺悔するこ

と)。そして、歎異抄は裏切りの書であるという。

わたしは聞きたい。

唯円の無条件の救済は山折哲雄氏にもあてはまることなのであろうか。

また、親鸞のいう二つの条件を

山折哲雄氏は満たされていらっしゃるのであろうか。

(6月29日 2004年掲示板)

■柳宗悦

今また、柳宗悦の「南無阿弥陀仏」を読み返しているが、読めば読むほどこの世界にある凡の不可思議さを感じる書である。今のわたしは全面的に念仏門の立場に立つわけではないが、ひとつひとつの言葉がここに浸み入ってくる名著である。

「……助かる資格があつて助かるのではなく、そんな資格もないままで助かるのである。こういう不思議な事実をどう説明したらよいか。

^{かえりみ}省ると、この不思議について教えを述べているのが念仏宗ではなかったか。弥陀は衆生に、往生の資格を要求したことがないのである。必定地獄に落ちるそのままで^{さしつか}差支えないと^{ききや}囁いているのである。……」(岩波文庫 43 ページ)

引用箇所は実は「実用品の中に時おり藝術品以上の美が見出される不可思議さ」について語っているのであるが、山折氏の話とは離れてしまうので引用はさけてあります。興味のある方はぜひお読みになって下さい。

(7月2日 2004年掲示板)

■善と悪

「善人なおもて往生す。いわんや悪人をや」

この言のひとつの相は、あなたは善人の仮面を脱ぎ去ることができるか、という問いである。

グルジェフ流に話すと、「善だけでは人間ではない。悪だけでも人間ではない。善と悪があつて、良心が生まれ初めて人間となる」という考えである。(本人が意図したかどうかは別として) 唯円の言は悪人だけに向けられているのではない。グルジェフの「善だけでは人間ではない」という山折氏のような善人にも向けられている言葉なのである。

「あなたが往生する。そうであるならば、麻原彰晃もまた往生する。これは当然のことである。」このことをあなたは認められますか、という問いかけである。

(7月14日 2004年掲示板)

■グルジェフの良心

「善だけでは人間ではない。悪だけでも人間ではない。善と悪があって、良心が生まれ、初めて人間となる」

分かったようで分からない話しである。わたしの理解では、おそらくひとつの意味はこうである。

教え込まれた善、衝動で行なう悪、これらはロボットのような行為であり、それは人間ではない。人間とは、しなさいという善がなかなかできない、してはいけないという悪をしてしまう、それらの葛藤の中で自らの善と悪が溶け出し、その葛藤の溶鉱炉から生まれる金をグルジェフは良心と呼んだのであろう。

(8月9日 2004年掲示板)

6月30日 2004年

●時間

時間はギザギザに進むことが可能かもしれない。

わたしは<今>別の人生を歩んだが、<今>またそれとは違う人生を歩む。

★7月 2004年

7月2日、3日 2004年、6月15日 2012年

●時空

すべての時間が瞬間にしか存在しないように、すべての空間もまた瞬間にしか存在しない。次の瞬間にいまある空間は同じ空間としては存在しないのだから。わたしは同じものを見ることはできないのだから。

その意味で、わたしは世界を変化するものとして見る。

しかし、これはいまのわたしの見方では見ることができないということではない。わたしはただそこに埋没しているだけだからである。

(新掲示板記入可)

■世界

時があるのでなく、選択がある。

空間のなかにわたしがいるのでなく、異なるわたしがいて、好きなわたしを選択する世界がある。

●意識のある人生

出来ないと言わない。

出来ると言う。

困ると思わない。

それも道であると言う。

(7月3日 2004年掲示板)

7月3日 2004年

●意識のある人生

未来のリアリティ

7月4日 2004年

●鏡

他人のころをもてあそんでいる人は、

実は、

自分のころをもてあそばされている。

今日も幸せか。

幸せならならばいい。

10年前幸せならならばいい。

今日も幸せならならばいい。

10年前の幸せだけにしかみえないあなた。

これは、わたしが見る眼がないだろうか。

ああ、わたしに眼があるのだろうか。

(7月4日 2004年掲示板)

●意識のある人生

どのような気づきであれ、メモする。

メモとは形であるから。

形とはこの世界であるから。

(7月4日 2004年掲示板)

7月5日、10日、12日 2004年、6月12日 2012年

●門

外側の門に鍵をかけ、

内側の門にもまた鍵をかける。

外側の扉は高く囲われ、
内側の扉もまた高く囲われている。

わたしの内はわたしの外と照応する。
わたしの内なる無明の暗さは門の固さと扉の高さとにシンクロする。

こんな世の中だからこそ、丈夫な鍵をかける。
当然の話しであるといわれる。

こんな内側だからこそ、丈夫な鍵をかける。
ただし、こちらは見ることはできない。
見ることができないので、それに照応する外の門の固さも扉の高さも、なぜそうなのか、
本当のところを見ることはできないでいる。
(7月12日2004年掲示板)(加筆済み新掲示板)

7月6日2004年

●シンクロ

あり余る時間とわたしの内界とはどのようなシンクロをしているのだろうか。
わたしの怠惰とシンクロしているのか。
わたしのすべきワークとシンクロしているのか。
わたしの過去のワークとシンクロしているのか。

●創造

麻雀での集中力、囲碁将棋での集中力、持続力が生み出すもの。
あるいは受験勉強での持続力。

●意識のある人生～呼吸

今日一日を呼吸法に費やしてみる。

7月7日、8日2004年、6月15日2012年

●モノ

類は友を呼ぶというが、類は親友も悪友も嫌いな人間も呼ぶ。

このことはモノについてもいえる。

わたしの親友としてのモノ、悪友としてのモノ、それはわたしにとって何であろうか。
それはわたしのどのようなところとシンクロして生き生きとしているのであろうか。ある
いは、生き生きとしてくれないのであろうか。

わたしの嫌うモノ、わたしが捨てても捨ててもいつの間にかそばに在るモノ、そのような
モノ、それはわたしにとって何であろうか。

(加筆して新掲示板記入可)

●ラマヌジャン

数学のモーツァルトとも言うべきインドの夭折の天才ラマヌジャン。(加筆～どのようにし
て定理を導き出したかについて) 多くの人はその才をたたえるが、掛け算九九が出来れば、
才などは本来同じことである。それは与えられたものという意味である。もし、与えら
れたものでなく、彼が前世で努力した賜物として備わった才能だとしても、他の数学鈍才
と同じである。それはこの世界で成し遂げたことだけが意味があるからである。

その意味で、彼がこの世界に導き出した無数の定理よりも、彼自身が苦闘した個人的なこ
とにわたしは関心がある。

(加筆して掲示板記入予定)

●意識のある人生～創造力

キャンバスに絵筆で描くように、
一本一本の筆圧を感じるように、
そのように、この世界に意志すること。

(7月9日 2004年掲示板)

7月9日、10日 2004年、6月15日 2012年

●世界

風景をよく見てみることに。

この世界はわたしが創造できるということを知っていること。

●意識のある人生～生まれ変わり・俯瞰

精神世界に興味のある人は皆生まれ変わりのことを信じている。

しかし、

生まれ変わりを信じるのであれば、想像力をたくましくして——そして創造して、当人に
成り切って体験してみることだ。

今生も当人に成り切って体験してみることだ。

生まれ変わりであることを知っていること、成り切ること、このふたつがあってこの世界は十全感のある人生となる。

(要加筆新掲示板記入可)

7月11日2004年

●身体

(土曜出勤の朝、車中で)

身体は今休息を欲しがっているかもしれないが、それは後でも大丈夫かもしれない。

だとしたら、身体にそのことを言い聞かせ、今は疲れにこころを一片でも奪われないことである。

奪われるなら、休んだ方がいい。

●感動

曾我ひとみさんと家族との再会シーンになぜあれほど感動できるのであろうか。

もしかして、あの映像にはうそがないからではないだろうか。

あらゆる価値観を超えて、<本当のこと>であるからではないだろうか。

だから、涙が出てくる。

どのような崇高な考えであれ、それが<本当のこと>でなければ、それが<わたし>でなければ、それが<わたし>にうそをついているのであれば、涙は出てこない。

ということは、もしかしたら、いつも<本当のこと>を生きていないのではないだろうか。

(7月11日2004年掲示板)

(まあ、<本当のこと>という言葉が適切かどうかは別として。)

●問答

「この教室に来て何も変わってこないですよ。」

「あなたは何も払っていないからです。もちろん、参加費1000円のことではありません。それは変わるための対価ではありません。」

(対価とは、ワークであり、それは日常にある。)

7月11日2004年

●意識のある人生～天

天を向いた生き方と地を向いた生き方がある。

せめて、時々空を見上げて生きていきたい。

●意識のある人生～理想とするイメージ

門と塀のない生活

7月16日2004年

●無にある現実

小さい頃住んでいた社宅は平屋の狭い家であったが、庭は結構広かった。当時のことを思い起こすと、ひとつひとつの踏み石でさえ不思議なありがたさをもって感じることができる。西方浄土とはこの世界のことであるというが、もしかすると、このようなノスタルジーの感覚の内に浄土の美しさ、ありがたさが現われ出ているのかもしれない。

今いる家、今いる世界にこのようなありがたさを実感することはない。これは昔がよかったからではない。あと20年か30年かしてこの世界を去るときに、今いた世界のことを思い起こすならば、今いる世界もまたありがたしとしみじみと感じることができるであろうと思うからである。

そして、こういうありがたさというのは、もしかして<無>の中にあるのではないだろうか。諸行無常の<無>の中にあるのではないだろうか。凡夫たるわが身にはこの<無>を常々感じ入ることはかなわぬが、遠い昔、失った関係、この世を去るときにはしっかりととらえることができる。この<無>の中に虚しさとしてでなく、<実>としての世界が<現>われ出てくるのではないだろうか。そしてこれこそが本来<現実>と呼ぶべきものではないだろうか。

(7月16日2004年掲示板)(新掲示板記入可)

7月18日、19日、20日、21日、22日、23日、26日、27日2004年、6月15日2012年

●言葉

言葉には毒素のようなものがある。

どのようなものかという、これではっきりとは言えない。自分でもよく分かっていないからだ。

言葉はモノと似ているところがあって、使いこなせない言葉ばかりを書いたり話したりしていると、わたしの心身を傷つける。まあ、わたしがこの掲示板に書いているようなことも、わたしにとっては相当際どい言葉であって、両刃の刃の意味合いがある。

また、わたしにしっくりこない言葉を平気で垂れ流ししていると、これまた知らず知らずのうちにわたし自身を傷つけてしまう。掲示板に書き込む時にはできるだけ自分なりに推敲を重ねて出すようにしているが、それでも、まあいいかという気持ちで書き込んでしま

うことも多々ある。出してしまった言葉というのは、すでにわたしの身体のようなものとなってしまうので、今さら書き換えるということはなかなか出来ない<>とても困難なこととなる>。

ただし、わたしが言いたい言葉の毒素のようなものというのはちょっと違うものである。
(7月20日2004年掲示板)(新掲示板記入可)

■よく知っていること

故人となられてしまったが、昔倫理学の授業で坂部先生が
「自分はカントを専門にしているが、よく知っていることというのはなかなか話す気になれないものなんです」
とおっしゃっていたが、当時はその意味合いはまるっきり分からなかった。では今どの程度分かっているかは何とも言えないが、こういうことではないかと思っている。

<よく知っている>と、知っていることを言葉によって伝えることができないと感じるので、なかなか話す気になれないというところがある。また逆に、<よく知っている>と、まるっきり知らないことがたくさんあることを感じることで話すことができないというところがある。どちらにせよ、言葉にするとことによってウソになるので、なかなか話す気になれないということである。

もっともらしい説明であるが、このことだけで言い尽くせているとも思えない。それが言葉にある毒素のようなものなのではないだろうか。わたしが<知っていること>を言葉にすると、わたしが<知っていること>が汚れてしまうのである。それは上述の理由のみならず、言葉そのものが持っている毒素のようなものによるものなのではないだろうか。では、その毒素は何に由来するのであろうか。…今のわたしにはまだ分からない…(そして、もしかしたら、間違っただけを言っているのかもしれないのだが…)

ともあれ、われわれはいつか<よく知る<>ことができ、また<よく知りたい>と思った時に、——そういう時が来たならば——、言葉を捨て去ることになるかもしれない、と最近感じている。

(7月22日2004年掲示板)

■

本来の毒素というか、抵抗感というか、そのような抗い難い何かがある。

■言葉のもつ身体性

言葉は身体とよく似ている。言葉がないと、わたしは表現ができない。しかし、言葉を用いるととても消耗する。

言葉を使いこなすことは難しい。

身体を使いこなすことが難しいように。

もしかしたら、使いこなしていないから毒素のようなものを感じるのでしょうか。

進化した星での対話

■焼却～オイゲン・ヘリゲル

ヘリゲル婦人の回想

「…彼が七十一歳も生き延びることができたということはほとんど奇蹟のように思われます。これはおそらくただあの“わたし”のない態度、忍耐と自己放棄によってのみできたことなのでしょう。晩年にはある楽しいな平静がいやましに現れてきました。彼はこの質素な隠棲の家で、幾重もの悩みがあるにもかかわらず、しごく瞑想的にまた献身的に暮らしていました——まるで、私共の考え方によりますとただいわゆる賢者だけができるような仕方です。

彼は身をもってする事例を通じて、ひとり人間が与えるすべてのものを与え続けてきました。それに反して、彼の書いたものは、彼にとってそんなに重要ではありませんでした。多くの人々が期待していた著作を彼は後の世に残しませんでした。彼は草稿を焼き捨ててしまったのです。

おそらくこれは、窮極的なものの全汎性^{はん}に対する畏敬の念からであったのでしょう。この全汎性は言葉の中に呪縛^{じゅばく}されると体験の力を失うものなのです。またおそらくこれは言葉というものの一般が重要さのないためであったのでしょう。…」

(オイゲン・ヘリゲル著 稲富栄次郎・上田武訳「弓と禅」139 ページ 福村出版)

同様の話しは確か一遍上人にもあったと思う。偉大な先人のこころの内を慮ることはできないが、自分なりに考えてみる。

ある漫画家の家が火事になった時、消火の水で家中が水だらけになったが、不思議と辻村ジュサブローが作った人形が置いてある床の間だけはまったく水をかぶっていなかったという話しを読んで、ジュサブローの本を読んだことがある。25年前のことであり、その本は今では手元にないのだが、こういう話しが書いてあった。

「昔人形作りに行きつまった時、この目があるから本当の人形作りができないのではないだろうか。こんな目はいつそう見えなくしてしまった方がましであると思い、目をヤスリ

で突こうとした時に、自分の気持ちの傲慢さに気づき、思いとどまった。」

よくぞ思いとどまったというか、人間の危機状態にはこのような見えざる手がさしのべられる。正しくは、思いとどまったのでなく、思いとどまらされた、というべきものであろう。まあ、それはさておき、自著の焼却にはこのような傲慢さは含まれていないのであろうか。

書き残すことが慢心であれば、自著の焼却もまた慢心といえないだろうか。書き記すという行為にはどこか<それ>が関わってくる。わたしの慢心が筆を持つこともあるが、<それ>がわたしを導くこともある。もしそうした著書であれば、<それ>が矢を射った時に「矢が仏陀に当たる」ように、わたしの言葉もまた「仏陀を記した」ということもあるのではないだろうか。どれほどの未熟者であれ、人間として文章を書いたものであれば誰でも一度は<それ>が書いたという経験をしているのではないだろうか。そうだとすると、書き残すことが慢心というよりも、まさに焼却という行為こそ大いなる慢心といえるのではないだろうか。書いたという行為を否定し、書いたものを焼却するという自己否定こそ大慢心ではないだろうか。

仮にわたしの我欲、わたしの慢心がゆえに表現された文章であったとしても、人はその言葉の毒と共に死んでいくのがいさぎよいというものではないだろうか。

そもそも言葉の毒というものは焼却して消え去ってしまうようなものではないからである。仮にモノが消え去ったとしても、行為というものは消し去ることができないものだからである。行為とは消えるものではなく、「変えることができるだけのもの」だからである。

(7月27日 2004年掲示板)

■グルジェフ

「私は彼が言ったことに対して感謝し、草園で私の仕事を果たさなかったことを詫び、これからはちゃんと果たすということも言った。

彼は感謝の言葉をそっけなく拒絶して、詫びることは無用だと言った。「そうすることは、今では遅すぎるし、草園で立派な仕事をするのにも遅すぎる。人生では、チャンスは二度と来ない、チャンスは一度かぎりだ。草園で立派な仕事を自身のためにするチャンスが一度ある、だがそうしない、だから、この草園で、今たとえ一生働いても、同じことにはならない。だが、このことについて「後悔」しないことも重要である。後悔して一生を無駄にすることもできる。ときどき、大切なことがある、良心の呵責と呼ばれていることである。善くないことをして、ほんとうの良心の呵責をもらえば、これは大切なことになり得る。だが、ただ後悔して、これからはもっとよくすると言うことは、時間の浪費である。この時間は既に去っている、あなたの人生のこの部分は、もう終わっている、もう一度生きる

ことはできない。いま薬草園で立派な仕事をして、それは重要なことではない、間違っ
た理由のために——仮にも直せない被害を直そうとするために、仕事をするであろうから。
これは重大なことだ。だが、もっと重大なことは、後悔したり、残念がったりして時間を
無駄にしないことである、これは、もっと時間を浪費する。人生では、そういう間違いを
しないことを学び、一度間違いを起こせば、その間違いは永遠であるということを理解し
なければならない。」

（「魁偉の残像」256 ページ）

残すのも慢心であり、残さぬのも慢心であるといえるのかもしれない。

本の売却

他の人間の営みと同様に、言葉は焼却しても消えることはない。

■ グルジェフ

舞踏のなかにあるメッセージ

建築物の内にあるメッセージ

客観的藝術（言語も客観的伝達手段ではない）

■ イエスの奇蹟を起こす言葉（創造力としての言葉）

仏陀の言葉

南無阿弥陀仏の十八番目の誓願

■ 言葉と行為

詩人のように話し、遊行僧のように行なう。

（新掲示板記入可）

● モノ

10 万円のメガネより 100 円のメガネを自慢する。

使わないで棚に飾っておく湯飲み茶碗を自慢するのでなく、いつも使う湯のみ茶碗を自慢
する。

しかし、100 円のショップで買ったメガネを自慢することはないし、いつも使う茶碗を自慢
することはない。本来、モノを自慢するということは無意味なことなのかもしれない。た
だ、気に入っているということだけがあるのかもしれない。

7 月 22 日 2004 年

● 意識のある生活～天

人を相手にするのではなく、天を相手にする。

人を相手にする時には、求める、離れる。

天を相手にする時には、与える、近づく。

天とは何か。

それはわたしの内にある理想であり、ふれるとこちよいいものであり、すべてに通じる道である。

●実相

死ぬとシャレコウベとなる。

そして、それが仮相であると知る。

身体が仮相であると知る。

なぜなら、身体はなくとも死者が生きていることを感じとれるからである。

7月23日、29日 2004年、6月15日 2012年

●欲心

もしすべて——富、権力、名誉——、これらがいつでも実現できることとしてわたしの内に存するとしたら、わたしはそれらを欲するであろうか。

すべてのことが実現できることとしてすべてがわたしの内にあるとしたら、わたしは何を欲するのであろうか。

(7月26日 2004年掲示板) (加筆済み新掲示板記入可)

■金の斧

わたしはこの人生で、
金の斧を取るのかどうか。

仏陀にとって、金の斧とは何であったのか。

金の斧はあとで手に入るものなのか。
ただし、あとでは「いらぬ」と言うかもしれない。

7月26日、28日、29日、8月13日 2004年

●意識のある人生～時空

わたしが今日6時に起きたとすると、その世界があり、

わたしが今日9時に起きたとすると、その世界がある。

わたしが今日予定の掃除をしなかったとすると、しなかった世界があり、

わたしが今日予定の掃除をし終わるとすると、その世界がある。

わたしは世界を新たにひとつひとつ創り出す。

わたしは世界の中にいるのではなく、世界はわたしが創り出すのである。

わたしがどのような行為をしようとする世界は不変のものとしてあるのではなく、

わたしのひとつひとつの行為が目には見えづらくとも、世界を変えているのである。

このことはもちろん、言葉にも考えにも言えることである。

(7月28日 2004年掲示板)

■時空

明日6時に起きても、明日掃除をしても、今日6時に起きず、今日掃除しなければ、今日が創り出すことができたはずの世界はもう二度とできない。

この二度とできないということを死を宣告されると知る。

この二度とできないということを親しい人の葬式で知る。

このことをすべて喪失して知る。

このことを他のことを為して知る。

(掲示板記入予定)

■だが、すでに書いたように、もう一度欲すれば人生はもう一度ある。

そして、その人生が今回の人生であるかもしれない。

●意識のある人生

幸も不幸もすべてが我がものである。

幸も不幸も見ることができれば、

それは、我がものであることが分かり、

それを<使う>ことができる。

(掲示板記入予定)

7月27日、29日 2004年

●自己想起

歩行時の歩き方の自己想起、びっこをひかないようにして歩く。

一種の演技。

●楽しいこと

今日これから「秀策」に囲碁を打ちにいくのであれば、ワクワクする。

今日これから、母の付き添いで病院へ行くのであれば、足が重い。

わたしは囲碁将棋が好きである。

しかし、魂はどちらを楽しんでいるのかは分からない。

また、こうもいえる。

しかし、将来のわたしはどちらを楽しむのかは分からない。

わたしとは、何であるのか。

(8月12日 2004年掲示板)

7月28日、29日 2004年、6月19日 2012年

●因果

他人に与えたものをわたしが受け取る。

ただし、「見返りの気持ちなし」に与えた場合である。

この意味で、人はいいものを他人に与えたときには、いいものを受け取ることができない。

報酬を期待して与えるからである。

この意味で、人は嫌なものを他人に与えたときには、嫌なものを受け取ることになる。

まさか、自分がお返しを受け取ることになるとは思わずに、他人に嫌な思いをさせるからである。

(7月29日 2004年掲示板) (新掲示板記入可)

ただ、これとは別にある行為への愛。この場合はどうか。

■因果～自他～愛

わたしはすべてをわたしのためにする。

わたしは弟の持っているキャラメルが欲しかったので、取り上げて食べる。

...

わたしはわたしのためにする。

ただし、わたしの大きさがだんだん大きくなるので、わたしのためにすることは変わってくる。

やがて、わたしは「他人のためになる」ことをするようになる。

ただし、それはわたしがしたいからするのであり、「他人のためにする」のではない。「他人のためになる行為」を欲し、それを行なうだけである。

だから報酬を必要としないし、わたしが他人のためにしたことを他人が受け容れることを強制しはしない。

わたしは、わたしの行為を愛する。

わたしは、わたしのために人生を生きる。

このことは、卑近な生き方から崇高な生き方まですべてに共通する。

(加筆して掲示板記入予定)

■グルジェフの愛

前にも引用したことがあります、愛に関してこれほど簡潔に、そして、その本質を語っているものをわたしは知りません。

人々の間——一人ともう一人の人と——の適切な、客観的な道徳に基づいた愛について説明を求められたとき、グルジェフは答えた。

「他の人が、その人自身に必要なことをするのを助けることができるほどに、あなた自身を発展させる必要があります、たとえ、相手の人がその必要性に気づいていないときでも、また、あなたにとって不利なことになっても、助けることができなければならない。この意味においてのみ、道理に適切にかなった愛と言え、真の愛の名に値する。」

彼は、さらにつけ加えた。たとえだれにも劣らぬ心積もりでも、たいていのひとは、積極的に人を愛することにかけてはあまりに臆病であって、相手に対して何かをしようと試みることさえ恐れる——愛が恐るべき一面をもっていることの一つは、相手がある程度助けることはできても、その人のために実際に何かを「する」ことはできないということである。「ある人が歩かなければならないときに、その人が転んだなら、起してあげることはできる。だが、その人にとっては、もう一步踏み出すことが空気以上に必要であっても、その一步は、その人が一人で踏み出さなければならない。その人に替わって、もう一人の人が、その一步を踏み出すことは不可能である。」

(フリッツ・ピーターズ著「魁偉の残像」261ページ メルクマール社)

●取り込まれること

紙一重であるところの働き～自己検証できるかどうかはその差である

恋人同士

宗教

師弟

詐欺まがいのセールス

謙虚・畏敬の念

不安の連想とインスピレーションの連想

7月29日、8月11日、13日2004年、6月15日、19日2012年

■時空～存在

この世界では、時計も水も残らない、そして、わたしも残らない。

時計も水も連続してわたしの手元にあるということはある、そして、わたしも連続して存在するということがある。しかし、それは一瞬一瞬変化し、しかも永遠にあるわけではない。永遠にあるのは時計がどのように存在したか、水がどのように存在したか、わたしがどのように存在したか、ということだけである。

●エネルギー～言葉と疲労

今朝犬の散歩に行かなかったことがかくも疲労困憊させたのであろうか。

■<時空><創造><自己規定><エネルギー>

最もつらい瞬間が最も選択を変えることができる瞬間である。

そして、選択を変える瞬間だけが人間である。

ところで、この時のエネルギー使用はどのような量、質、変化であるのだろうか。

(6月19日 2012年新掲示板)

●宝箱

昔話によくあるように、最も価値がないように見えるものの中に大切なものが入っているということがある。

最も価値がないように思えるものをもう一度開けてよくみってみることである。

わたしの場合は何か。

深夜の電話番の夜勤の日である。いつからか、トラウマになってしまっている。

(加筆して新掲示板記入可)

これはなぜか？

わたしが見ることができないからである。

なぜ見ることができないのか？

宝はなかなか開けることができない箱の中に入っている方が楽しみが多いと創造者は考えたのであろうか。

囲碁将棋の上達。

●風船

どうせ連想世界に生きていくのなら、不幸をふくらませて連想するのではなく、幸福をふくらませて連想する方が人生は楽しい。

ただし、これまた、時に自分が今どのような連想の中にとらわれているかを想起する必要がある。

7月31日 2004年

●身体

わたしが犬に生まれていたらどのような人生を体験するのであろうか。

魂としての体験と犬の身体をまとった自我としての体験、それはどのようなものであろうか。

あるいはまた、進化した宇宙人として存在として。あるいはまた、想像を絶する存在として、五官以上の機能をもった存在として存在したらどうであらうか。ただし、これらは犬ほど想像力を働かせることはできないかもしれない。

そしてまた、この地球人として生まれてきて

●<関係性><自他>

犬との交流のしかた。

人間との交流のしかた

感情を主眼としみるか。。。

★8月 2004年

8月1日 2004年、3月22日 2010年

●時空

光と感触

五官のうちの触感の位置付けは特別なものがあるのではないだろうか。

ヘレンケラー

触感を無くす実験

■意識のある人生～五感・内と外

直観と結びついた五感。

触れる、見る、聞く、嗅ぐ、味わう。

これらを外なる五感でなく、内なる五感として生かしてみる。

(3月22日 2010年掲示板)

●アタマ

アタマがよいと自分になれる。

これは利己主義である。

アタマが悪いと他人になれる。

これは利他主義である。

果たして利己主義と利他主義を結びつけるものはあるのだろうか。

(9月1日 2004年掲示板)

8月2日 2004年、3月22日 2010年

●自己制御

仕事で席を立たない。

強制か自主か。

内なる自己規定のみが席を立たないことを可能とする。

これは、あらゆる行為に対していえることである。

8月5日 2004年、3月22日、23日 2010年、6月16日、21日 2012年

●意識のある人生～読書・人生

本を読んでいて、いいことが書いてあると思っても、読み終えてしばらくすると、すっかり忘れていく。

線を引いたり、もう一度読み返してみないと、何も残らない。

あるいは、もう一度でなく、何度も何度も読み返してみないと、何も残らない。

人生も読書と同じようなもので、生きていくだけでは何も残らない。一日も終わりに、今日の出来事を追体験して初めて人生を自分自身のために活かすことができる。

あるいは、今日一日の最後というのは疲労困憊で何もする気がしないので、数時間毎の空き時間にそれまでの数時間を振り返ってみるとよいかもかもしれない。

(8月5日2004年掲示板)(加筆済み3月23日2010年)(加筆済み6月21日2012年新掲示板)

■<感情>

読書でこころを打たれる文章は何度も何度も時をへて反芻し、初めて自分のものとなる。自分の人生もこころを打たれるような人生とすることである。

言葉に感情を溶き、身体とすること。★★★

(加筆して掲示板記入予定)

▲感情とエネルギーはどう違うのであろうか。どう同じなのであろうか。

8月6日、8日、9日、10日、26日2004年、2月6日2005年、3月29日2010年、6月16日、21日2012年

●意識のある人生～<時空><選択>

本を読み始めて、おもしろくなければ、本を閉じて、別の本を読めばよい。

本を読み終えて、分からなければ、時をおいて、また読み返せばよい。

この人生を生きていて、おもしろくなければ、人生を閉じて、別の人生を生きればよい。

この人生を終えて、わけの分からない人生であったなら、時をおいて、もう一度同じ人生を生きてみればよい。

ただし、このような生き方はいつでもできる。

死ぬ前でなくとも、たった今でもできる。おもしろい人生を生きること、分かる人生を生きるとはいつでもできる。

今をその始まりとすることである。

(8月6日2004年掲示板)(加筆済み6月21日2012年新掲示板)

■校長の言葉(ハリーポッター)～<時空>

校長はハリーポッターと女の子に言う。

「うまくいかなければ、もう一度戻ってやり直せばよい。」

「人生はやり直せない」とよく言われる。何と恐ろしい言葉であらうか。

「人生はやり直せる」と言われたら、何とほっとする言葉であろうか。
そう、人生はやり直せる、とわたしは考える。(その方が合理的だからである。わたしが世界を創造するとしたら、そのように創るからである。)

「人生はやり直せる」。

そして、この人生が実はやり直しの人生であるのかもしれない。
過去と同じように生きるのか、今度の人生では違うように生きるのかが問われているのかもしれない。

今回は違うように生きてみようと思って、この人生をやり直し始めたのかもしれない。
もしかして、わたしはあの時と違うように生きてしまっているのではないだろうか。
今日は新しい人生を生きてみよう、昨日とは異なる、ウン十年前、ウン百年前とは異なる人生を生きてみよう。

(8月11日 2004年掲示板) (加筆済み新掲示板記入可)

■客観的眼

映画「ハリーポッター」に出てくる校長は生徒にアドバイスをするが、具体的に動くことはしない。

河合隼雄氏が「カウンセラーにはふたつの人格があり、ひとつの人格は普通の人間としてクライアント（患者）の話しを親身になって聞くわたしであり、もうひとつの人格はカウンセラーとクライアントを包みこむような形で見ている客観的眼としてのわたしである」というようなことを言っている。

客観的眼は見ているだけであるが、この眼がカウンセラーとクライアントとの間に単なる身の上相談を超えた関係を築くことになる。

「ハリーポッター」での校長はこのような客観的眼であり、理不尽な行いもあえて見逃す。しかし、見逃しているが、どこかでブレーキをかけているところがある。ちょうど、孫悟空が悪さをして世界の果てまで飛び回っても、お釈迦様の手のひらから超えることができないようにである。

この客観的眼、普遍的眼はカウンセリングや「ハリーポッター」の魔法の学校だけでなく、ひとりひとりの人生の内にも実は存在する眼である。

(8月10日 2004年掲示板)

■時空～支点

時空を超えて支点として働くわたしというものが存在するはずであるが、それは一体何であらうか。

まずはそこにころを向けてみること。

意識であらうか。

■時空～シンクロシティ

昔テレビで「未来の自分」に助けられたという話しをやっていた。テレビのやることなので、どこまで実話なのかは疑問ではあるが、わたしはこういう話しというのは現実に存在することだと思っている。

先日見た映画「ハリーポッター」でもこの話しが出てくる。こちらはフィクションであるが、フィクションの方がリアリティがあるというのがこの世界の不思議なところで、よくできた話であった。

詳細は映画を見ていただくとして、未来の自分は過去、あるいは現在の自分に対してどのような助け方をするかというと、姿を決して見せたりしないということである。石をぶついたりして、あるサインを送り、過去、現在の自分が自発的に行動を変えるようにする。これは、人間の最も輝かしい権利である自由、自らが原因（由）である自由を損なわせないためである。だから、かなり危機的な状況であっても直接的な方法で自分を助けることはなく、仮に直接的な方法であっても、まさか自分に助けられたとは決して思うことはない方法を用いる。それを、過去、現在のわたしは運よく助かったとか、あんな偶然もあるのか、といった表現をする。

わたしは今回の人生で少なくとも 2 回や 3 回は死んでいてもおかしくない出来事に遭遇している。これは、実は 2 回や 3 回実際に死んでいる自分もいるということなのかもしれないということである。2 回や 3 回実際に死んでいて、未来の自分が人生をやり直すために自分を救いに来て、今のわたしがあるということである。

この世界にいる限り、このような時空の話しはなかなか理解しがたい。しかし、せめて、ある偶然、意味のあるような偶然があったときには、その声に耳を傾けてみるのが大切なことは確かである。偶然を偶然としてやり過ごすのではなく、もうひとりのわたしとの対話だと思えば、そこに自分を変えるという崇高な機会が生じるかもしれない。おそらく、そのことだけが人間であることなのだから。

（8 月 8 日 2004 年掲示板）

(参考) 言葉の問題

(参考) フェルミのパラドックス (宇宙人がなぜ地球人とコンタクトをとっていないのか)

■シンクロ

執筆

8月9日、11日、25日 2004年、2月6日、7日 2005年、3月23日 2010年、6月16日
2012年

●わたしの痛み

自分に素直でないことほど不幸なことはない。

なぜなら、

自分がほんとうに望んでいるものを手に入れられないからである。

素直になれずに、望んでいないものを手に入れると、こころが痛む。

こころをたいせつにすることである。

素直であることである。

素直になってこの世のものとあの世のものにふれることである。

(2月7日 2005年掲示板) (3月23日 2010年掲示板加筆して再掲) (加筆済み新掲示板記入可)

8月10日、11日、26日 2004年

●意識のある人生～自己想起

何も考えないわたし

内側のわたし

第三の眼

■無考

考えない⇔在る

夢で得ていた数学の添削の解答

一瞬の睡眠によって疲れが取れること

ヒーリングの時

「弓と禅」における「それ」

多くのことは「自分」がなくて為される。

よきことは<それ>によって為されているように思える。
<それ>とは自分とは違うものなのだろうか。

我欲のある自分と魂としてのわたし

●意識のある人生～食事

1 何を食べているのか

2 どのようにして食べているのか

(本を読みながら、週刊誌を読みながら、TVを見ながら、…)

●シンクロ

「神との対話」がフロッピーに写せず、印刷できないこと→自分のものとする
こと
市野恵子さんの話し、川西さんの話し～執筆すること

8月11日2004年、3月29日2010年



すべてのことはあった方が<楽しい>。ないことから考えれば、あった方が楽しい。楽しいこととしてすべてがあるとみれば、世界は変わる。

●時空～この世界はないのではないか

小説を読んでいてくりひろげられる世界は、実は存在しない。

存在するのは文字が書かれた紙だけである。

しかし、小説の世界に<在る>時には、小説の世界だけがあり、文字の書かれた紙は存在しない。

小説の世界（意味の世界）がなければ、文字は存在しない。

文字がなければ、小説の世界も存在しない。

すなわち、

小説の世界は存在しないし、文字が書かれた世界も存在しない。

小説の世界も存在し、文字が書かれた紙も存在する。

●質問～気

気功で禁煙ができるようになるか。

禁煙と限らずに、嗜好が変わるということはある。

8月11日、13日 2004年、3月22日、3月29日、30日、31日、4月2日、3日 2010年、
9月29日 2011年、6月21日 2012年

●エネルギー問題

地球のエネルギー問題のほかに、私個人のエネルギー問題がある。

両者はとてもよく似ている。

どこかというところ、再利用しがたい形で使用済みエネルギーを廃棄する点である。

私個人の場合は、救い難い思い——嫉妬心、独占欲、差別、慢心、傲慢、小心——という
廃棄エネルギーがある。

(3月29日 2010年掲示板) (草稿「モノ」へ要転記) (加筆済み新掲示板記入可)

■質問9 1～<エネルギー><善と悪>

エネルギーは善用に用いられる場合と悪用に用いられる場合とがある。

分かりやすい例は、人助けと人殺しである。

善用がどちらかは言うまでもない。

だが、ことはさように簡単ではない。

<そのままがいい>ということがあるからだ。

<そのままの流れがいい>ということがあるからだ。

自身の体験では、兄が末期癌で病床にあったときに手をかざしていたが、ある時

「つん (私のあだ名)、ありがとう。もういいよ」

と言い、それ以降は私も手をかざすことはなく、兄は亡くなった。手をかざせば少なくとも
も楽になり、便通もよくなっていたので、効果がなかったわけではない。ただ、ある時か
らはもういいということが生じてくるのである。17年も前の話しであり、当時の自分には
兄がなぜそう言うのかは分からなかった。

今ではよく分かるが、このことをどのように説明するかは難しい。

要は、人助けというものは「私が思うような人助けではない」ということがあるというこ
とだ。

では、エネルギーの悪用はどうか。悪を悪というなら簡単であるが、こちらもそれほど単

踏み出すこと

悪用というのはその当人にとっては悪用ではない。

返事をしない運転手にチップをあげること。

小学校の時の席替え。

アメリカから帰国したグルジェフがフリッツへはらった不当なお礼。そして、〇〇に払った不当なお礼。

悪用された行為は、通常、「目には目を」原則として、悪の循環がつづく。

▲善用の変換

■エネルギー～自他におけるエネルギーの方向性

「私が他人と異なる意見をもっているかどうかはどちらでもよい。大切なのは、私の方から何をつけ加えたら、その人が自分で正しい事柄を見出せるようになれるか、ということだ」。

(ルドルフ・シュタイナー著「いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか」104 ページ イザラ書房)

グルジェフ

じみへの空手家と宇宙人との会話

使い尽くすエネルギーと使い尽くされないエネルギー

～我々は灰にすることができず、ゴミにしているだけである。

燃やすことと使い尽くすこと。

使い尽くせるものと燃やすしかないもの。

使い尽くすというのは可能なのであろうか。

8月12日2004年、4月2日2010年

●犬の睡眠

犬は一日中でも寝ている。
一日中起きていられることなど考えもおよばない。
そんなことはできないという。

●お江戸でござる

スキンシップ

暗誦

8月13日2004年、4月2日2010年

●意識のある生活～創造力の養成

普段していることを、無意識でなく、意識して行なう。
知らないうちに駅に着いたのではなく、これから駅に行くことを<決めて>、駅に行く。
わたしがこれからすることを決め、<そのことを実現する>。
実現させるためには、実現させることを意識して、知っていて、それを志向している。一瞬だけでなく、常に。
このことを、まずは「99パーセント実現できること」から行なう。
(加筆して新掲示板記入可)

8月16日2004年

●鏡～オリンピック

アテネオリンピックが始まった。オリンピックの年は不幸な出来事が生じるという話を聞いたことがある。個人対個人の闘争心、国対国の闘争心がおおられ、その心が影響して戦争や大惨事が起こるといふ論理である。そうなのかあ、という気もするし、ホントかいなあ、という気もする。

人の不幸を喜ぶようなオリンピック精神もあるだろうが、勝者をたたえ、敗者をいたわり、自己の達成をたたえるオリンピック精神もかならずあるはずである。そのような精神をここを開いて見ることができれば、必ずしもオリンピックの年は不幸が起こる年とはいえないようにと思う。人間のこころの内には、勝って喜ぶ精神もあれば、勝ちを譲る精神もある。後者の精神はわざと負けるということとは少し異なる。わたしが一生懸命走ってビリになった。でも、もしかすると、わたしはビリになりたかったのかもしれないのだ。ビリでなければ知りえないことがあるからだ。オリンピックは勝ち負けだけではない。

この世界というのは鏡の像の世界であり、ほんとうの世界とは価値観が全く逆の世界なのかもしれない。もし、ビリの人に金メダルが与えられるのであれば、人は競争するのであ

ろうか、とも思ったりもする。

ともあれ、美しい身体の動きを見ているのはこちよ。柔道の野村選手の動きなど見ていると、驚愕する。ミュンヘンオリンピックだったか？、女子 800 メートル自由形の選手の動きは、キビキビしていてなおかつやわらかく、今でもはっきり覚えている。名前は忘れてしまったが…。人間は死して名を残すというが、わたしにとって彼女は動きを残してくれた人間である。こういうものは、彼女が死んでも、わたしが死んでも未来永劫残っていくものである。

(8月16日 2004年掲示板)

8月17日 2004年

●シンクロ～死期

祖父、原田、父、彩花ちゃん、

死期とのシンクロ

現在とのシンクロ

8月20日、24日 2004年、3月31日 2010年、6月19日、20日 2012年

●意識のある生活～<わたし><動詞>

昨日とは違うように生きてみる。

おそらく、それが人間であり、今日もまた生きている理由であるからだ。

前世とは違うように生きてみる。

これまでの自分とは違うように生きてみる。

おそらく、それが人間であり、今日もまた生きている理由であるからだ。

そして、それがきっと、この人生での本当のわたしであるからだ。

(8月25日 2004年掲示板) (加筆済み 6月20日 2012年新掲示板)

●言葉

大きい言葉がある。

それはわたしを超えている。

だが、それは将来のわたしでもある。

だから、大きい言葉に出会うとき、大きい言葉を自らが発するとき、

「大きい言葉をわたしは実行にうつすことができるか」

と、わたしはいつも問われることになる。

言葉は先立ち、行動はあとを追うからである。

たとえば、

「あなたはどうしますか。」

「あなたの言ったように行動しますか。」

この問いかけは不思議なほど言葉とシンクロする。

(加筆して掲示板記入予定)

■言葉の身体化

言葉には賞味期限がある。賞味期限内に現実世界で表現し、わたしの身体とすること。

8月21日、22日、23日、24日、25日 2004年

●意識のある生活～選択・時空

もしかして、毎瞬、毎瞬、人生をやり直しているのではないだろうか。

実際に、毎瞬、毎瞬、人生はやり直せるようにみえる。

(8月21日 2004年掲示板)



「念 仏」～回数～大乘

「弓と禅」～修業～それ

●出来事～信仰

母がころんで入院したところ、「お宅は浄土真宗だから、そんなことになるんだ。うちの宗教に入れば、そんなことにはならない」と言った方がいるようで、母がえらく怒っていた。まあ、その方は浄土真宗を目の敵にしている宗教教団に入っている方なので仕方がないが、それにしても人の災難につけこむような言動はあまり感心しない。まあ、それを入信のきっかけにしようとする単純さはほほえましいとも言えるし、人のところを何も知らないとも言える。もし、そのように考えるのであれば、当然逆バージョンも考えられるのであって、「お宅は浄土真宗だから、骨折せずにすんだ」とも言える。まあ、これはある意味で「同じ穴のむじな」パターンであり、現実によく見られる話しである。

では、わたくしはこの手の話しにノータッチかというところではない。この世界に偶然はないし、無意味なことはないというのが、わが人生観であるので、この種の特別に見える出来事には特に注意をはらう。ただし、短絡的な「幸、不幸の1対1対応」はしない。出来事というのは、複雑な折り紙のようなもので、折り込まれた紙をどうやって開くかということに一番の関心を寄せている。「出来事があつた時間の前後の出来事」に注意をはらう

とその出来事がある程度は見えてくる。ただし、その出来事はそれに関わるひとりひとりにとって意味は違うことなので、他人にとっての意味合いまではわたしは詮索しない。母が浄土真宗だからひどい目にあったか、浄土真宗だから不幸中の幸いの事故ですんだかということにはわたしは関わらない。これは母の問題であるからだ。

まあ、この種の事故のような出来事に関してはわれわれ人間は相当無力である。まさしく、群盲象をなでるような見解しか持つことができない。

(8月22日 2004年掲示板)

■変化

出来事というのはわたしが同じ生き方をするために生じるのではなく、違う生き方をするために生じることである。

いつもいつも、出来事に対して、自分を変えずに、それは間違っている、それは不運だ、相手がおかしいとか考えていると、違う生き方ができるいう機会をみすみす逃してしまうことになってしまう。

(8月24日 2004年掲示板)

■シンクロ

碁会所に行こうと思うと、身体はわたしにシンクロする。

お見舞いに行こうとすると、身体はわたしになかなかシンクロしない。

こういう場合、身体とは別の全く違う出来事が生じる。

この出来事は身体の代わりにわたしとシンクロしたものである。

この世界では、身体も出来事もわたしにシンクロする。

両者は異なるようにみえるが、実は同じところがある。

(8月23日 2004年掲示板) (08212004)

■群盲

亡くなった本人の意味は、不摂生をした、いつも怒ってばかりいた、もう相当な年齢であった、…、等々いろいろな理由が考えられる。

わたしにとっての意味は、たとえば、グルジェフはこのようなことを言っている。

～引用 (母親の死に関して)

■グルジェフの信仰

これまた、何度も何度も書き込んでいるグルジェフの言葉であるが、とても気にいって

るので再度引用させていただく。

「意識した信仰は自由である。感情的な信仰は隷属である。機械的な信仰は愚かさである。」
（「グルジェフ・弟子たちに語る」メルクマール社）

「浄土真宗に入っているからそんなことになるんだ」とおっしゃったご婦人の信じ方は機械的な信仰である。「ころんでけがをしたら、浄土真宗！」すごい論法であり、いつもいつもその論法で人生を過ごしていくのであるから、機械的という以外に何とも表現しようがない。だが、わたしとて、まるで無縁な話しではない。このような機械的思考方法はそれが機械なるがゆえに自分では気づかないだけである。

機械から自由へ。

「神との対話」の言葉をうのみにして、むやみに引用したりしないこと。
昨日意味があったからといって、今日同じ言葉を使ったりしないこと。
マージャン牌が石ころに感じるような仕方で、世界に参加しないこと。
今自動装置の機械なのか、それとも、自ら手動で動こうとしているのか、そのことを知っていること。

ところで、意識した信仰とはいつの時代になったら実現するのであろうか。その時代には、感情的な信仰、機械的な信仰とはおよそ理解不能なころの状態かもしれない。現代において、意識した信仰というものが考えもつかない信仰形態であるようにである。

（掲示板記入予定）

■機械的信仰（祖父の信仰）

●意識のある生活～＜機会＞

人生は条件を獲得するためにあるのではない。
与えられた条件の中で自分を表現することにある。
（加筆して掲示板記入予定）

●癒し

言葉によって癒すことなどとてもできない時、癒せるのは世界であり、その人自身というわたしである。

言葉が出ないときには、言葉にしないこと。ただただころが出るようにすること。



ライブハウスの歌のピンキリにはあまり差を感じない。

囲碁将棋のピンキリには大いなる差を感じる。

これはなぜだろうか。

音楽に無知なせいだろうか。演奏者のレベルがおなじだからだろうか。

●人工物と自然

昔の自然と人工物

サービスとモノも今は人工物が安く、人の手、自然の手を借りたものは高い。～神と共にいることは高い。

8月24日、26日、29日 2004年

●伝言

昔、歌声で伝え、今、言葉で伝え、将来、気で伝える。

だが、わたしの気はアルファベットをすべて言うことができないレベルである。

●自力と他力

それが作った大黒様

わたしが彫った大黒様

神はわたしが彫ることを欲しているのだろうか。

イエスの手かざしと医師の治療

■それ

<それ>というのは実はわたしのことであり、そのわたしはとても大きいので、<それ>と呼ぶしかないものなのかもしれない。

(掲示板記入予定)

●呼吸法～BOX

最初は息を入れて、息を出すのか。

そのことを知っていること。

やがて、

ではどのように入れるか、どのように出すかのか。

どのように印象を入れて、どのように印象を出していることを知っていること。

では何を入れて、何を出すのか。

「2001年宇宙の旅」での呼吸

●時空

今わたしが持っているものは永遠にあるわけではない。

だが、今あることについては永遠にある。

(掲示板記入予定)

8月25日2004年

●催眠術

人間はいつも自分に催眠術をかけて己を呪縛している。

だが、いつも世界に催眠術をかけて思い通りに生きることでもあるのである。

(8月25日掲示板)

●素もぐり

人生は素もぐりのようなところがある。深くもぐればもぐったほど多くのものを得る。だが、えてして再び海上に顔を出すことができなくなる。暗闇にもぐりつづけていても、光にもどることを忘れてはならない。

●言葉と気

着物がしっくりくる。

8月26日2004年

●「街の灯」

チャップリンの無声映画で「街の灯」というのがある。

目の見えない花売り娘にチャップリン扮する浮浪者が金を手に入れ、手術代を渡し、その娘は目が見えるようになる。その浮浪者は金を盗んだという罪で牢獄に入れられているが、しばらくして出てくると、花売り娘は目が見えるようになって、花を売っている。浮浪者は目が見えるようになったことを喜びその娘を見てみると、無心されている思った花売り娘はお金を浮浪者に向かって投げる。しかし、浮浪者はお金でなく、花を一本もらいたいと言う。花売り娘が花を一本手渡すときに、手と手がふれ、その浮浪者が自分に手術代を出してくれた人間であることを知る。

花売り娘は幸いである。一度は金銭を放り投げたとしても、その相手が実は自分を助けて

くれた人物であることを知ることができたからだ。

だが、現実の人生においてはそのようなことはなかなかない。だから、前世で命を救ってくれたかもしれない人、来世で命を救ってくれるかもしれない人に金銭を投げたり、つばをはいたりする。

(8月26日掲示板)

8月27日、30日2004年、2月11日2005年

●自殺～＜生と死＞

生きることと自殺することは、選択の側面からはイコールである。

それをわたしは選ぶのか、選ばないのか、という側面からはイコールである。

無意識に生き、無意識に死ぬのであれば、そこにわたしはないのであるから、何を怖れることがあるのか。

意識的に生き、意識的に死ぬのであれば、そこにわたしがいるのであるから、何を悔やむことがあるのか。

だが、人は無意識に生き、死期にだけ意識的になれる。

医者から死期を宣告されるにせよ、自らが死期を宣告するにせよ、人は死期にだけ意識的になることができる。

だが、それでは人生は悲しい。

死んでいくときだけでなく、生まれてくるときにも、生きているときにも、いつもわたしがいる人生でありたい。

(8月27日2004年掲示板)

●天秤～＜生と死＞

生きることと死ぬこととは、選択の側面からはイコールである。

生をわたしは選ぶのか、選ばないのか、という側面からはイコールである。

無意識に生き、無意識に死ぬのであれば、そこにわたしはないのであるから、何を怖れることがあるのか。

生も死も同じ重さで、とても軽い。

意識的に生き、意識的に死ぬのであれば、そこにわたしがいるのであるから、何を悔やむことがあるのか。

生も死も同じ重さで、限りなく重い。

どちらにしる、生も死も同じ重さである。

(掲示板記入予定) (草稿転記済み)

だが、人は無意識に生き、死期にだけ意識的になれる。

医者から死期を宣告されるにせよ、自らが死期を宣告するにせよ、人は死期にだけ意識的になることができる。

だが、それでは人生は悲しい。

死んでいくときだけでなく、生まれてくるときにも、生きているときにも、いつもわたしがいる人生でありたい。

(8月27日掲示板)

●本能

俗に、食欲、性欲、排泄欲を三大本能という。

では、

わたしの食欲は多いのか、少ないのか。

わたしの性欲は多いのか、少ないのか。

そして、

多い方がいいのか、少ない方がいいのか。

ところで、人間の本能とは何か？

食欲、性欲、排泄欲は本当に人間の本能なのだろうか？

人間はそれら本能と呼ばれるものを過剰に満たそうとしたり、逆にそれらを抑えたり、拒否しようとする。もしかして、人間の本能とは他の動物にみられる本能とは全く別のものをいうのかもしれない。

人間の本能とはいったい何であろうか。

(掲示板記入予定) (草稿転記済み)

8月28日、30日 2004年、6月18日 2012年

●エネルギー

「新たな理由で生きること。人生の目的はそこから得られるものとは無関係で、そこに注ぎこむものこそが大事だと理解すること。」

人生から得ようとして、蓄積しようとして、実は、エネルギーを浪費しているのかもしれない。そこに注ぎこむことによってこそエネルギーは蓄積されるのかもしれない。そのときのエネルギーの浪費とは深い疲れであり、エネルギーの蓄積とは深い喜びである。そのエネルギーの蓄積庫は無限の大きさである。

(加筆して掲示板記入予定)

●催眠術

催眠術はさめてしまうと、ばかばかしい。

催眠術など、かけてみようと、かけられてみようともしらずに、さめさせてあげよう、さめようと思うことである。

(新掲示板記入可)

●願い～＜受容＞＜創造＞

人は毎日毎日、毎瞬毎瞬願っている。

無意識でありたい願い

病気になりたい願い

注目されたい願い

自分だけが特別である願い

願うことがかなわない願い

何事もかなう。

わたしは、そう願っているのだから。

わたしがそのことを認めることができなくとも、願ったのでかなっている。

だが、もしも、

＜わたしがそのことを認めることができれば＞、

別の願いをして別の生き方をすることができるであろう。

(新掲示板記入可)

■自力と他力

願いは必ずかなうとしたら、それはある意味では、わたしは願いを必ず実現できる、ともいえる。

■無明

病気でないときには、病気になることをおそれない。

だから、わたしは病気を願うことができる。

▲無明

死ぬことなどこわくないといって生きているが、生きているこの生はいつもびくびくした生である。

▲＜生と死＞

本当に死ぬことをおそれずにすむようになれば、生をおそれることはなくなる。

●自他～愛（願い～愛されたい）

ある人間は、今、あなたを愛さないかもしれないが、＜世界＞は、今、あなたを愛している。

また、あなたが相手をおせば、愛される。愛されることは、今ではないかもしれないが。

また、あなたが相手をおさなくても、相手はあなたを愛したことがある。あなたは相手をおさなかったことを忘れてはならない。あなたがしなかったことを相手に求めるのは理不尽というものである。

相手があなたを愛するかどうかは、＜あなたにできない＞ことである。

＜あなたにできる＞ことは相手をおするか、愛さないか、ということである。これは、どちらでもできる。

ある人間は、今、あなたを愛さないかもしれないが、相手をおすることはできる。

愛は「あなたはわたしをおしなさい」という束縛をせずに、＜相手を自由にする＞。

愛は「愛されるという条件」を必要とせずに、＜無条件におする＞からである。

（掲示板記入予定）

■為すこと（教室より）

「愛されたいという願いに対して」

あなたが相手をおさなくても、相手はあなたを愛したことがある。あなたは相手をおさなかったことを忘れてはならない。あなたがしなかったことを相手に求めるのは理不尽というものである。

また、相手があなたを愛するかどうかは、＜あなたにできない＞ことである。

＜あなたにできる＞ことは相手をおするか、愛さないか、ということである。これは、どちらでもできる。

（8月30日掲示板）

ある人間は、今、あなたを愛さないかもしれないが、相手をおすることはできる。

愛は「あなたはわたしを愛しなさい」という束縛をせずに、＜相手を自由にする＞。

愛は「愛されるという条件」を必要としないからである。

愛とは＜無条件に愛する＞ことである。

(掲示板記入予定)



なぜ、この世界が創造されたのか。

それは無条件に愛するためである。

無条件に愛するためには、＜すべて＞を知る必要がある。

この世界は、もともとは存在しなかった、その＜すべて＞の一部である。

● 為すこと (何者になりたいか)

「わたしは、いまは、癒される人である。そして、将来は、癒す人でありたい。」

魚をとってもらう人ではなく、魚をとってあげる人になる、

救われる人でなく、救う人になる、

癒される人ではなく、癒す人になる、

この転換は、たった今、この瞬間から可能である。

そして、また、この転換のみがあなたにとって可能なことである。

魚をとってもらうことはあなたがすることではないので、してもらえないかもしれない。

救われることはあなたがすることではないので、してもらえないかもしれない。

癒されることはあなたがすることではないので、してもらえないかもしれない。

しかし、魚をとってあげること、救うこと、癒すことは、あなたがすることであるから、

たった今、この瞬間から可能なことである。

あなたの人生はあなたができることだけである。

(後日 10 月以降、掲示板記入予定)

■ 矛盾

矛盾しない願いとは自己を実現しようとする願いだけである。

(加筆して後日、掲示板記入予定)

● 自己観察

今小さい頃の自分を振り返るようにして、今、今の自分を観察する。

8 月 29 日、30 日、31 日、9 月 2 日 2004 年、6 月 18 日 2012 年

● モノ～＜自他＞＜所有＞＜身体化＞

私はわたしのものを他人に与えようとする。

だが、どのようなわたしのものも他人は受け取ることはできない。

「あなたの考えは間違っている」というわたしのもの

「知識は伝えることができない」というわたしのもの

「石を持ち上げるとカミがいる」というわたしのもの

「人間は空中浮揚ができる」というわたしのもの

どのようなわたしのものも他人は受け取ることはできない。

受け取ることができるのは、その人自身が選び取ったものだけである。

だから、わたしもまた今日一日、他者から受け取るのではなく、わたし自身が選び取ることだけに人生を費やす。

(8月29日 2004年掲示板) (加筆済み新掲示板記入可)

■ 自他

他者を変えることはできない。

他者が変わることはある。

そして、変わらないことはない。

● トリモチ

お金を稼ぐ人は稼ぐことにとらわれ、稼げない人は稼げないことにとらわれる。

持ち金の多寡に関わらず、それを活かすことにはなかなか気がまわらない。

背中にお金をはりつけて、それを使おうとはしない。

● 瞑想・呼吸法

ひとつのことだけをする。

一瞬に始まり、一瞬に終わる。

こころと姿勢のシンクロ。

顔の緊張をほどく。

呼吸・身体・こころの一体感を感じる。これは、呼吸から入る方が近道のようなのである。

自己想起をして呼吸を始める。そのときに、自分の身体が緊張していることをチェックする。

歩行と呼吸～持ちものはバックパックのみにする
実践教室に取り入れる

8月30日、31日 2004年、6月18日 2012年

●エネルギーの平和利用

核エネルギーの利用はまずは破壊兵器としてであった。
そして心的エネルギーの利用もまずは破壊的に用いている。
怒る、イライラする、嫉妬する、身構える、…
これらのことに莫大なエネルギーを費やし、互いに傷つけている。

だが、別の形でエネルギーを用いることができないものだろうか。

そしておそらくは、この心的エネルギー使用の仕方と核エネルギー使用の仕方は照応している。

そうだとしたら、もっとも簡単な変革はわたしの心的エネルギー使用法を変えることである。

(新掲示板記入可)

■エネルギー～怒り

他人を原因とすることをやめること。(他者の行為を変えることはできない。それは他者に属することである。わたしにできることは、他者の行為に対して怒ることをやめることだけである。)

現象として見ること。

自らが原因となるために、呼吸法、瞑想を行なうこと。

■感情の揺れ

グラスの中の水が揺れている原因は、グラスにある。

グラスとはわたしである。

グラスを揺らさなければ、わたしが揺らさなければ、水は揺れない。

水はグラスの外にいる誰かが揺らすのではない。

もちろん、どのように揺らしてもよい。

「よい」という意味は<できる>という意味でのことである。

怒りたければ、怒ることができる。

悲しくなりたければ、悲しむことができる。

笑いたければ、笑うことができる。

そして、違うように揺らしたければ、違うように感情を現わすこともできる。

そして、それはわたしであって、最終的には、相手が怒らせたり、悲しませたり、笑わせたりしたわけではない。

■「くさいものにふた」の話

●行為への愛

鑑真のトンネル掘り、ひとりでもよいから行なえばよい。

そして、それは実現する。

■行為への愛

わたしの行為とは、誰も必要としないものである。

●太古の利器

最近、パソコンという便利なものができて、わたしはあなたと対話ができる。

また、大昔から呼吸という便利なものがあって、わたしは<わたし>と対話ができる。

こちらはパソコンのネットほど盛んではないが、誰もが使っている。無意識に使っている。

そして、ほとんどの人が使っていない。意識して使っていない。

<わたし>との対話は意識して使わないとONにならないようである。

(9月1日 2004年掲示板) (要加筆新掲示板記入可)

●意識のある生活

胃への光～食物～胃の声を聞く。

呼吸～「気」

印象～

(加筆して掲示板記入予定)

●意識のある生活

毎瞬毎瞬、生命のプロセスと共にいること。

毎瞬毎瞬神と共に呼吸すること。

毎瞬毎瞬電話をとること。

神といふことのチューニングは自分で行なうしかない。

●才能

才能とは何のためにあるのか。

才能豊かな前途ある若者を見ていると、もしかすると、才能とは高慢に陥るためにあるのではないかと思えてしまう。しかし、このような高慢さをへてから人は初めて謙虚になれる。

その意味で、最大の才能というものは最低の才能を見るためにあるのかもしれないと思えてくるほどである。

(掲示板記入予定)

■試験

試験で満点はとれても、人生では満点はとれない。

人生をもし試験にたとえるなら、人生は 1 回の試験用紙でなく、無限にある試験用紙だからである。

今のわたしはわら半紙一枚の試験用紙では満点、90 点を取れるかもしれない。しかし、まったく別の試験用紙があり、その問題に取り組んでいる人がいることも忘れてはならない。

(掲示板記入予定)

■質問～卒業試験

この世界であなたに最後に配られる問題用紙は何であろうか。

この世界で最後に取り組むあなたの課題とは何であろうか。

(6月18日 2012年新掲示板) (教室テーマ予定)

わたし自身、今回この地球上で考えられることは、感情のコントロール、これが最後であり、最初である。すなわち、今である。

■高低

某有名経済人の言葉をしるした本が出た。

この方はもしかしたら、来世ではホームレスとして生まれ、トイレの壁に言葉を書き記すかもしれない。

どちらがわたしであるのだろうか。

どちらもわたしである。

上から見たり、下から見たり、人に書かせたり、自分で書いたりして、人生は解きほぐされてくる。

(9月2日 2004年掲示板)

●仮想世界

この世界はある意味では、仮想世界である。だが、仮想であることをなかなか実感できないようになっていく。だからといって、仮想であることが実感されたら、人生は味気ないものになるかというときとそうではないであろう。

おそらく仮想であることを実感できたなら、この世界での人生は自分を中心にして築くことができ、世界とのわたしとの関わり方もおおいに異なってくるであろう。

スプーンが自在に曲がり、また元に戻る世界

壊れていた時計が自然に動き出す世界

雲が消え、また、雲が出てくる世界

身体を消し、また、生じさせる世界

●一夜漬け

キリギリス人生のわたしは試験がないと勉強しなかった。

人生でも同じで、ルーティンな仕事があってその合間に本当にやりたいことをやってきた。多くの時間があるときには本当にやりたいことはしなかった。

そういうわけで、人生にも終わりがやってくる方がベターなのかもしれない。

でも、いつかは、いつかのいつかは、知り合った皆と永遠の宇宙生活を楽しまたいと思う。

(掲示板記入予定)

●<生命のプロセス>

人生で戻ることはなく、常に往く。

家に戻るときにも、家に往く。

家に戻ることはできない。

人生で戻ることはなく、常に往く。

何のために。

生命のプロセスの芸術行為をなすためにである。

(要加筆新掲示板記入可)

●実現「力」

「力」は長さである。

マージャンのイメージ

寒天状の「気」

●愛の姿

この世界では、人生のあらゆることが利用される。

無意味にみえること、悪行、唾棄すべきこと、
すべてが利用される。

哀しいかな、
そのようなときにだけしか、愛が現れているしるしを見ることができない。
だから、しるしを見ることができたときには、
もしかしたら、無意味にみえること、悪行、唾棄すべきこと、
これらにも愛が現れているかもしれないと思って見てみることである。
(加筆して新掲示板記入可)

●いる意味

わたしが嫌でもわたしを必要としている人がいるかもしれない。
魂はいることを望んでいるのかもしれない。

8月31日2004年

●言霊

言葉はまず夢を呼び出す。

★9月2004年

9月1日、2日、3日、4日2004年、6月21日2012年

●アキレスとカメ

目的をもたぬこと

●時空

今日のことを明日するのでなく、今日のことは今日行なう。
明日は別の日であり、明日やったことは別のことである。
今日のことは今日行なうことに意味がある。

区切られた時間がある。

6時から9時まで飲むことを楽しむ。

終わりまで、楽しむ。

1時から4時まで書くことにあたまをしぼる。

終わりまでしぼる。

区切られた時間がある。

一瞬一瞬を生きる。

一瞬一瞬に意識があり、目的があり、生命がある。

●時空～わたし

小林秀雄は生まれ変わって、自分の文章を読むということがあるのだろうか。

過去のわたしが書いた文章を今わたしが見て、そこに<在ったわたし>をまた体験する。

あるいは、もしかして、そこに<在ったわたし>はいわゆる自分ではなかったかもしれない。

でも、わたしが今感動するということはそこに<在った存在>とつながっているからではないだろうか。

そのつながりは、もしかして、わたしは<在ったわたし>であるといつてよいようなつながりかもしれない。

そのような<在ったわたし>の文章である。

「賀古（かこ）の教信は、西には垣（かき）もせず、極楽とは中をあげあはせて、本尊をも安（あん）ぜず、聖教（しょうきょう）をも持（じ）せず、僧にもあらず、俗にもあらぬ形にて、つねに西に向ひて、念仏して、その余（よ）は忘れたるがごとし」

（「一言芳談」より）（柳宗悦「南無阿弥陀仏」岩波文庫 24 ページ）

（9月9日 2004年掲示板）

●質問～BOX～スーパーコンピューター

アーサー・ケストラーはわれわれ地球人をスーパーコンピューター以上の存在であるのに「おつりの計算にしか自分自身を使わない存在」であると言った。

では、スーパー・コンピューター以上の存在とはどのような存在であるか。

月世界までの運行計算ができるのに、目の前の商品のおつりの計算にしか使わない。

内を見ることができるのに、外しか見ていない。

外を見るだけで、内を見ようとしない存在。

(要加筆新掲示板記入可)

9月2日、11日、12月8日 2004年、6月22日 2012年

●意識のある人生～＜身体化＞＜機会＞

余暇の時間を＜本当のわたし＞のために与える。

仕事の時間も＜本当のわたし＞のために与える。

雑用の時間も＜本当のわたし＞のために与える。

すべての時間を＜本当のわたし＞のために与えること。そのためには、どのようにすればよいか、その時々生き方を意識的に選択すること。その生き方に注ぎ込むエネルギーを惜しまぬこと。

(12月15日 2004年掲示板) (加筆済み 6月24日 2012年新掲示板)

■機会

自分が望むように自分にとって無限大の余暇の時間が必要であれば、今生でそのような時間が与えられた人生となるであろう。

(掲示板記入予定)

9月3日、4日、12月8日 2004年、11月23日 2005年

●わたし

＜それ＞の獲得は、自己放棄とは異なり、むしろ逆である。

＜それ＞の獲得は、新しい自己の獲得である。

より正しくは、新しい自己の目覚めである。

●質問～＜元気＞＜意識のある人生＞

今日一日が輝けば、明日一日も輝くことができる。

今晚の夜の12時まで輝けば、12時以降も輝くことができる。

今の一瞬が輝けば、次の一瞬も輝くことができる。

いつも、今、火をともししておくことである。

では、火が消えてしまっている時に火をつけるにはどのようにすればよいだろうか。

人生には、時々何が原因というわけではなく、火が消えてしまったような時が生じる。

そのような時にはどうすればよいだろうか。

(6月24日 2012年新掲示板)

簡単である。

神を呼び出すことである。

神に助けを請うことであり、

神に触れてみることである。

求めれば、しるしは必ず得られる。

(加筆して掲示板要転記)

●意識のある人生～仕事

立ち寄る碁会所と同じく、立ち寄る仕事であること。

碁会所にも飲み屋にもしばられている自分がある。しばられているのは仕事だけではない。

仕事が嫌であるというのは人生の変わり目かもしれない。だが、きれいな分かれ方もある。

9月4日 2004年

●仕事

仕事を終えた後のことを楽しみにして仕事をしないこと。

世界が溶けこむように仕事をする事（これは他のことも同じである）。

楽しい囲碁将棋をしていても、囲碁将棋がわたしでないように、仕事もわたしでないし、他のこともわたしではない。

わたしとは、囲碁将棋と同様に、「仕事のある場面でどのような選択をしてわたしを表現するか」ということだけである。

(新掲示板記入可)

●機縁

不仲であることによって、これまでにしたことのない体験、たとえば、おしゃべりしたいができなくなる、という体験ができる。その体験とは自分自身とても意味のある体験なのかもしれない。

●呼吸

呼吸とシンクロする世界

シンクロ≒創造

●遊び駒

郷田九段の快勝譜だけ最後まで観戦。終盤、つい7筋ばかりに目がいくが、4筋の金銀を攻めて、馬を活用し、最後には飛車まで世に出す手順に感嘆！ 将棋は遊び駒を活用するのが、遠くとも早い寄せとなる。ただし、実行するのは難しい。つい、あわてる乞食になってしまうわが身の余裕のなさが悲しい。

ところで、わが人生の遊び駒とは一体何であろうか？ もしかして、遊び駒を活用しないで、目先の損得にとらわれていないだろうか。

(9月4日 2004年日記記入)

9月5日、6日、12月8日 2004年、6月22日 2012年

●自他

職業だけの付き合いの人がいる。

やめれば二度と会わないであろうし、やめれば互いの言葉が変わってしまう関係の人がいる。

こういうのは、どういう縁なのか。

どういう意味なのか。

●金銭

お金を主（あるじ）として生きていくか。

お金を僕（しもべ）として生きていくか。

もちろん、お金は主などではない。

主は誰であるか、わが家のお金によく言い聞かせておくことだ。

もちろん、お金は僕である。

僕ではあるが、僕ゆえに大切につきあうことだ。

わたしには、両方欠けている。

(9月19日 2004年掲示板)

■主（あるじ）

わたしの主は何であるか。

わたしであろうか？

もし、わたしと言い切れるなら、それはそれですばらしいことである。

では、そのわたしとはどのようなわたしであるのか。

そして、そのわたしは今日どれだけの時間、主としてふるまっていたであろうか。

(12月12日 2004年掲示板)

■意識のある生活～生きていくためのツール

呼吸を助けとして、内側から人生を感じる。

お金を主人としないこと。

(新掲示板記入可)

●<知識>の獲得～ワーク (仕事)

指摘を受けて、自分自身が認めることのできる過ちと

指摘を受けて、自分自身が認めることができない過ちとがある。

これは<知識>があるかどうか、<知っている>かどうかという問題に帰する。

<知らない>ことは、認めることも、見ることもできないということである。

<知る>ためには、仕事をしなければならないし、仕事をする<知る>ことができる。

なお、この場合の仕事とは職業の仕事ではない。意識的に自分と世界に働きかける作業のことである。

(9月14日2004年掲示板)(加筆済み6月22日2012年新掲示板)

9月6日、7日、9日、12月8日2004年、6月22日2012年

●<所有>

いろいろな出来事がある。いろいろな現象に遭遇する。

そのような出来事、現象は相手のものである。

あるいは、創造者、神、SOMETHINGのものである。

だが、

<その出来事に対して、わたしがどのように受け取るか>

ということはわたしのものである。これだけはわたしのものである。人生でまず目を向けるべきは、このわたしのものである。

(9月6日2004年掲示板)(草稿「所有」転記予定)(加筆済み6月22日2012年新掲示板)

■方法

このわたしのものを手に入れる方法はいろいろあるが、ひとつの方法は、

「呼吸に意識をあてる」ということである。

すなわち、

「神に意識をあてる」ということである。

(新掲示板記入可)

「神との対話」では、魔法の質問と称している方法がある。

これが本当のわたしだろうか。

今、愛なら何をするだろうか。

●トンボ

先日バスに乗っていると、トンボが迷いこんできて出られなくなってしまった。光のある方へ行こうとして窓ガラスにくっついているが、冷房車のため窓は閉めきられていて出られぬ。窓を開けてやろうとすると、こわがって逃げてしまう。何度かこころみて、やっと外に逃がしたが、ひょっとするとわれわれ人間も窓にへばりついて外に出ようともがいているトンボのようなものではないだろうか。窓を開けてくれる出来事はあるのだが、われわれにはその意図は見えぬ、こわがって逃げてしまう。窓開けは、われわれには不幸な出来事のように思えてしまう。おそらく世の不幸とはおおむねそのようなものであろう。

(9月8日 2004年掲示板)

●時空

わたしのこれまでの人生に多数の選択肢があった。多数の選択肢の中から選んできて（あるいは選ばずに成り行き任せで）今のわたしがあるわけだが、もしかして、他の選択肢を選んで生きているわたしというのもひょっとして存在しているのではないかとちらっと妄想したりしている。

そのような妄想が浮かんでくるほど（本当かもしれないが）、わたしの人生は支離滅裂で統一性がない。これら多数を生きているわたしがひとつになって生きるなら、それはどれほど大きな力になるだろう。

(加筆して掲示板記入予定)

●眼

「将棋会館」の記者控え室では将棋のプロ棋士が「囲碁」の棋譜を並べていることがよくあるが、故大山康晴名人は囲碁も強く、局面をちらっと見るだけでプロの碁かアマの碁かを判別できたという。

同じようなことはコリン・ウィルソンも言っていて、詳しい話しは忘れてしまったが、工場の廃屋に残された機械を見たときに、機械のことを何も知らない者が見ているものと機械のことをよく知っている者が見るものとは風景がまるっきり違う、ということを書いている。

こういう違いは、囲碁将棋のようなゲームの場合に結果として如実に出る。その差は天文学的数字といたくなるような違いである。ただ、通常的心象風景ではこのような違いを測るスケールが存在しないので、わたしが大山康晴名人に将棋の指し手を意見するというようなナンセンスが多々生じる。

もちろん、逆のこともある。だから、＜人生では沈黙して自分の風景を歩いていくしかない＞という事態がしばしば生じる。

(12月14日 2004年掲示板)

(参考) 仏陀、モーリス・グリーン

■内からの眼

人間はエネルギー体であるとするハトホルの言。

●呼吸

いつもあるもの。

呼吸とは、多摩川の河原にある石ころのように、何のとりえもなさそうに、ありがたそうもなく、いつでもあった。

しかし、手にとってみると、不思議な感覚がある石であった。

(9月17日 2004年掲示板)

■カメの呼吸

海上で一息入れる。

■Be Here Now

いつもその瞬間だけの呼吸。

今を生きることと通じていく。

●行為

何もしないよりもしたことの方がよい。

父とお酒を飲んだこと。

父へのプレゼントしたネクタイの話し。

●お墓

わたしの墓碑銘はこのHPに残したことすべてであり、わたしがこの世界で呼吸したすべての思いである。

(要加筆新掲示板記入可)

9月7日2004年、2月1日2005年

●意識のある人生～呼吸法

不思議なことであるが、内なる風景は、呼吸を意識するとまるっきり変わってしまう。

(掲示板記入予定)

9月9日、12月8日2004年、6月22日、24日、25日2012年

●天賦の才

才能とは神とどれだけ長く、どれだけ深く交流できるかということにつきると思っている。ただし、それができるかどうかは人間自身によるものなので、その意味ではその才はその人自身のものである。

●愚行

われわれ大人は、どのようにへたな子どもの絵を見てもそれを非難したりしないように、創造者もわれわれ大人のどのような愚行も非難せずに見ているのかもしれない。

■<自由><似非愛><善と悪>

大人のまねをして描く子どもの絵はどれほど上手でもつまらないものである。

これは大人の行いについてもいえることである。

大人が神のまねをして愛に生きたとしても、神の目からみたらとてもつまらない生き方であろう。

なぜかという、神は「神まね」の中にいないからである。

その人自身を生きる時にだけ神がいるからである。

(2月1日2005年掲示板)(加筆済み6月25日2012年新掲示板)

●逆～自他

わたしが善人であるかどうかは相手次第である。

感じのよい人であればわたしは善人になるし、感じの悪い人であれば悪人になるからであ

る。

わたしが善人であるかどうかはわたし次第である。

感じのよい人に善人になり、感じの割る人に悪人になるのはわたしだからである。

だから、

感じの悪い人にも実は善人になれる。

それもわたしである。

立派なことをした人でも嫌いである場合がある。

ひどいことをした人でも好きである場合がある。

相手が善人であるかどうかはわたし次第である。

ただし、わたしが善人であるかどうかはわたし次第である。

(加筆して掲示板記入予定)

●意識のある人生

毎日意識して別の道を通る。

9月10日2004年

●現実・具現化・

今はうそつきであるかもしれないが、ずっとうそつきでありたいとおもわない。

知識の量とそれを育てること。

この世界では知識を育てなければうそつきである。

●知識

土壌に蒔く種子が多ければ多いほど、よく育つというものではない。

多くのことを知っているということは、それが種子となり樹木となる可能性を秘めてはい

る。

しかし、その種子のうち、育てることができる種子はどれほどあるのであろうか。

もしかして、すべての種子が種子のままに終わるのかもしれないのに、人は多くの種子を

持っているだけで自分は特別な人間であると思いきんでしまっている。

(9月11日2004年掲示板)(草稿「知識」転記予定)(4月18日2003年ノート)(新掲示板記入可)

(参考) シュタイナーの読書

■動詞

あの世界での本当のこと

以前両親が住んでいたところは周りが農地の中に作られた建て売り住宅で、駅まで行き来するバスの中から眺めていると、畑の一角に立派な石碑が建てられていていつも花が添えられてあった。どういういわれの碑であるかということ、江戸時代に直訴に行った農民の墓であるということであった。当時直訴した者は死罪であった。悪政の中、誰がそれを訴えに行くかで、志願者を募ったに違いない。誰が行くのか、死罪を望む者はいないであろう、家族のいないものはいないであろう。誰が行くのか、村で一番のろくでなしを選んだらうか、それとも、この者だけは行かせたくないという村を背負う人物を選んだらうか。おそらく、この者だけは行かせたくないという人物が志願して、直訴に行ったのであろう。

人は死して名を残すといわれるが、そうではない。

人が選んだことがこの世界に影響を残していく。

選択はこの世のことではない。

だから、生死を越えている。

そして、それがわたしである。

わたしは、他者の選択、他者のわたしにふれてところが動く。

(掲示板記入済、内容すり合わせ)(新掲示板記入可)

9月11日2004年

●意識のある人生

外にいるのではなく、いつも内から外を見ている。

■集中

集中についてはどう考えるか。

内と外との一体化というべきなのだろうか。

●世界

自動性と主体性

●相談

あらゆる相談事で気をつけること。

それは、相談者のこころの内に何が生じていて（嫉妬、怒り、貪欲）、それを見ることができかどうかということ。

9月12日、20日、12月8日 2004年

●利己主義

利己のない利他は疲弊するが、利己のある利他には終わりはない。

その利他はわたしだからである。

（12月16日 2004年掲示板）

9月14日、20日、24日 2004年、6月22日 2012年

●ヒーリング～「報酬」＜神聖なる二律背反＞＜行為への愛＞＜一体＞

治療者の報酬とは病気が治ることである。

これ以上のことはない。

それはわたしが為したのであるのだから、それ以上は求めない（行為への愛）。

治療者の報酬とは病気が治ることである。

これ以上のことはない。

それはわたしが為したのではないのだから、それ以上求める権利はない。

（9月22日 2004年掲示板）（加筆済み 6月22日 2012年新掲示板）

●為すこと

他人を変えることはできないが、自分を変えることはできる。

現象を変えることはできないが、自分の受け止め方を変えることはできる。

だが、自分で為すことはとても大きな仕事となるので、心理学の「影」のように、自己を相手に投影し、相手や現象を変えようとする。

だが、これはできない。

できることは、困難ではあろうとも、わたしが為すことだけである。

（12月13日 2004年掲示板）

9月15日、17日、20日、22日、23日 2004年、2月1日 2005年

●世界

天才も、鈍才も、

奇人も、俗人も、

善人も、悪人も、

この世界では生きることが<できる>。
人間だけが気に入らない人を生きないようにする。

(9月15日 2004年掲示板)

■世界～選択

この世界では生きてもいいし、死んでもいい。
この世界では生きることもできるし、死ぬこともできる。
それをわたしが選ぶことが<できる>。

だが、他人が選ぶことができるという話があるようだ。
裁判官が選ぶことができる、という。
神が選ぶことができる、という。
裁判官が選ぶことは知っているが、神が選ぶかどうかはわたしは知らない。

あなたは生きていてはいけない。

書いてみると、すごい言葉である。
(9月23日 2004年掲示板) (新掲示板記入可)

■自己決定

>あなたは生きていてはいけない。

>書いてみると、すごい言葉である。

わたしは生きていけない。

これまた、すごい言葉であるが、わたしには大きな力というか、大きな波というか、大きなところというか、そのようなものを感じ、絶望的ではあるが、どこか希望が感じられる言葉である。

(9月24日 2004年掲示板)

■嫌いな人

やがて、やがて、その後、やがて、
わたしが嫌いであったすべての人が自分の成し遂げたいことに関わり、助けていた、
このことにわたしは気づくであろう。

(9月24日 2004年掲示板)

9月17日、20日 2004年

●意識のある人生～手本

この人生で達成すべきこととは既に示された。

空中浮揚もしたし、光体験もしたし、ヒーリングもした。

だが、それらはしたというよりも、示されたという方があたっている。

これからのわたしにとっては、それらが常に人生のうちに組みこまれていること。

もちろん、過去の体験そのものが目標ではないが、自然にわたしの内と外とに在ること。

そして、そのように、生きることである。

●時空

過去への働きかけはできるのであろうか。

現在に働きかけるとはどういうことであろうか。

もしかして、この世界は多重存在であって、一瞬一瞬その多重存在からひとつのわたしを選択しているのかもしれない。

もしかして、過去世だけを生きているのかもしれない。人生のやり直しとして。

時空を超えるもの～気、意識、テレパシー

■知識

どちらでもよい。実感できるか否かということ。

地球が丸いということはわたしの知識となっているのであろうか。

美濃囲いでは一段金が急所の駒である、ということを知ってはいるが、それをわたしは駆使できているのであろうか。

多重世界を知ること。

●草稿

分からないままでもよい。

間違えていてもよい。

有機体としての書物。

テレパシーのある書物。(スティーブン・キング)

●時空

相手との距離よりも自分の足までの距離の方が長いということもある。
地続きとしての宇宙。

9月20日、24日、12月8日、13日、12月17日 2004年、6月22日 2012年

●世界

神のすばらしさ、人間のすばらしさを感じるためにこの世界が創造されたのだとしたら、人間の創り出すもの、小説、映画、囲碁将棋の棋譜、等々もまた人間のすばらしさ、小説、映画、囲碁・将棋のすばらしさを感じるために創造されたものである。

この世界が創造される前の神、人間よりもこの世界が創造された後の神、人間が尊いように、この小説が、映画、囲碁将棋が創造される前の人間、小説、映画、囲碁将棋よりも創造された後の世界の方が尊い。

どのようなことであれ。

どのような唾棄すべき行為であれ。

(新掲示板記入可)

●表出

隠すことにより現れてくるものがある。

それは隠すことができずに、いつも現れる。

汚いと思うものを隠すことはできるが、
わたしが汚いと思うことは隠すことはできない。
恥ずかしいと思うものを隠すことはできるが、
わたしが恥ずかしいと思うことを隠すことはできない。
だから、隠せない思いはいつか必ず現れる。

なぜなら、思うことはこの世界とあの世界にまたをかけているので、
あの世界で現れたことはこの世界でも現れ出てくるからである。

(12月18日 2004年掲示板)

そして、あの世界で思いが隠すことができないように、その思いはやがてこの世界に表出してくる。なぜなら、思いがこの世界の源だからである。そのようにして、隠したものがやがてすべて表われ出る。

●ヒーリング～＜行為への愛＞

今日また外を歩いていると、通りすがりの人からパンフレットを渡された。

皆に配っているということではなく、通りすがりにわたしを見て渡した。

最近とみに古傷が痛み、足をひきずっているからだろうか。

手かざしのパンフレットである。

治してもらいたい、と問われれば、治してもらいたい。

治してあげると、と言われれば、結構です、と答える。

天邪鬼なのだろうか。

治癒というものは、どこか本人の関われるところがなければ、それはうさんくさいものを感じてしまう。

わたくしもそういう経験はあるが、少々ヒーリングの心得があると、それを使ってみたくなくなってしまふ。この気持ちはひょっとして核兵器を使ってみたくなることとどこかつながってはいないだろうか。

人間が何かを純粹に為すということはとても難しい。

しかし、もう一度子どものように、そしてまた、大人のように為すしかない。

(9月21日 2004年掲示板)

■偉大なる利己主義

>わたくしもそういう経験はあるが、少々ヒーリングの心得があると、それを使ってみたくなくなってしまふ。この気持ちはひょっとして核兵器を使ってみたくなることとどこかつながってはいないだろうか。

わたしはわたしの利益のためにヒーリングを行なうし、わたしの利益のために核兵器を使う。このことを知っていることが、わたしの行為が継続していくことの第一条件である。ただし、両者の行為には大きな違いがある。その違いを埋めるものは、この「わたしのためにすること」、この「利己」を大きくすることだけである。もちろん、わたしが望むであればの話である。

わたしは他人のためにヒーリングを行ない、核兵器を使う。このような自己隠蔽に陥るとき、わたしの行為はバラバラとなる。

(12月13日 2004年掲示板)

■偉大なる利他主義 (神聖なる二律背反)

だが、他方こうもいえる。

わたしは＜他人のために何かを行う＞ということを通じてしか、＜わたしのために何かを成し遂げる＞ということとはできない。

(12月14日 2004年掲示板)

●意識のある生活～＜言葉＞＜為すこと＞

言葉が言葉を呼ぶ。

大きな言葉を書く。

大きな言葉を表現する。

そうすれば、つられて大きな言葉が次々に湧いてくる。

●呼吸法

額での呼吸

●意識のある生活～多重世界

世界は多重構造になっている。

あらゆる世界がある。

今の一瞬が岐路である。

9月22日、23日、24日、27日、10月2日 2004年

●別人

中学のクラス会の案内が来た。

思い出すことは、ある人のことである。

彼は小学生のときから知っているが、ガリ勉で人をバカにする嫌な奴であった。でも、今はまるで違う。

別人である。

もちろん、成長したとか、大人になったとか、という言い方はできるが、久しぶりに会うと、別の人間と会っているような感覚になる。

この感覚は不思議な感覚である。

(9月25日 2004年掲示板)

■遡及

他方、今の彼から昔の彼を見ることができる。

これまた、昔の彼は別人のように思える。

あらゆる不快な出来事、あらゆる不快な人間がこのように見ることが可能であれば、この世界もまた別人となるであろう。

(10月1日 2004年掲示板)

■仮想世界

昔はあのように見えた。

今はそのように見えた。

どちらが本当なのであろうか。

昔も、今も、あのように、そして、そのように見えただけではないだろうか。

(10月2日 2004年掲示板) (草稿「イメージーション」に転記)

●イヤなこと

イヤなことも見方を変えてみれば、別のものに見えてくるかもしれない。

わたしは不要品をゴミとして捨てる。

だが、ある人にとってはそのゴミは拾って大切にとっておきたい貴重品かもしれない。

骨董品の価値。

●雲消し

おもしろがることによって、初めて実現することがある。

また、おもしろがらなくとも、何回でも実現可能なこともある。

■成長

おもしろがることは最初である。

意識して行なうことは2番目である。

では次に行なうことはどのようにしてであらうか。

●矛盾 (神聖なる二律背反)

世界一やわらかい盾と世界一やわらかい矛とを一戦交わらせたら、どちらが勝つであらうか。

これは矛盾ではない。

両方は、互いに交わるからである。

勝負をすると交わる。

これがわたしの「囲碁将棋の勝負」の理想である。

(10月1日 2004年掲示板) (新掲示板記入可)

9月24日 2004年、1月31日 2005年、6月23日 2012年

●意識のある人生～出来事

今日あることはすべて意味がある。

意味が見えるようになること。

意味が見えれば、今日の人生は二度と生じえない。

同じことを何度も何度も体験するような無明に陥らないこと。

世界を見て、新たな人生、別の人生を体験すること。

●わたし

内なる風景が大きいと、世界はすべて入ってしまうかもしれない。

(喫茶店で窓外の景色を見ながら思ったこと)

(10月2日 2004年掲示板) (草稿要転記)

●神

幸運といわれるような時にだけ神を知るのではなく、不運といわれるような時にもまた神を知ること。

(9月30日 2004年掲示板)

●利己主義

ただあるのは、わたしの行為だけであり、あらゆること、迷惑な人も、…の人も、わたしの行為を成し遂げるためにある。

●カウンセリング

不遜を取り払うこと

●自由

親から行かされる買い物は嫌いであるが、わたしが行く買い物は好きである。

9月25日、10月2日 2004年、6月23日 2012年

●エネルギー

いつも「湧出」であったときのことを思い起こすこと。

でなければ、「湧出」であること。

■方法

体を動かすこと。

湧出する方法で動かすこと。

呼吸を止めること。

■意識のある人生

無意識から意識へ。

9月27日、10月2日、5日、24日 2004年、6月23日、25日 2012年

●意識のある人生～姿勢

まっすぐな樹木のように立っている。

内側も、外側も。

(10月8日 2004年掲示板)

●意識のある生活～＜創造＞

好きなことだけをするために全精力をついやす。

(掲示板記入予定)

キーワードは「好きなこと」と「全精力」であるが。

好きなこと～わたし～わたしの大きさ

■源泉

嫌っていることを嫌うのではなく、好きなことをもっと好きになり、好きなことから嫌いなことを変えていく。

●＜時空＞～＜今＞＜創造＞

30年前を存在していないというなら、一瞬前もまた存在していない。

一瞬前を存在しているというなら、30年前もまた存在している。

30年後を存在していないというなら、一瞬後もまた存在していない。

一瞬後を存在しているというなら、30年後もまた存在している。

この意味で＜今＞という時間はかなり特殊である。

＜今＞というのは、＜存在＞と結びついているからである。

その意味での＜今＞というのは時間性を超えた存在となる。

＜今＞は過去とは決してならいし、また、未来とも決してならない。

<今>とは、過去や未来のように存在しない時系列のひとつではない。

あるいは、

<今>とは、過去や未来のような仕方で存在している時系列のひとつではない。

<今>とは通常使われている「過去、現在、未来」という意味での「現在」ではありえないことであり、

<今>とは<存在である>

とか

<今>とは<わたしである>

とか

<今>とは<創造である>

とか

そのように言う方がわたしにはしっくりくる。

——蛇足——

だから、今というよりも、「Be Here Now」といった方がぴったりする。

そしてまた、30年前、一瞬前、今とでは何が同じで何が違うのであろうか。

(10月3日2004年掲示板)(加筆済み新掲示板記入可)(草稿要転記)

■創造と時間

よく言われることであるが、創造は未来にそうなると思うことによってではなく、<今そうである>というところにいることによって、為される。

だから、いつも、

今、今、今、

である。そして、その今に、

どのように存在しているか、どのように存在しているか、どのように存在しているか、

である。

(新掲示板記入可)

●準備

幽体離脱には意識の継続性が必須の条件となるのではないだろうか。

向こうの世界がわたしの意識によって自由に変貌するのだとすると、わたしが今のような万華鏡の世界であるなら幽体離脱の世界を生きていけないかもしれないからである。

●そろそろ

小説を読むこと。

9月30日、10月2日 2004年

●世界とクオリア

「囲碁」の用語で「車の後押し」という打ち方がある。これはひどい俗手のことで、わたしも初心者頃はよくやった悪手である。しかし、今はよほどの必然性がないとやらないし、他人が打つのをみているだけで気分が悪くなる。わたしにとっては、「車の後押し」は時間の経過と共に、棋力の向上と共に、異なる風景に見えるようになってしまった。そして、その景色から受ける感覚もまったく別様のものとなってしまった。

このことは囲碁や将棋、藝術に関わることであればある意味でみやすい話しである。だが、この世界において異なる風景と感じることに限っては簡単ではない。皆同じものを見ているという合意があるからだ。

■飲酒世界

別のクオリアを得ることができる世界。

囲碁・将棋

気功教室

★10月 2004年

10月1日、4日 2004年

●モノに内在する法則

モノにある法則とは何か。

ひとつは、エントロピー減少へと向かうことを是とする法則である。

● 仮想世界

いわゆる現実とは創造者の創った仮想世界であり、白昼夢から小説・映画・バーチャルリアリティまでの仮想世界は人間が創った仮想世界である。

■ ライフゲーム

ラングトンが壁のなかに見たというライフゲーム（脳と仮想 124 ページ）

10月3日、4日 2004年

● 往く人

昨日、ある方が事務所にわたしを訪ねてきた。

だが、本当はわたしが訪ねていったのである。

どういうことかというと、わたしがわたしでなければその方は訪ねてこなかったからである。

だから、わたしがまた違うわたしとなると別の方が訪ねてくる。

その意味で、他者がわたしを訪れるのではなく、わたしがいつも他者のもとを訪れるのである。

（10月4日 2004年掲示板）（意識のある人生へ転記）

■ 例

カウンセラーとクライアント

● 良書

わたしにとってのよい本とは、多くの情報を与えてくれるのではなく、わたしが考えるきっかけを与えてくれる本である。

10月4日、24日、26日 2004年、2月1日 2005年、6月23日、25日 2012年

● 失われないもの

前世での善因が今回もまた引き継がれているものとは何であろうか。

前世での善因も悪因も今生において引き継がれていく。

悪霊とかの話で、いつも悪因のことばかり語られるが、善因もまたこの人生へと影響を及ぼしている。

過去のどのような善因が今のわたしと作り出しているのでしょうか。

次回生まれ変わってきたのちにも残っている〈もの〉とは何であろうか。

次の人生にも引き継がれていく〈もの〉、

〈決して失われないもの〉とは一体何であろうか。

今生の何がその〈失われないもの〉を導くのでしょうか。

(加筆して新掲示板記入可) (教室での質問へ転記)

■人因

通常の過去の善因とは神の因である。

わたしの内にある因で、神の因でない、わたしの因であるものはどれほどあるのでしょうか。

■大乘と小乗

わたしは大乘で生きてきて、小乗で生きることは、とても困難である。

しかし、小乗こそが人の道ではないだろうか。

●不可思議光

人生で不思議なことはいろいろあった。

空中浮揚、光体験、気功治療、信じ難い出会い、…等々。

それらのことは、渦中にいるときには、現在進行形でいるときには、不思議でも何でも無い。当たり前である。

しかし、あとで振りかえってみて、とても不思議なことであったのに気づく。

今ではしようと思ってもできないことばかりだからである。

この世界でのその他の、誰にでもある当たり前のこともまた、臨終の間に振りかえってみたときに、とても不思議なことであったことに気づくであろう。

もう、その当たり前のことはできなくなってしまったからであり、その当たり前のことは実は奇蹟のような不可思議なできごとばかりだったことに気づくからである。

無明の身なるがゆえ、何ごとにも気づきということがなく、およそ感謝というものに縁遠く生きていくことほど悲しいものはない。

(10月5日 2004年掲示板)

●栗の意図

犬と散歩していると空き地に栗の木があり、栗がたくさん落っこちていた。

これはもちろん子孫を増やすための栗の木の戦略である。
とげとげは動物にやたらと食べられないためのものだろうか。
だが、栗の木自身が意図せざるが生じる。
それは、動物がその栗を食べてうるおうことができるということである。
しかしひょっとすると、栗が意図してないというのはわたしの浅はかさで、栗は動物に恩恵をおよぼすことを深いところで意図しているのであろうか。

(10月6日 2004年掲示板) (新掲示板記入可)

●クオリア

わたしが日々感じる触感は味気がない。
わたしは、
深い呼吸時にふれるやわらかな触感、
瞑想時に時おり生じる世界へのとけこみ、
インスピレーションを文字にする時にふれる喜び、
そのような質感とともに生きていたい。

これはそのような世界にわたしがふれるということなのだろうか。
それとも、そのような世界にわたしが変えてしまうということなのだろうか。

(2月3日 2005年掲示板)

■意識のある人生

いま、どのような触感、質感にいるのだろうか。

■海中、地上、空中、宇宙へと

■意識の起源 (ユーザー・イリュージョン)

●媒体となるもの

糸電話

有線電話

携帯電話

テレパシー

感情

気

エネルギー

身体・・・ハトホルのいうところの宇宙全体の意識体としての身体 (わたし)、そして、四

大元素

ディーパック・チョプラのいう場の意識体

10月5日、6日、24日 2004年、2月4日 2005年、8月24日 2011年、6月23日、25日
2012年

●金銭～＜所有＞

金銭があればエントロピー減少（秩序化）を買える。壊れた自動車修理も部屋の掃除も排泄物の処理もお金で片がつく。

だが、買えないものもある。

自らエントロピー減少を行なわなければならないものもある。

＜健康＞

＜自己実現＞

＜新たな選択＞

これらはわたしのものであり、金銭で買うことはできない。

——蛇足——

原因・結果・責任を考えなければならない。

同様に、他者のものもまた金銭で買うことはできない。

また、金銭で買うことができるものはわたしのものではない。

さらにまた、金銭で買える秩序化もまたいつか自分ですることになる。それは、因果応報ではなく、行為として尊いからである。

（6月23日 2012年新掲示板）

●「気」

気の好みの個人差。

アイスクリームを好きな子どももいれば、ほうれん草の方を好む大人もいる。

●エネルギー～知識

知識を＜身につける＞と疲れがある一方で、エネルギーが新たに湧いてくる。

だが、学校の面白くない授業でのような知識の流入はエネルギーの消耗となる。

あと悪心が悪心を産み出す連鎖のような知識もある。こちらは消耗だけでなく、他者への破壊エネルギーとして働くだけにやっかいである。

●ノンフィクションの伝記～<神と人間>

その人の人生以上のことを書くことはできない。

■

どのような波乱万丈の伝記を読むよりも、平凡であってもひとりの人生を歩むほうがわたしにとっては尊い。

もっと、尊い人生はその人生がわたしの思いどおりになるという人生である。

それは、わたしの人生である。

■<神と人間>

その人の人生以上のことがしばしばなされる。

●エネルギー

OCNトップニュースは「来日ビョンホンにギャ〜！ 5000人」

私のトップニュースもいつもこんなニュースかもしれない。

10月6日、9日 2004年

●影

まず、相手に原因があり、相手を変えようとする。

だが、自分に原因があり、自分を変えようとした方が理にかなっているかもしれない。

わたしは自分のことを相手とは別の人間だと思っている。

だが、ひょっとしたら、わたしとは相手と同じことをして、相手と同じことを考えている人間かもしれない。

相手はわたしとは別の人間だと思う。

だが、ひょっとしたら、相手はわたしと同じ人間かもしれない。

もしかして、わたしが良心となれば相手も良心となり、わたしが悪心であるので相手も悪

心である、そのような相手かもしれない。

(10月9日 2004年掲示板)

10月7日、9日、10日 2004年

●意識のある生活

身体・食物・片づけ

●意識のある生活～引力

今日生じた出来事はすべてわたしに起こった出来事である。

わたしはその出来事を呼んだのである。

今日呼んだその出来事とは何であろうか。

わたしの何が、意識している部分と意識していない部分の何が、その出来事を呼んだのであろうか。

なかにはわたしが呼んだと思えない出来事もある。

だが、その出来事もわたしにとって有意義な出来事とすることができる。

その出来事にわたしはどういう意味を与えるのか。

わたしは出来事に関心を持つ。

わたしはわたしに関心を持つ。

(10月10日 2004年掲示板)

■斥力

今日起こった出来事はわたしに起こった出来事である。

しかし、わたしに無関係であると思えば、わたしに起こった出来事と思えないかもしれない。

わたしに無関係に思えるのであれば、他人が起こした出来事であると思えば、その出来事とはできるだけ無関係に生きていけばいい。

だから、他人を非難しないことである。

わたしに関係のある出来事と思えることだけに深く関わっていけばいい。

●母のよいところ

片づけ

勤勉

そして、他人のよいところをよく見る

天才とはすべての人がたどり着くところであり、一里塚である。

10月8日、9日2004年

●教室

質問中心

テキストは読んできてもらい、疑問の点のみとりあげる。

10月9日2004年

●クラス会

わたしの人生はとても興味深い人生であった。

これは、他の人の人生についてもいえることであろう。

10月10日、11日2004年

●体

肝臓に関心を持つ。

自分の体に関心を持つ。

声を聞く。

■水とコーヒー

■モノ

モノとしての身体、食物、片づけ

エネルギーとしての身体、食物、片づけ

気としての身体、食物、片づけ

エントロピー減少としての身体、片づけ、エントロピー増大としての食物摂取

(加筆して教室「モノ」へ要転記)

●意識のある人生～創造の秘密

30のときの光と感謝と発心

■ゾル・ゲルとしての気

希望を作るのではなく、気を作ること

●外情報

グルジェフが超努力とかワークとか呼んでいるもの

捨てられた情報としての外情報、しかし、それが伝えられる情報であること

感情の伝達

10月11日 2004年、6月28日 2012年

●存在

悪人である限り、悪をやめることはできず、悪を呼び込む。

行為としての悪を行なわなくとも、こころの中で悪が生きているのであれば、それは原因となり、何らかの形で表出し現実に現れる。

これは愚についてもいえることである。

悪や愚を



人を罰すのではなく、行いを罰する。

名詞を変えるのではなく、動詞を変える。

●意識のある人生～創造力

あらゆる入眠前に、創造のイメージを行なう。

魂と共にある創造を行う。

10月12日、18日、20日、28日、29日 2004年、7月1日 2012年

●読書法と知識

本を書き写すことと知識

シュタイナー流の読書

グルジェフの知識

外情報を得るための読書

●わたし～二人のわたし+ α

わたしの内には二人のわたしがいる。

「行為するわたし」とその行為を「見ているわたし」である。

ただし、「見ているわたし」は非常に幼いので、まだ「見ることが可能なわたし」としてとどまっている。この「わたし」はとても幼いので、「行為するわたし」におんぶされる形で不離一体である。そして、その「見る」という能力を「行為するわたし」とともに他人を見ることに費やし、わたしを見ることはない。他人は「見るわたし」から離れているので見ることはできるが、わたしとは一身同体であるので見ることはなかなか適わない。

この「見るわたし」は本来「行為するわたし」を見るためのわたしである。他人を見るの

もよいが、この「見るわたし」を両足で歩けるようにして、「行為するわたし」からひとり立ちさせる必要がある。

(10月12日 2004年掲示板)

■ 離〜<わたし><時空>

離れるといろいろなことがよく見えるようになる。

別れというのは、ひょっとして見るができるようになるためにあるのかもしれない。だから、よく言われる「嫌いな人への対処法」として、その人の死を思い浮かべるという方法がある。まあ、しかし、死ななければ相手を理解できないというのは悲しい無知ではある。

これは時間についても言える。ノスタルジーということではなく、過ぎ去った過去の出来事というのは後から振り返ってみると、現在進行形で進行している時とは違って自分自身とその周りの出来事が見えるものである。渦中にあった時には見えなかった様々な意味があぶりだされてくるというのは、何もわたくしに少し智恵がついたということだけではなく、時間という距離をおいて見ることによって初めて可能になることではないかと思っている。現に、今現在進行形のことについては、相も変わらず無知蒙昧を發揮しているからである。

さらにこのことは自身の空間についても言え、「自分ことは棚に上げて他人のことをとやかく言う」という多くの人にある性癖の中に見ることができる。離れている他人のことはよく見ることができるが、離れていない人、最も近くにいる人である自分のことについては何も見ようとせず、この人のことについては何も知らずに一生を過ごしてしまう。

(10月18日 2004年掲示板) (加筆済み 7月1日 2012年新掲示板) (「原稿」・「意識のある人生」要転記)

■ 森敦

30年前の人生の風景はその渦中にいる時とまったく異なって今見ることができる。

これはまたさらに30年後になればまた異なって見れるだろうし、死後、そして、生まれ変わってみれば全く別様に見えるであろう。

30年前の善が無意味に、悪が善の種に、正が方向に、悪が立場に変わるかもしれぬ。

このことは後になってみれば、当たり前となるのであるが、今渦中にいる時には変じることは当たり前でなく、それゆえ、今のわたしにしがみつく。

この意味での変じ方を森敦は森富子に次のように語っている(森富子は文学の同人誌で森敦と出会い、後年養女となるが、この時にはまだ師弟の間柄である)。

「女は女の側から書けば、書きやすいと思いますが」
「そう思うのなら、女を主人公にして書けばいい。そして、それを男を主人公にして書き直してごらん。がらりと世界が変わってしまうはずだ」
「書き直しという意味が、少し分かった気がします。目の醒めるような話です」
「書き直しは、世界を変容させるためにするのです。書き直しができたら、プロです」
（「森敦との対話」18ページ 森富子著 集英社）

森敦の論によると、
立場を変えて小説を書くことがくできれば、その作家はプロであるという。
その伝でいくと、
立場を変えて人生を見ることがくできれば、その人間はプロであるということになる。

まあ、大部分の地球人はまだアマチュアかもしれない。
（10月20日 2004年掲示板）

■イチロー（たけし）

■占い師

占い師は過去や未来へと同調できる人である。タロットカードの模様や筮竹の数、当人の所持品を用いて過去や未来へとシンクロする。
だが、このような占い師とて今現在にシンクロできるかどうかという、とても微妙なところがある。

現在とのシンクロとは意識のある人生をおくるとのことだからである。

■占い師～＜時空＞＜Be Here Now＞

優れた占い師は過去へとシンクロ、同調して過去を知ることができる。
また、近い未来であれば、未来へもシンクロ、同調し未来を予言する。

だが、どのような優れた占い師も今を占うことはしない。

頼む人がいないからだろうか。
それとも今は占うことができないからだろうか。

今を占うとはどういうことだろうか。

占うとは知ることである。

筮竹の数やカードの図柄、水晶の奥に見える風景を通じて知ることである。

わたしは過去どのような人であったかを知ることであり、

わたしはこれからどのような運命をたどっていくかを知ることである。

では、今を知るとはどういうことであろうか。

あるいは、今は知っているので占ってもら必要はないということだろうか。

(10月28日、29日2004年掲示板記入予定)(7月2日2012年新掲示板) (「時空」へ要
転記)

■ <Be Here Now>

いや、おそらく、今にはすべてがあるので占うことなどできないからだ。

今というこの存在は時空とは別のものなのである。

占い師～過去・未来とのシンクロ

通常人～現在とのシンクロ



379～<二分心>の崩壊と意識の誕生

1976年 ジュリアン・ジェインズ (プリンストン大学) 「<二分心>の崩壊にたどる意
識の起源」

381～意識の不在

「私たちはたいがい、自分のしている行為以外のことについて考えている。それは、つまり、意識は人間の通常の機能にさほど重大な意味を持っていないということにほかならない。なにしろ、そうでなければ、人間は自分が今していること以外は考えられなくなってしまふ。

したがって、何か別の事柄についてたえず考えている点を抜きにすれば、現代人は意識を持たない人間と何ら変わりはない。」

「人は、<私>という意識を持たなくても、確かに機能しうる。事実、たいいていの人間は、多くの時間を<私>という意識なしで過ごしている。ただ、そのことに気づいていないだけだ。なぜなら、無意識に行動している間はそれを意識しないからだ。もし意識できるのなら、それは無意識ではないということになる。私たちは、意識していないことを意識で

きない。意識があつて初めて意識できる。」(382L9)

10月13日2004年

●呼吸

呼吸とは、あの世とこの世とを結んでいる一本の糸のようなものかもしれない。

(10月13日掲示板) (「呼吸」の項に要転記)

10月16日、18日、20日、21日2004年、7月3日2012年

●路傍の石

いつも通る道のいたるところに、「ここにゴミを捨てるな」「収集日にゴミを出せ」「ルール違反持って帰れ」「違法駐輪禁止」「町をきれいにしよう」等々の張り紙がある。汚い字で汚い言葉が書いてあると、それもゴミではないかと思えてしまう。まあそれはともかく、この人の<きれい>と少なくともわたしの<きれい>とはかなり違っていそうだと思えてくる。最近問題になっている「ホームレスの締め出し」にはこういう人はおそらく大賛成なのであろう。わたくしなどは、全く気にならないというか、ある程度「この方の考えるゴミ」がある方が落ち着くタイプなので、ホームレスがいる風景の方が好きなのである。きれいな人工石よりも生活観のあるダンボールがある風景の方が好きなのである。人工石はわたしに何のイマジネーションも起こしてくれないが、ダンボールの家からは様々な心的風景が生じてくるからである。

旅行に行ったりしても、名所旧跡を見るよりも、何気ない路傍の石を見て、そこから時代をさかのぼって想像力をふくらませていくことの方が好きなので、あまりきれいにされてある街並みには魅力を感じない。まあ、だからといってゴミが好きだというわけではない。イエスの弟子が腐敗した犬を見て目をそむけたとき、イエスはその歯並びの美しさの中に神を見たというが、わたくしはそこまでの眼は持ち合わせていないので、やはりゴミを見ると目をそむけてしまう。また、最近のゴミはビニールのゴミ袋に包まれていたり、化学製品のゴミが多いので、昔のゴミと違って、肌触りの感じられないゴミばかりで、目のそむけかたも昔とはかなり違ったものとなっている。

まあ、話しがずれていってしまったが、それでも、ルール通りに整然とした街並みであるよりも、ある程度くずれた姿という方がわたしにはほっとするところがある。こういうくずれ方は昭和30年代の日本にはどこにもあった風景であったような気がするが、単なるノスタルジーであろうか。

(10月16日2004年掲示板)

■きれいな道

きれいな道が作られた。

このきれいな道が汚されて汚くなった。

この汚れた道が清められて、もとのようにきれいな道になった。
もともとのきれいな道と清められたきれいな道とは同じ道であるのか。
同じようにきれいなのか。
もとの方がやはりきれいなのか。
それとも、あの方がきれいなのだろうか。
(10月17日 2004年掲示板) (エネルギーへ要転記)

●禁酒

お酒以外にも人生の楽しみは数え切れないほどある。

なすべきことは日常のなかにある。

しるしをよく見ること。
人生の出来事すべてにしるしを見ること。

飲みたいということをコントロールできるようになったら、飲むことがあるかもしれない。

飲酒を習慣としなくなることによって見ることができるものがある。

下の遺産の問題

10月18日 2004年、7月1日 2012年

●<エネルギー>

魚や野菜、ご飯を食べてエネルギーを得て、残りはゴミと排泄物にしてしまう。わたしは日々世界を乱雑へと導く。エントロピー増大へと一役買っている。

しかし、この人間という存在はエントロピー減少、すなわち、秩序へと向かうことも行なう。それは得たエネルギーを基にして、創造するという行為である。

だから魚や野菜、ご飯を「自分自身で処理できないゴミと排泄物」にして終わらせるので無く、魚や野菜、ご飯の変容としての「創造」についてところを寄せることである。

この「創造」とは宇宙のプロセスへの参画としての「創造」であり、

また、日常の小さな自己表出——親切と言われているものでもある。

(新掲示板記入可)

■自己構築～創造としての精神構築

一生を通じて、あるいは、生まれ変わりの全生涯を通じて、「創造による秩序 \geq エントロピー増大」を成し遂げるのが人間存在であると思っている。

■自己構築～不死としての肉体構築

どちらにしろ、四大元素を用いている。

●環境と人間

●質問～遺産

あなたがこの人生でこの世界に遺したものは何であるか。

あなたがこの人生でこの世界に意識的に遺したものは何であるか。

(7月1日 2012年新揭示板)

●原稿

実体験と詩と質疑応答を中心とする。

10月19日、20日、27日 2004年、7月1日、3日 2012年

●二つの眼

この世界が0と1からできているかもしれないこと。

この世界が感動できる真理の世界、良心の世界、芸術作品をしてあること。

■

将棋のルールと感動

小説の文字と感動

●意識のある人生～＜選択と創造＞

創造した時のこと、それは、「わたしの方からではなく世界の方から創造された時」のことであるが、

世界とシンクロして生きた時のこと、「それは、わたしの方からではなく世界の方からシンクロしてきた時」のことであるが、

とにもかくにも、その時を思い起こしてみること。

そのような時は、

揺るぎない発心があったこと。

疑いのない発心があったこと。

へこたれない発心があり、在り難く感じる事ができたこと。

そして、自然に任せていたこと、流れに任せていたこと。

そのような時であったこと。

そして、いずれもが無意識のままそのようなころに至っていた。

今は、今度は、意識的に自分自身をつくりだすときである。

そして、わたしの方から世界に働きかけ、世界とシンクロして、世界をつくりだす時である。

(新掲示板記入可)

■発心

禁酒しようと決意すると、身体がお酒を欲しがらなくなる。感情がお酒を欲しがらなくなる。

人のために授かったヒーリング能力を使おうと決意すると、周囲の出来事がそれに呼応する。

10月20日、21日、22日、23日 2004年

●意識のある人生～視点

A氏のことをまるで違う視点から見てみることに。

●意識のある人生～わたし「a」⇒「非 a」⇒「A」

若いときにはお酒がなくとも友人と腹をわって話せた。

だが、今はお酒がないとなかなか本心をさらけ出すことができない。

そして、また、今、お酒がなくとも腹をわって話せるようにしようと思っている。

昔、空中浮揚を一度した。

だが、今はできない。疑う気持ちがあるからだ。

そして、また、今、空中浮揚など当たり前だと信じていることができる人間でありたいと思っている。

できなくなるということは素晴らしいことだ。

もし<望むのであれば>、もう一度できるようになるということだからだ。

しかも、以前とは違って、もっと素晴らしい方法で。

その素晴らしい方法とは<わたしがいる>という方法である。

(10月22日 2004年掲示板)

●台風23号

昔は、街灯が切れて暗くなったことを楽しんだ。

台風が来て、床上浸水し、同級生の家に避難したことを楽しんだ。

今は、災難を楽しめなくなっている。

■触れる

十代の時と同じように世界に触れる。

●一所不住

森敦は小説のなかに住んでいたのかもしれない。

わたしは何処に住むのか。

10月21日、22日、23日 2004年、7月1日 2012年

●意識のある人生～舟（神との対話）

わたしというひとりの人間に多くの人が乗り移って体験できる、そのような人生を生きる。

たとえば、縁あって一時期共に生きた亡き父と兄とが体験できる、そのようなわたしの人生を送る。

(10月23日 2004年掲示板)

■ごきぶり～一体

一族としてのごきぶり

●ころ

人生を、身体を牽引するのはころの方向性だけかもしれない。

(台風で徹夜した日に、予期せず元気であったこと)

●瞑想

瞑想空間をきれいにする

瞑想空間はどこにあるか

瞑想はいずこに

そしてわたしは

■瞑想

瞑想の際は、常に具体的にイメージしてみる。

あるいは、常に具体的に感じつづけてみる。

常に瞑想空間にいることを意識する

●おこぼれ

よい言葉を書き写しながらインスピレーションを得る

このことは瞑想についてもいえることである。

よい言葉に触れる、よい瞑想に触れると、そこからしみ出てくる肌触りがある。

■日常と不運

●意識のある人生～食

長南年恵を範とする。

●しるし（うるさんへの返信）

世間の常識からいくと、酔っぱらってひっくり返って頭をぶつけ、救急車で運ばれたとなれば、災難でしたとか、自業自得とかという話になるわけですが、わたしは全く違ったものととらえています。何かというと、しるしです。

ある人は奇蹟というしるしを見せて、人々を導こうとします。

その人が病気が治れと言葉にすると、病気が治り、

また、その人の衣にふれれば、病気が治り、

そしてその人は、遠く離れた病人を、時よりも早く治してしまいます。

このようなしるしにより初めて気づくというのは、本当はとても愚かな話なのですが、少なくない人がこのようなしるしを求めます。そしてまた、少なくない人がしるしを与えられる力を求めます。しかし、このような奇蹟のしるしは甘いお菓子のようなもので、小さな子どもを一時的にいざなうことはできても、このようなしるしにより人が真の信仰心に目覚めるといことはなかなかありえません（なお、真の信仰心とは、グルジェフの「意識した信仰は自由である。感情的な信仰は隷属である。機械的な信仰は愚かさである」と

言うときの「意識した信仰」のことです。)

実はしるしというのは日常生活の中にすべて埋まっていて、わたし自身の存在と同調しながら、同時に道標の役目もになって表れているものなのです。しかし、わたしも凡夫なる身ゆえ日常生活の内にあるしるしを見て人生に生かしていくということはなかなかできないがゆえ、今回のような出来事が生じてくるのだと思っています。ですから、わたしにとって今回の転倒事件はある人の奇蹟の治療行為と全く同じことなのです。

まあ、天邪鬼なもので、治療行為はありがたく感じないが、転倒事件はありがたく感じるわけで、わたしのような者にはこのような形でしるしが落ちこちてきます。

(10月21日2004年掲示板)



発心のなき意志は停まる。

●無常

無常であること

無常であることに流されること

無常であること

無常の海に自らが始まりとしてあること。

(掲示板記入予定)

10月23日、11月3日2004年、7月1日、3日、4日2012年

●亀の読書

頭が悪いからゆっくりとしか読めない、ということがあり、

頭が悪いからゆっくりと読める、ということもある。

わたしの風景を生きてみようとおもう。

(10月24日2004年掲示板)(加筆済み新掲示板記入可)

●悪徳教祖～<善と悪>

皿を洗ったことがない人は、皿を割ることはできない。

人を救いたいと思ったことがない人は、人を支配する迷路に入り込むことはできない。

できなければ、それはわたしではないと言うであろう。

(10月25日2004年掲示板)(7月3日2012年新掲示板)

■<存在><わたし><うそ>

他者の行いを非難するとき、

それは、

わたしに<できること>か

わたしに<できないこと>か

わたしが<すること>か

わたしが<しないこと>か

それは、どれであるだろうかと自問自答すると、私は自分自身に平然とうそをついてしまう。

(7月4日 2012年新掲示板)

■ただ一つの道

いまのわたしには<できること>はたくさんある。

たくさんあって、支離滅裂に生きている。

さきほど考えていたこととまるで反対のことを話したり、考えたり、行動したりする。

●身体

瞑想していると、身体の不具合のあるところが違和感、痛みなどを伴った感覚が生じてくる。このことは、瞑想によって身体に影響を与えるということではなく、身体のある要素もまた瞑想空間にいるということなのではないだろうか。

(掲示板記入予定)

10月24日、25日、11月2日、3日 2004年、7月1日、3日、5日 2012年

●質問～「嗜好」<選択><意識のある人生>

わたしが飲酒を好むことと鶏肉を嫌うことにはどこか共通するところがある。

逆であってもよいし、

また、

逆にすることもできる。

同じようなことはその他にもいくらでもありそうである。

<あなたの逆>をあげてみてください。

あなたができる逆をあげてみてください。

あなたができない逆をあげてみてください。

そして、今できないがいつかできるようになりたい逆をあげてみてください。

(11月2日 2004年掲示板) (加筆済み 7月5日 2012年新掲示板)

■

また、逆にできないこともある。

ただ一つのこと。

どのようなことがあるだろうか。

(教室テーマ) (加筆して「選択」に要転記)

答え～成長～愛が体験の中で顕現すると、その愛は不安という小さな箱にはもう入ることはできない。

■

グルジェフの好き嫌いを逆にするという話し。

シュタイナーにも同じような話しはあるか。

■

ダビンチのできないと言う時には紙を否定しているという話し。

●遠回り

もしかしたら効率的な時間・空間の使い方と効率的な人生とはまるで正反対かもしれない

今日一日、ときに効率とは無縁の時と場をもち、

噛みしめてみること、踏みしめてみること。

(新掲示板記入可) (草稿「すき間」に転記)

■Nちゃんのこと。

10月25日、27日 2004年、7月3日、5日 2012年

●異なる道

泥で家を作る人もいれば、草で家を作る人もいる、家を作らず、自然を住み家とする人もいる。

どれも家であり、どれも道である。

わたしの道があるということがある。

それにこだわるということがあり、

他方また、それにこだわらないということがある。

●見ること

決して見るができないもの。

それは、「これは～である」と断言したものである。

見ることができるものは大きな声の中にはなく、沈黙の中にある。

(10月28日 2004年掲示板) (加筆済み新掲示板記入可)

10月26日、27日、11月3日 2004年

●教室

教室～直観の答えを求める

準備～純粹に手立てを尽くせば、うまくいく。

うまくいくとは何か？

自分にとってうまくいく。

手立てを尽くすとは何か。

●募金

先日街頭募金をして「ありがとうございます」と頭を下げられたが、あとで考えてみるに、頭を下げるのはこちらであったような気がする。

(10月26日 2004年掲示板)

■10月26日病院へ行く途中での盲人

●感情の奴隷解放

飲みたい日には、絶対に飲みに行かないこと。

ギャンブルで大勝ちした日にギャンブルをやめること。

飲みに行くことは、用事があって外出するときと同じであるようにする。

(要加筆)

10月27日、28日、29日、11月2日2004年、2月4日2005年

●意識のある人生～創造と創造されたもの

わたしは<わたしが疑いのないところ>でだけ生きていくことができる。

その<わたしが疑いのないところ>というのはほとんどが無意識のうちに、ほとんどが共同で創り出されている。

わたしはそのような世界に生きている。

だが、その世界を疑い始めた人は、その世界ではもう生きていくのがとても困難となる。

そして、その人は、新しい世界を自力で創り出すしかない。

わたしはこれである、という世界を自ら創り出すしかない。

<わたしが疑うことのできないところ>、そこだけで人は生きていけるからである。

(11月3日2004年掲示板)

●瞑想

いつも、<そこに>いること。

<そこ>とは今であり、在るであり、創造である。

具体的には、

正四面体の頂点に。

千葉、目白(新宿)、鎌倉

●日本人拘束事件

どのようなことであれ、いつも同じような反応を示すことは愚かというものである。

同じように見えたとしても、同じ状況というのはありえないからである。

身悶えするような苦渋の後で、同じ結論に至るということがあったとしても、常にロボットのように反応するのであれば、「わたし」は「ロボット」に任せて、昼寝でもしている方がましというものである。

(10月27日2004年掲示板)

■この人とは一緒に行かない

河合隼雄と中沢新一との対談集で「ブッダの夢」という本がある。その本の中で「箱庭療法」(砂を入れた箱にいろいろなおもちゃを使って箱庭を作り、その作業を通じてこころの治療を行なう療法)にふれ、ひとつの事例を取りあげて、河合さんが中沢氏に説明してい

る。箱庭療法は継続して行なうことにより、こころの状態と箱庭の状態とが微妙にシンクロして変化していく。その事例のある箱庭を写した写真を見せながら、河合氏はこう語っている。

「この作品は、女の人が、一人で森に入っていきます。深いところに行けば、素晴らしい花があることがわかっているけれども、途中が非常に危ない。そこで迷いますが、ついに決心して、一人で、今から森の深みに入ろうとしているところです。このときに、僕は心の中で決心するわけです。一人で行かすのは危ないから、一緒に行こうと。それは本人には絶対に言いません。」

こういう覚悟とやさしさと強さというのは、なかなか日常生活では出会えないことである。逆のパターンで突き放していることは、よく観察すれば山ほどあるが。

(「ブッダの夢」朝日新聞社 87 ページ 文庫本もあり)

(10月30日 2004年掲示板)

わたしはそうする、と言いたい。

だが、わたしはそうしたい、と、そうする、との間にいる。

わたしはまだ、そうである、ということではない。

■

わたしはあなたが思っている以上にとても冷たいし、
わたしはあなたが思っている以上にとてもやさしい。

何に対して冷たいか、何に対してやさしいか。

■

その人を生きなくともよい。

だが、多少なりとも、その人を生きてみようとしてみようではないか。

■ なすこと、なせること、

映画「グリーン・マイル」は超能力者の黒人ヒーラーの話である。彼は無実の罪でとらえられ、死刑判決を受ける。刑務所で刑務官と親しくなり、刑務官は彼の無実を信じて疑わないが、刑務官の身では確定した死刑判決はくつがえしようがない。死刑の前日、刑務官は黒人ヒーラーに泣いて訴える。

「わたしはあの世に行ったときに、神様から、あなたに何をしてあげたのかと聞かれてたら、答えようがない。わたしは救われない人間だ」

その黒人は目に涙をためながら答える。

「親切にしてあげたといえればいい」

「グリーン・マイル」はわたしにとってはつまらない映画であった。だが、この言葉だけは今も深くこころに残っている。

(10月30日 2004年掲示板)

■「親切」

何もできなかったかもしれない。しかし、親切にしてあげた、これは内と外との架け橋である。

そういえば、最近、何か親切にしてあげたことがあったらどうか。

(掲示板記入予定)

■リンク

新潟地震と日本人拘束事件とは関連している出来事である。

10月28日、29日 2004年

●現実という夢がある

夢の中で「これは夢であってほしい」と何回思ったことがあるか。

だが、夢の中ではそれはいつも現実であった。

そして、目が覚めたときに、それは願いどおり夢であった。

あの夢が夢であったのなら、そんなにびくびくしていなくてもよかった。

まあ、終わったことは仕方がない。

今度同じ夢を見るときには別の生き方をしてみよう。

だが、もう一度叫ぶであろうか。

「これは夢であってほしい」と。

「これが夢であったなら。

これが夢であったなら。

これが夢であったなら…」

(10月29日 2004年掲示板)

●教室

良い話しをしてもらう。

悪い話しもしてもらう。



治療の主体とは何か。それは治癒である。

病気、治療家、患者、治癒

治療の報酬とは治ることである。(治ることが主体)

他の人のために何かをしてあげたこと、それ自体が報酬である。(行為が主体)

グリーン・マイル

10月29日、11月2日 2004年、7月3日 2012年

●馬鹿

バカな奴だと言えるのがいることはありがたい。

あいつがいるおかげで、わたしは「あいつはバカだ」と言うことができるのだから。

また、あいつがいなければ、わたしがバカだと言われたかもしれなかったのだから。

こんないい機会はない。あいつをおもいきりののしってやろう。

何て、バカな奴なんだ。

(10月29日 2004年掲示板)

●内と外

わたしの言葉であれ、他者の言葉であれ、発せられた言葉だけでなく、内側の言葉を聞きとること。

わたしは今外側のことを問題にしているのか、それとも内側のことを問題にしているのかを鑑みる。

外側だけを問題にしているときには、わたしは片目しか開いていないというよりも、わたしには目がない、といった方が適切である。

いま、外へ求めているのか、内へ求めているのか。

いま、外に向かっているのか、内に向かっているのか。

外は内に従う。

■意識のある人生～<内と外><Be Here Now>

外に対する不安は、不安が実現したときに対処する。

●意識のある人生～<創造>

創造は片手間ではなされない。
四六時中であること。

■意識のある人生～＜機会＞

内側の風景が実現するか、しないか。

それは必ず実現する。

ただし、わたしがイメージしている外側の風景と異なって実現することが多々ある。

わたしはわたしがどれほど大きいかを知らないので、もっと大きな仕方で実現することもあるからである。

(7月3日 2012年新掲示板)

(医者を目指したこととヒーリング能力を得たこと)

●因果応報

ゆるすための因果応報というものもある。

●小説

もうろくして、やっとなすことができた。

物質化現象も思いのままであった。

それはできたのか。できていなかったのか。

10月31日、11月4日 2004年

●生

ひとりの生命を救うのに莫大な人力、莫大なエネルギーが費やされることがある。

してみると、わたしが普通に生きているということにも、莫大なエネルギーが使われているのかもしれない。

もちろん、そのエネルギーの出所はわたしではない。

わたしというのは、実はいつも死んでいて、生きているということは相当特殊なことなのかもしれない。

(10月31日 2004年掲示板) (新掲示板記入可)

●死

将棋のある局面で最善手はただ一つだけであるように、わたしが今何を書くかという言葉もただ一つであり、何をするかということもただ一つである。

ところで、彼の死に対してわたしが書く、その唯一の言葉が今のわたしには思いもつかな

い。

ただ、「バカな奴だ」とか、「死んで当たり前だ」とかという言葉ではない。このことだけは確かである。

(10月31日 2004年掲示板)

■森敦

森敦もその一つの言葉を求めて苦闘していたのであろう。

■エネルギー

生きている状態というのは、莫大なエネルギーが費やされている。

このことは、このエネルギーを取り出すことができる、このエネルギーを使うことができるということを意味している。

では、このエネルギーを何に費やすか、ということが大いに問題となる。

★11月 2004年

11月1日 2004年、7月3日、7月22日 2012年

●式神

もしかしたら、式神とは自分のことではないだろうか。

斜め後ろから自分を常に観察したときの自分の働きは、式神ではないだろうか。

■四大元素

ハトホルのいうところの四大元素もいわば式神と言えそうである。

このような式神に意識を向けること。

11月2日、3日、4日、6日、14日、15日、17日、18日、12月13日 2004年、2月4日、5日 2005年、1月4日 2006年、3月23日、25日 2010年、7月5日、6日 2012年

●森敦の表現

森敦が小説で表現したこと。

森敦が人生で表現したこと。

どちらが主たる作品なのであろうか。

小説には読者がいる。

人生の読者は誰であったのだろうか。

(11月14日 2004年掲示板)

■河合隼雄の表現～コップに当たる言葉

河合「僕がいま考えているのは、いま言われたこととかなり近いんだけど、たとえば僕がこのコップのことを言いたいんだったら、このコップを言葉で記述するのではなくて、**僕**の**言葉に乗った人は、その調子で行けばコップに当たるとか**、そういう言葉の使い方がありはしないかと考えているわけです。つまり、そのことを直接には表現できないので、この線を無限にたどればそこに行きつくというような、**方向と運動を与えるような言葉の使い方はできないだろうか**。そういう言語の使用法というのはまったく違いますね。精神分析における言葉と。」

(「ブッダの夢」35ページ)

(11月16日 2004年掲示板)

■神の表現～創造する言葉

「神が『光あれ』と言うと、その通りになった」

これは科学を知らない時代の大人のおとぎ話のように思っていたが、最近、ひょっとしたら本当の話ではなかろうかと思いはじめている。

(11月17日 2004年掲示板)

■確実・知識

いつも言っていることだが、確実なこととはとても個人的なことである。この個人的なことは、わたしひとりだけの確実性にとどまることもあれば、多くの人に共通する確実性にいたることもある。ともあれ、確実なことはあくまでも完全に個人的なことである。だから中学の時に、わたしが「対頂角は等しい」という証明を知り、「対頂角は等しい」ことが確実になったときでも、おそらくクラスの半数以上の生徒はそのことは確実ではなかったはずだ。わたしはこの証明法による確実さを知ってから、それまでは大嫌いだった数学が大好きに変わってしまった。あばたがえくぼに変わった瞬間であった。だが、クラスの多くの生徒にとっては「対頂角は等しい」ということを教科書上の知識として「知って」はいても、わたし個人が体験したように身体を通して知ることはなかったはずである。

だから、わたしが持っている「言葉によってこの世界が生まれた」という確信を多くの人が教科書上の知識として「知っているか」、あるいは「知っていないか」はわたしにとっては同じことである。どちらも<知らない>からである。

分かりやすい例は囲碁や将棋の大局観である。

A と B とが囲碁を打っている。初段氏は A が有利だという。八段氏も A が有利だという。しかし、その見ている内容はまったく異なるので、八段氏が B を持ち、初段氏が A を持っても、簡単にひっくり返ってしまう。初段氏が「A が有利である」ということを知っているか知っていないかは八段氏にとっては、＜知らない＞ことと同じぐらいの話である。初段氏にとっては「A が有利である」というのは、次の瞬間に「B が有利である」というように変わる程度の理解の仕方だからである。

では、わたしが「言葉によって世界が生まれた」ということを本当に知っているかどうかは、何ともいえない。この世界はあまりにも奥深く、囲碁の初段氏と同じ程度の理解の仕方ではないかもしれないからだ。ただ、はっきりいえるのは、これまでの常識、知識で、イエスといわれてもノーといわれても、わたしとしてはただ沈黙しているだけである。

(2月5日 2004年掲示板) (新掲示板記入可)

■沈黙

だから、自分自身に誠実であるならば、誰もが沈黙を守って生きていかざるをえないということがある。

(掲示板記入予定)

▲覚醒後のブッダの沈黙。

■世界にとって確かなことだからといって、わたしにとって確かなこととは限らない。

■存在を呼ぶ言葉

ババジと呼ぶと瞑想がうまくいく。

●意識のある人生～創造

すべてのことは決めると変わる。

創造という種子が芽吹くための要素は、決めるということかもしれない。

決めたことを忘れてはいけない。

そうすれば、

決めたことが実現するように、

いつも、いつも、世界は決意に共鳴する。

(2月9日 2005年掲示板) (3月25日 2010年掲示板再掲) (草稿①転記予定)

■創造・反復

同じことをすると創られていく。

(3月25日 2010年掲示板)

この創造は外観のみならず、内観をも変容させる。

(3月24日 2010年掲示板記入予定)

無意識の反復

南無阿弥陀仏の称名～祖父母の体験

誰だろ う瞑想

修行

■禁酒、食性、
能力の出始め、

■意識のある人生～選択・無意識の人生

いつも何にふれているかということ、これは相当に肝要なことである。

わたしというものがいない間には、

無意識に生きている間は、

わたしはふれているものに同化するからである。

だから、これから何をするのか選べるのであれば、その選択に慎重であるべきだ。

私はこれからそこにどっぷり浸かることになるからである。

そして、常に選べる選択肢があり、どの選択肢も選ぶことができるのである。

(11月4日 2004年掲示板)

■同化・類は友を呼ぶ

つきあうなら一流の人間とつきあうのがよい、と言った人がいて、とても嫌な感じがしたが、話しはうそではない。

わたしというものがあると、

世界はわたしに同化してくる。

だが、わたしというものがないと、

わたしは世界に同化してくる。

だから、世界がわたしを引き上げてくれる人のいる世界か、わたしを引き下げてくれる人のいる世界かは、とても大切なことである。

(11月9日 2004年掲示板)

ただし、では、ブッダやイエスはどうかであったか。ブッダやイエスは彼らにとって三流の人間と付き合っていたのではないか、ということもある。だが、彼らにはわたしというものがあるので、彼らに世界は同化してくるということである。

だから、あらゆることに優先することは、

いつも、いつも、わたしがある、

ということである。

(11月11日 2004年掲示板)

この同化している自分に気づくこと。

これは簡単なようでいて難しい。

(加筆して掲示板記入予定)

魂の世界での同化。

わたしというものがいない間には、

わたしはまわりによって作られるのだから。

そしてまた、何にふれているか知っていること、これも同様に大切なことである。

その意味で自然にふれているのは、常に過たない。

■「犠牲」(～ブッダの夢 (97 ページ))

河合「この作品は、さっきの、あさとルビーの話の続きになります。海の中をルビーとあさは船に乗っていくんですが、そのときに犬のシロを連れて乗ってるんです。三つの果物を持っていますが、非常に大事な食べ物なんですね、彼らにとっては。そこに嵐が起こっておさまった頃、たしかネズミが、木切れにつかまってやってきます。助けてやろうと思っただけけれども、ネズミを乗せると重すぎて帽子が沈むわけです。そこで決心して、三つの果物を捨てます。捨てて、ネズミを乗せたら、ネズミが島へ行ける道を案内してくれて、この島へ着きます。そうすると、素晴らしいところで、ここへあさとルビーは一緒に上陸する。たしか、捨てた三つの赤い果物が、ひとつは金魚になって、ひとつはこの赤い実に、

ひとつはこの屋根の赤になるのかな。そういうふうになるわけですか。またここに教会があります、とうとうこういう素晴らしいところに着きました。めでたし、めでたしというんです。

ここで非常に大事なテーマは、何かを達成するためには大事なものを犠牲にすることが要請される。これも慢性のデプレッションの症例が治癒されるときによく出てくるテーマで。」

中沢「要するにゴミを捨てられるようになるわけですか。」

河合「そうです。全部キープしていた人ですから。」

■ 身体

この大事なものが身体ということがあるのだろうか。

身体を捨てるということがあるのだろうか。

わたしが動詞に生きるなら、わたしが場に生きるなら、個々の「名詞という身体」を手放すということもまたあることかもしれない。

■ 禁酒

飲酒によって手に入るもの。

飲酒によって手に入らないもの。

選択の一瞬一瞬にそうすることにより手に入るもの、手に入らなくなるもの、をこころに描いてみる。

そして、そのように人生は進み、描かれる。

■ 「神との対話」～何の時であるか

● 信

身体を通して信じられる人。

これは通常の信じ方と異なる。

だから、気を感じていなくとも気功治療が効く人がいる。

こういう人は知識として信じていなくとも、身体が信じている。

また、気を感じていても気功治療が効かない人もいる。

こういう人は知識としてしか気を感じていない人である。

……ということではなかろうか……と最近思っている。

これは神仏を信じることにもいえる。

信仰心がある人といえども、通常は単なる知識の世界の中での信じ方である。

だから、神仏を信じていようと、信じていまいと、そのことで論争しようと、しまいと、身体を通して信じることからいえば、まるで同じ世界である。

では、身体を通して神仏を信じるということは、どういうことであろうか。

(11月15日 2004年掲示板)

だから、神を信じていなくとも効く人もいれば、

神を深く信じていても効かない人もいる。

11月3日、4日、7日、9日 2004年、2月5日 2005年、7月8日、13日 2012年

●意識のある人生～始まり

今日が元旦であるように、朝に目覚め、感じ、生きる。

この感覚は、今日、作ることができる。

今、作ることができる。

(11月6日 2004年掲示板) (改変して掲示板記入予定)

●在ること

(簡単な紹介)

長南年恵の心情

「俳句引用」

があって、彼女の身体が共鳴し、世界が共鳴する。

心情がなければ、この世界では何も共鳴しない。

(加筆して掲示板記入予定)

●時空～多重世界

最近、時々感じることもある。

実はわたしは一回生きた人生をもう一度生きているのではないだろうか、ということである。

もちろん、以前の人生の記憶はない。

過去がどのような人生か分からないが、わたしは以前の人生に落第の刻印を押ししたりはしない。

ただ、今回の人生で以前とは異なった生き方をしようとしてこの世界にいて、前回と同じ人生を生きるのなら、それは愚かというものであろう。

(11月5日 2004年掲示板)

■再上映

映画を見て体験するように、他人の人生、自分の人生をもういちど生きて体験するという
こともあるのではないだろうか。

有意義な人生というものがあるのなら、稀な人生というものがあるのなら、それを一度き
りで終わらせるというのはあまりにもったいないからである。

(加筆して掲示板記入予定)

●ツケ～＜為すこと＞

金銭のツケというものがある。

これは物質世界のツケであり、後払いのツケである。

他方、こころのツケというものもある。

これは為しえたのに為さなかったことから生じるものである。

あとでやろうとか、明日やろうとか、何々という条件が満たされたらやろうとかと言って、
先延ばしにすることから生じるものである。

こちらは請求書のように目に見えないだけにおそろしい。

ひょっとして、ツケがたまりすぎて払いきれなくなっちはいないだろうか。

何回も生き直して払わなければならないほど借金するのではなく、日々に為しえることを為
すこと——いかなる小さなこともツケにしないこと——このことこそが肝要である。

(11月7日 2004年掲示板) (加筆済み 7月8日 2012年新掲示板)

今日の人生にこころのツケはなかったであろうか。

(11月8日 2004年掲示板)

■内と外

金銭の借金とこころの借金はシンクロしている。

■グルジェフ

●意識のある人生

二重の意識の訓練

「ユーザー・イリュージョン」では意識の無意識化によるものと言っているが、二重意識
というのは不可能なことなのだろうか。

11月4日、21日 2004年

●意識のある人生～わたしの仕事

今日

変えた習慣というものがあつたか。

自己のものとするを行なつたか。

必要なだけ食事をしたか。

自分を見つづけていたか。

エネルギーを何に移し変えたか。

(11月23日 2004年掲示板) (新掲示板記入可)

●意識のある人生～創造

自由であることを目指すのなら、自由であることを望むのなら、

いつも自由を感じていること、

身体の奥深いところで、常に自由が充満していること、

すなわち、

自由であること。

(12月4日 2004年掲示板)

■<場>「小さな声」

そのことの前提となること。

自由を描けるほど、こころが静寂であること。

11月5日、10日 2004年、7月8日、13日 2012年

●言葉

今生は言葉に人生をかけるのが、自分の生き方かもしれない。

■8年経ってみて思うこと。それは、やはりその言葉をを身体化すること。

●一緒にいた距離

将棋のネット中継を見ていて思うことは、将棋というのは、もちろんその内容の良し悪し
というものもあるのだが、それ以上に

見た時間の長さだけ、

対局者と一緒に考えた時間の長さだけ、

おもしろいものである。

このことはあらゆることについて言えることであるが、効率を求める現代には失われつつあるおもしろさかもしれない。

●カルマ

運不運、仕事の電話

■カルマ～＜自己想起＞＜自己観察＞

これはよくよく考えてみるべきことであるが、カルマには悪いカルマだけでなく、よいカルマもある。正邪をつけなければ、カルマとは原因と結果の法則である。今のわたしは過去の原因があって存在する。その過去の原因が何であるかは今のわたしにはふれることができない部分なので、これには手をつけることができない。ただし、今のわたしは過去の結果であると同時に、今も未来の原因であり、つねに原因を作り出してつづけている。この原因にはわたしは手をつけることができる。だから、いつも、いつも、わたしがいて、このわたしがどのような原因となっているかを見つづけていることが大切なこととなる。

(11月12日 2004年掲示板)

■エントロピー

この人生でまた乱雑さを引き起こしているもの。

300万円の借金をしているなら、まず300万円を返済しなくてはならない。
それなのに、またさらに300万円借金しているような人生かもしれない。

●瞑想

見ること。

11月6日、9日、10日 2004年、1月13日 2005年、7月8日、9日、13日 2012年

●死～＜時空＞

死とはこの世界からいなくなることである。

だが、もしかしたら、時間からいなくなると言った方が適切なのかもしれない。

(加筆して掲示板記入予定)

(ヒマラヤ第2号を読みながら、感じたこと)

死とはこの世界からいなくなることである。

だが、もし意識のある人生を送ることができるようになれば、時間を使うようになれる、空間を使うようになれる、と言った方が的確な言い方になるのかもしれない。

(加筆して新掲示板記入可)

●瞑想

深夜の湖水のような静寂が中心であること。

とりあえず、無音、無言葉、

■身体・環境・存在

日常生活をどのように送っているか、たとえば飲食が瞑想に多大な影響を与えているかもしれない。

●宇宙の外

犬は人間になりたいと思わない。

人間になるということは犬にとっては想像の埒外のことであろう。

では、

人が「なりたいたと思わない」「なりたいたと思えない」「なりたいたと想像すらできない」、そのようなこととは一体何であろうか？

もちろん、想像の埒外のことなので、答えることはできないのだが。

あるいは、もしかしたら、言葉遊びでなく、想像とは創造であるのかもしれない。

創造でない想像はないのかもしれない。

人間存在は創造であり、創造につながらない想像というのはいえなないことなのかもしれない。

(11月10日 2004年掲示板) (草稿要転記) (新掲示板記入可)

あるいは、すべては想像できることなのだろうか。

こういうすべてとは何であろうか。

すべての外というのはないのであろうか。

そしてまた、そもそも、想像の埒外のことを想定するという事は、何かを示唆しているのではなかろうか。

(11月13日 2004年掲示板)

■壁～意識のある人生

犬は人間になりたいと思っていないであろう。

人間になるということは犬にとって想像外のことだからである。

では、人間にとって、「犬にとっての人間になりたいと思う」ような想像外のこととは一体

何であろうか。

まさしく、想像外なので答えることはできないのだが。

あるいは、人間が想像できないこととはないことなのであろうか。

この問題は今回の生きている時間に答えを得られないかもしれない。

ともあれ、この今大切なことは、想像できる限界の〈本当のわたし〉を表現することであり、また、そのようにして今日一日の機会も与えられているのかもしれないということである。

(7月9日 2012年新掲示板)

■無限

■想像

常に想像外のことが起こる。

人間はこの想像の埒外のことを楽しみ、また、悲しむ。

だが、想像がつねに創造となるのであれば、

人間は創造したことの内側を楽しみ、また、悲しんでいることになる。

わたしの想像は、果たして、創造でないのか、それとも実は、創造であるのか。

(1月13日 2005年掲示板)

11月7日、9日 2004年、2月10日 2005年、7月8日 2012年

●できないこと

他人のしていることをしてはいけないと非難するのでなく、そのことを自分が<できる>か否かを問うてみる。

できるのであれば、それはよい。

できるが、しないと断言できるのであれば、なおさらよい。

どちらの場合であっても、非難するようにはならない。

もし、できないのであれば、それもまた非難するにはあたらない。

わたしにはできないことであるのだから。

わたしにできないことを他人ができるということは、すべて賞賛するに値するとは言えないまでも、少なくとも、それは不可思議な他人の行為である、ということだけである。

わたしにはできない。ただそのことだけである。

(加筆して新掲示板記入可)

●意識のある人生～離～創造

創造するためには、モノから離れること。

なぜなら、モノは創造の源でないのだから。

しかし、離れると、その後モノが従うという皮肉さがある。

離れると知るし、

離れるとコントロールできる。

(加筆して新掲示板記入可)

●意識のある人生～<離><時空>

不死というのは、時間の束縛、時間の流れに身を置いていないことである。

すべては離れることによって為される。

人間存在にとって離れる基本は自己に埋没せず、自己を想起し、自己を観察することである。

自分が何をしているのかいつも知っていることである。

しかし、これがとてつもなく難しい。

私はいつも同じ反応を繰り返すブリキのロボットである。

(新掲示板記入可)

●画家

わたしの言葉、それは画家のように時間をかけて言葉をかきこまれているだろうか。

同時にまた、一本の線、それは一瞬のことであり、それはかきなおしではない。

(新掲示板記入可)

11月9日、10日、12日、16日 2004年、7月8日、9日 2012年

●自己顕示欲

大人であれば、大人が子どもに自己をひけらかすことは無意味であり、そのような行為をしない。

子どもどうしが自己を大きく見せようとする。

もちろん、この大人、子どもは暦の年齢のことではない。

(掲示板記入予定)

大きな人間に対して自己を大きく見せようとする。

●当事者

森敦が吐血したとき、弟子に言ったことは、ウィスキーをただちにロックで持ってくるよ
うにということであった。理由は、もうお酒を飲めなくなってしまうかもしれないから、
ということである。こういう話しはとてもおもしろい。わたしは喜ぶ。だが、森敦の身体
にとってはタマラン話しであったらうなあ、とも思う。

わたしはとても愚かなので、悲しむべきときに喜ぶ。

(11月11日 2004年掲示板)

わたしの身体

わたしの身体と呼んでいるものの愚かしい使い方

■＜離＞～相手の立場に立つこと

当事者になれないこと

看守の役割、囚人の役割、役割だけを見て、なりきって、相手を見ない、相手になれない。

●モノ

モノの最低の使い方は、モノを使わないということである。

あるいは、自分が使っていないモノを他人にも使わせないということである。

どちらもいい勝負である…というか、同じことを言っているのかもしれない。

(11月16日 2004年掲示板) (新掲示板記入可)

■金銭

貯金の金銭はこの場合のモノであるのかないのか。

■「上下」＜一体＞

このことのひとつの本質は、

イエスやブダから頼まれれば喜んで使ってもらおうであろう

ということである。

●意識のある人生～＜愛と不安＞心配

わたしにとって、できることとできないことがある。

できることは心配ではない。

できるのだからやって、心配ではない。

できないことはできないのだから、心配しても仕方のないことである。

だから、できないし、心配もしない。

(2月8日 2005年掲示板) (加筆済み新掲示板記入可)

■

とはいっても心配をする。たとえば、昨日のスマホの不具合の件である。
きついからである。

できないということ。

11月10日、12日、13日、18日 2004年、2月5日 2005年、7月9日 2012年

●意識のある人生

あらゆることを見せるためにしないこと。

食事

姿勢

●意識のある人生

人生は動いているようであるが、動いていない。映画のフィルムのようにフィルムはまわって動いているように見えるが、実は動いていない。

わたしは停まっている電車のようなものである。まわりの景色が動いているので、わたしの電車が動いているように思っている。

わたしは、わたしから離れなければならない。

(要加筆)

世界の動き方はわたしの見る目とはまるで違う。

世界の動き方を見ようとすることは今のわたしにとってはあまり意味がない。意味があるのは、わたしのメガネ——ものの見方を変えることである。

●執着

愛情と執着とは紙一重である。

執着が愛情に変じることはないが、愛情はしばしば執着に変じる。

わたしのお気に入りのカップ、わたしのお気に入りのアイデア、わたしの言葉、わたしのお金、わたしの…。

おそらく愛情の対象とは少々距離をおいたぐらいでちょうどよいのではないかと思っている。

(加筆して掲示板記入予定)

離を解脱と呼ぶほどに、離はとても困難なことである。

● 不死

この世にいて、時間の流れにいないこと。

■

人間は不死であると信じている人もこの世界では人は死ぬものであり、あの世界で永遠に生きることができると考えている。

だが、この世界でも永遠に生きようと考えている人がいるようである。死ぬのが怖くて不老不死の妙薬を求める権力者ではなく、この世界でただ、ただ、永遠に生きていこうとする人である。おそらくは、ゲーテが芸術家礼賛で語った、あの世界で永遠に芸術活動をするということを、この世界で永遠に芸術活動、創造活動をしようとするということであろう。

(引用)

■ 意識のある人生～

人生はこま切れのようにして生きていくしかない側面があるが、長いスパンでの展望、意志をもてば、少なくともこの世で人生が終わりだという感覚はないはずである。

意志の長さがはっきりと未来に届いているからである。

■ 上映時間

2時間で終わらない映画がある。

● 切り抜き

以前何回か、新聞の切り抜きをしたことがあるが、単に切り抜いただけで終わってしまった。後でその切り抜きが必要になったことはなかったからである。

しかし、いわゆる我々の知識というものもこのような新聞の切り抜きのようなもので、後になってみれば、何の役にも立たない紙切れのようなものなのかもしれない。

(11月18日 2004年掲示板)

■ 価値あるもの・切り抜きでない人生

では、これまでの人生で最も役に立ったこととは一体何であろうか。

■ 価値

録画したビデオ

気に入ったモノ

11月11日、12日 2004年、2月5日 2005年、7月9日、10日、11日 2012年

●初等科読本

凶を凶と読むか。

あるいは、凶を吉と読むか。

(掲示板記入予定)

●意識のある人生～<時空><シンクロ><機会>

占いで「二占すべからず」(二占=気に入らない卦が出たからもう一度占ってみること)と
いうことがあるが、人生においてもこのことはいえる。

同じことは二度現れない。

「わたしがすべきことは何か」という思いと「筮竹の陰陽の形」とは一回だけシンクロするのと同様、

人生もまた一瞬一瞬だけが完璧にシンクロしているのであり、そのシンクロを他の機会に得ようとしてもその一瞬のようにして得ることはできないのである。。だからグルジェフが次のように語ったのである。

(フリッツはグルジェフの主宰する「人間の成長と発展の研究所」プリオールで多くの人たちとともに起居をともにし、学ぶ。フリッツは当時まだ子どもであり、グルジェフから頼まれていた薬草園の手入れの仕事をずっとさぼってしまい、しかられる。その内容も興味深いことであり、おそらく多くの人にとって有益な話しであるがそれは後日ふれるとして、以下はその怒られたときの話しである。)

私は彼が言ったことに対して感謝し、草園で私の仕事を果たさなかったことを詫び、これからはちゃんと果たすということも言った。

彼は感謝の言葉をそっけなく拒絶して、詫びることは無用だと言った。「そうすることは、今では遅すぎるし、草園で立派な仕事をするのにも遅すぎる。人生では、チャンスは二度と来ない、チャンスは一度かぎりだ。草園で立派な仕事を自身のためにするチャンスが一度ある、だがそうしない、だから、この草園で、今たとえ一生働いても、同じことにはならない。」

(フリッツ・ピーターズ著「魁偉の残像」256 ページ めるくまーる社)

ある雲の形は必然性とともこの一瞬だけたったひとつの形を取る。
同じように、人生もまた、今日一日だけしかないひとつの形がある。ひとつの機会がある。

今日だけできることが与えられている。

今日だけ意味があることだけが与えられている。

この今日という筍竹の陰陽の形を見誤らないことである。
モノもそうであるが、今日という一日には膨大な意味が隠されて差し出されている。その意味を十分に使い切ることは実際には不可能に近いことであるが、その意味の千分の一、万分の一でも使い切ろうと努めることはできる。そして、万分の一でも一日を使い切れれば、生きていけると感じるができる。

(7月11日 2012年新掲示板)

(蛇足) ~なお、グルジェフは一回性のほかにもうひとつ大切なことを言っている。

「だが、このことについて「後悔」しないことも重要である。後悔して一生を無駄にすることもできる。ときどき、大切なことがある、良心の呵責と呼ばれていることである。善くないことをして、ほんとうの良心の呵責をもてば、これは大切なことになり得る。だが、ただ後悔して、これからはもっとよくすると言うことは、時間の浪費である。この時間は既に去っている、あなたの人生のこの部分は、もう終わっている、もう一度生きることはできない。いま薬草園で立派な仕事をして、それは重要なことではない、間違っただけのため——仮にも直せない被害を直そうとするために、仕事をするであろうから。これは重大なことだ。だが、もっと重大なことは、後悔したり、残念がったりして時間を無駄にしないことである、これは、もっと時間を浪費する。人生では、そういう間違いをしないことを学び、一度間違いを起せば、その間違いは永遠であるということを理解しなければならない。」

(新掲示板記入可)

■時間

●葬式

四十九日をやらなかったことが愚かだとしたら、もっと愚かなことを日常生活で山のように行なっている。

●自戒

ひょっとして、I氏のような瞑想をしているのかもしれない。

●意識のある人生～仕事

托鉢としての仕事。

神が与えてくれた仕事。

●天

「天網恢々疎に漏らさず」というのは、見えない世界のことである。

天に唾する

天への貯金←この世の金から<離れる>ことによって得ることができる。

11月12日、17日2004年、11月24日2005年

●錯覚

電車が動いているのか、景色が動いているのか。

わたしは他人のせいにするが、わたしのせいかもしれない。

わたしの電車は動いていなくて、景色の方が動いているとわたしはいうかもしれない。

確かにそうかもしれない。

でも仮にそうだとしても、わたしの電車を動かさずにいる理由にはならない。

(掲示板記入予定)

●覚悟

教室の受講生の悩み、迷いをすべて引き受けること。

●子どもの瞑想

子ども時代のノスタルジーというのは、ひょっとしたら子どものように感じ、瞑想することの一端かもしれない。

11月13日2004年

●教室～言葉のしおり

「生命、愛、感謝」

「生命、愛、調和、平和、完全」

(参考)「ヒマラヤ聖者の生活探求 第一巻」(ベアード・T・スポールディング著 96 ページ 霞ヶ関出版)

「この村には平癒の廟というのがあった。建立以来この廟ではただ生命、愛、平和という言葉のみが口にされてきて、それが極めて強烈な波動となって蓄積され、廟を通り抜けるだけで殆んどすべての病気がたちどころに癒されるというのである。この廟では生命、愛、平和という言葉だけが、かくも長年月にわたって語られてきているので、それから出る波動は極めて強烈であり、たとえ不調和や不完全を意味する言葉を何時なるとき使ってみたところで、何の影響も及ぼせないそうである。人間の場合にしてもその通りで、生命、愛、調和、平和、完全を現わす言葉だけを出すようにすれば、そのうち不調和な言葉など出せなくなるであろう。事実わたしたちは不調和な言葉を使ってみようとしたが、その都度それは言葉にならなかった。」

11月16日、17日、18日 2004年

●瞑想

一日の元型としての朝の瞑想。

一日のわたしの時空にエネルギーを注ぎこむ。

これは抽象的なものとして。

人生で生じる出来事はアドリブで楽しみ、その意味を見いだす。

これとは別にわたしの具体的な一日として、元型を具体的に瞑想空間に創り出す。

これまでの瞑想空間を創造空間へと変じる。

あるいは、同じことなのかもしれない。

一日の元型としての夜の瞑想。

一日のわたしの時空からエネルギーを受ける。

一日のわたしの時空にエネルギーを注ぎこむ。

■集中

10時間のダラダラした瞑想ではなく、10分間の命がけの瞑想。

■ババジ

ババジの名を呼び、瞑想を手助けしてもらう。

(参考) 言葉

バカヤロー、お母さん、天にましますイエス様、…

言霊

●<それ>と「わたし」

わたしとはドアで、空間を仕切り、部屋にしているだけなのかもしれない。

●意識のある人生～創造されること

執着をなくすということから、まず実現される。

考えてみれば、これがわたしの望む創造のためにいちばんに必要なことであった。

●時空～予言

人間～わたしが稲毛に自宅があるのを知っているから、夜になると、家に帰ることを予言できる。

占い～シンクロしたしるしを見て、予言する。

創造者～

●意識のある人生～芽

今日一日、わたしの内に生じた愛の芽はどれほど小さくとも決して見逃さないこと。

その芽を踏みつけてしまわないこと。

わたしはいつもわたしのいるところにしかいない。

(11月18日掲示板)

善因となる、どのような小さな芽も決して見逃さぬこと。

一瞬、一瞬、愛の種子を拾うことができる機会がある。

どれほど小さな種子であろうとも、成長すれば、この世界すべてを覆っているような愛となる。

■愛の種子

この世界には雪の結晶のようにひとつひとつが違う形をした愛の種子がちりばめられている。

ひとりひとりがこの愛の種子を拾いながら、人生を送っていく。

ひと粒も拾わないような人生はない。

ひとりひとりがこの世界にあるすべての種子を拾う。

みな違った愛の種子をひとつひとつ拾う。
だから、皆がひとりひとり違う人生を送る。

(11月19日掲示板) (草稿へ要転記)

今日もまた、皆が違う種子をみつけて、ひとりひとりの人生を送る。
(加筆して掲示板記入予定)

●意識のある人生～創造

いつも何にエネルギーを費やしているか。
いつも何を想念しているか。

そして、波の間に間にただようエネルギー、想念ではなく、
いつもひとつに注ぎ込まれるエネルギー、想念、
それを意志している。

(加筆して掲示板記入予定)

■トリモチ

嫌うと、避けると、そのものはくっついてくる。
嫌うのではなく、避けるのではなく、ただただ理想を意志しつづける。

■創造～念力

創造は念力ではない。(ヒマラヤ聖者の生活探求)

■内と外

内から実現されてくる。
外からは実現されない。
条件からは実現されない。

11月17日、19日 2004年

●モノ

必要と思われるモノだけを持つ。
いつもこのようにこころがけてはいても、
生きてると、この必要なモノが増えてくる。
生きてると、必要なモノが減ってくる、という生き方はないものだろうか。

(11月19日掲示板)

11月18日、19日、22日 2004年

●究極の選択

究極の選択とはただ一つの選択であり、究極の自由とはただ一つの選択である。

将棋のハブヨシハルが優劣不明の局面で乾坤一擲、次の一手を指す。

その一手はまさしく神と通じたような一手である。

それは唯一の手、神とハブにとっては他に選択肢のない一手である。

ハブに自由はあるのか？

何をやっても自由だという自由はない。

しかし、これこそ最善の一手という<自らが由（原因）である>という<自由>はある。

わたしはこれだけを選ぶ、ただ一つの選択を選ぶ、これこそ究極の自由である。

このただ一つの選択において神と人とが通じる。

（11月24日掲示板）

死ぬしかない、と思う。

これが唯一の選択であると思う。

しかし、究極からみれば、生きるしかない、ということかもしれない。

11月19日 2004年

●金の成る木

「神との対話」はとても分かりやすい本ではあるが、やはり理解不能なところもある。そのひとつが、

「実は金の成る木というのはあるんだよ」

という話しである。わたしはこの本を一箇所を除いて全面的に信用しているので、どこにあるんだろう？ と実は何年もの間考えていた。

求めていると、答えは与えられるものであり、どこにあるかははっきり分かった。分かったが、金が成っている枝まで高すぎて上っていくことができない。筋力不足である。これからはちょっと筋力トレに励もうと思っている。

（11月20日掲示板）

11月20日 2004年、2月5日 2005年

●健康

健康とはこころの反映である。

いつもこころで何を思っているか。

怒り、不安、妬み、嫉み、…。

身体は忠実にこころを映し出す。

●意識のある人生～裸

困ることなど存在しないと知っている。

だから、いつも裸でいる。

●住まい

本当の住まい

2箇所

●意識のある人生～導き

光を忘れないこと

●柔軟体操

心身

●手足の冷たさの象徴

●いらぬ非難を受けたときのこと

黒住宗忠の為したこと。

米長邦雄氏の為したこと。

●影響

喫茶店でただ思うこと。

グリーンマイル「親切にしてあげたと言えればいい」

11月21日、22日 2004年、2月5日 2005年

●意識のある人生～聖なる言葉

無限なる愛、

わがところに満ち、

わが身体を通る。

(わが身体に通ず。)

愛が満ちているところ

愛が通っている身体

愛が通じている身体

■心身

「ここに満ち」ということのころとは身体のことかもしれない。

(参考)「ヒマラヤ聖者の生活探求」1巻 59 ページ

「神と人、父と子との親密なつながりを実感するでしょう。実はひとつであるのに(丁度、魂と肉体との関係のように)、これまで別のものと思ってきたのは実は心で勝手にそう思い込んでいたのです。」

●身体

心身の相関関係についてはよくいわれる。

不安、イライラ、怒りなどのころのあり様が身体に悪影響を及ぼすということはよく知られているし、よく語られる。

だが、平穩、平和、愛情豊かなころのあり様が身体にどのような影響を及ぼすかについては全く知られていなし、それゆえ、語られることはない。

(11月22日掲示板)(教室資料要転記)

■神殿としての身体

創造

小乗の道

大乘の道

●愛

身体への愛～身体の立場に立つ～少食

他者への愛～他者の立場に立つ

実現への愛～実現の立場に立つ

自己への愛～自己の立場に立つ～どのような自己であるか

(教室資料)

11月22日、27日 2004年

●まわり道

毎日毎日駅まで歩く道のりを遠回りして歩いている。

いろいろな道を遠回りして歩くと、いろいろな景色が見られて楽しい。

しかし、もし急ぐのであれば、早く駅まで行って、余った時間を他に使うつもりであるならば、最短距離を歩いて行った方がよい。

ただし、悲しいかな、さの最短距離の道を知らない。

●耳鳴り

小さい頃から時々聞こえる耳鳴りは、高い波動の振動なのかもしれない。

●占い

占いは「時空」を俯瞰する。

ババジという言葉は「時空」を突き抜け、わたしの瞑想を助ける。

そして、愛という言葉、思い、行為はわたしがすくい上げるのを待っている。

●自己想起

自己意識というのは、わたしが居場所を定める役割だけをしているのかもしれない。

●教室（12月25日）

イエスに代わって話すこと⇒内なるキリストに従って話すこと。

ただし、これは、いつでも、ということであるが。

●贈り物

実は、愛がなければ何も与えることはできない。

だから、愛のないものは受け取ったようにみえてもやがては消えてしまう。

ただし、愛があつてさえ、<その人自身が為して得るべきこと>は何も与えることができない。

（11月27日掲示板）

ただし、愛があつても与えることができないものがある。

それは、その人自身が為すことである。

為すことは、相手に強要することもできないし、相手に代わって為してあげることもできない。

（草稿要転記）

●放火

あらゆること、すべてをそのまま受け取る。

火はつけないこと。

●モノ

死ぬ時には何も持っていくことができないという。

では、生きている時には、持っていることができるのというのだろうか。

（11月25日掲示板）（教室資料転記予定）

● 奇跡

奇跡はなぜ生じるか。

ひとつは、奇跡とは不可解な出来事でも何ごとでもなく、それは法則であるから生じる。

もうひとつは、奇跡に思えるような外なる出来事を見ないと、内なる出来事を変えようとしないから奇跡は生じる。

だから、奇跡に感動することはよいが、奇跡にとらわれぬことである。

奇跡は内なる法則へのいざないである。

(11月23日掲示板)

■ わたしの場合

わたしの身に生じた奇跡とは、人に見せる奇跡として生じたのではなく、わたしに見せる奇跡として生じたのではないだろうか。

■ 質問～超能力はなぜふさわしくなさそうな身の人にも生じるのか。

● 神聖なる「二」と「三」

● 小さなころざし

● 草稿

草稿を書くことでなく、自分が変わることに心血をそそぐ方が楽しい。

このことは、わたしの為すべきことの本質かもしれない。

急ぐべきこととは何か、ということ。

いま急いでやりたいことこそ、わたしの本分となるワークではなかろうか。

楽しいことをする。

こちよいいことをする。

内側も、こちよいい気持ちでいる。

● クライアント

治らなかった人を放棄するのはたやすい。

しかし、縁があってその人たちとお会いしたのではなかろうか。

11月23日 2004年、2月5日 2005年

●救い

まず、自分自身を救う。

その後、縁があつて何もできなかった人を。

なぜなら、自分を救えなくて他人を救うことはできないからである。

●スプーン曲げ

信念のリトマス試験紙

●意識のある人生

常に、自己内在の<内なるキリスト>と共に生きる。

11月24日 2004年

●夢と現実

夢で行なえることとは、現実にはできないことではないだろうか。

●神様

小さい頃から神様とはつきあつたり離れたりしている。

11月26日 2004年、2月6日 2005年

●感触

この世界はわたしが今見て、感じているような世界ではない。この感覚は時々生じる。では、本当はどういう世界なのかというと、言葉ではいろいろ言えても、実感としてとらえることはなかなかできない。その感覚は30歳の時の一度きりの不可思議な喜びの感覚であった。

●意識のある人生

自分自身が何をしているかを思い出すたびに、自己の内なる神と常にふれているようにする。

他人自身が何をしているかを思い出すたびに、他者の内なる神と常にふれているようにする。

(2月6日掲示板)

自己想起～わたしの内なる神と常にふれていること。

自他～相手の内なる神と常にふれていること。

(加筆して掲示板記入予定)

■神の現われ方

●呼吸

ひとつひとつの細胞の内にある神が振動しているかのように呼吸する。

(掲示板記入予定)

●パソコンの購入

22万を活かすこと。

人間を活かすこと。

■パソコンの故障

●創造

<わたし>が向上すれば、外は自然とついてくるものである。

●教室

教室の参加者は、わたしの内にあるしこりを何らかの形で反映している。

ということは、教室では教わるという姿勢が正しいのかもしれない。昨日の苦情電話のように。

●体験

神の波動に合わせることへの抵抗感というのは（～自由の問題）、携帯やパソコンを使ったことのない人が持つ抵抗感と同じかもしれない。

●意識のある人生～不安

不安はその都度対処する。

その都度、インスピレーションが生じる状態にしておく。

…もしかすると、このことが神といることというわたしの場合の体験かもしれない。

11月28日 2004年

●不安

誰でもそうかもしれないが、自分も子どもの頃は不安など全くなく、外部の制約はあってもこころの中は天国状態であった。しかし、そんなノー天気なわたくしを見た親から中学に進学する前に何度も何度も「そんなに勉強をしないと、不良の仲間に入れられてしまうよ」と散々脅かされたのが不安の始まりであったように思う。

不安をもって、あらかじめ用心しておいた方が世の中は渡っていきやすいということは確かにある。しかし、不安をもったために失ってしまったものもたくさんあるように思う。この遺失物について語られることはほとんどないので、＜この世界では何かが足りていない＞というような漠然とした皮膚感覚だけがこの失われたものの存在を訴えかけている。

(11月29日掲示板)

11月30日、12月1日、2日、3日、5日、7日、9日、14日 2004年

●永遠の身体

「神との対話」で「あなたがたの身体は永遠に生きられるように造られている」という話が出てくる。こういう話題は宇宙の彼方の話としてぐらいいか気にとどめてなかったが、「ヒマラヤ聖人の生活探求」を読み始めてからはとても身近な問題として感じ始めている。以前にも書いたが、この本を読み始めたこと自体がわたしにとっては奇跡的な偶然である。この奇跡的な偶然は、奇跡的と呼ぶだけの意味がわたしにはあり、16年前にヒーリング能力に目覚めてからの一連の出来事がある一点で集約する、そういう一点がこの「永遠の身体」という理想の実現である。

(11月30日掲示板)

■永遠の身体～気の質

「永遠の身体」ということで、わたしがどのような身体をイメージしているかということ、単に老化を防ぎ、若々しい身体を保っているという身体ではなく、そのような物質的な身体をも含めて、物質から＜光のような身体＞へまで段階的に自由自在に変容できるという身体である。

精神世界の用語を用いるなら、波動をあげて身体を光のようにし、波動を下げて身体を物質化する、ということになるのだろうか。ただし、この波動の感覚というのはわたしには実感できないので、もしかすると「気の粗さ、細かさ」（これなら実感できる）ということが身体の変容と関連しているのだろうか？

(12月1日掲示板)

■永遠の身体～武術の身体

合気の達人である故「佐川幸義」氏は相手に触れずに5人も人間を吹き飛ばしたり、米国大統領候補のボディガードを指一本で動けなくしたりしたというが、こういう技は「物質としての肉体が物質としての肉体に影響を及ぼす」ということでかける技ではなく、「佐川氏の身体のあるレベルの層が相手の身体のあるレベルの層に影響を及ぼす」ということで発揮される技であると思われる。ただし、佐川氏はその技を超能力としてでなく、技術としてとらえていたので、「身体のある特殊な動きが物質としての肉体でなく、身体のあるレベルの層に影響を及ぼす」という形でとらえていたのかもしれない。ともあれ、佐川氏

の合気から「身体が物質以外のレベルの層と密接に結びついている」ことが想像される。

(12月2日掲示板)

■永遠の身体～「弓と禅」

身体の動きが「肉体を超えた特殊な層」と関連があるとはとても思えないかもしれないが、実はこのような例は枚挙にいとまがないほどこの世に満ちあふれていることである。ただ、この特殊な層が明確に現われ出てくるためには膨大な反復が必要となるので、「動きと特殊な層の関係」はあまり気づかれることがないのかもしれない。

たびたび取り上げる「弓と禅」の著者オイゲン・ヘリゲルの弓の師範「阿波研造」の場合も同じである。師は弟子のオイゲン・ヘリゲルに来る日も来る日も「弓の型」だけを繰り返させ、弓を射させない。異国の弟子にはこの指導法は理解しがたいものであり、何度もやめようと思ったり、また、破門されたりもするが、やがて、師が「今し方<それ>が射しました。<それ>に対してわれわれは敬意を表して頭を下げましょう」といい、動きが特殊な層を生み出すに至る。阿波師の場合、この特殊な層とは何かというのが興味深い。ある日、オイゲン・ヘリゲルが師に尋ねる。

「的とは何ですか」

「…この目標は、そもそもこれを名付けるとすれば、仏陀といわれるのです」

師にとっては、わたしのいう特殊な層とは仏陀に至る道であり、それゆえそれは<仏陀である>ことに通じる。また、こうも言っている。

「あなたの念頭から中りを追い出さない！ あなたはたとえ射がことごとくあたらなくとも、弓の師範になれるのです。あの的の中りは、頂点に達したあなたの無心、無我、沈潜状態——その他なんとこの状態を名付けようと——の外面的な証拠、確認に過ぎないのです。名人の地位にも段階があります。そして最後の段階に達した人であって初めて、外面的な目標をも、もはや射損じることがあり得ないのです。」

このことを身体に即して考えるなら、肉体としての身体とは、弟子がこだわる中りのように、外面的な証拠、確認に過ぎないのです。射手と仏陀の間に外面的な的があり、わたしが仏陀と通じれば必ず外面的な的と通ぜざるを得ないように、わたしが仏陀と通じれば必ず身体の外面的な的とも通ぜざるを得ないのです。身体の外面的な的とは永遠の身体ということです。わたしは百発百中、千発千中、的に当てる人がいたら奇跡の人と呼ぶように、永遠の身体を保持している人がいたら奇跡の人と呼ぶでしょう。しかしそれは、阿波師のいう特殊な層である<それ>、すなわち<仏陀>を見ることができない凡夫ゆえの言であります。

(12月3日掲示板)

■人生における型

では、弓における型というのは人生においては何であろうか、という問題が出てきます。

(12月5日掲示板)

■レス

…意識

(加筆して掲示板記入)

■永遠の身体～空中浮揚

「永遠の身体」に関係がありそうなわたしの体験に関して若干お話します。

小学校5年か6年の頃の話ですが、テレビで「プロレス」を見終わって、異常な興奮状態にあり、「今なら何でもできそうだ。空中に浮かんでみようか」と思い、鏡台の三面鏡の前でそのことを意志すると、いとも簡単に1メートル近く浮き上がってしまった。しかし、いざ浮き上がると怖くなって、足をバタバタさせて着地した記憶があります。足をバタバタさせたのがなぜかリアルに記憶に残っていて、あの出来事は事実であったろうと今でも思っています。

あの時連続して訓練していれば、今頃「空飛ぶ中年男」としてデビュー出来たかもしれないですね。アタマもだいぶ白くなってきたし、髪を伸ばせばまさしく仙人です。

しかし残念ながら、空中浮揚は今の私にとっては再現性のない1回限りの体験です。では、どうすればもう一度浮かぶことができるのかということをお賢い知恵ではかってみるに、おそらく「確信性」と「ハイな精神状態」に鍵があるのではないかと思います。このふたつのこころの状態はある意味で通じているところもあり、別の言葉で表現すると、「信仰心」とか「神・仏に通じていること」ということになります。信仰とか神・仏という言葉にアレルギーのある方には、「人間の内にある無尽蔵のエネルギー貯蔵庫を開くこと」という表現になるかもしれません。

ただし、この「確信性」とか「ハイな精神状態」というのは、とても微妙なところがあり、通常用いられている意味とは似て非なるものです。ちょうど、どれほど人が立派に弓を構えてみせても、「<それ>が弓を構えた形」とは全く異なるかのようにです。だから、百万回、千万回、確信をもって空中浮揚をしようとしてもできないし、異常な興奮状態が空中浮揚への道を開くわけでもありません。このあたりの微妙な感覚については、ふれられれば、また取り上げてみたいと思っています。

(12月5日掲示板)

■永遠の身体～疾走

空中浮揚ほど劇的な出来事ではないが、中学時代、陸上競技に明け暮れていた時にも一度不思議な体験をした。当時は陸上の部活が終わってから、自宅から往復 4 キロの路上を毎晩走っていた。走るのが好きだったのである。

ある時、小学校時代の同級生で他の中学に行った友人と一緒に走ろうとさそわれて走った時のこと、彼もバスケット部に入っているのだから走るスタミナには自信を持っていたようであるが、わたしが疲れを見せずに走っているのを見て、ゴール間近でもないのに、やおらスパートをかけてきた。彼は、必死に全力疾走をするが、わたしが全く息を切らせず平然とついてくるのを見て、ついにギブアップしてしまった。

あの晩は不思議なほどの軽さであった。空中を走っていたわけではないが、感じとしては、空中を地上の中間を走っているような感じで、永遠にでも走っていれそうな気分であった。

数年前、ある精神世界の講演会で「足を動かもしないのに、体が自然に移動した」という体験を話されていた方がいらっしゃったが、まあ、わたしの場合もそれに近い感覚であった。

肉体としての身体の利用と肉体を超えた身体の利用とは、連続的な様々なレベルがあるのかもしれない。そして、おそらくは、純粋な肉体としての身体のみ利用ということはいえないのではなかろうか。

(12月7日掲示板)

■永遠の身体～寒天状の気～物質化の一步手前であろうか。

六年ぐらい前の話しである。当時妻は電話を受ける仕事をしていて、他人の「気」を受けやすい妻から「しんどくて仕方がないので、他人の気を受けないようにバリアとなる気を入れてもらえないか」と何度も冗談半分に頼まれた。そういう「気」はあまり好みではないので、あまり相手にはしていなかったのだが、一度せっぽつまった感じで頼まれ、では入れてみようかと「気」を送った。そのときは、ちょうど兄の死期を医者から宣告された日であり、わたくしもかなり興奮状態にあった。実家から「遠隔」で10分ぐらい送っただろうか。その「気」は今までの「気」とはかなり異質で、妻の周りに「寒天状の気」がおおわれていくのがはっきりと分かった。効果のあるなしは不明であったが、しばらくすると妻から電話があり、娘が悪さをするので、少しふれたら吹っ飛んでしまい、動けなくなってしまったので何とかしてもらいたい、とのこと。この手のことは簡単なので、普通の気を送って娘はすぐに元気になったが、まあ、寒天状の気の効果は絶大であった。

今振り返ってみるに、あの寒天状の気は佐川幸義氏が合気で用いる武道のような気であったのだろうか。あるいは、あの感触は物質化現象へと至る気の使い方であったのだろうか。

(12月9日掲示板)

■永遠の身体～「気」の強弱

十数年前、鍼灸の専門学校に通っていた時の話しである。同じクラスに某気功道場に通っていた人がいて、何回かわたしの気を送ってあげたことがあった。わたしには、わたしの「気」の質はまるで分からなかったが、熱心に気功の鍛錬をしていた彼氏によるとわたしの「気」はとても細かい「気」で、道場で習っている「気」は目が粗いという話しであった。

あるとき、彼が自分で流す「気」に手を入れてみてくれという。彼氏が両手を広げてその間に「気」を流し、わたしがその間に手を入れると、不思議なことに彼の流す「気」は遮断されてしまうのである。普通はそのようなことはありえないという。ちなみに、彼の通っていた道場は「気」によって人を飛ばすという、そういう「気」を出せるようにするのであるが、こういう武術のような「気」はもっと目の細かい「気」には全く通用しないというところが、この物質世界の法則とは異なるようで、なかなか興味深い話しであると思っている。

では、わたしはいわゆる「邪気」など絶対に受けないかという、そんなことはない。また、他人の「邪気」を受けやすいという人にもずいぶんお会いしたが、そういう人の身体をなしている「気」がどのような「気」であるかは、今の段階ではわたし自身コメントする情報を持ちえていない。

(12月10日掲示板)

■永遠の身体～スプーン曲げ～大乘

■永遠の身体～煩惱・条件

永遠の身体を得るということは、身体をコントロールできるということである。どのようにコントロールするかというと、

■関心

身体に目を向けたのは、中学生の頃ニキビが出来て、毎日鏡とにらめっこした時と40歳の頃毎日のようにサウナに泊まっていたが、ある朝サウナの鏡を見て「この顔は誰だ」というぐらい疲れた顔をしていたのに衝撃を受けたことぐらいである。

陸上競技をしていた頃

もしかすると、身体というのは、相当注意をはらうべき宝物であるのかもしれない。

グルジェフが言っていた身体の動きに注意をはらうということは、その言葉以上の意味が

ふくまれているのかもしれない。

やわらかい信念、やわらかい身体、そして、自己意識

あるいは、囲碁将棋の次の一手、あるいは、囲碁将棋の形

寒天状の気とは物質化の一步手前の気か、しかし、影響力が強いところをみると「情報力」の強い気であるのだろうか。

身体を動かす気と想念から生まれる気

どちらの気が強いか

通らない気

想念と気の粗さ、細かさ

神の愛の気

わが身に生じたさまざまな奇跡が再現性をもたなかったということは、それが神からの奇跡であったということをも物語っているのか。そして、奇跡とはそのようにして生じると。邪気を廃する。

佐川幸義の技術、オイゲン・ヘリゲルの師の技術

■永遠の身体～輪廻

生まれ変わることができるということは、人生が一回きりでないということは、喜ばしいことであると思っていた。失敗すればやり直しがきき、また、何度でもいろいろな立場に立って体験できるというのは、とても合理的であると思っていた。

知らない土地への旅行は胸が躍るように、予想もつかない人生の旅もまたこころが躍る。しかし、このような人生の繰り返しこそ、お釈迦様が輪廻と称したことではなかったか。この世界は見て、体験して、楽しんだり、悲しんだり、笑ったりすることができる世界であるが、同時にわたしが粘土を自由にわたしの好むような形に変えるように、この世界もまた創り出すことができるものである。わたしはこの世界で客人のように楽しむこともで

きるが、また、この世界の主人となって世界を創り出すことができる。

輪廻と物質としての身体

生まれ変わりは喜ぶべきものではないのかもしれない。

死体とこの世での生き方

物質界での輪廻からの脱却

死を悲しむのなら、生も悲しまなくてはならない。

どのような生を送っているのか知らない。

■永遠の身体～呼吸

いろいろな本でよく言われていることは、波動を下げると物質化するという話しである。

逆に波動を上げると

いろいろな本で物質と波動の関係がとりあげられている。わたしの理解するかぎりでは、波動を下げると物質化し、波動を上げると別の世界の存在になるということのようである。この波動の上げ下げの実感はわたしにはないので、本当の話しかどうかは今のところは深く立ち入らない。ただし、呼吸の目の粗さ細かさ、気目の粗さ細かさについては比較的感じ取ることができるので、これを手がかりにして身体の調整をこころみしてみようと思っている。

波動を上げるとか下げるとかの問題。

波動を上げることの実感としての呼吸法。

想念と＜呼吸の質＞の問題。

合気道の身体に対する影響力

兄の死とそのときのこころの状態、ある意味での躁状態、アクティブ状態、

あるいは、兄の存在、父の存在

他者のための行為

コントロールという問題

物質としての身体をたくみにコントロールということ以外に、

■永遠の身体～文芸春秋

車内吊りの広告によると、「文芸春秋」で死に方の特集をやっている。まあ、わたしの「永遠の身体」などという考え方は信じがたいわ言であろう。

アーサー・ケストラー（「機械の中の幽霊」の著者）という人は「今世紀中に人類は月に行くであろう」と予言し、職にふさわしくない発言をすることで、当時やっていた科学雑誌の編集長を首になりそうになったという。

人間という存在は、想像できることはすべて創造してしまう存在である、というのがわたしの基本的考えであり、これは外的なことのみならず、内的なことに関しても同じである。ただ、アーサー・ケストラーも指摘しているように、内的な事柄に関心を寄せる人はとても少なく、関心のある人も「依存的な関心の持ち方」をするので、人類の内的発展は紀元前後に一部の突出した人間が出て以来、ほとんど成長がみられていない。このことが、わたしが「永遠の身体」を主張することがたわ言となる所以である。

「神との対話」で「あなた方はまだ保育園以下である」というようなことが書かれてあるが、二本足で歩いたことのない人には四つ足でハイハイする以外の動き方は信じられないナンセンスなことがらとしてとらえられるであろう。

ちなみに、二本足で歩くとは、意識的な生活を送るということである。

（12月15日掲示板）

●為すこと

この人生では、

生まれる前に為したことを単に再現しているだけの「わたしが為す」ことと

この人生で初めて<わたしが為す>ことと

両方の為すことがある。

今日為したことはどちらの「為すこと」であっただろうか。

（12月9日掲示板）

■為されること

実はもうひとつの「為すこと」があり、

それは、他人の言うように為す、ということであり、

「神との対話」では、仮に罪というものがあるとしたら、そのことかもしれない、と言っている。

これは正確にはわたしが<為す>というより、他者の人生を「なぞっている」だけという

ことだからである。

ただ、わたくしが思うに、この「なぞる」ことだけであっても、人生を変えていく力があるところがまさしく物質世界の物質世界たる所以である。

写経には写経の力があり、凡夫の念仏には念仏の力が生じる。

(12月11日掲示板)

この人生で新たに達成できたことと前の人生で達成されたこととがある。



どこからが今回の人生の始まりであるのだろうか。

あるいは、

わたしの人生のどの部分が今回の人生であるといえるのだろうか。

★12月 2004年

12月3日、4日、5日、24日 2004年

●どんぐりの睡眠

もしかして、ホームレスのように眠っているのかもしれない。

世界への関心が低いので、政治や経済や利益にしか感心がないので、今はまだ、「どんぐり」のように眠っているしかないのかもしれない。

どんぐりは何度も何度も落ちて、どんぐりのまま芽が出ずに終わる。

■食事と睡眠

●ヒーリング

治らなかった体験をしても、治るという確信を持ち続けられること。

そこで、大乘と小乗とに分かれる。

●不動の点

不動の点とは意識のことである。

不動の点にするものは意識である。

■視野

(早朝、パール街を歩きながら～)

人間は意識したものしか見ることができない。

いつも通勤で歩く道であっても、意識を変えれば違うものが見えるように、わたしの内的風景も意識を変えれば、無意識に生きるでなく、無意識に過去の悔恨、未来への不安、他人の思惑に生きるのではなく、わたしの意識というサーチライトを内的風景にあてつづけるならば、まるで違う風景が見えてくる。そして、その風景が外なる風景の原画である。

(加筆して掲示板記入予定)

12月4日、5日 2004年、1月4日 2005年

●意識のある人生

こころの内側にいつも湖面があり、それはさざ波ひとつ立っていない。

●創造

過去の奇跡の創造を振り返ってみる。

■創造力の源

できる喜びと疑心が一片たりともないこと。

可能性としての人間存在～偏見の排除

どんぐりは芽を出す。

人間も芽を出す。

●縁

わたし以上と思われる人には恐れ、ひれ伏し、

わたし以下と思われる人には一顧だにせず、足蹴にする。

だが、わたしの手の届かないような人物に会うことはないだろうし、

わたしと無縁なほど愚かな人とも出会うことはないであろう。

(加筆して掲示板記入予定)

●時間を刻む

体内時計の目覚ましで早起き。

体内にある健康指針で食事、起床、行動、睡眠。

●不敗の法

将棋の不敗の法は、将棋を指さないことである。

囲碁の呉清源の名言に「手抜きはつねに次善手以上の手である」というのがある。ある部分戦で最善手が分からない、そこで分からぬまま悪手を打つよりも手を抜いて他に打った方がはるかにましであり、大局の見地からは<別のところ>に打った方がよいということが往々にしてあるということである。ただ、われわれ凡手はどうしても<今打っている>部分に目がくぎづけになり、<別のところ>に打つことなどは思いもつかないことがよくある。

何回か書き込んだ話しであるが、安田九段は知的障害児に囲碁を教えるということを初めてなされた方である。誰もがそんなことはできないと思っていたのであるが、教えると打てるようになるということである。ある時、安田九段が知的障害児の子ども A 君と B 君が碁を打っているのを見ていたところ、もともと A 君の方が強いので A 君優勢なまま局面は進行し、ある一手を打てば A 君は大石をとって勝つことができる、という場面になる。そこで A 君が考えているが、A 君の実力から次の一手は分かっているはずである。ところが、A 君は B 君の表情を見て何やら考え、わざと悪手を打つ。それを見て B 君は喜んで次の手を打ち、逆に A 君の石をとって逆転勝ちし、大喜びをする。そして、B 君が喜んでいて A 君もまた大喜びをする。それを見ていた安田九段もまた不思議な感動をおぼえる。そのことを「週刊碁」に書き、それを読んだ高塚がまたまた感動する、という、まあ、こういう図式である。

わざと負けるというのは囲碁のルールの外である。わざと負けたら、囲碁にならない、囲碁にはならないが、大局では最善手であるのかもしれないのである。二度と再現されることのない碁であるが、その勝負は「週刊碁」とこの HP に永遠に残る勝負である。

だから、もしかしたら将棋不敗の法、将棋の最善手もまた将棋を指さないことなのかもしれない。

すなわち、<将棋のルール>では、将棋を指さないということ。

<この世のルール>では、生きていけないということ。

<しない>ということの偉大さがある。

<しない>ということは、別のルールで生きていくということである。

(1月4日 2005年掲示板)

もしかして、この世界のことはすべて<しない>ということが最善手なのかもしれない。と同時に、この世界は<する>ことを積み上げていく世界でもある。神聖なる二律背反である。

将棋を教えるという人

●??

人間でなく、良心でなく、わたし

12月5日2004年

●意識のある人生～瞑想

宇宙全体とシンクロした呼吸

12月6日2004年

●創造

不安であれば、それも創造される。

●教師

わたしが教える人がいる。

わたしに教えてくれる人がいる。

両方の人がいる。

ひとりの人が両方の人であることもある。

(掲示板記入予定)

●9人のハーモニー

9人のハーモニーが美しいか醜いか、どちらにしろ、わたしはその一員である。

ハーモニーが醜ければ、そのハーモニーを乱している誰かを追い出すか。

いつもそのように考えるが、もしかして、わたしが抜け出すべきなのかもしれない。

わたしは音をはずしていないか。

音をはずしているのは8人で、わたしは音をはずしていないと考える。

それが悲しいかな、この世界の人間である。

(加筆して掲示板記入予定)

●

ババジのようにひとりの人を永遠に見守っていること。

あるいは、ババジのような人から永遠に見守られていること。

ドングリ

親子

■まなざし

ひとりの人を永遠に見守っているということは、わたしにできることだろうか。
ある人から永遠に見守られているということは、わたしの身に起こっていることだろうか。
(12月6日掲示板)

12月7日、14日 2004年、1月31日 2005年

●意識のある人生～黄金の時

「神との対話」で神は「すべての時は黄金の時である」という。
雑用の時にも黄金の時を。
決まりきった仕事の時にも黄金の時を。

●想像外

この世界に想像もつかないおぞましいことが存在しているなら、
この世界に想像もつかない理想が存在していたとしても不思議ではない。
もし、わたしの身体の完全性に思い至るなら、後者の理想が存在していると考えの方が自然である。
ただし、普通、後者を見ることはできない。
そこにいないからである。
前者は頻繁に見ることができる。
そこにいるからである。
そこにいる、いないというのは、他者のことではなく、無論、わたしのことである。
(12月8日掲示板)

■想像できること

想像とは、わたしのいるところである。
そして、想像は創造の源となる。

想像とはわたしのいるところである。
まだ、その居場所は現実という場所ではないかもしれないが、わたしは想像するときにある場所にいる。
問題は「わたしはいつもその場所にいるかどうか」ということと「わたしが本当に望んでいる場所であるかどうか」ということである。
このことが想像が創造となるのか想像のままで終わるのかの境目である。
(12月27日掲示板)

●瞑想

内から外に光が出て行くように行う。

(加筆して掲示板記入予定)

●モノ

モノは昔、人の手をかけて作られた。

どのような人の手か、ということが問われた。

なぜなら、人の手がモノに映し出されたからである。

ところが今は、値段が安いかなんかが問われている。

(加筆して掲示板記入予定)

モノに残る気、姿、

12月8日2004年

●断定

人生で句点をつけることは簡単である。

しかし、句点をつけた瞬間、歩みはとどまる。

人生はつねに読点で進んでいくのがよい。

読みづらいかもしれないが、前には進んでいく。

(掲示板記入予定)

12月10日、12日2004年

●創造～虫の目・鳥の目

ゲームの戦略には普遍的なコツがある。コツをつかめば、考えなくともどのように指せばよいか、どこに石を打てばよいかはかなり分かるものである。

人生における創造もまたしかりである。われわれが通常用いているスキル、マニュアルは神の目から見ると、全く不必要な道具であるかもしれない。

(加筆して掲示板記入予定)

12月9日2004年

●創造・望み

永遠の身体が得られれば、わたしの望みはすべて解決される。

～望みは実現された。

12月13日、14日2004年

●鏡

イエスは、あなたもわたしと同じような奇跡を起こすことができる、いや、もっと大きな

奇跡を起こすことができる、と言った

イエスはすべての人の内にキリストを見る、内なる神性を見ることができたからである。

だが、いまのわたしは他人の内にそのような神性を見ることができない。

だから、相手にわたし以上の奇跡が起こせると言うことができないし、

だからまた、いまのわたし自身にも神性はその程度にしか芽吹いていない。

得々として、他人を非難すればするほどわが身は下がる。

まるで、杭碁のようである。

(杭碁とは、杭のように打てば打つほど(囲碁では石を打つという)棋力が下がっていく、へぼ碁のこと)

(加筆して掲示板記入予定)

モノを創り続けているだけでなく、

時には、

この世界の不可思議さを感じてみるのもよいかもしれない。

神殿として身体の掃除

原型としての今の身体

12月14日 2004年

●芸術～一回性と反復性

科学の優れているところは、反復性があることである。すなわち、実験して新しい発見を確認できるし、条件が同じであれば、すべての人、すべての出来事に通用することである。

下駄を作る職人もまた科学のように同じ下駄を作り出す。その同じさ加減は、時には機械が作り出す同じさ以上である。

機械も同じようにしてモノを創り出す。(作り出すから創り出すへ)

食物を食べているのではなく、エネルギーを食べているのではないだろうか。

エネルギーにもいろいろなレベルのエネルギーがある。

ヒーリングも同様である。

●保育園以下

神との対話で「人間のレベルは保育園以下である」という話しが出てくる。まあ、自分の足で動き出す以前の段階であるということで、おそらくは意識的行動ができないというレベルの話であろう。

だが、保育園以下ということは、考えようによっては、信じがたい、想像しがたい未来があるということでもある。

12月17日、18日、21日、23日、24日 2004年

●神同一障害

みかけは男であるがこころは女である、あるいは、みかけは女であるがこころは男である「性同一障害」は最近かなり社会的認知を得るようになってきた。しかし、「神同一障害」に関してはまだまだボロクソ、クソミソである。「神様を信じている」というのはまだよい、新興宗教は少々危ないところもあるが、まあ初対面でなければ、それほど心配はない。浄土真宗、日蓮宗、曹洞宗、キリスト教となれば、完全な社会的認知を受けている。どのような宗教であれ、まあ、信じるのはよい。問題は「わたしは神様である」という宣言だ。これは相当危なくみられてしまうようである。原因は、「神様→教祖→人を従属させる」という図式が反射神経的に思い浮かぶからではないだろうか。まあ、確かに世の中の宗教はほとんどがその図式となっているので無理はないのであるが。

以前、飲み屋で「わたしは神様だ」と叫んだようで、後日、「あの時あんた、神様だと叫んでいたよ」といかにもトンデモナイことを口走っていたと言われたことがある。まあ、へべれけでそんなこと言っても説得力0であろうが、実はわたしのライフワークのひとつは「神同一障害」を認知させることである。そのためには、わたしが神であることを立証しなくてはならない。だが、どうみたって見かけは人間で、しかも中身は俗物ときては、立証は結構な道のりとなりそうである。

(12月18日掲示板)

■人間

人間は人間であると思う人間がいる。

神を信じれば救われると思う人間がいる。

神を信じて神になろうとする人間がいる。

どの生き方を合理と感じるかは、まさしく感じ方の問題なので、見解の相違としかいいようのない話なのである。

(12月19日掲示板)

●変身

ほとんどの人にとっては「わたし」というのは外的評価によって成り立っているの、他人にどのようにみられているかによって、カメレオンのように「わたし」が変身していく。しかし、死期を宣言されると、ほとんどの人のうちの一部の人は「わたし」はこれまで他人の評価に合わせて変身してきたが、わたしのものといえる〈わたし〉はそのような変身によって何も変わってこなかった」ことに気づく。〈わたし〉が変わるといえるのは全く別のことである、ということに気づく。

(12月23日掲示板)

■

わたしのものとしての〈わたし〉の変身とは何であろうか。

決意

●どちらでもよいこと

肉食も飲酒もこのまま一生やめるということが達成できている。だから、場合によっては食べても飲んでもどちらでもよいと思っている。だが、自己想起をするということに関しては達成することができていない。だから、自己想起をするということはわたしにとってできてもできなくてもどちらでもよいことではない。

(12月21日掲示板)

■コントロール

同じようなことは他にもある。イライラすること、不安になること、怒らなくてもよいことで怒ること、病気になること、身体が朽ち果てること、…、これらのコントロールは達成できていないことなので、これまた、わたしにとってどちらでもよいことではない。

(12月24日掲示板)

■コントロール

多くの人は世の中にはコントロールができないことがあると思っているが、わたしはすべてのことは本来コントロールできると思っている(ただふたつのことを除いて)。多くの人は自分でコントロールできることがあると思っているが、わたしはほとんどすべてのことは自分でコントロールできていないと思っている。

では、コントロールできるものはどれだけあるだろうか？

身体はコントロールできるだろうか。

多くの人は健康である限り、身体をコントロールできていると思っている。

病気になったときにだけ、コントロールできなくなり、また、人の身体には耐用年数があり、やがて死んでいく、そのことは仕方がないことだと思っている。

実はこの関係は全く逆であって、

■

そして、コントロールできるものがわたしのものといえる。

■

ただふたつのこととは。

自分が自分でなくなること。

他人をコントロールすること。

●意識

意識というのはもしかして、選択だけに用いられるものなのであろうか。

12月18日 2004年

●病気

いつもどこにいたかを知らなかった。

いまどこにいるのかも知らない。

このあとどこにいるのかも知らない。

たばこの煙がいっぱいの部屋にいれば、肺がんになる確率が高くなるように、悪意がいっぱいのところの内であれば、病気になる確率も高くなる。

わたしはいまどこにいるのであろうか。

わたしの部屋はいま清んでいるだろうか。

(12月20日掲示板)

●凡人
凡人が
凡人による
凡人のための
ホームページ

12月23日、24日 2004年

●永遠の身体～意味

風邪で寝こんでいた三日間を白紙としない。

人生の意味は多数ある。

不摂生をして風邪をひいた。これからは気をつけよう、などという意味もあるだろう。このことはもちろん大切なことであっても、今のわたしの関心をひかない。

わたしが関心があるのは、外が寒いと風邪をひいてしまうというようにわたしの身体を<放っておく>わたしの在り方である。どのように<放っておく>かということ、わたしはわたしの身体に全く関わるができないというような仕方で<放っておく>ことである。このことは、うがいをしないとか栄養をとらないとか寒さに備えないとか、そういう類の話ではない。たとえていうなら、将棋のルールを覚えたからといって将棋を指せるとはいえない、駒を動かせるからといって将棋の世界のことは何も分かっていないからである。そのような初心者の将棋のように、身体とわたしとの関わりもそのような仕方でしか関わっていないのではないかということである。要するに、何も知らないので<身体する>ことができないのではないかということである。

このことが三日間寝込んでいてよく分かった。

(12月19日掲示板)

12月24日 2004年

●星に願いを

昔「医者になりたい」と願ったところ、神の答えは「ヒーリング能力をかすらせてくれた」ことであった。

最近「お金が欲しい」と願ったところ、神は「ここに金のなる木がある」と教えてくれた。また、「80歳まで仕事をして最後の10年間は世界をじっくり見て90歳まで生きたい」と願ったところ、神の答えは「永遠に生きればよいではないか」ということであった。

「いろいろなところを旅行しながら暮らしてみたい」と願ったところ、「テレポーションすればいいではないか」と答え、

更に、わたしの究極の願い「すべてを知りたい」という願いに対しては、「あなたは神の子であるのだから、神になればよいではないか」という答えであった。

神の贈り物はつねに奇想天外である。

(12月25日掲示板)

12月25日2004年

●教室

2時00分 気功体操

2時30分 気の交流

3時00分 瞑想

4時00分

体が動く気

屋外での教室

スプーン曲げ

チャクラの開発

12月27日、28日、30日2004年、4月22日2005年、7月21日、23日、24日、26日、
27日2011年

●意識のある人生～＜選択・創造＞1～時空

今日のことは今日以外には行うことはできない。

今日のことを明日行えば、その意味は違ってくる。

今のことは今以外には行うことはできない。

今のことを後で行えば、その意味は違ってくる。

今日のことは、今日のためにあり、

今のことは、今のためにある。

そこで、

今、何を考えるのか

今、何を話すのか

今、何を行うのか

このことが常に問われている。

(4月22日2005年掲示板)(7月26日2011年ブログ再掲)

●条件反射

わたしは香辛料が好きである。七味唐辛子は大好物で、そばやうどんにはメチャクチャふ

りかける。

●ゴーギャンの問い

ゴーギャンの有名な言葉で、

「われわれはどこから来たのか。われわれは何か。われわれはどこへ行くのか。」
という言葉がある。だが、

どこから来たのか、
何であるのか、
どこへ行くのか、

何ひとつ知らないで生きている。
もしかしたら、知ろうとしないで生きている。

何という人生だろうか。

しかし、もしも忸怩たる思いがあるのなら、それはきっと意味のある思いである。
(7月21日 2011年ブログ)

われわれは何であるか。
無限と有限

■<わたし> 3～「ゴーギャンの問い」 2

>何であるのか、
>どこへ行くのか、

今、何であるのか、
これから、どこへ行くのか、

これは自分で決められる。

問題は、それが自分であるかどうかだ。
(7月23日 2011年ブログ)

そのためには、<わたし>とは何かという自己研究が必要となる。

●沈黙

大地震で多くの方が亡くなりました。

テレビを見たり、新聞を読んだりしている人が、人ごとのように、何の感情もともなわず、口先だけでコメントしているのを見ていると、自分もまるっきり同じなので、無性に腹が立ってくる。

だから、このことについてはひと言たりとも何も話さない。

(12月30日掲示板)